



IEHE TOHOKU Report 84
Institute for Excellence in Higher Education, Tohoku University

第32回東北大学高等教育フォーラム
新時代の大学教育を考える [17] 報告書

大学入試を設計する

－「大学入試研究」の必要性とその役割－

令和 3 (2021) 年 2 月

東北大学高度教養教育・学生支援機構

第 32 回東北大学高等教育フォーラム（新時代の大学教育を考える [17]）

大学入試を設計する
—— 「大学入試研究」の必要性和その役割 ——

- ◇ 日 時 : 令和 2 年 9 月 23 日（月）13:00～17:00
◇ 会 場 : 東北大学百周年記念会館 川内萩ホール（及びオンライン配信）
〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内 40
◇ 主 催 : 東北大学高度教養教育・学生支援機構

プログラム

- | | | |
|------------|--|----------------|
| 司 会 | 東北大学高度教養教育・学生支援機構准教授 | 久保 沙織 |
| 開会の辞 | 東北大学総長 | 大野 英男 |
| 基調講演 1 | 「大学入試学」の淵源と展開
— 個別大学の入試関連組織と入試戦略 — | |
| | 東北大学高度教養教育・学生支援機構教授 | 倉元 直樹 氏 |
| 基調講演 2 | 「大学入試学」の実践と成果
— エビデンスに基づく東北大学の入試改革 — | |
| | 東北大学高度教養教育・学生支援機構教授 | 宮本 友弘 氏 |
| | (休憩) | |
| 現状報告 1 | 入試改革への挑戦
— お茶大新フンボルト入試の実施状況・課題・展望 — | |
| | お茶の水女子大学教授 | 安成 英樹 氏 |
| 現状報告 2 | 大学入試を読み解き、解きほぐす
— 高校現場の実践と課題 — | |
| | 青森県立青森高等学校教諭 | 笠井 敦司 氏 |
| 現状報告 3 | 「高大接続改革」に対する高校現場の受け止めと今後の期待 | |
| | 武蔵高等学校中学校校長 | 杉山 剛士 氏 |
| | (休憩) | |
| 討 議
司 会 | 東北大学高度教養教育・学生支援機構特任教授
東北大学高度教養教育・学生支援機構特任教授 | 秦野 進一
伊藤 博美 |
| 閉会の辞 | 東北大学理事・副学長 | 滝澤 博胤 |

大学入試を設計する

—— 「大学入試研究」の必要性とその役割 ——

目 次

第 32 回東北大学高等教育フォーラム企画主旨	1
開会の辞	3
第 I 部 基調講演	
基調講演者紹介	7
基調講演 1 : 「大学入試学」の淵源と展開 —個別大学の入試関連組織と入試戦略— 東北大学高度教養教育・学生支援機構教授 倉元 直樹 氏	9
資料	17
基調講演 2 : 「大学入試学」の実践と成果 —エビデンスに基づく東北大学の入試改革— 東北大学高度教養教育・学生支援機構教授 宮本 友弘 氏	21
資料	28
第 II 部 現状報告	
現状報告者紹介	33
現状報告 1 : 入試改革への挑戦 —お茶大新フンボルト入試の実施状況・課題・展望— お茶の水女子大学教授 安成 英樹 氏	36
資料	42
現状報告 2 : 大学入試を読み解き、解きほぐす —高校現場の実践と課題— 青森県立青森高等学校教諭	

	笠井 敦司 氏	45
資料		49
現状報告 3 : 「高大接続改革」に対する高校現場の受け止めと今後の期待 武蔵高等学校中学校校長	杉山 剛士 氏	52
資料		58
第Ⅲ部 討 議 ーパネルディスカッションー		61
閉会の辞		76
講 評		
講評 1 : 入試改革と高校教員の立場から 青森県立八戸工業高等学校	井上 誠之 教諭	77
講評 2 : フォーラムへの所感として 岩手県立一関第一高等学校	吉田 達行 教諭	80
講評 3 : 第 32 回東北大学高等教育フォーラムに参加して 宮城県仙台第三高等学校	渡部 敦 教諭	83
講評 4 : 大学入試学の波及効果を期待して 秋田県立秋田北高等学校	杉田 道子 教諭	86
講評 5 : 試されるとき 山形県立新庄北高等学校	植松 弥公 教諭	89
講評 6 : 教育について社会的な議論を 福島県立福島高等学校	菅野 陽介 教諭	93
アンケート・参加者統計		
アンケート集計結果		97
アンケート自由記述		98
参加者統計		110

第 32 回東北大学高等教育フォーラム企画主旨



令和3年度(2021年度)入試に導入が予定されている新しい入試制度が実施直前になって大きく方向転換した。現状、各大学はその対応に追われている。激変する状況をどう分析して変化を予測し、どのような制約条件の下で何を重視すべきか。適切な決断を下して実行に移すには確たる根拠(エビデンス)が必要となる。内部に専門的かつ実践的に「入試研究」を行う機能を持つか否かで、大学の決断が大きく左右される局面が到来している。

各大学に入学者選抜を研究する部署を設置し、個別大学がそれぞれ研究に基づく最適な入試戦略を描いていくことは、かつての文部省の戦後大学政策で構想されてきた形であった。2000年代にAO入試が拡大し、アドミッションセンターが設置されていった時期は、各大学が入試研究の機能を保有する入試戦略本部を立ち上げる好機でもあった。平成11年度(1999年度)にAO入試を専管する組織として設置された東北大学アドミッションセン

ターは、組織形態と役割を少しずつ変えながら20年以上に渡って個別大学の立場から入試研究を行い、成果を蓄積してきた。高大接続改革に対する独自の対応も従来から積み上げた成果に加え、たゆまぬ情報収集と分析を行い、それを基に学内での議論を積み上げた結果として現れたものである。

本フォーラムでは個別大学における「入試研究」を主題とする。基調講演は東北大学入試センター所属の教授2名が務める。アドミッションセンター発足時から東北大学の入試に携わってきた倉元直樹教授が、主として文部省の構想と個別大学における大学入試研究のイメージについて概説する。それを受けて、高大接続改革に対して東北大学が取ってきた対応の根拠について、宮本友弘教授が具体的に解説を加える。東北大学の対応で最も重視されたのは「東北大学志望の受験生保護」という観点であった。

基調講演に加えて、全国的にユニークな「新

フンボルト入試」を立ち上げて軌道に乗せた
お茶の水女子大学の安成英樹教授の現状報告
と高校側の視点から見た入試研究に関する話
題提供を予定している。

以上の各講演と報告を受け、フロアからの
意見を交えて討論を行い、そこから良好な高
大接続関係の構築における入試研究の役割と
今後の展望を描くことを試みる。高等学校お
よび大学の先生方、関係する方々の多くの参
加と忌憚なき活発な議論を期待している。

本報告書は、フォーラムの録音記録に修正
を加えた原稿、「招待参加者」としてフォーラ
ムに参加し、フロアの立場からフォーラムに
対してお寄せいただいた講評、およびアンケ
ート・参加者統計から成る。招待参加者は、
東北地方 6 県の高等学校進路指導研究会進学
指導部会等を通じ、各県 1 名ずつ選ばれた
方々である。

本報告書は、録音テープから起こした原稿
に対し、発言者が校正を加え、最終的に編集
責任者が表現・体裁の統一・修正を加えたも
のである。招待参加者の原稿の編集について
も、体裁統一と誤字脱字の修正のみにとどめ、
極力臨場感のある会場の雰囲気やそこに参加
された方々が感じられたこと重視することに
した。

尚、編集過程で生じた不具合に関しては、
全て編集者の責任である。

本フォーラムの開催・運営にあたっては大
変多くの方にご協力をいただいた。心より御
礼を申し上げたい。

(編集担当：

東北大学高度教養教育・学生支援機構
高等教育開発部門入試開発室
教授 倉元 直樹・教授 宮本 友弘・
准教授 久保 沙織・助教 南 紅玉)

注：本フォーラムの企画のうち、基調講演及
び安成英樹氏の現状報告は、JSPS 科研
費 JP20K20421 の助成を受けた研究成
果の一部である。

開 会 の 辞

東北大学総長

大野 英男

久保沙織准教授（司会）：

皆様，こんにちは．本日はコロナ禍の大変な状況の中，ご来場，オンラインのそれぞれで，全国から多数の皆様にご参加をいただきまして，誠にありがとうございます．予定の時刻となりましたので，第32回東北大学高等教育フォーラム「大学入試を設計するー「大学入試研究」の必要性とその役割ーを始めさせていただきます．

私は，本日の全体進行を担当いたします東北大学入試センターの久保と申します．どうぞよろしくお願いいたします．

開会に当たりまして，主催者を代表して東北大学総長，大野英男よりご挨拶申し上げます．

大野英男総長：

皆さん，こんにちは．東北大学総長の大野英男でございます．久しぶりの対面も含めた会場でのご挨拶ということで，こういう感じだったと今，私も改めて思っているところでございます．

今回，32回目となりました東北大学高等教育フォーラムの開会に当たりまして，一言ご挨拶をさせていただければと思います．フェイスシールドも用意してもらったのですが，上下がよくわからない状況でしたので，マスクでお話をさせていただきます．十分聞こえますか．はい，ありがとうございます．

本日は，講師をお務めいただくお茶の水女子大学 安成英樹先生，青森県立青森高等学校教諭 笠井敦司先生，武蔵高等学校中学校校長 杉山剛士先生をはじめとして，お忙しい中皆様にご出席あるいはご参加いただきまして，誠にありがとうございます．

本フォーラムは例年2回，春と秋に開催しており，この春の5月にも高大接続をテーマとし



て開催を予定しておりましたが，このたびの新型コロナウイルス感染症の影響によって延期をさせていただきます．関係者力を合わせて，本日より早く，ここに開催できることになりました．

今年の年明けから，もう本当にコロナ一色ということになりましたけれども，急速な世界的広がりを見せた新型コロナウイルス感染症によって世界が大きく変わりつつあります．ニューノーマル，あるいは新しい日常というものが出てつつあり，且つその後にはポストコロナの世界というものが見えつつあるところであります．

本学も，この7月にコネクテッドユニバーシティ戦略というものを定めまして，大学の変革を更に加速することにしております．諸活動のデジタルトランスフォーメーションを強力に進めて，サイバーとリアルの空間，その融合を進め，ボーダレスあるいは多様性，更にはインクルーシブを実現する大学，そして社会を創造していきたいと考えております．

この春の学期の初めから私ども，4,400科目の授業をオンラインで提供してまいりました．10月には2学期が開始されますが，十分な感

染防止対策を講じた上で対面、そしてオンラインを併用する形で実施を予定しております。

また、本日この萩ホールにお越しいただいている皆様のほかに、オンラインでご参加いただいている多くの参加者がいらっしゃいます。こうしたハイブリッド企画というものが、ポストコロナ時代にも、イベントの1つの形として定着すると私たちとしては考えております。

さて、今日のフォーラムのテーマである大学入試制度ですけれども、昨年、ついこの間ですけれども、随分昔のようにも思えますが、昨年から今年にかけて予期せぬ大きな出来事があったことは、私たち共通に記憶しているところであります。まず昨年11月に大学入学共通テストにおける英語民間試験導入が延期されました。12月には記述式の問題の導入も見送られています。受験生、そして受験生を指導される高校の先生、更に私ども大学も、急遽対応に追われた次第であります。

現在、文科省では大学入試のあり方に関する検討会議が立ち上がっており、これらの検証を含めてさまざまな検討が進んでいます。ここに新型コロナウイルス感染症の問題が加わり、不確定要素が極めて多い状況が続いています。いずれにいたしましても、令和3年度入試はウィズコロナ時代の最初の入試になります。そういう意味で、私たちがそれをどういうふうに考え、どういうふうに準備していくかというのは、極めて重要なものであるというふうに思っております。

大学入試を設計する、と題した本日のフォーラムでは、初めに本学の倉元直樹教授、そして宮本友弘教授が、本学における入試研究についてお話をさせていただくことになっています。その後お茶の水女子大学の安成先生から、お茶大新フンボルト入試の状況などをお話いただきます。更に高校の現場から、青森高等学校の笠井先生、そして私立武蔵高等学校中学校の杉山先生にご登壇をいただくことになっています。

現在、各大学では、本学も含めて感染症対策に留意しつつ、予定されたスケジュールに沿って入試の準備を進めているところであります。起こりうる問題を予見し、何より受験生が安心して試験に臨めるよう新しいスタイルで実施することに向けて、本日のフォーラムも新しいスタイルですけれども、本日のフォーラムが皆様に新たな発見をもたらし、更に我々のこういう新型コロナウイルスを含めた新しい状況に対応する一助となることを願ひまして、私からのご挨拶とさせていただきます。本日はご参加いただき、まことにありがとうございます。どうぞよろしくお願いいたします。

(拍手)

久保沙織准教授（司会）：

大野総長、ありがとうございました。

ここでお知らせとお願いがございます。まず、本日の進行についてのお知らせです。来場参加の皆様はお手元の封筒に、オンライン参加の皆様は事前にメールにてご案内させていただいたオンライン参加者用ページに配付資料がございます。配布資料のプログラムをご覧ください。本日は3部構成となっており、第1部の基調講演では東北大学入試センターの倉元先生、宮本先生からそれぞれ35分程度お話をいただきます。第2部は、現状報告として安成先生、笠井先生、杉山先生より、それぞれ20分程度お話をいただきます。その後、第3部では5人の先生方に再びご登壇いただき、基調講演、現状報告を踏まえての討議を行います。第1部終了後と第2部終了後に、それぞれ20分程度の休憩を挟み、本フォーラムの終了は17時頃を予定しております。なお、基調講演、現状報告でお話いただきます先生方の詳しいプロフィールにつきましては、配付資料に含まれておりますのでご覧いただければと思います。

次に、皆様へのお願いです。このたびのフォ



ーラムでは、討議のための質問票及び事後アンケートをウェブ上でご記入いただくようご用意いたしました。まず、討議のための質問票についてご説明させていただきます。来場参加の皆様は、「第32回東北大学高等教育フォーラム 討議質問用」という配付資料に記載されているQRコードを読み取り、当該ウェブページにアクセスしてください。オンライン参加の皆様は、事前にご案内させていただいたオンライン参加者用ページより、「討議質問票へ」を選択してください。現在投影されているスライドに表示されているQRコードからも、質問票のウェブページへアクセスしていただくことができます。第3部の討議に反映させていただきますので、ご記入は第2部終了後の15時50分までに行ってくださいようお願いいたします。なお、基調講演、現状報告に対するご質問やご意見は、15時50分までの間であれば、お一人につき何度でもご記入いただくことが可能です。二度目以降続けて入力する場合には、「別の回答を送信」と表示されることがありますが、そちらを選択していただいても構いません。また、大変恐れ入りますが、討議のためのご質問、ご意見の受け付けは、今回はウェブからのみとなりますので、ご理解のほどよろしくお願い申し上げます。

続いて、フォーラム終了後のアンケートへのご協力のお願いです。来場参加の皆様はQRコードを読み取り、ウェブ上でご回答いただく方

法と、用紙に直接ご記入いただく方法のいずれかをご選択いただけます。用紙にご記入いただいた場合には、受付に回収箱を設置しておりますので、お帰りの際にご提出ください。オンライン参加の皆様は、事前にご案内させていただいたオンライン参加者用ページより、「アンケートへ」を選択してください。アンケートへのご回答はフォーラム終了後にお願いいたします。

なお、今年も本フォーラムの内容等を記載した報告書を、参加された皆様にご送付することにしております。皆様のご協力をいただき、本日は有意義な会となりますよう努めさせていただきますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

基調講演者紹介

基調講演者 1

倉元 直樹（くらもと なおき）氏

1961 年北海道生まれ

〔教員歴〕

大学入試センター研究開発部 助手	(1990 年 12 月 ～ 1999 年 3 月)
東北大学アドミッションセンター 助教授	(1999 年 4 月 ～ 2004 年 3 月)
東北大学高等教育開発推進センター 准教授	(2004 年 4 月 ～ 2014 年 3 月)
東北大学高度教養教育・学生支援機構 准教授	(2014 年 4 月 ～ 2015 年 9 月)
東北大学高度教養教育・学生支援機構 教授	(2015 年 10 月 ～ 現在に至る)

〔主な研究歴〕

専門は教育心理学（テスト学，大学入試学）

〔主な著書，研究業績〕

倉元直樹編（2020）. 「大学入試学」の誕生，東北大学大学入試研究シリーズ 第 1 巻，金子書房.

倉元直樹編（2020）. 大学入試センター試験から大学入学共通テストへ，東北大学大学入試研究シリーズ 第 2 巻，金子書房.

倉元直樹監修（2020）. 変革期の大学入試，東北大学大学入試研究シリーズ 第 3 巻，金子書房.

宮本友弘・倉元直樹（2017）. 国立大学における個別学力試験の解答形式の分類，日本テスト学会誌，No. 13，69-84

Kuramoto, N & Koizumi, R. (2016). Current issues in large-scale educational assessment in Japan: focus on national assessment of academic ability and university entrance examinations. *Assessment in Education: Principles, Policy & Practice*, in press.

日本テスト学会編（2007）. テスト・スタンダード——日本のテストの将来に向けて——，金子書房（共同執筆）

〔学会活動等〕

日本テスト学会，日本教育心理学会等
日本テスト学会理事（2005 年より）

〔その他の特記事項〕

全国大学入学者選抜研究連絡協議会企画委員会委員（2010 年 5 月より [継続中]）

日本行動計量学会 林知己夫賞（優秀賞） 受賞（第 27 号）（2007 年）

日本教育心理学会 城戸奨励賞受賞（第 37 号）（1995 年）

基調講演者 2

宮本 友弘（みやもと ともひろ）氏

〔教員歴〕

メディア教育開発センター研究開発部助手（8年間）
びわこ成蹊スポーツ大学スポーツ学部准教授（5年間）
聖徳大学大学院教職研究科准教授（8年間）
東北大学高度教養教育・学生支援機構准教授（4年間）
東北大学高度教養教育・学生支援機構教授（1年目，現職）

〔主な研究歴〕

専門は教育心理学（児童期・青年期の学力，動機づけ，学習方略）

〔主な著書，研究業績〕

宮本友弘（編）（2020）．変革期の大学入試 金子書房
宮本友弘・倉元直樹・庄司強（2020）．高校教員は新傾向の国語記述式問題をどう捉えているか
—全国調査から— 大学入試研究ジャーナル， 30， 30-35.
宮本友弘（2019）．「主体性」評価の課題と展望—心理学と東北大学 AO 入試からの示唆大学入
試における— 東北大学高度教養教育・学生支援機構（編）「主体性」の評価
—その理念と現実—（pp. 7-29）東北大学出版会
宮本友弘（2019）．児童期の学力の発達に関する縦断的研究 風間書房
宮本友弘・田中光晴・庄司強（2019）．新共通テスト（イメージ例）が測定する資質・能力の分
析（2）—センター試験及び個別学力試験の遂行状況との比較から—大学入試研究ジャーナル
29， 99-104.
宮本友弘・倉元直樹（2018）．国立大学の個別学力検査における記述式問題の出題状況の分析
—80字以上の記述式問題に焦点を当てて—，大学入試研究ジャーナル， 28， 113-118.
宮本友弘・倉元直樹（2017）．国立大学における個別学力試験の解答形式の分類
日本テスト学会誌， 13， 69-84.

〔学会活動等〕

日本テスト学会理事（4年目）
日本教育心理学会「教育心理学研究」編集委員会委員（2年目）
「指導と評価」（図書文化）編集委員（5年目）

基調講演 1：「大学入試学」の淵源と展開 — 個別大学の入試関連組織と入試戦略 —

東北大学高度教養教育・学生支援機構教授

倉元 直樹 氏

【講師紹介】

久保沙織准教授（司会）：

それでは早速、第 1 部の基調講演に移らせていただきます。基調講演 1、演題は『「大学入試学」の淵源と展開— 個別大学の入試関連組織と入試戦略 —』です。東北大学教授、倉元直樹先生、よろしくお願いいたします。

（拍手）

倉元直樹教授：

ご挨拶

ご紹介にあずかりました東北大学の倉元でございます。どうぞよろしくお願いいたします。本日、たくさんの方にご参加いただきましてありがとうございます。見渡す限りは、あまりたくさんの方はいらっしゃらないのですが、背後に同時配信で聞いておられる方々がたくさんいらっしゃるということで、非常に嬉しく思っている次第でございます。

まず、お詫びですが、タイトルに関して、サブタイトルの方が 5 月にお話をしようと考えていたものをそのままにしております。かなり中身が変わったかもしれません。あらかじめ、お詫びをいたします。

本講演の構成は、このようになっております。講演時間は 35 分ぐらいを予定しております。お聞き苦しいところがあるかと思いますが、どうぞよろしくお願いいたします。

今回の企画と本講演の概要

最初に、このフォーラムは大変異例でございます。私どもの入試関連のテーマとしては 17 回



目なのですが、2 つの点で異例でございます。

まず、開催予定が春から秋へと変更になったということです。これは東日本大震災のときに一度ございまして、今回 2 回目です。

もう 1 つ、今回初めての試みというのが同時配信でございまして、これにはひやひやしております。どうも話がおかしいのは、主催者の立場と基調講演者の立場が、今、入り混じっていることでして、今回、もう 1 つ異例なのは基調講演 2 名とも東北大学入試センターから立てたということです。単独の基調講演というのは一度だけあったのですが、今回はこれが極めて異例なところかなと思っています。と申しますのは、先ほど開演前に金子書房の方から担当者のご紹介があったのですが、この「大学入試学の誕生」という本を皮切りに「東北大学大学入試研究シリーズ」というものを出版したというわけです。それにちなんだフォーラムという性格になるのが今回の企画です。出してはみたものの、ずいぶん大風呂敷を広げてしまったな、と内心ぶるぶ

る震えているところでございます。

それでも、「大学入試学」という大風呂敷を広げたのだから、何かどういうものかということを示すべきであろうと考えました。「入試」でございますので、「解答例」を持ってくる必要があるだろうということで、本日、用意したのが以下の4つのトピックです。それぞれお話をさせていただこうと思います。

大学入試学とは？

まず、「大学入試学」という言葉、今から自分の書いたものを振り返ってみると、十数年前から随分言っていたようなんですね。「これが必要だ」ということは、ずっと思っていたのですが、思い切って表に出してみようということになったのは、やはり、この時代のなせる業かなと思っています。

大学入試学というのは、当然、大学入試をテーマとした研究ですけども、・・・これは私が考えるところということですが、・・・1つは研究母体が設置されている組織に資する研究的成果を生むことを目的とした営み、平たく言えば東北大学の入試センターである以上、東北大学にプラスになるような研究をしなければいけない。これは、あらかじめ与えられたミッションなのだろうと思っています。

もう1つ、日本社会に資する、・・・ちょっと語呂が悪いのですが、・・・大局的な大学入試選抜制度の設計に資する研究的成果を生むことを目的とした試み、学術研究の成果に基づくエビデンスの積み上げが必要である、というわけです。平たく言えば、東北大学の入試センターとしては東北大学のためと同時に、おそらくは日本の社会にプラスになるようなことを目的とした研究というのをしなければいけないのだろうなと思っています。その結果として、大学入試研究、これが普通の研究と違う性質があるだろうと考えるゆえんが、2つ出てまいります。

1つは、研究主体です。もちろん、個人の従来型の研究、純粋な研究として入試を研究、テーマ

とされている方は当然いらっしゃると思います。けれども、おそらく大学を単位とした研究組織による研究という形態が典型になってくるものなのではないかなと思っています。これには歴史的な経緯があるということです。

2つ目には、先ほども申しましたが、研究組織の設立母体の目的と利益に沿った機関研究を含むということです。東北大学の入試センターである以上、東北大学がこのセンターを持つ意義というのは、やはりその成果を大学に還元する必要があるということになってくるだろうと思います。それがなければ、この組織を持つ意味はないだろうという話になってくる。ということは、我々の研究成果を誰が評価をするかというと、仲間内、同じ研究仲間というよりも、それだけではなく、外からの評価が大事になってくるのではないかな、と思います。大風呂敷を広げるのは、結構、勇気がいりまして、多分、同業者からは笑われるのだろうな、と思いながら、あえて大きな「大学入試学」ということばを使ったのは、こういう意図がございます。おそらく、仲間内ではなくて、外から評価を受けるということが必要なだろうと思っています。

おそらく、研究テーマとして大学入試研究が積み上がっていきますと、大きな大学入試政策の策定の根拠、エビデンスを出していくということも期待されるのでありましょう。ただ、結構、難しい部分がありまして、1つは、・・・これは後でお話しますが、・・・少々、格好つけて言ってみますと、我が国の大学入試の持つ構造的困難、1つは二重性、国民的関心事であると同時に当事者間の問題でもあるというところですね。それから、相矛盾する異なる理念、いろんな条件、・・・実施の条件、・・・この均衡点を探っていく必要があるだろう、というわけです。これは、大学入試というものが持つ難しさであり、また学問的に乗り越えなければいけない部分じゃないのかなと思っています部分です。

もう1つは、これは、実は、今日はあまりお話しできないところかなと思いますけれども、

普通に学生を育てるということにはなかなか難しい部分があります。と言いますのは、我々が扱っているデータの機密性、・・・例えば、学生の成績、入試の情報といったようなものは、もう、もろに個人情報ですから、こういったものを学生に触らせることはできないのです。いきおい、学生にはこういったものに関わらないテーマで研究をさせながら、大学入試に関する見識を深めるということをやってもらわざるを得ません。この辺が難しいところでございます。

大学入試の学問化構想

さて、ここから先は、実は、先ほどの「大学入試学の誕生」という本の中に入れてさせていただいたものの中からの紹介になってくるのですが、実は、大学入試学というのは一種の「官製学問」でございまして、・・・これは悪い言葉ではないと私は思っているのですが、・・・要は、戦後、文部省の大学入試政策は、国立大学を対象として科学的客観的選抜を促すということを目途（もくと）とされていた、ということです。したがって、国立大学にかなり力を入れて整備をされております。この辺は第1巻の第2章に詳しく書かれていますが、当時、これを担当されていた文部省の方が、研究方面に転身されまして書き残されたものでございます。

1つは、「入選研」と当時呼ばれたものですが、けれども、国立大学の中に入学選抜の方法を研究する委員会を設ける、という施策です。これは委員会組織であるというところがみそです。1967年からということですので、いわゆる「能研テスト」というのが当時あったのですが、それとセットで考えられたものではないかと思えます。つまり、大学に「入試の研究をなさい」ということは文部科学省のほうから政策として言われていたということですね。実は、今でもこれを後継する組織が続いて存在しています。いわゆる学会のような役割を果たすもので、「入研協」と呼んでおります。国立大学入学選抜研究連絡協議会、これはセンター試験の前身に当たる

共通1次の発足と同時にできた組織でございます。当時は国立大学の入試研究の交流と協力ということを目的にしてできたもので、今は、センター試験利用大学による全国大学入学選抜研究連絡協議会というふうになっております。ただ、この頃の精神が、今、受け継がれているかどうかということとはなかなか難しいのかもしれない。

事務体制も同時に整備が行われました。学生課の中の教務係の担当であった入試の業務を入学主幹、入学試験係長、ひいては入試課というふうに格上げしていった時期がございました。今では、各大学に入試課というセクションが当然のようにあるわけですが、当時、こういう政策をとっていただいていたということですね。

2000年代に入りまして、「アドミッションセンター」という組織ができるようになります。私も、東北大学においては、今、「東北大学入試センター」と呼んでいる組織ですが、その前身に当たります。1999年に設立されました。国立大学の中では一番古いアドミッションセンターということになります。その中の大きな役割がAO入試の企画・実施、広報活動といったところだったんですが、同時に入試改善の研究を行うということも大事なミッションとなりました。これまでと違い、・・・一番違ったことは何かというと、委員会組織というのは人が入れ替わってくるんですね。委員として2年務める、4年務める、そこで交代になると積み上げというのはなかなかやはり難しいところがございます。それが教員定員をつけていただくことによって、恒常的に入試研究をする組織ができた、というわけです。

すなわち、戦後文部省は入試の専門性というのを認識し、政策化していったということになります。その器としてアドミッションセンターというものがつくられて20年たったわけですが、今、その成果が問われる時期かなというふうに思います。ということで、ここから具体的なテーマの話に移っていきます。

高大接続改革の方針転換

1 つは、高大接続の方針転換という話です。先ほど、総長のご挨拶にもありましたけれども、高大接続改革はなぜ方針転換を迫られたのか、経緯を簡単にお話しします。これは皆さんもご存じのところだと思いますけれども、2014 年 12 月の高大接続方針で極めてラディカルな入試改革の提案がなされます。センター試験の廃止もここに含まれておりました。それを継いで、これを具体化するべく高大接続システム改革会議で議論をしていただいたのですが、なかなか具体的な像が見えないままに、3 年前、文部科学省のほうで実施方針というのが示されて、改革の 3 本柱が立てられたという経緯です。3 本柱というのは「共通試験への記述式の導入」「英語民間試験の導入」「個別選抜での主体性評価」ということだったわけですが、残念ながらこれが実現に至ることはなく、昨年の末に次々と英語民間試験、記述式導入が見送りになるという経過をたどりました。また、今年 7 月には主体性評価に関わるはずだった教育情報管理機構の認可が取り消されるというようなことで、曲がり角に来ているわけです。ただ、機構の認可が取り消しになったから主体性評価というものが取り下げられたわけではないというふうに私は認識をしております。

この原因に関して、非常に簡単どころではありませんけれども、各論 1 つひとつではなくて総論的なアプローチを試みたいというのが今日の方針でございます。1 つは「大学入試の二重性」、1 つは大学入試が「妥協の芸術」であると、この 2 点について話をさせていただきたいと思っております。

大学入試の二重性

これはもしかしたら刺激的な物言いなのかもしれないのですが、改革がトップダウンで始まったということ、これが問題だったのではないかと思います。つまり、出発点に誤りがあったということです。現実的に目標達成の可能

性がない改革へ行ってしまったのは、おそらく、この「大学入試の二重性」ということの見落としではないかと考えているわけです。高校からも大学からも現行の・・・現行というのはこの改革前の・・・大学入試制度に対する改革の機運は存在しなかったにもかかわらず、性急な改革が始まったのはこの二重性を見落としに由来するのではないかと思うわけです。

この「二重性」とは何のことでしょうか。1 つは、まごうことなく入試は「国民的関心事」でございます。誰もが関心を持ち、また意見を持つことができるテーマであり、持っているテーマであるということです。ただ、それと同時にやはり「当事者性」が強いものであると。入試というのは基本的に当事者間、つまり受験生と大学の問題。ここですね。国民的関心事である以上、大学入試が問題になるということは大きなニュースバリューになります。これはいい意味でも、というか、・・・いい意味で問題になることはあまりなくて悪い意味が多いのですが、入試ミスなどが起こると非常に大きく取り上げられてしまうというのは、やはり皆さんが関心を持っているからだと言えます。その中で大学入試改革というのは、これはやっぱり世間の注目を引くものだったということは思います。

ただ、入試というのは本質的に当事者の問題でもあります。ここを見落としたがために改革に走ってしまったのかな・・・実現性がないというふうに言わざるを得ない改革に走ってしまったのかな、と思うわけです。この二重性の中でも当事者性ということに関しては、実は過去にちょっとした調査をしております。質問は簡単です。「東北大学の入試が、あなたの高校の教育にどの程度影響を与えますか」という質問を全国 2,000 ぐらいの高校に問いまして、1,300 ぐらい返ってきました。これはランダムサンプルではなくて、過去数年間に東北大学に受験生を送ったことがある学校ということです。結果を単純集計しますと、40%以上が「あまりない」と答えたんですね。東北大学の入試、自分ところの教

育にあまり影響はない。ただ、ちょっとした仕掛けをしました。それは集計の仕方を変えたのです。合格者、志願者数で重みをつけました。というのは、例えば、過去5年間で一人しか志願者を送っていない高校には「1」、1,000人送っている高校があるとすれば、それには「1,000」というウェイトをつけたとすると、「かなりある」という回答が跳ね上がってくるのです。

つまり、東北大学、・・・旧帝国大学の1つでもあり、指定国立大学法人の1つでもあり、それなりのプレゼンスを持っているという自負はしているんですが、・・・単体で見たときの影響力というのは、そう大したことはないのです。ただ、東北大学に受験生を送る高校から見ると、非常に大きな影響がある。大学入試は当事者間の問題である、というのは、こういうところです。現在、ご存じのとおり大学入試も多様化していますし、高校教育も非常に多様化しています。それぞれの当事者が抱える問題というのは、場面場面で大きく違うのです。ということは、それは、やはり、1つひとつ、もうちょっと細かく見ていただく必要がある部分かな、と思います。そこに一律、トップダウンの大きな改革をかぶせようとしたところが、多分なかなか難しい結果につながったのかなと思います。

大学入試は妥協の芸術

もう1つは、おそらく、1つの理念だけを押し通そうとしたことにあるのではないかと思います。これ6年前なのですが、私は「大学入試は妥協の芸術だ」ということを言ったことがあります。手前味噌ですが、奥深い、いい言葉だなと思います。というのは、やはりいろんな理念が出てくるんですね。それは相入れないものが多いです。その中で条件、実施できる可能性ということも含めてその均衡点を見出すというところで、何とか皆さんが許容できる制度になっていくわけですが、そういったところを1つだけの理念で押し通すということは、このバランスが崩れてしまうということです。

大学入試の三原則、これはいわゆる四六答申、1971年の答申に過去の日本の大学入試政策を振り返って出てきた言葉なのですが、・・・九州大学の木村先生がこれを発見して、ほかにも同じようなことを言っていた方もいたのですけれども・・・「公平性の確保」、「適切な能力の判定」、「下級学校への悪影響の排除」という3つの原理のバランスで大学入試政策が成り立っていたということをおっしゃいました。これなかなか、非常に有用性の高い概念かなと思います。

高大接続改革は三位一体改革であると言われていました。高校教育、大学教育、大学入試入学選抜の一体的な改革である、と。大学入試の改革というのは、高校教育及び大学教育を改革するための梃子である。すなわち、「下級学校への悪影響の排除」という概念を更に拡張して、プラスの影響を上にも下に及ぼすというところに持ってきた。ただ、その分、公平性に関して、あるいは適切な能力の判定という原理に関しては、あまり重視していただけなかったのかな、というようにあります。

高大接続改革の総括

おそらく、出発点の誤りという指摘が正しいのであれば、それは「大学入試学」というものが担うべきだったエビデンスが欠如していたんだろう、と思うわけです。大学入試の「二重性」、「妥協の芸術」という性質を考えるならば、もうちょっと、・・・理念はいいとして・・・方法に配慮があつてしかるべきだったかなというように思います。

大学入試は、多分に技術的な専門性の要素があります。ここでは詳しく申し上げませんが、数学の記述式問題、最初に「こういった問題が記述式として共通テストに課されるのだ」と言われたところから、最後、いわゆる試行調査で出てきた問題は、相当、急激に変わっていました。これは、やはり、「できる」「できない」の問題ということをあまり重たく考えていただけなかったところが原因なのかな、というふうに思

います。

主体性評価の技術的な困難に関しては、2 回前のフォーラムで取り上げたところです。こういったことを考えると、やはり、我々、入試の研究に携わる者として、おそらく、政策に使っていただけのような結果を十分出してきていないという反省をしなければいけないのかな、ということも思います。

ただ、一連の議論の中で改めて成果として分かったのは、個別選抜で、今、国立大学が課しているような記述式問題、その重要性ということがコンセンサスを得て再認識されたことではないかなと思います。おそらく、これが、次の問題を考える際に重要な役割を持ってきているのではないかな、ということです。

コロナ禍の下での大学入試

最後、コロナ禍の下での大学入試ということについて、今、私が考えているところをお話させていただきます。

まず、コロナウイルス感染症の蔓延というのは、これは、おそらく、世界中の誰も予想していない予想外の出来事だったのではないかなと思います。そういったところで、それでは入試をどう考えるのか、というのは、これは大学入試学にとってはいきなりの応用問題で、ここをある程度整理して考えられなければ、今の状況に耐えられるレベルに達していないということになるのかなと思います。

ということで、まず問題点を整理させていただきます。「長期的な課題」と「当面の課題」、それから「政策的な課題」と「個別大学の課題」ということです。

アフターコロナの時代の大学入試の設計、これは「長期的な課題」になるかなと思います。アフターコロナ、ウイズコロナの時代に入試は根本的に変わるのか。明らかに言えるのは、この COVID-19 という感染症と入試の実施は非常に相性が悪いということです。例えば、試験会場、どのぐらいの間隔をとれば「密になった」と言わ

ないでいただけるのか。準備の、試験問題を作成するところも、どうしても対面でやらざるを得ないようなところもあります。ですので、非常に相性が悪い。さらには、高校入試の場合は近隣の高校を受験するというのが典型ですけども、大学はそうはいきません。広域の移動を伴います。こういった条件が加わったという事実はございます。

ただ、そこで「評価すべき能力」に何か変更を要求されるという事態ではないのだろうと考えます。ということは、やはり、いわゆる必要なスジ、条件、理念に新たな 1 つの要素が加わったということで、「妥協の芸術」としての入試に新たな均衡点を模索するというのが、これからの入試の設計に必要になってくるのかな、と思います。現時点では、やはり材料が不足しています。構造改革的な再設計を語るには時期尚早ということで、この話題のこの切り口は、ここで撤退をさせていただきます。

ということで、短期的な問題、当面の課題です。令和 3 年度の入試をどう実施するかということになります。政策的な課題、これは文部科学省、それから国立大学の場合は国大協でお考えいただいているところですが、総合型選抜、学校推薦型選抜、一般選抜、全て現在進行形で対応中でございます。これに、今年、特別な状況が加わるのが、いわゆる高大接続改革初年度の受験生、彼らに対して何をどうするかということになってきます。

現在のところ、実施時期や選抜資料の配慮、実施上のコロナ対策等さまざまなご批判がありますが、こういったことを各大学に任せるのではなくて、きちんとした指針を持って導いてもらっている、政策的に導いてもらっているということには、実施の現場からいうと感謝の念しかないというところです。もちろん、いろいろと問題はあると思います。では、個別大学としてどうするのか。それは、東北大学の令和 3 年度入試をどう乗り切るかということですが、密状態の回避、これは文部科学省の指針に従うこ

とになると思います。問題は、県境を越えた広域移動というところです。これなかなか悩ましい問題です。ここをどうするのかということを、東北大学の学部入試の構成を考えながら材料を集めてみました、というのが次の話です。

緊急高校調査

東北大学の入試は、大きなところで「AO 入試Ⅱ期」「Ⅲ期」、それから「一般選抜」というくくりで実施をしております。Ⅱ期はもうすぐですね、11月に実施です。10月には募集が始まります。募集期間が10月に設定されています。Ⅲ期は共通テストの後、2月の実施です。一般選抜、これはほかの国立大学と同様に前期日程、後期日程の日は2月25、26日、3月12日とそれぞれ決められております。

緊急の高校調査を行いました。東北大学に志願者・合格者が多い300校ほどが対象で、まだ調査の途中でございます。回収率60%弱というところまでの集計です。状況設定は、新型コロナウイルスが悪化して、県境をまたいだ行動に制限がかかっている上に、大学独自で判断をしなければならない状況ということで設定しました。

まず、現状ぐらいの感染状況であれば、おそらく感染対策をしながら実施をするのに問題はないだろう、ということです。もしも、ものすごく状況が悪くなったら、どういうことを望みますか、ということです。全国で「これはもう大変だ」ということになれば、おそらく大学独自で判断をするという状況ではないので、この間のところ、そういった状況に限定して調査をした結果でございます。

4つの場面を設定いたしました。それぞれ状況が異なりますので、一律に扱えないということで4場面です。ここから先は結果について淡々と申し上げます。

まず、AOⅡ期、これは第1次選考が11月7日に実施予定されています。東北大学のAO入試というのは、いわゆる「学力重視」ということをうたっておりまして、今年度、令和3年度から、

全ての実施学部で第1次選考で筆記試験を課す予定なのですね。そのことに関して伺いました。

選択肢は五つです。「選抜を中止して、定員を一般選抜ないしはAOⅢ期に割り振る」というご意見は単純集計をすると2割ぐらい。「筆記試験を中止して書類で選抜せよ」というのは10%ぐらいあるのですが、全体としていけば少数派です。当事者として一番希望されているのは、実は、「地方会場」なのですね。実は、これは非常に困ったことでして、地方会場という選択肢は入れたのですが、実質的にはCOVID-19に対応する中で、地方会場は不可能だと思います。というのは、これ個別対応に近くなってくるんですね。例えば、東京に地方会場を設けますと、東京の受験者はいいいのですが、県境を越えて東京周辺のところから感染状況のひどい東京に来なさいと言うのか、という話になってきます。それだったら、例えば、長野にも設けてくれ、という話になるので、これは実質的には実施できません。ただ、これを入れておいたのは、もしも、一般選抜で、例えば、国立大学の全てが協調して会場を融通し合うというようなことができれば不可能ではないだろうな、と思ったからです。ただ、圧倒的に回答がここに集中してしまったというのが、結果です。

第2次選考、これは面接中心で行っています。選択肢を1つ増やしました、「オンラインの面接」というのを入れました。「面接試験の中止」に関しては4分の1ぐらいは容認をするという結果です。これは普通に集計しても重みづけをしても変わりません。ほとんど変わりません。1つの特徴は、4割ぐらいはオンラインの面接を容認しているということです。この結果を見て、オンラインの選択肢は筆記試験のところにも入れておけばよかったな、と後になって思いました。というのは、筆記試験はやはり、今、技術的に難しいだろうということで、選択肢には入れなかったのですけれども、面接であれば、「オンライン、まあまあいいんじゃないか」という意見もあるというのも現状です。

AOⅢ期、これは時期が全然違いまして、センター試験の直後で日程がきちきちになっていて、もう特別な対応は難しいということですから、選択肢は3つに絞りました。大変な状況でも「予定どおりに実施」をしてくれ、2次というのは面接が中心になりますけれども、それは中止にして「共通テストで選抜」をしてくれ、選抜を中止にして「定員を一般選抜に」という3つの選択肢の中では、「共通テストで選抜」が多数派です。それはそれで非常によく分かります。というのは、先ほど申しましたタイトな日程ですので、ほかのことはできません。やはり共通テストの比重が重たい選抜をしています。必ずしもそうではない区分もあるんですけども、そういうところをご理解いただいているんだろうなと思います。

最後、一般選抜です。「募集をやめていいよ」という学校は1つもなかったです。あとは、「地方会場」か「個別を中止にする」か「予定どおりやってもらう」か、ということなんですが、これは「地方会場」と「予定どおり」というので半々に分かれている感じです。つまり、全体的に言えば必ずしも全部がそういう意見ということではないのですが、いわゆる筆記試験的なものを望むという回答がやはり多いのだな、というふうに思っております。

まとめ

まとめです。「大学入試学」の目的は個別大学、私の場合は「東北大学の利益」を追求するということと「公共性」との両立ということが必要とされているだろう、ということです。今までの流れからいいますと、このフォーラムを17回実施させていただいていることもあり、個別大学、東北大学への貢献という点ではある程度評価をいただいている証拠かなとは思いますが、ただ、政策には我々の知見が活かされているとは思えないという、ここに大きな課題があるかなと思います。

高大接続改革が方針転換をしなければいけな

かった原因は、おそらく出発点のところで大学入試の当事者性を軽視したこと、それから下級学校、・・・今回は大学もですね・・・への影響ということに、行き過ぎた力点を置いたところにあったのかな、と思います。したがって、この轍を踏まないようにするために、やはり、現場の意見というのが大事になります。そこで、今、高校側に意見を伺っているところです。現在のところ集まった結果が、非常に多様である。ということで、改めて難しさを感じているところです。

あとは、ディスカッションのところでご質問いただければと思います。ご清聴ありがとうございます。

(拍手)

久保沙織准教授(司会):

倉元先生、ありがとうございました。

冒頭で申し上げたとおり、ご質問等につきましては、来場参加の皆様はお手元のQRコードから、オンライン参加の皆様はオンライン参加者用ページより、ウェブ上での入力をお願いいたします。

注: 本講演は、JSPS 科研費 JP20K20421 の助成を受けた研究成果の一部である。

資料



「大学入試学」の淵源と展開

—個別大学の入試関連組織と入試戦略—

東北大学高度教養教育・学生支援機構
倉元 直樹

2020/9/23
大学入試を設計する：基調講演1
1



はじめに (3)

- 中身の実寸に比べてかなり大きな風呂敷???
- **大学入試学 (admission studies)** とは何か? ← 本フォーラムで**解答例**を示すべき
 - トピック1：大学入試学とは?
 - トピック2：大学入試の学問化構想
 - トピック3：高大接続改革の方向転換
 - トピック4：コロナ禍の下での対応戦略

2020/9/23
大学入試を設計する：基調講演1
5



本講演の構成

- はじめに
- 大学入試学とは?
- 大学入試の学問化構想
- 高大接続改革の方針転換
- 大学入試の二重性
- 大学入試は妥協の芸術
- 高大接続改革の総括
- コロナ禍の下での大学入試
- 緊急高校調査
- まとめ

2020/9/23
大学入試を設計する：基調講演1
2



大学入試学とは? (1)

- 大学入試学 (admission studies)
 1. 研究母体が設置された**組織に資する研究的成果**を産むことを目的とした営み
→ 伝統的な学問と異なる二つの要素
 2. 日本社会に資する**大局的な大学入学者選抜制度設計に資する研究的成果**を産むことを目的とした営み
→ 学術研究の成果に基づくエビデンスの積み上げの必要

2020/9/23
大学入試を設計する：基調講演1
6



はじめに (1)

- 東北大学高等教育フォーラム
 - 第1回+偶数回 → 高大連携、入試の企画
 - 今回で実質17回目：2つの点で異例
- 開催予定が春から秋へと変更
 - **東日本大震災** (第14回 [8]) → 9月2日
 - コロナ禍 (今回) → 秋への変更+オンライン参加
 - **イベントの同時配信**は初の試み

2020/9/23
大学入試を設計する：基調講演1
3



大学入試学とは? (2)

- 大学入試研究が持つ**異質な要素**
 1. **研究主体**：研究者の所属大学を単位とした研究組織が典型 ← 歴史的経緯から
 2. **研究目的**：研究組織の設立母体の目的と利益に沿った機関研究を含む
 - 大学入学者選抜に関わる**外部からの組織評価** (←→ 同業者同士の内部的な相互評価)

2020/9/23
大学入試を設計する：基調講演1
7



はじめに (2)

- 基調講演者が2名とも**東北大学入試センター**関係者
 - 単独の基調講演を務めたことはある (第26回 [14])
- 「異例」の理由
 - **東北大学大学入試研究シリーズ**の出版
 - 第1巻「大学入試学」の誕生



2020/9/23
大学入試を設計する：基調講演1
4



大学入試学とは? (3)

- 大学入試研究が持つ公共性
 - 大学入試政策策定の**根拠**、**エビデンス**創出の期待
- わが国における大学入試の持つ構造的困難
 - 二重性：**国民的関心事**と同時に**当事者**間の問題
 - 相矛盾する異なる理念、条件の**均衡点を探る**必要
- **データの機密性**：大学入試学成立基盤の困難
 - 研究成果の開示、研究者の育成に課題

2020/9/23
大学入試を設計する：基調講演1
8

大学入試の学問化構想 (1)

- 大学入試学は**官製(?) 学問**
- 戦後文部省の大学入試政策：科学的客観的選抜
→ **国立大学**を対象とした制度の整備
- 大学入試方法研究組織の整備（第1巻第2章）
 - 国立大学入学者選抜方法研究委員会**（入選研）
試験実施と追跡調査に基づく選抜方法の研究（1967～）
 - 国立大学入学者選抜研究連絡協議会**（入研協）
国立大学の入試研究の交流と協力（1980～）

2020/9/23

大学入試を設計する：基調講演1

9

大学入試の二重性 (1)

- 【問題点1】改革が**トップダウン**で始まったこと
- 出発点の誤り →
現実的に**目標達成の可能性がない**改革へ
 - 高校からも大学からも現行の大学入試制度に対する改革の機運は存在しなかった
 - なぜ、性急な改革がはじまったのか？
← **大学入試の二重性**（duality）の見落とし

2020/9/23

大学入試を設計する：基調講演1

13

大学入試の学問化構想 (2)

- 入学者選抜事務処理体制の整備（1967～）
 - 学生課 → 入学主幹、入学試験係長、**入試課**
- アドミッションセンター**の整備（1999～）
 - AO入試**の企画・実施、広報活動、**入試改善の研究**
 - 教員定員**の配置
- 戦後、文部省は**入試の専門性**を認識、政策化
- 器ができて20年、その成果は？

2020/9/23

大学入試を設計する：基調講演1

10

大学入試の二重性 (2)

- 大学入試の二重性
 - 入試は**国民的関心事**とであると同時に**当事者性**が強い
- 大学入試は国民的関心事
 - 大学入試が問題になる → 大きな**ニュースバリュー**
 - 大学入試改革 → 世間の耳目を引く
- 一方、大学入試は**本質的に当事者間の問題**
← ここに見落としがあったのでは？

2020/9/23

大学入試を設計する：基調講演1

14

高大接続改革の方針転換 (1)

- 高大接続改革はなぜ**方針転換**を迫られたのか？
- 高大接続改革の経緯
 - 2014年12月：高大接続答申
 - センター試験廃止等のラディカルな入試改革提案
 - 2016年3月：高大接続システム改革会議
 - 2017年7月：文部科学省実施方針
 - 改革の3本柱**（共通試験への記述式の導入、英語民間試験の導入、個別選抜での主体性評価）が明示

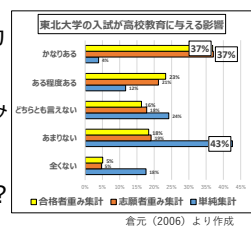
2020/9/23

大学入試を設計する：基調講演1

11

大学入試の二重性 (3)

- 東北大学の入試**の影響力（倉元、2006）
 - 単純集計では「あまりない」
 - 合格者数、志願者数で重みをつけると「かなりある」
- 大学入試は**当事者問題**
- 一律**トップダウン**は可能か？



2020/9/23

大学入試を設計する：基調講演1

15

高大接続改革の方針転換 (2)

- 英語民間試験導入延期（19/11/1）
- 共通テストへの記述式問題導入見送り（19/12/17）
- 教育情報管理機構認可取消（20/7/22）
（← 主体性評価を取り下げたわけではない）
- 本日は各論ではなく、**総論的アプローチ**を試みる
 - 大学入試の二重性
 - 大学入試は妥協の芸術

2020/9/23

大学入試を設計する：基調講演1

12

大学入試は妥協の芸術 (1)

- 【問題点2】**一つの理念**だけを押し通そうとしたこと
- 大学入試は**妥協の芸術**（倉元、2014）
 - 相矛盾する異なる理念、条件の均衡点を見出す
 - 例：手続きの公平性と実施負担
 - 大学入試の三原則**
 - 「公平性の確保」「適切な能力の判定」「下級学校への悪影響の排除」（木村・倉元、2006）

2020/9/23

大学入試を設計する：基調講演1

16

大学入試は妥協の芸術 (2)

- 高大接続改革は三位一体改革
 - 高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革（中教審、2014）
 - 大学入試の改革は高校教育及び大学教育を改革するための梃子 → 公平性に関する意識改革を提言
- 理念の中核：下級学校への悪影響の排除の拡張
- 公平性の確保や適切な能力の判定を軽視？

2020/9/23

大学入試を設計する：基調講演1

17

コロナ禍の下での大学入試 (3)

2. 当面の課題：令和3年度入試の実施
 - 政策的課題：総合型選抜・学校推薦型選抜、一般選抜（共通テスト、個別選抜）
 - ← 現在進行形で対応中
 - 特別な状況：高大接続改革初年度の受験生
 - 実施時期、選抜資料の配慮、実施上のコロナ対策等 ← 批判はあるが、緊急対応の指針に感謝

2020/9/23

大学入試を設計する：基調講演1

21

高大接続改革の総括

- 出発点の誤り ← 大学入試学（エビデンス）の欠如
 - 大学入試の二重性：国民的関心事と当事者性
 - 大学入試は妥協の芸術：三原則のバランス
- 大学入試は多分に技術的な専門性が求められる
 - 英語民間試験、数学の記述式問題にまつわる迷走
 - 主体性評価の技術的な困難（cf. 第28回フォーラム）
- 成果：個別選抜の記述式問題の重要性が再認識

2020/9/23

大学入試を設計する：基調講演1

18

コロナ禍の下での大学入試 (4)

- 個別大学の課題：東北大学の令和3年度入試をどう乗り切るか？
 - 「密」状態の回避 ← 文部科学省の指針に従う
 - 県境を越えた広域移動 ← 入試実施の必須条件
- 東北大学の学部入試構成
 - 総合型選抜：AOⅡ期（11月）、AOⅢ期（2月）
 - 一般選抜（前期日程 2/25・26、後期日程 3/12）

2020/9/23

大学入試を設計する：基調講演1

22

コロナ禍の下での大学入試 (1)

- コロナウイルス感染症（COVID-19）の蔓延
 - ← 全く予想外の出来事
- コロナ禍の下での入試をどう考えるか？
 - ← 大学入試学の実用問題
- 問題点の整理
 - 長期的課題と当面の課題
 - 政策的課題と個別大学の課題

2020/9/23

大学入試を設計する：基調講演1

19

緊急高校調査 (1)

- 対象：東北大学に志願者・合格者が多い325校
- 回収率：58.8%（191校）（9/5回答分まで）
- 状況設定：COVID-19の感染が悪化し、県境をまたいだ行動に制限が掛かっている上、大学独自で判断をしなければならない状況
- 東北大学の入試制度に応じて4場面の設定
 - ← それぞれ状況が異なるので、一律に扱えない

2020/9/23

大学入試を設計する：基調講演1

23

コロナ禍の下での大学入試 (2)

1. 長期的課題：大学入試の再設計
 - ウィズ・コロナ時代に入試は根本的に変わるのか？
 - COVID-19と入試実施の相性の悪さ
 - 大学入試の実施条件に新たな要因が加わった
 - 評価すべき能力に影響を与える要因ではない
 - 妥協の芸術としての入試に新たな均衡点の模索
 - 構造改革的な再設計を語るには時期尚早？

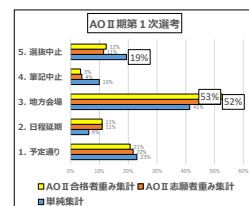
2020/9/23

大学入試を設計する：基調講演1

20

緊急高校調査 (2)

- AOⅡ期第1次選考：筆記試験、11/7実施予定
- 選抜中止、筆記試験中止（＝書類で選抜）は少数派
- 当事者は地方会場希望
- COVID-19対応の地方会場設置は困難



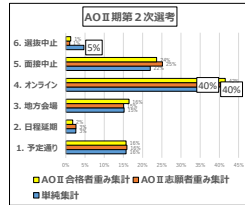
2020/9/23

大学入試を設計する：基調講演1

24

緊急高校調査 (3)

- AOⅡ期第2次選考：面接試験、11/21実施予定
- **面接試験中止**容認（＝書類＋筆記試験で選抜）も**約1/4**は存在
- 多数派（4割）は**オンライン面接試験**を容認



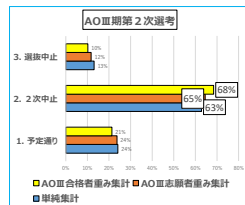
2020/9/23

大学入試を設計する：基調講演1

25

緊急高校調査 (4)

- AOⅢ期第2次選考：面接試験等、2/13実施予定
- **第2次選考(面接中心)中止**（＝大学入学共通テスト＋書類で選抜）が**多数派**
- AOⅢ期のタイトな**日程**
- 実際、**共通テスト**の比重大



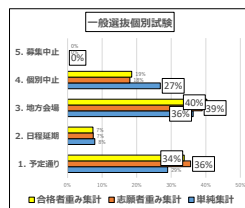
2020/9/23

大学入試を設計する：基調講演1

26

緊急高校調査 (5)

- 一般選抜個別試験：前期日程2/25・26、後期日程3/12実施予定
- **募集中止は皆無**
- **個別試験中止は少数派**
- 多数派は予定通りの実施と地方会場に2分



2020/9/23

大学入試を設計する：基調講演1

27

まとめ

- 大学入試学の目的は**個別大学の利益**と**公共性**
- **個別大学**の入試への**貢献**には一定の評価？
- **政策**には知見が行かされていない ← 大きな**課題**
- 高大接続改革の方針転換の原因は出発点？
 - 大学入試の**当事者性**の軽視、ないしは、無視
 - 下級（＋上級も？）学校への影響の**行き過ぎた力点**
- コロナ禍緊急対応には高校側も**多様な意見**

2020/9/23

大学入試を設計する：基調講演1

28

基調講演 2：「大学入試学」の実践と成果 —エビデンスに基づく東北大学の入試改革—

東北大学高度教養教育・学生支援機構教授

宮本 友弘 氏

【講師紹介】

久保沙織准教授（司会）：

続いて、基調講演 2 に移ります。「『大学入試学』の実践と成果—エビデンスに基づく東北大学の入試改革—」と題して、東北大学教授、宮本友弘先生、よろしくお願いいたします。

（拍手）

宮本友弘教授：

皆さん、こんにちは。東北大学の宮本です。

これから、基調講演 2 としまして「『大学入試学』の実践と成果—エビデンスに基づく東北大学の入試改革—」というタイトルで発表させていただきます。倉元先生の基調講演 1 とつながりがございまして、基調講演 1 が理論編とすれば、この基調講演 2 は実践編ということになります。

本日の内容ですが、この 4 つからなっております（スライド 2）。最初に、大学入試学とエビデンスの関わりについて申し上げます。続いて、東北大学の大学入試研究の特徴、3 番目に、エビデンスに基づく東北大学の入試改革ということで、いくつかの具体例をお示しします。そして、最後にまとめを述べさせていただきたいと思えます。

まず、大学入試学とエビデンスということですが、先ほどの倉元先生のご発表にもございましたように、大学入試学には大きく 2 つの目的があります（スライド 3）。

1 つは、組織に資する研究的成果を産むということです。もう 1 つは、日本に資する研究成果を産むということで、組織のため、日本社会の



ためということです。いずれにせよ、この研究成果が実際に役立つことを目指しているわけです。その意味では、実学と考えることができます。そして、大学入試学あるいは大学入試研究というのを実学として捉えたときに、このような特徴があるのではないかと思います。

まずは、実用的なニーズに応えることです。研究方法は学術研究と同じです。そのため、実際に従事する人には、きちっとしたアカデミックトレーニングを受けていることが必要になります。

次が、実学としての大学入試研究の最大の特徴だと思うのですが、研究成果が意思決定の際のエビデンスとなることです。入試に関することの何か決定をしなければいけないときに、そのためのエビデンスを産み出すということが大事になります。ここにおきまして、大学入試学あるいは大学入試研究とエビデンスの接点が出てくると思います。

では、ここでそもそもエビデンスとは何かということをちょっと考えてみたいと思います（スライド 4）。エビデンスとは、実証性を伴っ

た科学的根拠のことを指します。

ただし、エビデンスは領域によって考え方に違いがございます。単なる量的な根拠だけじゃなくて質的なものも根拠に含める場合もあります。皆さんもご存じかと思いますが、1990年代頃から、さまざまな領域の政策や実践でこのエビデンスが重視されまして、エビデンスに基づく、いわゆるエビデンスベースドということが重視されるようになってきております。

ちなみに日本の教育界ですと、2005年の中央教育審議会義務教育特別部会において、荻谷剛彦先生が、「エビデンスベースドの議論をしましょう」ということをおっしゃったことが、広く知られるようになったきっかけだといわれています。

今申し上げたように、エビデンスは研究の成果ですが、エビデンスという言葉の中には、どういう方向性、どういう志向性を持った研究をするのかというような含みもあります。すなわち、エビデンスを産出する研究とは何かということを考えていく必要があります。それに関しましておもしろい枠組みがございまして、研究の象限モデルというのがございます(スライド5)。政治学者のストークスという方が研究を2つの次元で分類しています。

1つは、真理を探求する次元です。もう1つは、研究の成果を社会的に活用することを考えるかどうかということです。こうして見た場合、真理探求はするんだけど、あんまり活用の考慮は考えていないというのが純粋基礎研究、例えば、量子論のボーアです。これが事例として書かれています。一方、真理探究はあんまりしていないんですけども、活用をすごく考慮するのが、純粋応用研究で、発明王のエジソンがこれに当たるとしています。最後、活用に刺激された基礎研究というところがございます。パスツールが予防接種を普及させようという発想でワクチン研究をしていたわけなんですけど、エビデンスを産み出すという研究と考えた場合、これが該当するのではないかとというのが言われておりま

す。いずれの研究も重要なんですけども、エビデンスベースドと考えた場合は、この成果の活用というのをかなり意識した基礎研究をするということが重要になってきます。こういった分類に従いますと、大学入試研究はパスツール型、すなわち活用に刺激された基礎研究と位置づけでもよいのではないかと私は思います。

続いて、大学入試学とエビデンスとの関わりを考えたとき、エビデンスのレベルというのも大事になってきます(スライド6)。エビデンスのレベルというのは、よく医療分野のレベルが例示されるんですが、レベルⅠが最もエビデンスとして高い価値があるものが、ランダム化比較試験のシステマティック・レビューです。ランダム化比較試験というのは、ランダムに2つの群に分けて、それを比較して、例えばお薬の効果とか治療法の効果、そういったものを見るものなんです。そういったものをたくさん集めてどうなんだと見るのが、一番レベルが高いと言われるものです。最もレベル低いのが、権威者の意見や専門家委員会の報告書ということになっています。このように、医療の分野ではかなり厳格なエビデンスレベルの段階がございます。

しかし、ランダム化比較試験というのは現実場面ではなかなか適用できるケースが限られておりまして、特に教育の分野では倫理的にも実施するのが結構難しかったりします。更に、大学入試研究は、科学性を放棄しているということではございませんが、科学的厳密さを優先するよりも、特定の文脈で決定に至る判断材料になるかどうか、そういった現実性が重要になってくるという部分もございます。

また、エビデンスには3つの局面があると言われています。エビデンスを「つくる」、これは実際研究者のお仕事です。そして、それを「つかう」、これは活用実践者とか政策立案者の方です。実は両者の間の「つたえる」という部分が非常に重要な役割を持つそうです。いくらい研究をしても、うまくそれが伝わらないと活用には至らないということなんですね。アメリカなどで

は、教育の領域で「つたえる」ことに特化した組織もあるそうです。大学入試研究ではこの「つたえる」というところが非常に重要になってくるのではないかと考えております。以上のエビデンスの考え方に基づいて、東北大学の大学入試研究の特徴について述べたいと思います。

エビデンスをつくる局面におきましては、まず教員の専門性をあげることができます（スライド7）。私たちは、高度教養教育・学生支援機構の中の入試開発室というところに所属していますが、教員の専門は次の領域をカバーしています。まずは、教育心理学で、実証的な研究方法を蓄積しております。また、心理統計学で、文字どおりデータ分析に関する専門知識・技術を備えています。さらに、教育学で、ICT をさまざまな調査で活用しています。加えて比較教育学を専門にする者がおり、海外の情報を収集することも可能となっています。このように非常に強力なエビデンスをつくり出す体制を組んでおります。

もう一点は、私たちのステークホルダーである、高校側の意見を重視しております。これは、先ほどの倉元先生のご発表でも高校調査についてのお話があったと思います。我々は、大学入試における相互関係の原則というのを大事にしております。相互関係の原則というのは入試を実施する側、すなわち大学と志願者との相互関係ということなのですが、大学側が幾ら高邁な理念のもとに入試制度をつくったとしても、受け手である志願者がそれに魅力を感じなければ全然意味がないわけです。したがって、志願者のニーズを適切に把握、冷静に受け止めることが肝要と考えております。

さらに当事者性、これも先ほどの倉元先生のご発表の中でキーワードとして出ていたと思うんですが、やはり大学の入試のあり方というのは、その大学への進学を視野に入れた受験生を数多く抱える高校にとってはすごく大問題なんですね。ですので、そちらの声をしっかりと受け止めていくことが重要だと思っております。

高校調査はそういう意図で実施しているんですが、一部の方によれば、高校教員の方に調査してもいろいろ本音は言ってくれない、そういったご意見もいただくことがあります。しかしながら、本学に志願者をたくさん送っていただいている高校の方の声を聞く限りは、しっかり本音を言っていると私は考えております。大学入試の一番重要な大原則というのは、受験生保護の原則です。更にそれに当事者性を入れるならば、東北大学志望の受験生保護ということが重要になってきます。それがゆえに、ステークホルダーである高校側の意見を重視する、これが我々のエビデンスをつくる局面での特徴の1つでございます。

次に、エビデンスをつたえる局面でも、私たちは特徴があると思っています（スライド8）。1つは情報発信で、これは外部に向けたものです。通常、何か研究した場合は学会が中心になり学会発表や、論文に仕上げてそれを世に知らしめるわけですが、それだけですと、やっぱり数に限りがあります。広く世に広めるために、我々は、マスコミにも積極的に発表しています。更に、情報の速報性ですね。明らかになったことをすぐに伝えるために、ホームページなどを利用して広く周知しています。さらに、本日の東北大学高等教育フォーラムのようなイベントで生の声をお届けする、そうしたことにも我々は力を入れています。

更に、学内の教職員の方々にも、そういったエビデンスを広く伝えることも重要と思います。言ってみれば学内広報ということです。我々はいろいろ明らかになったエビデンスにつきまして、入試に関わる全学的な委員会で逐次周知していますし、政策決定に関わる先生にも丁寧に説明してきております。学内広報をしっかりとやることによって、学内での議論の積み上げがはるかに促進されますし、更には大学の意思決定にも一定程度寄与できていると考えています。つまり、このエビデンスをつかう局面へつながる活動にも力を入れています。

以上を踏まえまして、エビデンスに基づく東北大学の入試改革ということで具体的なお話に入らせていただきたいと思います。基本的には、平成 30 年 12 月 5 日に出した予告をベースに、その背景、その根拠となったエビデンスについて申し上げます。

こちらまず、英語認定試験あるいは英語民間試験の活用ですが、ポイントは、出願要件とはしない（スライド 9）。更に、点数化してこれを合否判定にも用いることはしないということが我々の予告でした。なぜこの予告を出したかというと、1 つのエビデンスとして高校調査 2017、先ほど倉元先生のご発表にもありましたが、高大接続改革に関してやった第 1 回目の調査で、2017 年度に実施しました（スライド 10）。期間は 1 月から 4 月、対象は当事者性を重視しまして、東北大学に志願者、合格者を多数輩出する 269 校に実施しております。平成 26 年から 29 年度入試で通算合格者数が 8 名以上、それ以外で AO 入試Ⅲ期合格者数 2 名以上、こういった基準で対象を定めました。学校数 269 校は、全国の高校の数で考えるとわずか 5.4%しかカバーはしていないのですが、これを志願者の数で重みづけしますと 79.1%、さらに合格者数で重みづけしますと 82.4%になり、相当数の東北大と当事者性がある学校をカバーしています。こうした調査を重ねることによって、当事者からの声を拾い上げる方向で、高校調査を 2017 年からずっと続けてきております。

さて、先ほどの英語認定試験の活用に関する我々の決定に影響を及ぼした調査結果としてはまずこれです（スライド 11）。国大協の基本方針に対する意見を聞きました。そうしますと、単純集計で 8.3%、全志願者数で 6.5%と「賛成」が少なかったわけです。一方では、「やむを得ない」が 49.5%で一番多いのですが、自由記述を見ると、決まったことなので仕方ないといった内容が多く、英語 4 技能の評価の理念には賛同していても、公平性や妥当性には疑義を訴える声もございました。本当にやむを得ないという感じ

でした。

続いて、次の年の高校調査です（スライド 12）。これは 2017 年度調査のフォローアップになっています。我々の予告に対する意見を聞きました。そうしますと、8 割以上が単純集計でも、重みづけしても「賛成」という結果になりました。逆に、「反対」は僅かで、国大協の方針に賛成だと言っていた意見よりもかなり減少しています。直接は比較にはなりませんけれども、我々の予告は支持されたと判断しております。

続いて、記述式問題の活用なんです（スライド 13）。こちらのポイントは、点数化して合否判定には用いられない、同点に並んだ場合だけ記述式問題の成績評価が高い志願者を優先的に合格とすることです。記述式問題の影響力を大きくしないという考え方がベースにはあります。

その背景として、まず、これは直接この予告に関わった調査ではないのですが、国立大学の個別学力試験の実態調査を行いました（スライド 14）。高大接続システム改革会議の最終報告で、一般入試の課題として、知識に偏重した選択問題が中心で記述式問題を実施していない場合もあるという指摘があり、それが共通テストで記述式を入れる理由の 1 つにもなっているのですが、国立大学の個別学力試験を見る限りにおいては、どうもそれは印象と合わないわけです。本当に国立大学に該当するかどうかということの検証を試みました。分析対象は、国立大学 82 校の 2015 年度の一般入試個別学力試験問題、これを校間単位で回答形式を分類しました。その結果、こちらです（スライド 15）。

まず、全部で 2 万 4,066 問収集しまして、そのうちの約 88%が記述問題でした。更に、共通テストの 1 つの目安になっていた 80 文字以上の記述式問題は 1,088 題、既に出題されていました。記述式問題を出題していない大学は 1 大学のみ、80 以上の記述式問題を出題していない大学は 9 大学のみという結果でした。これを受けまして、国立大学におきましては先ほどの指摘は当たらないのではないかと、個別試験で思考

力, 判断力, 表現力も測れるのではないかと考えた次第です。

そして, この調査結果の学外発信ですが, 速報性が大事だと考えまして, まず科研費のホームページに掲載しました。2016 年の 12 月です。それを朝日新聞がいち早く報道してくださいました。しかし, 高大接続改革に影響を与えることなく数年が過ぎていきました。突如として 2019 年 11 月, 昨年, アエラで我々のデータが掲載されました。その頃は, ちょうど国会で記述式導入の議論がなされておりまして, 我々の研究結果が 1 つのエビデンスとして複数回取り上げられました。結果的に, 多少は日本の入試設計に資するような結果になりました。これはあくまで背景にあった研究です。

予告で使われた研究は 2017 年度の高校調査の結果です (スライド 16)。記述式問題をどの程度重視してほしいかについて尋ねたところ, 「とても重視してほしい」は, 単純集計でも 5.6% でした。ただ, 「どちらとも言えない」が一番多かったのですが, 新共通テストの内容がよくわからないのでなかなか判断もしづらい, あるいは個別試験で十分といったようなご意見もありました。我々の予告に対してフォローアップの調査結果を見てみます (スライド 17)。大多数ではないのですが, 単純集計, 志願者ベース, 合格者ベースのいずれも約 6 割が「賛成」です。一方, 「反対」は, 9.6% と若干多いです。ただ, ここの「反対」には, 積極的に活用すべきだ, だけじゃなくて, 一切利用すべきでないというような意見も入っていて, 多様な観点がありました。

では個別式だけでいいのかといいますと, 参考の研究結果があります (スライド 18)。こちらは, 大学入学者選抜改革推進委託事業の中で行った研究ですが, 本学にたくさん志願者を送ってくださる高校だけでなく, 無作為に全国の高校 2,000 校を抽出して実施した調査です。それで, 個別学力試験に対する改善の必要性というのを聞きました。そうしますと, 国語は

現状のままでいいというのが 39.9% で, 半数以上の方が, 改善が必要だとしています。数学は, それに対して現状のままでいい, というが声が多くありました。この結果は軽視し得ないと思いますので, 個別学力試験に対する改善は今後も検討していく必要性はあると思います。

最後に, 調査書等の扱いです (スライド 19)。こちらのポイントはまず, チェックリストで志願者が自己申告するということです。さらに, 使いどころが合否ラインで志願者が同点で並んだ場合, 主体性評価が高いほうを優先的に合格とすること。チェックの根拠は調査書により確認する。これがポイントになっています。これがチェックリストですね, こちらも既に予告で出しております (スライド 20)。これに対しては, 何か調査を行ったということよりも, 2 年前のフォーラムで主体性について皆さんで検討したと思います。そのときに, 心理学的な知見からどう考えるかということで, 言ってみれば間接的なエビデンスなんですけれども, そういう学術的な知見の観点からこの主体性評価を考えてみました。そうしますと, 主体性といった場合, そのコアになるものは何かというと意欲ですね。心理学の用語で申しますと, 動機づけとなります。動機づけには, 最近の学説では, 特性レベル, 領域レベル, 状態レベルというふうに 3 段階の水準があると考えます (スライド 21)。特性レベルというのは, 性格的に何事にも意欲的だということです。それに対して領域レベルというのは, 「私は勉強に意欲的だ」, 「僕は部活動に意欲的だ」というふうに意欲が発揮される領域や分野が分かれることです。さらに状態レベルというのは, この授業はとてもやる気があるけれども, この授業はあまりやりたくないというような, まさに状況に依存するような話です。

重要なことは, 動機づけにはこういう領域固有性があることです。特定の領域ではやる気を出すけれども, 別領域だと発揮されないような場合, 領域固有性があると言います。さらに, 発達段階が進むほど, こうした好みといいますか

領域というのは分化していきます。小学校ぐらいのときはスポーツも頑張る、勉強も頑張るんですけども、だんだん発達が進むと、勉強は頑張るけれども運動は頑張らない、といった場合もあります。また、英語は頑張るけれども数学は、というような状況もあります。こういった領域固有性を考えた場合、主体性評価で大事になってくるのは、大学に入学後の学びの文脈で、学習の文脈で発揮される意欲です。なので、勉強、学業という領域レベルで発揮される意欲、動機づけというのはをしっかり見ていく必要があると考えられます。

さらに、皆さんも日頃感じていると思います。が、学業領域の動機づけは成績に反映されます(スライド 22)。これはどういうことかというと、動機づけがございまして、これが学習方略、これ勉強のやり方ですね、これを媒介にして学習結果に反映されるということは、もう心理学的にはある程度わかってきていることです。したがって、このことから何が言えるかというと、試験成績結果には動機づけ、主体性のコアの概念である意欲、そういったものがしっかり反映されるということが考えられます。すなわち、まずは学力検査の成績というのを重視するというのは、主体性評価にとっては悪くはないということです。

従来から動機づけはどうやって測っているかといいますと、自己報告あるいは行動観察、他者評価ということになります。このことを踏まえますと、自己報告、まさにチェックリストなのです。それを体現したものです。更に、行動観察、他者評価、これは調査書ということになりました。こうした道具立てが、心理学的な理論とも整合するということです。予告の背景には、こういったような考え方があるということです。

調査書の扱いに対する東北大学の方針に対する意見は、「賛成」が一番多かったんですが、半数を切っています(スライド 23)。「どちらとも言えない」と拮抗しておりますので、今後、実際に行った後、追跡しながらしっかり検討してい

く必要があると思います。

ただ、認識しておいていただきたいこととして、中央教育審議会の初等中等教育分科会の教育課程部会が出した 2019 年の「児童生徒の学習評価のあり方について」の報告があります(スライド 24)。これによると、「主体的に学習に取り組む態度」は 2 次元で捉えるとあります。

1 つは「粘り強く学習に取り組む態度」、もう 1 つは「自ら学習を調整しようとする態度」です。取り組む態度のコアとなるのは当然動機づけです。自ら学習を調整しようとする態度は自己調整学習と言われるものですが、そこで鍵を握ってくるのが学習方略です。まさに我々がベースとして考えていたモデルと非常に整合しています。さらにこの報告の中では、知識及び技能の習得や思考力、判断力、表現力等の育成に結びついていることが重要とされています。つまり、そうしたことと結びつかないような主体性じゃないよということです。心理学における学問的知見を活用することも有効であるし、把握する方法として、生徒による自己評価も大事だということも指摘されております。我々の予告の後に出ていますけれども、我々の出した予告の理論的な背景とは整合する内容になっております。

最後に、「おわりに」なんですけれども、今回いろいろなエビデンスに基づいて大学入試改革を行ってきましたが、わかってきたことは、エビデンスに基づいて設計された入試制度の頑健性なんです(スライド 25)。倉元先生の発表にもあったように大学入学共通テストが方針転換しました。大学入試英語成績提供システムの導入延期、英語民間試験の延期、記述式問題の見送り、

「JAPAN e-Portfolio」運営許可の取り消しというように、今回の改革の柱であった 3 つがどれもできないことになってしまいました。状況が一変しました。しかしながら、我々の考えた対応、予告にはほとんど影響しないということです。それはエビデンスに基づいて、いろいろなことを立案していることによる効用だと私は思っ

ております。

しかしながら、大学入試を叫ぶ以上、大きな課題として、倉元先生の発表ともかぶるんですけども、やはり日本社会に資する研究成果をつくって、それを「つくる」だけじゃなくて「つたえる」ことが重要だと思います。やはり政策立案への寄与を目指していくということが、我々にとって大きな使命だとも思っております。

東北大学は、今後もエビデンスを重視していく予定で、東北大学ビジョン 2030 の主要施策の 1 つとして、「エビデンスに裏づけられた新たなアドミッションの展開」というのを掲げております(スライド 26)。詳しくはこちらをご覧くださいのですが、最後に申し上げたいのは、大学入試の責任は最終的にはやっぱり大学にあることです。したがって、当該大学の志願者、受験生の保護の大原則から、やはりエビデンスに基づく意思決定が何よりも大切になってくるのではないかと思います。個別大学に今求められていることは、そういうことではないかと思っています。

以上をもちまして、私の発表を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

(拍手)

久保沙織准教授（司会）：

宮本先生、ありがとうございました。ご質問等につきましては、ウェブ上での入力をお願いいたします。

注：本講演は、JSPS 科研費 JP20K20421 の助成を受けた研究成果の一部である。

資料

第32回東北大学高等教育フォーラム 2020年9月23日（水）

基調講演2

「大学入試学」の実践と成果 —エビデンスに基づく東北大学の入試改革—

宮本 友弘
(東北大学高度教養教育・学生支援機構)



大学入試学とエビデンス③

● 研究の象限モデル (Stokes 1997, 岩崎 2011をもとに作成)

		活用の考慮	
		No	Yes
真理探究	Yes	純粋基礎研究 Pure basic research (ボア型)	活用に刺激された基礎研究 Use-inspired basic research (バスツール型)
	No		純粋応用研究 Pure applied research (エジソン型)

▶ 大学入試研究はバスツール型

本日の内容

1. 大学入試学とエビデンス
2. 東北大学の大学入試研究の特徴
3. エビデンスに基づく東北大学の入試改革
4. まとめ

大学入試学とエビデンス④

● エビデンスのレベル
医療分野の例(岩崎 2017をもとに作成)

レベルⅠ	ランダム化比較試験のシステマティック・レビュー
レベルⅡ	ランダム化比較試験
レベルⅢ	非ランダム化比較試験(準実験的研究)
レベルⅣ	症例対象研究、コホート研究
レベルⅤ	記述的研究や質的研究のシステマティック・レビュー
レベルⅥ	記述的研究や質的研究
レベルⅦ	権威者の意見や専門家委員会の報告書

▶ ランダム化比較試験は適用できるケースが限られる
▶ 大学入試研究では、科学的厳密さよりも、特定の文脈で決定にいたる判断材料になるかどうか重要

● エビデンスの3つの局面

つくる 研究	→	つたえる 普及	→	つかう 活用
-----------	---	------------	---	-----------

大学入試学とエビデンス①

● 大学入試学の2つの目的 (倉元, 2020)

- 研究母体が設置された組織に資する研究的成果を産むこと
- 日本社会に資する大局的な大学入学者選抜制度設計に資する研究成果を産むこと

● 実学としての大学入試研究

- 実用的なニーズに応える
- 研究方法は学術研究と同じ
- 研究成果が意思決定の際のエビデンスとなる

東北大学の大学入試研究の特徴①

● エビデンスを「つくる」局面

➢ 教員の専門性

- 教育心理学・・・実証的研究方法
- 心理統計学・・・データ分析
- 教育学・・・ICT利用
- 比較教育学・・・海外の情報収集

➢ ステークホルダーである高校側の意見を重視

- 大学入試における「相互関係」の原則 (倉元, 2018)：志願者側のニーズを適切に把握、冷静に受けとめることが肝要
- 当事者性：大学の入試の在り方は、当該の大学への進学を視野に入れた受験生を数多く抱える高校にとっては大問題

▶ 東北大学志望の受験生保護

大学入試学とエビデンス②

● エビデンス (evidence) とは

- 実証性を伴った科学的根拠
- 1990年代頃から、さまざまな領域の政策や実践で「エビデンスに基づく (evidence-based)」が重視される
- 日本の教育界では、2005年の中央教育審議会義務教育特別部会における議論で広く知られるようになった (惣脇, 2009)

● エビデンス = 研究の成果

- エビデンスを産出する研究とは？

東北大学の大学入試研究の特徴②

● エビデンスを「つたえる」局面

➢ 情報発信

- 学会：全国大学入学者選抜研究連絡協議会、日本テスト学会等
- マスコミ：新聞、雑誌
- インターネット：科研費ホームページ
- イベント：東北大学高等教育フォーラム、学会シンポジウム

➢ 学内広報

- 入試に関わる全学的な委員会等での周知
- 政策決定者に対する説明
- ▶ 学内での議論の積み上げ、大学の意思決定に寄与 (エビデンスを「つかう」局面)

エビデンスに基づく東北大学の入試改革①

9

1. 大学入学共通テストへの対応：英語認定試験

● 予告（平成30年12月5日）

- ① 本学では英語 4 技能の修得を重視しており、受験に当たっては「CEFR における A2 レベル以上の能力を備えていることが望ましい」ことを出願基準とします。
- ② ただし、この出願基準は出願に当たって英語認定試験の受検とその結果提出を求めるものではありません。本学は英語認定試験の受検と CEFR の A2 レベルの成績を志願者全員に求める「出願要件」とはしません。また英語認定試験成績を CEFR 対照表に基づいて点数化し、これを合否判定に用いることもしません。

エビデンスに基づく東北大学の入試改革⑤

13

2. 大学入学共通テストへの対応：記述式問題の活用

● 予告（平成30年12月5日）

- ① 国語の記述式問題の活用については、以下のとおり取り扱います。
 - 1) 段階別評価を点数化して合否判定に用いることはしません。
 - 2) ただし、合否ラインに志願者が同点で並んだ場合、記述式問題の成績評価が高い志願者を優先的に合格とします。
 詳細については、大学入試センターによる成績表示方法の決定発表を待って改めて公表します。
- ② 数学の記述式問題については点数表示の成績を合否判定に用います。

エビデンスに基づく東北大学の入試改革②

10

▶ 高校調査2017（倉元・長瀬，2018；倉元・宮本・長瀬，2019）

➤ 調査方法

- ・ 調査期間 2018年1月～4月
- ・ 調査対象 東北大学に志願者、合格者を多数輩出する269校（①平成26年～29年度入試で通算合格者数8名以上。②AO入試前期合格者数2名以上）

	調査票 送付校	対象数	調査設計 カバー率	返送率	実質 カバー率
単純集計	269	4,972	5.4%	81.0%	4.4%
全志願者数	24,047	30,395	79.1%	89.1%	70.5%
全合格者数	8,442	10,249	82.4%	89.6%	73.8%

エビデンスに基づく東北大学の入試改革⑥

14

▶ 国立大学の個別学力試験の実態調査（宮本・倉元，2017，2018）

➤ 調査目的

- ・ 高大接続システム改革会議「最終報告」（2016年3月）：一般入試の課題として「知識に偏重した選択式問題が中心で記述式問題を実施していない場合もある」という指摘が、国立大学に該当するかどうかの検証

➤ 調査方法

- ・ 分析対象 大学院大学4校を除く国立大学82校の2015年度一般入試個別学力試験問題（前期日程、後期日程）
- ・ 分析方法 校間単位で解答形式を分類

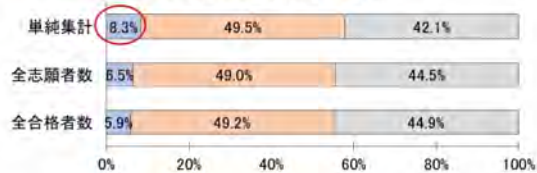
エビデンスに基づく東北大学の入試改革③

11

➤ 調査結果

□ 国立大学協会の「基本方針」（外部試験を一般選抜の全受験者に課す）に対する意見

■ 賛成 ■ やむを得ない ■ 反対



エビデンスに基づく東北大学の入試改革⑦

15

➤ 調査結果

- ・ 全24,066問中、約88%が記述式問題
- ・ 80字以上の記述式問題は1,088問
- ・ 記述式問題を出題していない大学は1大学のみ
- ・ 80字以上の記述式問題を出題していない大学は9大学のみ

➤ 調査結果の学外発信

- ・ 科研費ホームページに掲載（2016年12月）
- ・ 朝日新聞（2016年12月）→ AERA（2019年11月）

➤ 記述式導入の議論への影響

- ・ 2019年11月の国会において一つのエビデンスとして複数回取り上げられる

エビデンスに基づく東北大学の入試改革④

12

▶ フォローアップ：高校調査2018（2018年12月～2019年4月実施。詳しくは、倉元・宮本・長瀬，2020）

□ 英語認定試験に関する東北大学の方針に対する意見

■ 賛成 ■ どちらとも言えない ■ 反対



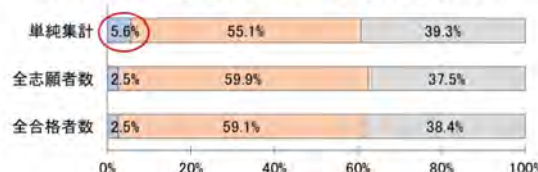
エビデンスに基づく東北大学の入試改革⑧

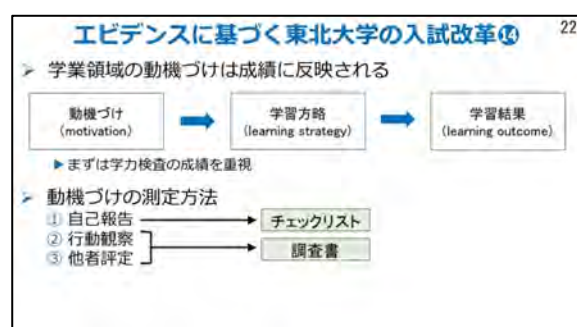
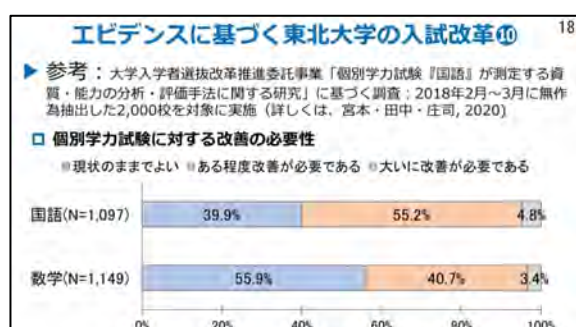
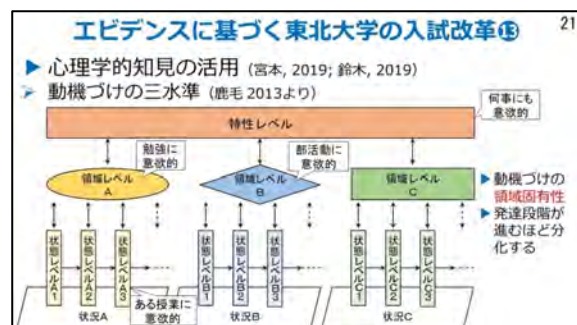
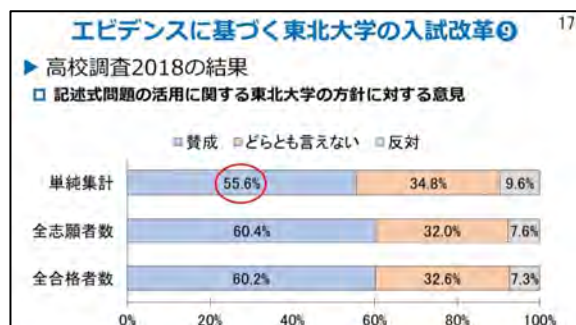
16

▶ 高校調査2017の結果

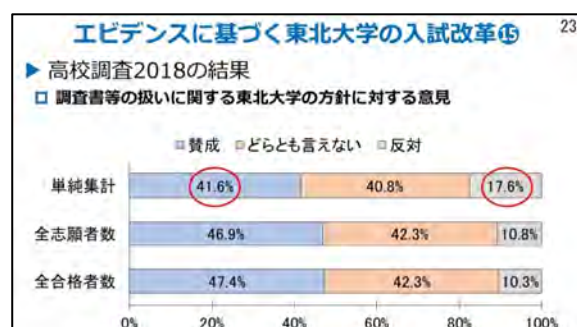
□ 記述式問題をどの程度重視してほしいか

■ とても重視してほしい ■ どちらとも言えない ■ あまり重視してほしい

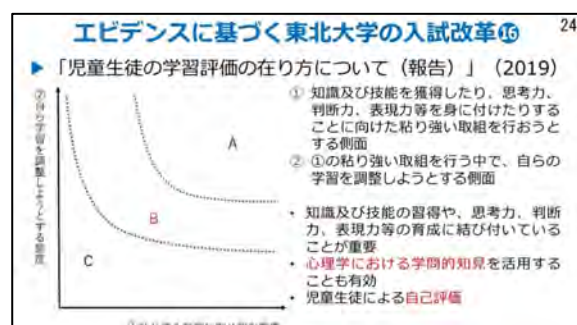




- ### エビデンスに基づく東北大学の入試改革⑬
- 19
- ### 3. 調査書等の扱い
- 予告（平成30年12月5日）
- ① 学力3要素における「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」の評価(主体性評価)については、志願票に調査書と対応した5項目程度のチェックリスト項目を設け、志願者がこれをチェックする自己申告方式をとります。
 - ② その活用については、合否ラインで志願者が同点で並んだ場合、チェックリストによる主体性評価が高い志願者を優先的に合格とします。
 - ③ チェックリストにおけるチェックの根拠を調査書により確認することとし、その他の資料を求めることはしません。
 - ④ チェックリスト及びその評価方法等の詳細については改めて公表します。



- ### エビデンスに基づく東北大学の入試改革⑮
- 20
- ▶ チェックリスト
- (A) 高校における学習活動に主体的に取り組んできた
 - (B) 部活動・ボランティア活動等に主体的に取り組んできた
 - (C) 生徒会・学校行事等に主体的に取り組んできた
 - (D) その他の活動に主体的に取り組んできた
 - (E) 高校時代に取得した資格、獲得した賞がある
- ※ ①のみで、自由記述欄はなし



おわりに

25

- エビデンスに基づいて設計された入試制度の頑健性
 - 大学入学共通テストの方針転換
 - ✓ 「大学入試英語成績提供システム」の導入延期
 - ✓ 記述式問題の見送り
 - ✓ 「JAPAN e-Portfolio」運営許可の取り消し
 - 東北大学の入試にはほとんど影響しない
- 日本社会に資する大局的な大学入学選抜制度設計に資する研究成果をつくり、つたえる
 - 政策立案への寄与を目指す

おわりに

26

- 東北大学では今後もエビデンスを重視
 - 「東北大学ビジョン2030」の主要施策の一つとして「エビデンスに裏付けられた新たなアドミSSIONの展開」を掲げる

アドミSSION・センターの機能を拡充・強化し、これまでの入学者等の実績や各種入試動向調査などのエビデンスを踏まえ、本学で学ぶ意欲の高い学生を受け入れる AO 入試を拡大するとともに、アドミSSION・ポリシーに合致した多様な学生を広く国内外から確保するための入試制度を開発・実施します。また、戦略的な入試広報および高大接続活動を強化します。

第32回東北大学高等教育フォーラム 2020年9月23日（水）

ご清聴ありがとうございました



引用文献

28

- 堀崎久美子(2017) 教育研究エビデンスの課題—知識社会における産出・普及・活用— 国立教育政策研究所紀要 第140集 95-112.
- 前嶋久美子(2017) エビデンスに基づく教育 研究の政策活用を考える 情報管理 60(1) 20-27
- 倉元直樹(編)(2020) 「大学入試」の歴史 命子書房
- 倉元直樹・長澤裕幸(2016) 高次接続改革への対応に関する高校側の意見—自己採点利用方式による第1次選考、認定試験及び新共通テスト記述式問題の活用— 全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会(第13回)研究発表予稿集 78-82
- 倉元直樹・宮本友弘・長澤裕幸(2019) 高次接続改革への対応に関する高校側の意見—東北大学のAO入試を事例として— 日本テスト学会誌 15 99-119
- 倉元直樹・宮本友弘・長澤裕幸(2020) 高次接続改革に対する高校側の意見とその変化—「受験生保護の大原則」の観点から— 日本テスト学会誌 16 87-108
- 宮本友弘(2019) 「主権性」評価の課題と展望—心理学と東北大学AO入試からの示唆 高度教育・学生支援機構(編) 大学入試における「主権性」の意義—その理念と現実—(pp.7-25) 東北大学出版会
- 宮本友弘・倉元直樹(2017) 国立大学における個別学力試験の報告形式の分類 日本テスト学会誌 13 89-94
- 宮本友弘・倉元直樹(2016) 国立大学の前期学力検査における記述式問題の出題状況の分析—40年以上の記述式問題に焦点を当てて— 大学入試研究ジャーナル 28 113-118
- 宮本友弘・倉元直樹・石川強(2020) 高校教員は新傾向の国語記述式問題をどう扱っているか—全国調査から— 大学入試研究ジャーナル 20 30-35
- 惣橋寛(2009) より一層エビデンスに基づいた教育政策と実践を OECD教育研究センター(編) 教育とエビデンス—研究と政策の両側に向けて(pp.3-13) 明石書店
- Stake, D.E.(1997) *Partners in governance: Basic evidence and technological innovation* Washington, DC: Brookings Institution Press.
- 鈴木寛之(2019) 教育の標準から見た「主権性」—自己調査学習の観点から— 高度教育・学生支援機構(編) 大学入試における「主権性」の評価—その理念と現実—(pp.31-48) 東北大学出版会

現状報告者紹介

現状報告者 1

安成 英樹（やすなり ひでき）氏

1963 年福岡県生まれ

〔教員歴〕

東京大学文学部西洋史学専修課程助手（7 年間）

お茶の水女子大学大学文教育学部人文科学科比較歴史学コース准教授（14 年間）

お茶の水女子大学大学文教育学部人文科学科比較歴史学コース教授（8 年間）

〔主な研究歴〕

専門は西洋史学（フランス絶対王制の統治構造・官僚制研究）

〔主な著書，研究業績〕

『フランス絶対王政とエリート官僚』（日本エディタースクール出版部，1998）

〔学会活動等〕

日仏歴史学会幹事（4 年間）・理事（14 年間）

史学会理事（2020 年～）

〔その他の特記事項〕

お茶の水女子大学入試推進室長・教育研究評議員（2014～2018）

現状報告者 2

笠井 敦司（かさい あつし）氏

1975 年青森県生まれ

〔教員歴〕

青森県立鱚ヶ沢高等学校 教諭（6 年間）

青森県立青森東高等学校 教諭（9 年間）

青森県立青森高等学校（現職） 教諭（9 年目）

〔主な教育活動〕

教科 ：国語

進路指導主事：平成 29 年度～令和元年度

教務主任 ：令和 2 年度～現在

現状報告者 3

杉山 剛士（すぎやま たけし）氏

1957 年東京都生まれ

〔教員歴〕

埼玉県高等学校教諭（入間高校，所沢東高校，与野高校）（13 年間）

埼玉県庁及び埼玉県教育委員会（県総合政策部主幹，教育委員会文教政策室長，高校教育指導課長等）（12 年間）

埼玉県立高校管理職（浦和第一女子高校教頭（2 年間），熊谷西高校校長（3 年間），浦和高校校長（5 年間））

私立武蔵高等学校中学校校長（現職）（2 年目）

〔主な教育活動〕

- ・教諭時代は公民科のほか，主に進路指導を担当．部活動ではバレーボール部顧問
- ・行政時代は，主に県の総合計画や教育振興計画を策定するとともに，指導行政を担当
- ・管理職としては，男子校・女子高・共学校を経験．また公立私立の双方も経験

〔その他の特記事項〕

- ・日本教育社会学会会員
- ・全国高校長協会理事（3 年間）
- ・主な著書「埼玉県立浦和高校」（佐藤優共著 講談社現代新書 2018 年）「ポケットいっぱいのお宝」（世界通信 2018 年）「大学入試がわかる本」（中村高康編 岩波書店 2020 年）等

現状報告 1：入試改革への挑戦

—お茶大新フンボルト入試の実施状況・課題・展望—

お茶の水女子大学教授

安成 英樹 氏

〔講師紹介〕

久保沙織准教授（司会）：

お時間になりましたので、これより第 2 部現状報告に入らせていただきます。

現状報告 1「入試改革への挑戦—お茶大新フンボルト入試の実施状況・課題・展望—」，お茶の水女子大学教授，安成英樹先生よりお願いいたします。

安成英樹氏：

こんにちは。お茶の水女子大学の安成と申します。

本日は，お茶大が 4 年前に本格的に導入しました新フンボルト入試（AO 入試，今年から総合型選抜）について，ごく簡単に概要をご説明しましたその課題についてお話ししたいと思っております。お手元の略歴をご覧くださいればおわかりのように，私は入試分野についてはそもそも全くの素人です。本日ご参加の方々の中でも専門分野においては最も遠いところにいる人間だと思います。実のところ私の専門は歴史学（西洋史，フランス史）なのですが，巡り合わせというか，6 年前に入試の責任者（本学では入試推進室長と申します）を任されました。ちょうど同じタイミングで，文科省の大学教育再生加速プログラム（以下，AP と略称）の公募があり，これにアプライして新しい入試改革を実働させるようにと当時の学長・副学長に申しつかりまして，以後 5 年間（AO 入試としては 6 年間）この入試部門の責任者，かつ新入試の主務設計者を務めて参りました。

まずは，新フンボルト入試の概要をご説明いたします。お茶大というのは，東北大学のような



大規模大学に比べれば本当に小さな大学です。全学で 3 つの学部しかなく，学生の定員も合わせて 452 人です。その 452 人の学生を，ありとあらゆる入試方法で選抜しているというのが現状です。その入試の 1 つとして，AO 入試を 2008 年度から導入していましたが，その AO 入試をさらに大きく改革して，これからの社会のニーズあるいは期待に沿うような入試をつくり上げよ，という命題が与えられました。これが本日お話しする新フンボルト入試という入試です（名称の由来をお話すると 15 分必要ですので，後で資料をご参照ください）。

当初の制度設計段階でまず念頭に置いていた狙いは，新しい学力の三要素を踏まえた上で，自ら考える力を持つ学生，入学時に知的ピークを迎えるのではなく，むしろ入学してから，あるいは社会に羽ばたいてから能力をますます発揮していくようなポテンシャルのある学生を選抜することにあります。それが実際にはきわめて難しいことは皆さんもよくご承知だと思います。とはいえ，単に知識の量，頭の中に詰め込んだ暗記の量の多寡ではなく，そうした知識をどう活かせるか，それを問う入試を目指しました。またせっかく新しいものを作るのであれば，受験する側にとってもこれまでに例を見ない知的に

「面白い」、受験すること自体に意義のある入試にしたいとも考えました。他方、簡単には測りえない受験生のポテンシャルを測るためには、(実施側の負担はいったん置いておいて) 時間と手間のかかる丁寧な入試を設計するしかないとの判断にいたりました。

実際の入試の仕組みですが、まず第1次選考においてはプレゼミナールという、大学の専門的な授業(90分2コマ)を受験生に実際に受講してもらい、大学での学びがどのようなものであるか、またお茶大の気風、どんな先生がどのような授業をするのかということを高校生に直に体験してもらうというかたちを設定しました。しかも、入試としては非常に特殊だと思いますけれども、このプレゼミナールを高校2年生以上にも参加できるようにいたしました。一方、第2次選考では、文系諸学科を目指す受験生には、図書館入試を、理系志望者には実験室入試を課しております(それぞれに特徴のある入試形態ですが、中身については後述します)。

次に、この入試の4年間の実施状況を資料に即してお話しします。第1次選考のプレゼミナールは受験生以外も参加可能という特殊な形態であり、その点では学内にも強い批判、懸念がありました。また、受験生は選考のために本学に2回も来なきゃいけないわけですから、受験する側にも非常に負担の重い入試です。しかも定員は全学でわずか20人。それでも旧AO入試の10人から倍増させたのですが、それでもお茶大の入学定員のわずか4%の枠を目指すわけです。このような過酷な、合格を目指すだけなら分の悪い入試を高校生が果たして受けてくれるのかという強い危惧がございました。6年前に制度設計を始めて(幸いにしてAPに採択されたのでこれを原資として)、さまざまな事前調査や長時間の議論を重ねて、2015年度にはプレゼミナールのみを先行実施し、ようやく2016年度から本格導入をしたわけですが、はっきり言って初年度は不安でいっぱいでした。ですが、結果としては資料を見ていただければ分かるように、

毎年200人弱の受験生が出願してくれるといううれしい誤算になりました。初年度についていえば、20人に対して198人(倍率約10倍)が出願をしてくれました。どこをおもしろいと思ってもらえたのかはしかとはわかりませんが、高校生がこの入試を非常に興味を持ってくれたことは確かでしょう。

加えて、毎年プレゼミナールには、高校2年生あるいはAO入試を受けない3年生が百何十人参加してくれています。受験生との比率は大体1対1ぐらいです。一般的にいう新しい入試制度というのは初年度こそ勢いがあるものの、2年目には出願者が落ち込むというケースが多いように見受けられます。ところが本入試に関していえば、2年目も受験生192人、さらにはプレゼミナールを受講した非受験者は、前年より増えたというような状況です。3年目には受験生が177名で、さすがにちょっと減ったかなと思いますが、昨年度(導入4年目)にはなぜか受験生、受講者ともに反転して大幅に増えました。今年度以降の入試改革(の混乱)を見越して、受験生に特別選抜への指向が見られたのかとも思いますが、ともかくもいい意味でこちらの予想に反して、昨年度は過去最高の222人の出願者を得ることができました。プレゼミの参加者も同様に大きく増えました。本学としては非常にうれしい、ありがたい数字になりました。

ここで入試の中身について簡単に申しあげると、第1次選考のプレゼミナールでは、大体文系、理系ともに90分の大学の授業を2コマ、フルに聞いてもらいます。毎年メニューを変えますから、あつかう分野やテーマ、内容も授業担当者も変わります。プレゼミナールではAP経費を利用して毎年参加者に悉皆的な受講アンケートを取っています。それによれば、全体に満足できるものだったか、あるいは今後の学びに有益だったかという質問に対して、非常に高い満足度を示しています。お手元のグラフにありますように、両方の質問ともほぼ99%に近いプラス評価を過去4年間、毎年得ることができています。

私はこれを専制国家の国民投票状態というふう
にしておりますけれども、これだけ多くの高
校生がプレゼミに来てくれて、かつ高い満足度
を持って帰っていているといえるでしょう。
プレゼミの設計理念としては、大学そのものを
知ってもらう機会にするのと同時に、学ぶこと、
自分で考えることのおもしろさを実感してもら
うというのが、当初からの大きな目標になって
おります。そういう意味で、このアンケート結果
からしてプレゼミナールの実施状況については
かなり肯定的に捉えていいのではないかと考え
ています。またプレゼミナールの参加者は、もち
ろん首都圏が多いのは当然ながら、それこそ全
国から集まっていることも付け加えておきます。

第2次選考では、前述の通り図書館入試、実
験室入試というものを受験生に課します。理系
の場合はそれぞれ学科の専門性をふまえた思考
力を問う課題を解いてもらいますが、一部の学
科では高校でグループ研究、自由課題研究をず
っとしてきているような人たちに、その研究成
果をポスターの形で持って来てもらって、ポス
ター発表とそれに対する質疑応答をベースにし
た入試を行っております。

最も特徴があると我々が考えているのは図書
館入試です。第1次選考を突破した人たちには
本学の附属図書館に6時間こもってレポートを
書くという仕組みです。要するに長時間にわた
って図書館に缶詰になってもらって、その資料
の何も見てもいいという、そういう入試を実
施いたします。附属図書館は幸いにして4年前
に増改築工事が終わり、とてもきれいな居心地
のいい空間となりましたので、ここでじっくり
ものを考えるという経験をしてもらうわけです。

最初にレポートの共通課題を出すわけですが
けれども、いわゆる簡単に正解が出る（ある）たぐ
いのものではありません。初年度のレポート課
題は「言語の持つ力について自由に論じなさい」、
2年目は「人間と動物の関わりについて自由に論
じなさい」です。一筋縄ではいきません。また図
書館入試は、本棚に向かって正解探しにヨーイ

ドンで徒競争するわけじゃない。すなわち、自分
は与えられたテーマについてどう考えるかをま
ずじっくりと考え、必要な資料を探し、その上で
自分の考えを答案にまとめるという経験をして
もらうわけです。受験生にはお弁当を持って来
てもらい、またこちらでも茶菓をふんだんに用
意し自由に使ってもらいます。この附属図書館
でのレポート作成が初日、2日目は午前中にグル
ープ討論、午後には個別面接を課します。丸2日
間、手間暇かけた丁寧でユニークな入試であり、
受験生は濃密な時間を過ごし、まさに真の実力
（ポテンシャル）を問われることになります。

合格者数など最終的な入試結果をまとめた表
を資料に入れてありますのでご覧ください。過
去4年間、実績としてはこのような数値になっ
ております。参加者の人数のみをとっても、受験
生も受講してくれた高校2年生以上の人たちも、
基本的にこの入試に対してポジティブに捉え強
い関心をもって新フンボルト入試に挑んでくれ
ているというふうに考えています。さらに、この
入試合格者にとっては入学までの半年が非常に
大事だと考えておりますので、合格者にはマン
ツーマンで上級生（多くは自身がAO合格者で
す）をチューターとして配置し、入学前にさまざ
まな相談ができ、勉強・学びのサポートをして
もらうという体制を組み上げています。また英語
力育成のためのe-learningを活用しての課題を
こなしてもらいます。

こういう形で運用をしてきてあつという間の
4年間でした。この新型AO入試では、わずか
20人の選抜のためにしては、非常に大がかりで
たくさんの人手とお金がかかります。これだけ
の労力をかけてやる甲斐があるのかということ
は、学内からもさんざん指摘をされてきました。
ただここで強調しておきたいことは、プレゼミ
がまさにそうだといえると思いますが、この入
試を受験することが、もちろん一義的には合格
を目標とすることは当然のことながら、それを
唯一の目標にしない入試、すなわち（これはちょ
っと傲慢な言い方ですけども）「合否にかかわ

らず」受験することで今後の有益な経験になる、あるいは自分の学びの将来ビジョンを明確にする、そういう仕組みを織り込んでいる点です。受験して損はない入試、です。

我々としても、お茶大をよく知ってもらった上で、ここで学びたいと思った人はぜひ新フンボルト入試以外の入試も受けてください、ということをアピールいたします。それに応えてくれていると言うべきなのか、例えば昨年には222人が出願してくれましたが、逆にいうと23人のみ合格しましたので、199人、ほとんど9割以上が落ちたわけです。ところが、不合格だった人たちのかなりの部分がすぐに気を取り直して、推薦入試や一般入試に挑んでくれて、そこであらためて合格を勝ち取って、最終的に合計62名が今年4月に本学の門をくぐっています（とはいえ、実際にはコロナ禍でほとんど登校できていないのですが）。あるいはプレゼミは受講したものの新フンボルト入試は受験せず、その他の入試区分で合格した人も9名おります。500名弱の新入生の中に、合わせて70名近くのプレゼミナール受講経験者が含まれているというわけですね。そういう意味で、たった20名をとる入試に留まらず、他入試への波及効果が相当に大きいものと考えています。

さて、残り時間わずかとなってしまいましたが、実は今日お話ししなければいけないのは（今日のフォーラムのテーマとしては）、このあとの今後の課題のほうだというふうに思っております。先ほど倉元先生、それから宮本先生の話聞いていて、もうとにかく耳が痛くてしょうがなかったですけども、本学の場合、小規模校であるということも含めて、非常に多くの課題があります。

まず、人の面、組織の面ということで申し上げますと、とにかくお茶大は掛け値なしに小規模の大学です。常勤の教員はわずか180人しかいません。さらには全ての入試を事務方として司ってくれている入試課には、課長以下常勤職員がわずか5人しかいません。一方、教員から選

ばれる入試委員というのは、どの大学でも恐らくそうでしょうけれども、非常に激務であり、通常2年任期で交替します（そうでなければ保ちません）。私はこのAP事業の運営・実施の責任者であったこともあり入試責任者を例外的に5年務めました。見てわかりますように、もう身も心も痩せ細りました。それはもう本当にどうしようもないぐらいに消耗いたします。ただ、教員の場合、とにかく2年で委員が交替してしまう。そうすると、なかなか制度的な維持ができません。もちろん交替しないと人の方が保たないのだけれども、一方で交替してしまうと情報が共有できない。先ほど宮本先生のお話にありましたように、入試では機密性がかなり重要です。そうすると、そう簡単にこういうやり方をするのだよということを大っぴらに伝達・共有したり、広く議論し検討する機会というのが少ないわけです。入試委員になって初めて、こんなことをやっているのかというのを理解するわけで、とくにAO入試はまさにそういうケースです。

それから、制度的なことでは、本学のような小さい大学では入試を担当する部門、アドミッションセンターというものは人的にも予算的にも立ち上げられません。常勤の教職員を回す余裕がないのです。したがって、それこそ任期で選ばれた（運の悪い）人が、その制度をなんとか維持していくしかない。当然のことながら、その過程で基本理念が徐々に失われていかざるをえません。また、新フンボルト入試は相当な負担のかかる入試ですので、今後どう維持していくかは正直にいったいへんな困難があるものと思います。AP事業もこの3月で終了し、外部資金も切れましたので、財政的にも本学自前の財源でやっていくほかありません。

この4年間で新フンボルト入試を立ち上げることにある程度成功したというふうに評価しております。とはいえ、思い起こせば何ととっても初年度が一番大変でした。新しい制度を立ち上げ細部を詰めていく過程で、どうしてこうする

のかというような批判や反論がすぐに出てまいります。それを1つずつ説得したり、解決したり、妥協したり、さらには黙っていじめられたりしながら乗り越えていくしかないわけです。ですが、そのなかで実感したことは、制度というのは一回作り上げてしまうと、もっと具体的にいえば去年こうしたのですから、という先例ができると、意外に皆さん素直に（これは多分に日本人の特性かもしれませんが）前例踏襲で動いていただけるように感じました。一方で、年月を重ねていく過程で今度は制度そのものがルーティン化、形骸化してくるのです。いわゆる創業か守成かどちらが難いかという議論に直結する問題だと思います。制度の理念を堅持しつつ、しかも柔軟に修正するというさじ加減こそが大事ということになりますが、そのためには先ほどから話題に出ているエビデンスが大事なのです。ただこのエビデンス自体を集約し分析していく体制がなかなかとれないというのが、本学の正直な現状です。人的、物的な余裕が本当にありません。

たとえばこのAO入試でどんな学生が入学してきたのかという点については、もちろん入学後の多角的な追跡調査が不可欠なのですが、それがなかなか難しい。先ほど言ったように常勤の教職員には余裕がありません。ようやく今年、自前の財源で入試担当の特任講師を雇用する体制が整いましたけれども、たった1人で何もかもやれるわけではないですし、通常の入試業務というものはあたりまえですが毎年繰り返し続いていくわけですね。さらに入学後の学生をどう追跡するかということに関しては、そもそも入試の職掌なのかという話とすぐに結びつきます。本来、これは学務課や学生キャリア支援課といった部署と協働しなきゃいけないのです。ところが、大学というところはお承知のとおり、いわゆる縦割り行政的な性向が非常に強くて、そこを突破するのは難しいものがあります。もう1つ、現状では個人情報という壁がどんどん高くなっている、その分情報やデータの扱い

に慎重にならざるをえません。本学ではまだ十分な追跡調査あるいは評価方法が開発できていないというのが正直なところですが、また、全学で20人しかとっていない入試ですので、AO合格者のGPAを単純にほかの入試合格者グループと比較するというだけでは、ほとんど意味がないわけです。量的な比較が困難だとすれば質的評価ということになりますが、これまたたいへん難しい。入学した学生は非常に個性的です。そういう意味では、身近に接している合格者の言動を元にした経験値というか印象でしか合格者像を語れないという問題を現在も克服できていません。

それから、もう一点付け加えておきますと、入試広報についての課題が非常に大きいと思っています。この4年間つくづく思い知らされましたが、我々は高校の先生方あるいは生徒の皆さんに直接働きかける術を持ちません。とくにAO入試に対しては世間の印象がもともと非常に悪いものがあります。この数年いろいろな高校に訪問調査にお邪魔しましたけれど、その際にうちはAOや推薦ではなく一般入試を目指させますということを明言される高校（の先生方）が結構ありました。これは恐らく今後変わっていくとは思いますが、そういう意味では特別選抜というのが、高大接続の問題と相俟って非常に難しい問題を抱えているということを実感しております。

以上、非常に簡略ではありますが、本学の入試改革の経験をお話ししました。そして、新フンボルト入試は今のところなんとかうまくテイクオフできたとはいえ、依然として多くの課題を抱えていると申し上げるべきだと思います。その点でお茶大のケースは、先ほど伺った東北大学の着実な入試施策の企画立案に対する、ある意味での反面教師のようなものではないかというふうに私は思っております。そもそもどの大学の入試制度も、学部学科においてボトムアップで営々とつくられてきたものです。それを、今回のお茶大の事例のようにトップダウンで、外部

経費をとってきて改革するのは極めて難しいことをつくづく思い知らされました。そして改革を企図する場合、当然学内の説得が必要不可欠になりますが、その説得をするにもやはりエビデンスがないとどうしようもないのですね。入試に正解や完成型はないわけですから。たとえばこれだけ受験生が来ているじゃないかと幾ら言っても、質はどうなんだとすぐ切り返されます。大学の教員というのはそういう論争には非常に長けておりますので。したがって、新たな入試制度を作るにしても維持するにしても、まことに難しい問題をはらんでいるということです。以上、現状報告というか半分以上愚痴になりましたけれど、これで報告を終わらせていただきます。持ち時間を超過してしまいました。誠に申し訳ありません。

(拍手)

久保沙織准教授（司会）：

安成先生，ありがとうございました。ご質問等につきましては，ウェブ上での入力をお願いいたします。

注：本報告は，JSPS 科研費 JP20K20421 の助成を受けた研究成果の一部である。

資料

入試改革への挑戦
—お茶大新フンボルト入試の実施状況・課題・展望—

第32回東北大学高等教育フォーラム
(2020年9月23日)

お茶の水女子大学
文教育学部教授 安成 英樹

【実施方法およびアドミッションポリシー】

第一次選考を兼ねるプレゼミナールと第二次選考を各々丁寧かつユニークな形式で実施

成果やプロセスを評価することで、ペーパーテストで測れない潜在的な力（ポテンシャル）を見極める

↓

単なる知識量の多寡を測るのではなく、その知識をいかに「活用」し「応用」できる力（ポテンシャル）を持っているかを問う

選考方法(二段階)

- ・ 定員は旧制度から倍増して全学で20名
- ・ 第1次選考：9月下旬開催のプレゼミナール受講後、受験生のみレポート作成 → 出願書類と合わせて総合的に評価
- ・ 第2次選考：10月中旬の土曜・日曜（理系は土曜のみ）：
文系学科は「図書館入試」、理系学科は「実験室入試」

お茶の水女子大学
多様な入学選抜試験

AO入試（新フンボルト入試）
推薦入試
帰国子女・外国学校出身者特別入試
一般入試（前期日程）
一般入試（後期日程）
高大連携特別入試
私費外国人留学生特別入試
第3年次編入学試験

プレゼミナール実施状況

2016年度プレゼミナール

2016年9月24・25日開催
プレゼミナール2日間の参加者はのべ489名（両日参加者をダブルカウント）

- ・ 初日各セミナー受講者 358名（AO受験者197名、非AOの受講者161名）
- ・ 2日目（計 131名）
図書館情報検索演習 76名
生物学科ポスター発表・相談会 38名
高校教員見学者 17名

2017年度プレゼミナール

2017年9月23・24日開催
プレゼミナール2日間の参加者はのべ524名（両日参加者をダブルカウント）

- ・ 初日各セミナー受講者 382名（AO受験者192名、非AOの受講者190名）
- ・ 2日目（計 142名）
図書館情報検索演習 77名
生物学科ポスター発表 45名
自主研究相談会 12名
高校教員見学者 8名

旧AO入試状況

入試統計

年度	出願者数	合格者数	入学者数
2008	99	9	9
2009	63	10	10
2010	81	6	6
2011	57	8	8
2012	47	8	8
2013	46	8	8
2014	52	9	9
2015	59	9	9
2016	64	6	6

定員10名を充足したのは2009年度のみ

旧AO合格者 追跡調査結果

2008年入学者の成績（GPA調査）

旧AO一週生の進路
(2008年度合格者)

- ・ 本学大学院・・・5名
- ・ 東京大学大学院・・・2名
- ・ 千葉大学・・・1名
- ・ その他・・・1名

2018年度プレゼミナール

2018年9月29・30日開催
プレゼミナール2日間の参加者はのべ480名（両日参加者をダブルカウント）

- ・ 初日各セミナー受講者 364名（AO受験者173名、非AOの受講者191名）
- ・ 2日目（計 116名）
図書館情報検索演習 88名
生物学科ポスター発表 28名

2019年度プレゼミナール

2019年9月28日(土)開催
プレゼミナール参加者はのべ454名
(今年度より1日完結型で実施)

- ・ 各セミナー受講者 442名（AO受験者219名、非AOの受講者223名）
- ・ 図書館情報検索演習参加者 50名
同見学企画参加者 70名
・ 生物学科ポスター発表 48名
自主研究課題相談会 9名

「新フンボルト入試」の由来

時間と手間をかけてじっくりと受験生の資質、能力を見る入試（学力以外の資質を測るには不可欠）
→「科学」のイメージ（ただし暗記ではないので名称として却下）

↓

近代大学の祖型ベルリン大学を創立したヴィルヘルム・フォン・フンボルトや初代総長フィヒテの理念を援用

「[高校までの]学校というものは出来あいで解決済みの知識を教え学ぶ場所であるのに対して、高等教育施設[＝大学]は、学問をつねにまだ完全に解決されていない「問題」として、したがって絶えず研究されつつあるものとして扱うところにその特色をもつものである。・・・教師も学生も、学問のためにそこにいるのである。」(フンボルト)

「われわれが学問を学ぶのは、一生涯いつでも試験に備えて、学んだことをそのまま言えるようにしておくためではない。そうではなくて、**学んだことを人生の来たるべき場合に応用するためであり、したがって学んだことを一つの働きに実えるためである。・・・究極の目的は決して単なる知識ではなくて、むしろ知識を駆使する技法を体得することにある。**」(フィヒテ)

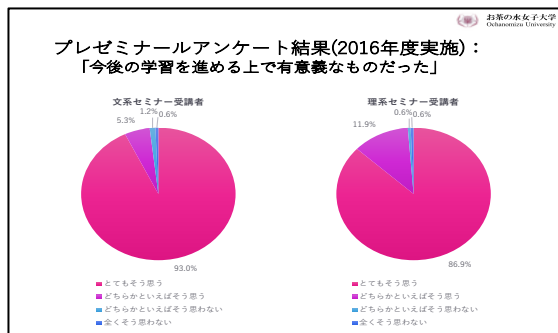
プレゼミナールアンケート結果(2016年度実施)：
「全体的に満足できるものだったか」

文系セミナー受講者

満足度	割合
とてもそう思う	1.2%
どちらかといえばそう思う	8.2%
どちらかといえばそう思わない	90.6%
全くそう思わない	0%

理系セミナー受講者

満足度	割合
とてもそう思う	1.2%
どちらかといえばそう思う	9.1%
どちらかといえばそう思わない	89.8%
全くそう思わない	0%

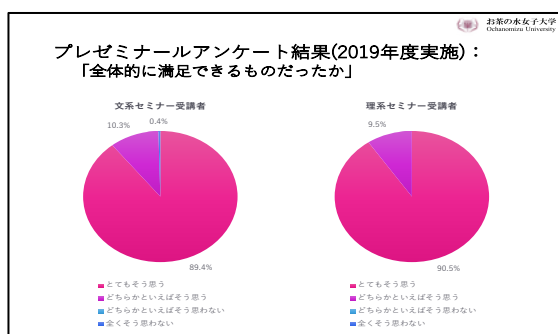


お茶の水女子大学
Chuo University

第2次選考 (10月中・下旬の土・日実施)
図書館入試 実験室入試

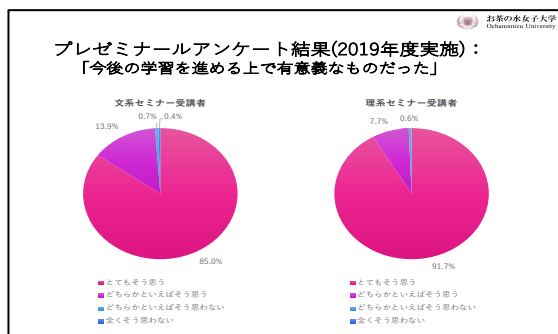
1日目は、附属図書館で、図書・資料を自由に参照しつつ課題についてのレポートを6時間かけて作成する。手書きでもWordで作成してもよい(ノートPCを全員に貸与)初年度のテーマは、「言葉の持つ力について論じよ」。2日目には、グループ討論と個別面接を課す。

自主研究課題のポスター発表(理学部生物学科、生活科学部食物栄養学科)、思考力や探究力などの能力をみる(考えを黒板を使って説明させるなど)といった課題を課す(理系の専攻は土曜日のみ) → R2年度より、学校推薦型選抜と統合し、11月末に選考を実施予定



お茶の水女子大学
Chuo University

図書館入試一附属図書館を試験会場として
人類の知の宝庫としての「図書館」の重要性
お茶大附属図書館の先進的な取組一大学内で最も居心地のいい空間へ
H29年度増改修工事...導入2年目にして「図書館が使えない図書館入試」を実施
リニューアルオープンした附属図書館(2018.4.2.)



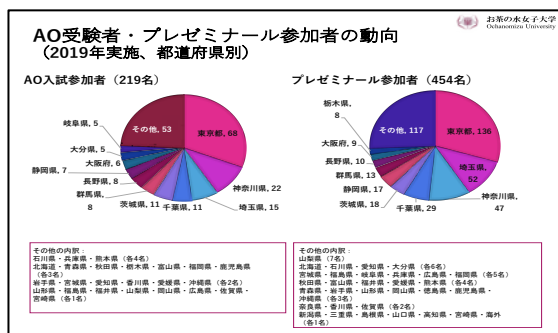
お茶の水女子大学
Chuo University

図書館入試の特徴
長時間(6時間)かけてレポートを作成
お弁当持参、茶菓用意
レポート作成の前に、情報検索レクチャーを受講

【過去4年間のレポートのテーマ】

- ・言語のもつ力について自由に論じなさい。(H29年度入試)
- ・動物と人間との関わりについて論じなさい。(H30年度入試)
- ・「役に立たないこと/もの」が存在することの意味について論じなさい。(H31年度入試)
- ・よい人生とは何か。よい人生を送るために、どのような学びが必要か?自由に論じなさい。(R2年度入試)

↓
正解のない問いをどう論じるか



お茶の水女子大学
Chuo University

入試実施状況一出席者・合格者の推移(4年間)

年度	平成27	平成28	平成29	平成30	令和1
プレゼミナール初日参加者数	265(試行)	358	382	364	454
新フロンティア入試出席者数	(64)	198	192	177	222
うち文系出席者	—	113	118	120	151
うち理系出席者	—	85	74	57	71
第1次選考合格者数	—	83	75	80	83
第2次選考(最終)合格者数	(6)	20	21	23	23

- ・新フロンティア入試実施状況(年度は入試の実施年度を示す)
- ・H27はプレゼミのみ先行実施、同年のAO入試は旧制度による実施(定員10名)
- ・H28から新フロンティア入試完全実施
- ・R2年度は、9月13日段階でプレゼミナールエントリー283名、うち出席予定者135名(文系のみ)、いずれも速報値

お茶の水女子大学
Ochanomizu University

入学前教育の目的と内容、入学手続きの説明、キャンパスツアー、大学生活・教育についての質問・相談（チューターとの懇談）

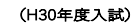
E-Learning英語教材

自宅でもできるE-Learningの活用。それぞれ、週約50分ずつ取り組んだ(H29年度)。

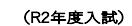
高校の学習を優先、学業の妨げにならない範囲で実施

主にチューターとやり取りしながら自主的に進める

 お茶の水女子大学
Ochanomizu University



 お茶の水女子大学
Ochanomizu University



 お茶の水女子大学
Ochanomizu University

- 課題(山積)と展望

- 時間がかかる入試方法→過重負担をいかに軽減するか(制度の見直し)
 - 専任教員は全学で180名、入試課員5名の1
 - 二次選考でも文系で試験官10名以上、理系各学科は総動員体制
- プレゼンとの実施方法、評価方法などのフラッシュアップ
- APBを経た後の財政的措置 (任期付講師の採用、必要経費の学本財源からの支出)
- 合格者の追跡調査 (マンパワーの不足)
- 有望な志願者を恒常的に惹きつけ、確保しようか……高校生への広報手段の開拓
- 「人」の問題……アドミッション・オフィスの弱体化(弱体化とヒトナセ)、任期で交替する教員入試業務のルーティン化→制度の簡便化、関係の喪失

現状報告 2：大学入試を読み解き，解きほぐす — 高校現場の実践と課題 —

青森県立青森高等学校教諭

笠井 敦司 氏

〔講師紹介〕

久保沙織准教授（司会）：

引き続きまして，現状報告 2「大学入試を読み解き，解きほぐす—高校現場の実践と課題—」，青森県立青森高等学校教諭，笠井敦司先生，よろしくお願いいたします。

笠井敦司教諭：

青森県立青森高等学校の笠井と申します。本校は，県庁所在地青森市にございます進学校であり，本年創立 120 周年を迎えました。また，県下屈指の進学校として地域の期待も大きい学校でございます。本日は，「入試を読み解き，解きほぐす」と題しまして，実践事例報告をいたしたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

さて，本日のトピックと展開です。全体として 3 部構成，対策を問い直す，入試を解きほぐす，対策を展開する，以上で進めてまいります。

では，早速まいります。「対策を問い直す」です。いよいよ 2021 年入試より，大学入学共通テストが導入されます。高大接続改革の要である入試改革は，知識偏重，一方的で受動的な高等学校教育を，いわば逆向き設計で改善を促すものだというふうに認識しております。そのことは共通テストの導入のみならず，ごらんのように，一般選抜，総合型選抜，学校推薦型選抜というふうに，選抜という表現に改められた点に端的に表れているんだと思います。

合格点を取ることにばかり意を注ぎがちになる入試から，多面的かつ本質的に，生徒の資質・能力を測る，見極める選抜へと転換を図る，そういうメッセージだと受け止めております。折しも現在，コロナ禍により，それぞれの選抜方式の全き形での実施が危ぶまれる状況下ではありま



すが，だからといって，当初掲げた理念までが反故になったわけではありません。コロナ禍があるがなかろうが，以前の入試に戻ることはなく，資質・能力を見とる選抜方式の比重が大きくなることは間違いありません。そこから目をそらすことなく，これまでの指導をどう評価し，変えていくべきなのかということにつきまして，本校の医学科推薦 AO 対策を具体的な材料としながらお話しをまいります。

ここで，従来の古典的な指導スタイルと，本校が実施している指導スタイルを対比的に見ていきたいと思います。従来の指導スタイルは，端的に言うとは指導・訓練型です。普段の学びとは別物，そして短期集中特訓，マン・ツー・マンの徒弟制度，一方的な指導で生徒は受け身になりがち。指導内情がその先生でないとわからないブラックボックスになっている。そもそも教員と生徒の関係は垂直的でありますから，指導教員がこうしろ，そうするなど言えば従わざるを得ないのが，生徒です。この関係性で指導するという観念にとらわれてしまいますと，どうしても文章の書き方だとか受け答えの仕方といった「方」の指導，技術的，表面的な指導に終始してしまいがちです。これでは単なる訓練で，生徒は苦痛であるばかりです。

しかし、考えてみれば簡単ですが、教え込まれたものを自分にたたき込んでそれを再現するというスタイルは、各大学が求める見とりたい力と合致しているとは思えません。ここには、対策を通じて生徒の資質・能力を高めるという発想が欠落しているんだと思います。入試対策におけるこうした構造的な弊害を取り除くためには、指導者としてではなく、プロデューサーとしての立ち位置で関わるのが大事なのではないでしょうか。

画面、こちらのプロジェクト型が本校の医学科指導の形でございます。普段の学びの延長であること、計画的・継続的であること、グループ化をして1対多、たまにマン・ツー・マンという形、柔軟な形、双方向的な意見交換が生じ、生徒との双方向の意見交換が生じ、また指導内容は他の教員の意見を取り入れながら、順次更新していくというような形です。

ただ、恐らく多くの進学校で、さまざまな名称でこうした進学グループをつくって指導なさっていらっしゃると思いますので、これ自体特に目新しいものではないと思います。ただ、大切なのはこうした指導形式ではなく、あるいは指導内容がどれだけ実際の入試と一致しているかでもあります。対策の局面で、どのような資質・能力の育成を目指しているのかということが一番大事だと思います。その際に、私が大事にしているのが次の8つのステップです。

順番に、読み解く、洗い出す、集める、探る、見極める、実践する、振り返る、修正する、以上の8つのステップです。これをこれから4つずつ、2つに分けてご説明をしていきたいと思います。

まず、入試を解きほぐすという1から4の段階です。例といたしまして、東北大学医学科のAOⅡ期、Ⅲ期のアドミッション・ポリシーをかいつまんで読み上げたいと思います。

AOⅡ期、人を対象とする生命科学や医学・医療に関わる学問に強い関心を持ち、旺盛な探究心と創造的な思考能力と高い倫理観を有する人

を求めています。研究医として世界的な活躍をめざす情熱と積極性を有する人を歓迎します。

AOⅢ期、医学・医療の指導者として世界で活躍をめざす人を求めています。対話による相互理解力と医学への強い学習意欲と探求心を持ち、リーダーシップを発揮できる人を歓迎します。

こう読み比べますと、Ⅱ期とⅢ期では重きを置く能力に違いがあることがわかります。資質・能力の観点の違いに着目して、私は次のように読み解き、洗い出しました。

Ⅱ期に掲げる創造的な思考力とは、定式的な思考パターンにこだわらず、多角的な視点で捉え、柔軟な発想で解決に導く能力ではないかと考えました。

Ⅲ期の対話による相互理解力は、端的に言ってコミュニケーション能力、詳しく言うと相手の意図や考えをしっかりと受け止めて理解し、その上で自分の考えを相手に伝えるように言語化できる力、こう読み解きました。

しかし、これが、では過去問とどのように対応しているのだろうか。確かめ算として情報を集めます。そういたしますと、生徒の報告書は、こういったものは各校でも当然のようにやられていることだと思います。これによりますと、創造的な思考力に相当するような設問、「風が吹けば桶屋が儲かる」の原因から結果を導き出す問題が出されました。

それから、私と練習していたので、安心しながら書けたというような対応の妥当性もある程度確認できました。これに基づきまして、また次の年の指導をアレンジしていくということになります。こうしたレポートの聞き取りから、可能な限り実際の試験を再現しようとはしますが、大切なのは再現性ではなくて、そうした設問内容、形式から見てとれる原理的なデザインを読み取ることが何よりも大事だと私は考えます。

対策のしようがないと、よく耳にしますが、それは対策イコール実際の出題形式に習熟するという発想をするからであって、対策イコール出題のデザインに沿って創造的に手だてを講じ、

生徒の資質・能力をレベルアップさせることだと考えれば、指導者としては気が楽であり、何よりも生徒と一緒に考え探求するという楽しい時間を共有することができます。

そこで、私が考えた2つのデザインがこちらです。1つがブラックボックス型、もう1つはパズル型です。ブラックボックス型は「風が吹けば桶屋が儲かる」のように、示された結論から見えない因果関係を探求するもの、パズル型は逆に目に見える事象を因果関係で結び、結論を導くものです。この一対の思考を、志望する大学が求める学生像とも照らし合わせて調整しながら指導していくという設計をしています。

では、具体的にいよいよ対策を展開する、の局面にお話を進めていきたいと思います。デザインの軸足を決めて、それに基づいて対策問題をつくるわけですが、これは宿題にするのではなくて、実際に私の目の前で時間を与えて解かせて、その状況を見て、生徒の様子を見極めて生徒自身にも感想を聞き、その双方向性の中でやりとりをして、指導の重みづけをしていくというような、もうそういう双方向性を大事にしております。

その1つとして、例題1と例題2をつくって取り上げてきました。例題1のみ、ちょっと読んでみたいと思います。ペナルティによってルールを守らせることはできないという原則がある。ルールを守らせるためにペナルティを設定することに効果がないのはなぜか、具体例を挙げつつ論証しなさい。そして、その論理に基づき「ルールを守らせる」ためにはどのような方法があるか、考えを述べなさい。という創作問題です。これについては、このような生徒の回答が書かれました。たとえ後でペナルティを受けたとしても、今、ルールを破って好き勝手するほうが良いと考える人が一定数いるとき、ルールは守られない。だから、ペナルティを厳罰化してペナルティを軽視できないようにすればよいというふうなレポートを書きました。それを私がまず読んで、それに対して一言一言、突っ込みを入れて

いくというような形です。それだと、ルールを守るよりペナルティを避けることが目的になってしまわないかというふうに、そしてまた思考を一段深めさせる。この問答をしていくということをやっております。これをするによって、おのずと面接練習にもなっているでしょうし、自分の書いたものを自己評価、メタ認知することにもなりますし、また指導者としても、この生徒の課題はここだなという形で、指導の計画を微調整したり修正したりすることができます。

もう一例あります。これはAOⅢ期のときにやった課題なんですが、画面はホワイトボードになります。学術的な文章を20分ほど読んで要点をメモさせて、それをホワイトボードに書いてプレゼンをするというような作業、対策であります。そこでもまたホワイトボードを指さしながら、これどういう意味ですか、そこはどういう意味かもう少し詳しく教えてくださいというような形でやりとりをしています。このような取り組みをして、生徒の資質・能力を高めていく。ごらんのように、医学科ですから、医学に寄せた内容もちろんやりますけれども、全く関係ないもののほうが多く出題をしているという感じです。

さて、もう早いものでまとめになるんですが、「対策」のその先へということでございます。入試対策という言葉のイメージはとにかく即物的で、合格のための訓練という認識がどうしてもあるように感じます。

しかし、どれくらいよく訓練されているかを見とるのが入試ではないと思っています。むしろ、訓練では身につかない本質的な思考力の質を見るのが大学入試なのではないでしょうか。実際、ある大学の面接で、受験した生徒が面接を退室する際に、高校の先生に言うておいて、あまり練習させないで、というふうに受験生に言ったそうです。これをその受験生から聞かされて、とても衝撃といいますか、ああ、そういうことだなというふうに思ったのを今でも忘れません。結局は、ですから思考力を、本質的な力をつける

しかないのだと思います。そう言ってしまえば、取りつく島もないんですけれども、その島に当たるのが先ほど述べたブラックボックス型とパズル型という考えではないかなと思っております。これを軸に、さまざまな創意工夫を凝らして指導していけば、自信を持って大学に生徒を送り出せるのかなというふうに考えています。

また、入試対策を合格のための短期集中指導、訓練ではなく、思考力を鍛え伸ばす集中特化型授業と捉えれば、ここでのノウハウを普段の授業に活用することができます。入試対策を別物扱いするのではなく、平時の授業にも転移し得る実践研究の場としても捉えることができます。そうしていけば、コロナ禍後の新しい学びの様式を紡ぎ出す1つのヒントとなる知の場になるのではないかなというふうに考えております。指導したことを軸に、新しいあり方、学び方というものを今後も研究していきたいなというふうに考えております。簡単ですが、以上で発表を終わらせていただきます。ありがとうございました。

(拍手)

久保沙織准教授（司会）：

笠井先生、ありがとうございました。ご質問等につきましては、ウェブ上での入力をお願いいたします。

資料

大学入試を読み解き、 解きほぐす

—高校現場の現状と課題

2020/09/23 東北大学教育フォーラム 現状報告
青森県立青森高等学校 笠井敦司



2 「指導・訓練型」から「プロジェクト型」へ「対策」観の転換

「指導・訓練型」	「プロジェクト型」
□ 普段の学びと「ベツモノ」 □ 短期集中特訓 □ マン・ツウ・マンの徒弟制 □ 一方的な指導 □ 指導の内情がブラックボックス	□ 普段の学びの延長 □ 計画的・継続的 □ グループ化 □ 双方向的な意見交換 □ 指導内容をオープンに

本日のトピックと展開

「対策」を問い直す	「入試」を解きほぐす	「対策」を展開する
□ 高校現場の考え方と実際 □ 訓練型からプロジェクト型へ □ 本校の対策スタイル	□ アドミッション・ポリシーを読み解く □ 求められる資質・能力を洗い出す □ 過去問の情報を集める □ 試験問題の「デザイン」を探る	□ 指導を実践する □ 意見交換して、答案を振り返る □ まとめ「対策」のその先に

3 本校の対策スタイル「医学科AO対策」を中心に

「対策」 8つのステップ

- 1 アドミッション・ポリシーを**読み解く**
- 2 求められる資質・能力を**洗い出す**
- 3 過去問の情報を**集める**
- 4 試験問題の「デザイン」を**探る**
- 5 生徒の資質・能力を**見極める**
- 6 指導を**実践する**
- 7 意見交換して、答案を**振り返る**
- 8 指導内容・順序を**修正する**

「対策」を問い直す

大学入試を読み解き、解きほぐす 2020/09/23



「入試」を解きほぐす

大学入試を読み解き、解きほぐす 2020/09/23



1 高校現場の考え方と実際—「入試」から「選抜」へ

■ 一般入試 ■ AO入試 ■ 推薦入試	■ 一般選抜 ■ 総合型選抜 ■ 学校推薦型選抜
--	--

知識・技能
思考力・判断力・表現力
学びに向かう力・人間性

広い意味での「学力」を3つ意識、重視する

アドミッション・ポリシーを読み解く

AO入試Ⅱ期（東北大・医学科）

人を対象とする生命科学や医学・医療に関わる学問に強い関心を持ち、旺盛な探究心と**創造的な思考能力**と高い倫理観を有する人を求めています。東北大学で学部・大学院教育を受けることを希望し、大学や研究所で**研究医として世界的な活躍をめざす情熱と積極性**を有する人を歓迎します。筆記試験、書類審査、面接試験によって、医学・医療に関わる**学問への関心、探究心、思考能力、倫理観**などを評価します。

AO入試Ⅲ期（東北大・医学科）

将来、**医学・医療の指導者として世界で活躍をめざす人**を求めています。東北大学で医学教育を受けることを熱望し、**対話による相互理解力**と医学への強い学習意欲と探究心を持ち、**リーダーシップを発揮できる人**を歓迎します。大学入試センター試験の成績に加え、筆記試験、書類審査、面接試験によって、医学・医療に関わるなど学問への関心、探究心、思考能力、倫理観を評価します。

（東北大学入試センターホームページより引用、傍線は発表者）

求められる資質・能力を洗い出す

A O入試Ⅱ期（東北大・医学科）

「創造的な思考能力」

⇒「一見して解決方法が見出しにくい課題に対して、定式的な思考パターンにこだわらず、多角的な視点でとらえ、柔軟な発想で解決に導く能力」

「研究医として世界的な活躍をめざす情熱と積極性」

⇒「解決困難な具体的課題を見据え、その解決を目指す強い志とそのためのビジョンを持ち、行動に移す力」

思考力 # 判断力 # 表現力 # コミュニケーション能力 # 柔軟性 # プレない

A O入試Ⅲ期（東北大・医学科）

「対話による相互理解力」

⇒「指導者として世界で活躍する人」に必要な、コミュニケーション能力。対話を通して相手の意図や考えをしっかりと受け止めて理解し、その上で自分の考えを相手に伝えるように言語化できる力」

「リーダーシップ」

⇒「対話による相互理解力」に基づいて、考えを整理し、自分の言葉で解決策や方針を打ち出すことのできる力」

指導を実践する一指導の実例

「思考力・判断力・表現力」を問う二つのバケツ

【例題1】ペナルティの効果

「ペナルティによってルールを守らせることはできない」という原則がある。ルールを守らせるためにペナルティを設定することに効果がないのはなぜか。具体例を挙げつつ論証しなさい。そして、その論理に基づき「ルールを守らせる」ためにはどのような方法があるか、考えを述べなさい。

ブラックボックス型 # 資料なし

【例題2】所得と生活習慣病

平成26年国民健康・栄養調査表2を参照し、★印の有意差のあった項目に基づき読みとることが可能な状況を説明せよ。また、そのような状況になる要因を考え、その因果関係を説明せよ。そしてそれを踏まえて、効果的と思われる対策を立てよ。

パズル型 # 資料読解

過去問の情報を集める

前年に同学科を受験した生徒の受験報告書を参考にします。

無い場合は、情報サイトを探るか、現場のネットワークを通じて入手に努める。

「風が吹けば桶屋が儲かる」ように一見関連のない原因から結果が導き出される過程を論理的に記述させる問題。

アドミッション・ポリシー「創造的な思考能力」に対応していると分析する。

指導内容の妥当性が確認できる

「原因から結果を筋道立てて書く練習は並井先生としていたので、安心しながら書けた。」

意見交換して、答案を振り返る

【例題1】ペナルティの効果

たとえばペナルティを受けたとしても、今、ルールを破って好き勝手する方がいい」と考える人が一定数いるとき、ルールは守られない。だから、ペナルティを厳罰化してペナルティを軽視できないようにすればよい

しかし、それだと「ルールを守ること」が目的になってしまわないか？とすれば、「ばれなければ大丈夫」と考えて不正が横行し、やっぱりルールは守られないのではないかな？

試験問題の「デザイン」を調べる

「思考力・判断力・表現力」を問う二つのバケツ

【ブラックボックス型】

一見ない因果関係を探る

因で出来上がっている家を見て、その構造がどうなっているか図面に書き起こす。

風が吹けば # 桶屋が儲かる

【パズル型】

一目に見える事象を因果関係で結ぶ

山積みになっている資材を見極めて、それを適切に使って家を組み立てる。

風 # 土ほぐり # 目が不自由になった人 # 三味線 # ネコの皮 # ネズミ # 桶

意見交換して、答案を振り返る

【表現重視の課題】プレゼン

学術的な文章を読み、要点をホワイトボードにわかりやすくまとめ、それに基づいて口頭で説明する。

〈画像は四本棒子「ヒトのこころの測定法」を読み、まもめた生徒のプレゼン〉

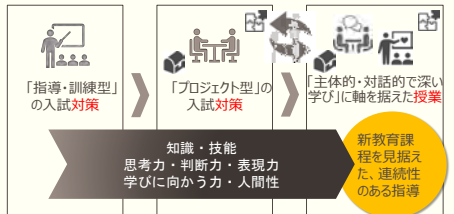
「因果関係」と「相関関係」は、どう違うのですか？なにか具体例を挙げてわかりやすく説明してください

「対策」を展開する

大学入試を読み解き、解きほぐす 2020/09/23



6 まとめ「対策」のその先へ



大学入試を読み解き、
解きほぐす 終わり

2020/09/23 東北大学教育フォーラム 現状報告
青森県立青森高等学校 笠井敦司



現状報告 3：「高大接続改革」に対する高校現場の受け止めと 今後の期待

私立武蔵高等学校中学校校長
杉山 剛士 氏

〔講師紹介〕

久保沙織准教授（司会）：

それでは、最後の現状報告となります。現状報告 3 『「高大接続改革」に対する高校現場の受け止めと今後の期待』、武蔵高等学校中学校校長、杉山剛士先生、よろしくお願いいたします。

杉山剛士校長：

皆さん、こんにちは。東京にあります私立武蔵高等学校中学校校長の杉山でございます。本日はお招きをいただき、また貴重なお時間をいただきまして本当にありがとうございます。3 人目の報告ということで、少々お疲れかと思えますけれども、この後休み時間もございますので、あともう少しお付き合いください。

私のほうからは、「高大接続改革」に対する高校現場の受け止めと、それから今後の期待ということでお話しをいたします。

最初に、自己紹介をいたします。私は埼玉県職員として 35 年間を過ごしました。まず最初に高校の社会科教員として 13 年、それから行政職員として 12 年、高校の管理職として 12 年、最後は浦和高校という学校の校長を 5 年間務めました。

また、その間、全国校長会の理事としても務めさせていただきました。そして、昨年度からは母校であります私立武蔵高校中学校の校長として戻ってまいりました。

今日のお話の流れでございます。そこに書いてあるとおりですけれども、あまりデータに基づいたお話はできないかもしれないんですが、せっきくの機会ですので、この間の動きを通し



て感じてきたことを今日はざっくばらんにお伝えしたい、そんなふうに思います。

まず、高大接続改革の現場の受け止めをお話しする前提としてこの間の議論の流れ、おさらいをしたいと思います。スライドにありますように、高大接続改革については平成 24 年に中教審への諮問がありました。そのときの諮問は、大学入学者選抜の改善をはじめとする高等学校教育と大学教育の円滑な実施と連携の強化のための方策についてということで、まずは大学入試、そして特に、低学力のまま大学に入学してくる学生をどうするか。そして、その課題を解決するための大学入試のあり方や高校の学習指導のあり方、特に質の保障という問題が非常に大きな問題としてあったというふうに思います。

その後政権交代がございまして、政府直属の教育再生実行会議が立ち上がります。その中で、高大接続の言葉が前面に出てまいりました。そして、実行会議の第 4 次提言を改めて受ける形で平成 26 年に中教審答申が出されます。この答申への当時の私の率直な感想ですけれども、例えば合教科型入試の複数回実施を提言するなど、

教育再生実行会議の提言以上に力が入った答申、そんな印象を持ちました。

ただ、その後高大接続システム改革会議、これは高校、大学の現場の関係者も入った平場の公開の会議でしたけれども、この中で現実的な制度設計が議論される中で、この合教科型入試や複数回実施はなくなりまして、いわばちょっとトーンダウンした形で平成 28 年 3 月に最終報告が出されました。

ところが、その後今度はクローズされた中で文科省での検討が進みまして、高大接続改革システム改革の最終報告から 1 年半後、文科省から高大接続改革の実施方針等の策定が示されました。その中では、英語民間検定試験の積極的導入が示され、正直びっくりしました。

また、記述式については当時は実施時期が問題の焦点になっておりました。記述式のみ前倒しするという考えが出ていたんですけども、これについては現状の時期と変えないという結論になり、ほっとした記憶がございます。

そして、その 2 年後、令和元年 11 月 1 日、この日は大学入試センターに英語民間検定実施のための共通 ID を送付する、まさに初日でありました。文科大臣から突然の見送り表明がされました。そして、12 月には記述式も見送りになりました。そして、社会からのいろんな批判を受けまして、12 月末にはこの間の流れを検証するとともに、記述式や英語民間検定試験の今後の扱いについて検討いたします大学入試のあり方に関する検討会議が急遽設置されまして、公開の場での議論が始まりました。

そして、この夏のことですけれども、今度は主体性評価を目指していた「JAPAN e-Portfolio」の運営許可取り消しが突然なされました。私も 40 年近く高校現場に携わってきましたけれども、こんなことはこれまでなかった。まさに未曾有の大混乱でありました。

それでは、高校現場の実際の受け止めはどうだったのか、英語民間検定試験の見送りを例に若干裏話も含めてお話をしたい、そういうふ

うに思います。11 月 1 日の朝、NHK から連絡がありまして、コメントが欲しいということで電話取材を受けました。その記事です。

東京練馬区にある私立武蔵高校の杉山剛士校長は「今さら延期することで生まれる混乱もあると思うが、教育現場では都内の進学校ですら不安や疑問が広がっていた。保護者会も質問の嵐ですでに大混乱の序章が始まっていた中で延期されたことは現場として評価したい」と話しました。その上で、「英語の技能を高めようということに異論はないが、50 万人の受験生が受ける国家的なテストに民間試験を活用するということにそもそも無理があった。地域格差や経済格差といった根源的な課題が解決されないまま実施ありきで進んできたことが大きな問題だった」と指摘しました。このコメントはそのままネットニュースに流れました。

NHK からは生徒のインタビューが欲しいということだったんですが、これ以上この問題に生徒をわずらわせるのはイヤでしたので、それはお断りして、校長の映像だけ後に取材に来るのでよろしくということで電話が切れました。

しかし、その後もう一回電話ありまして、別の学校の取材ができそうなので本校には来ないということで、そこで夜の 7 時のニュースに映像とともに流れたのが、以下のコメントであります。

〇〇市の〇〇高校では新たな入試の対象だった高校 2 年生が民間試験に向けて、すでに予約金を振り込んだり、対策講座を受けたりするなどして準備を進めてきました。延期は担任の教員が受験に必要な「共通 ID」の申請をしようとしていた矢先の出来事だったといいます。高校 2 年生の男子生徒は「やるものだと思って、予約金を払ったりして準備してきたので、はぁというのが感想です」と話していました。また女子生徒は「朝起きてニュースを見て衝撃を覚えました。これまで準備してきたので悲しいです」と話していました。

高校では英語の担当教員が実際に民間試験を

受けるなどして対策を進めてきたということで、○○校長は「びっくりしました。準備をしてきた生徒は一体どうなるんだろうと、はらわたが煮えくり返る思いです。もっと早い段階で決断して欲しかった、振り回された生徒を考えると気の毒でならない。高校生が一番の被害者だ」と憤りをあらわにしました。地域によって、あるいは学校によって、受け止めの差はありました。ただ、高校生が振り回されたというのは全くそのとおり、まさに未曾有の大混乱でありました。

その後、記述式も見送られまして、更にこの夏休みの8月7日には、e-Portfolioの運営許可取り消しというニュースが流れました。これはその対応についての文科省から学校現場への通知であります。ちょっと読んでみます。

「JAPAN e-Portfolio」の運営許可の取り消しに伴い、一般財団法人教育情報管理機構による運用が停止されるため、これまで利用者が登録した情報は「JAPAN e-Portfolio」を通じては令和3年度の大学入学者選抜に活用することができません。利用者の登録情報の取り扱いに関しては同法人と文部科学省での調整を行いましたが、令和2年9月11日以降「JAPAN e-Portfolio」のシステムは完全に停止しますので、登録した情報を保存したい利用者の皆様は令和2年9月10日までに、以下の情報を保存してください。ちょっと1段落飛ばしますけれども、上記の印刷・保存作業は、必ず令和2年9月10日までに行ってください。それ以降は登録した情報は、個人情報秘密の保持の観点から、確実に消去されます。

夏休みに、9月10日までにデータを取り出して保存しなさい、この通知をもらった「JAPAN e-Portfolio」を利用していた学校現場というのは、本当に困ったと思います。その現場の混乱も想像されてください。

この間の高大接続改革、特に大学入試改革に対する高校現場の受け止めですけれども、これはやっぱりデータに基づくものではなくて私見になってしまいますが、さまざまな校長先生方

のお話をお伺いする限り、不信と不安だと思います。一連の流れについて、国の教育行政に対する不信は、残念ながら大きなものになってしまいました。同時に現在は現場を預かる者として、不安のほうが大きい。

まず、新型コロナウイルスの対応はどうなるのか。「JAPAN e-Portfolio」は運用停止になった中で、Portfolioを大学はどう活用するのか。また、主体性入試はどうなるのか。そして、英語の民間検定試験や記述式、これは結局どうなるのか。更に、これは特に地方の公立高校の校長先生とお話ししていると、すごく心配されていることなのですが、今後大学入試改革に伴って経済格差や地域格差が更に影響してくるのではないかと、そういった不安であります。

それでは、これだけ混乱した要因は何か。これについては現在、大学入試のあり方に関する検討会議で検証中だと思いますけれども、せっかくの機会ですので、率直に申し上げさせていたきたい、そんなふうに思います。

まず、政治主導の弊害があったと思います。この辺の意思決定過程はブラックボックスでわかりにくい、わかりかねるところがあるんですが、メディアの報道を見る限り、英語の民間検定試験についても、そもそも無理な面があったにもかかわらず、民間企業の教育界参入という経済再生の視点や、グローバル化が進む中で、日本が世界から取り残されてはまずい、そういった日本の国力向上の視点から、若干強引に導入されようとしていた面があった、そんなことがうかがわれます。

次に、その政治主導の動きを支えた官僚機構があると思います。これも難しいところなのですが、無理筋な政策であっても、それを止められない。むしろ理論武装で補完してしまう。例えば複数回実施が消えたときに、記述式の導入によって、それが実質的な複数回実施だと言い換えたり、あるいは当初大学生の学力低下の問題に焦点が当たっていたりしたのが、やがて高大接続という非常に大きな仕立て、非常に何でも織

り込んだ大きな仕立てになる際に、この学力の三要素というのが大きな理論的基盤として位置づけられたようになってきた。戦線が拡大する中で、理論も補強されてきた、そんな印象を持っています。

そして、最後に「暴走」を止められなかった高校現場、大学現場の責任、私たちも全国校長会の中で精一杯の取り組みをしてきましたが、また東北大学さんのように真摯にこの問題に向き合うという動きがありますが、やはり国の政策に大きな懸念があっても、残念ながら批判しない、あるいは批判できないという構造があったように思います。これは率直に反省すべき点だというふうに私は思います。

それでは、この3つの要因の背景にある問題の本質は何か。問うべき問題の本質について、2つ指摘をしたいと思います。

1つは、教育という人の成長を扱う営みに対してリスペクトがあるのかということです。私は学校現場や教育行政を長年歩いてきて、つくづく思ったことがあります。それは、教育という問題はとても身近な問題であるので、誰もが一家言持っているけれども、教育それ自体に価値があると考えて教育を目的として語っている人と、教育を手段として語っている人、例えば政治の手段であったり、ビジネスの手段であったり、そういった人の2種類があるのではないかと思います。もっとも、それは私自身にも言えることで、教育で給料をもらっているわけですから、教育は手段でもあるわけですが、常々目的として語れる人でありたい、そんなふうに思っています。教育というのは人の成長を扱う営みです。

でも、この成長というのは厄介です。思ったようにはいかない、いつ効果が出るかわからない。お金を投じたらすぐ効果が出る、そういったような分野とは違います。現在は成果主義の風潮も強く、成果を出すことの重要性、それももちろんあるんですけれども、どうしても瞬間風速を追い及ばない成果主義とは相入れない部分という

のが教育の根本にはあると、そんなふうに思っています。なかなか変わらない現場に対して、改革論者はいら立ちを示しがちです。

でも、今お話ししたような性格を持つ教育という営みに対して、そういったものへのリスペクト、そして現場に対するおおらかさが欠けてはいなかったか。この間の混乱の様子を見て思います。

もう1つの問題は、急激な教育改革はうまくいくのかという問題です。教育現場にも当然課題はあります。ただ、戦時ならともかく、平時においては急激な改革というより、つまり目指すべき理念、到達すべき目標というのは旗として高く掲げながらも、成果の確認や意識の変容を伴いながら、先ほど安成先生が新フンボルト入試の話を本当に苦労されていると言われましたけれども、私はあれは旗を高く掲げながら少しずつ改善されている、そういうふうに思います。そして気がついたら以前とは全く違うことをやっていた、というくらいの改革のほう望ましいように思います。というのも、改革には必ず副作用が生じます。教育行政はまさに総合行政でありまして、一面真理が必ずしも全面真理にはなりません。例えば、かつて東京都は受験競争を緩和するために、都立高校に学校群のシステムを導入しました。

しかし、そのことにより受験競争が緩和したかということ、決してそうではありません。逆に都立高離れ、そして私学への受験生流入を招きまして、豊かでないと高い教育達成ができないのではないかと、そういった方向に進んできました。

また、今般の大学入試改革においても、大学入学共通テストで記述式を導入したり英語の民間検定試験を活用したりする、たとえその方向性は望ましいにしても、かえって共通テストが敬遠され志願者が減ってしまうのではないかと、そういったことも考えられます。教育政策の立案者は、こうした作用、反作用を直感できる高度な想像力、これが求められていると思います。

それでは、最後に、今後の期待についてお話し

をしたいと思います。現在、大学入試のあり方に関する検討会議において、今後の大学入試のあり方について議論を進めています。当初は年内にも結論をとということでしたが、新型コロナウイルスのこともあり、現在これまでの意見の概要もまとめられ、国民の意見も求めつつ、じっくりと考えようというふうに進んでいます。ぜひ実りある議論を進めてほしいと願っていますが、ここでは3つの視点から今後の高大接続改革についての期待を述べたいと思います。

まず1つ目は、実現可能性への配慮がなされるかということです。理念や目指すべき方向性を掲げるだけでなく、どうしたら実現できるのか、実現可能性があるとすれば、そこに生ずる負担への対処方法、また施策を実現するための資源の確保についても検討してほしいと思います。例えば英語教育を小中学校、更に高校でも充実させようという話があると、それを実現させるためには質の高い教える人を量的にも確保する必要があります。

しかしながら、学校現場はどうか。例えば、産休育休などの臨時教員、代替教員が必要なときに、英語の教員を確保することに苦労しているという話をよく聞きます。アクティブラーニング、主体的、対話的で深い学びの実現もそうです。これは、教員にこれまで以上にその教材研究や授業の準備を周到に行う、そういったことを強いることになりますが、教員に新たな課題を課すときに、それを実現させるための資源もセットで議論することが必要だと思います。

2つ目は、格差への対応が考えられているかということです。明治5年、1872年、明治政府は新しい時代の教育を進めていく上で、学制を發布しました。その中の有名なフレーズですが、「不学不邑」があります。邑に不学の戸なく家に不学の人なからしめんことを期す、士農工商という江戸時代の身分制度を打破して学問を社会全体に広げることにより、出自にかかわらず、学問があれば立身出世できる。そうした活力のある社会をつくる。つまり、学制という教育政策を

進めることにより、身分社会は解消され、そして社会の格差はなくなる。それが日本の近代化を支えた教育政策のベクトルでありました。

一方、英語民間検定試験の導入のときに課題として、その政策を推し進めれば推し進めるほど地域的格差、経済的格差が広がるのではないかと、そういったことがさんざん指摘されました。教育政策が進めば進むほど格差が広がるというのは、学制の政策ベクトルとは真逆になります。この教育と格差の問題は難しい問題です。

私は東京におりますので、中学校においては、もう多くの生徒が中高一貫校に通っている東京の状況を見ますと、もはやこの課題というのは新しい状況に入っているかなとも思いますけれども、先ほども申しましたように、特に地方の学校ほど、このことを強く心配されていると思います。国としても、この問題にどう向き合うかということをはっきり示すことが求められていると思います。

そして、最後に、本来の高大接続に向けての取り組みがなされるかということです。それでは本来の高大接続とは何かというと、これ大上段の議論になりますけれども、私はたった一度の人生をどう構想していくかという、いわば人生の構想力、あるいは価値ある人生をつくり上げようとするパッション、そういった視点から高校と大学の教育の筋を通していくことが必要ではないか、そんなふうに思っています。キャリア教育ということかもしれませんが、何かもっと単純に、そしてわかりやすく筋を通せないかな、そんなふうに思います。

個人的な体験ですけれども、今から4年前に夏休みを利用してアメリカの10大学を訪問し、そこでアドミッション・オフィサーや現地の学生、そして日本からの留学生に話を聞いたことがありました。そこで感じたことは2つです。

1つ目は、アメリカのアドミッション・オフィサーの数が多く、力のある高校生を発掘するために、入試に本当に手間をかけている、そういったこと。

そして、もう 1 つは、アドミッション・オフィサーが探そうとしているのは、まさに人生の構想力、それがアメリカでは問われていると、そんなふうに思いました。特にアメリカの入試で問われているエッセイ、それを書くことができる力を日本の教育では本当に育ててきたのか、そういったことを自問自答しました。エッセイは将来自分が何になりたいかだけでなく、どう生きたいか、これを問い続けているものであり、その答えは発達、成長の途中で変わるかもしれないけれども、そのことを考え続けさせ、高校から大学へと送り出していくこと、これが本来の高大接続ではないか、そんなふうに思った次第です。

もっとも、隣の芝生は青く見えますので、アメリカの制度自体にも課題はあるのは重々承知しております。ただ単に制度を導入すればよいということではなく、制度の背景にある歴史や文化、人々の意識が大事だと思った次第です。

加えて高大接続、そういった高大接続を図るために、高校側と大学側が同じテーブルにつくこと、これはとても重要だと思います。本日のフォーラムはまさにそういった機会を提供していただいている 1 つだと思いますけれども、私自身も埼玉県在校長のとき、地元の埼玉大学の学長さんと話し合って、高大への意見交換の場を設け、極めて有意義な時間を共有できたことを思い出します。お互いなかなか忙しいんですけども、やはり高校と大学が同じテーブルについて共に教育を語る、まさに目的としての教育を語ることが大切だというふうに思います。

以上、取りとめのない話をまた若干早口でお話しをしました。ちょっとお聞き苦しいところがあつたかもしれませんが、以上で私の報告を終わります。どうもご清聴ありがとうございました。

(拍手)

久保沙織准教授（司会）：

杉山先生、ありがとうございました。

ここで休憩をとらせていただきます。再開は、前方のデジタル時計で 16 時ちょうどいたします。

なお、基調講演及び現状報告の 5 名の先生方への質問等の受付は、5 分延長し 15 時 55 分で締め切らせていただきます。来場参加の皆様はお手元の QR コードから、オンライン参加の皆様はオンライン参加者用のページより、あるいはスクリーンに今表示されております QR コードからウェブ上での入力をお願いいたします。

密集、密接を避けるようご配慮いただき、ソーシャルディスタンスを保ってのご休憩をお願いいたします。それでは、休憩に入ります。

[休憩]

資料

第32回東北大学高等教育フォーラム

令和2年9月23日（水）

「高大接続改革」に対する高校現場の受け止めと今後の期待

私立武蔵高等学校中学校 校長
杉山 剛士

2 高校現場の受け止め （令和元年11月1日 NHKニュース）

東京 練馬区にある私立武蔵高校の杉山剛士校長は「いまさら延期することで生まれる混乱もあると思うが、教育現場では都内の進学校ですら不安や疑問が広がっていた。保護者会も質問の嵐です。大混乱の序章が始まっていた中で延期されたことは現場として評価したい」と話しました。そのうえで「英語の技能を高めようという点に異論はないが、50万人の受験生が受ける国家的なテストに民間試験を活用することにそもそも無理があった。地域格差や経済格差という根源的な課題が解決されないまま実施ありきで進んできたことが大きな問題だった」と指摘しました。

自己紹介

- 埼玉県職員として35年間
 - ・高校社会科教員として13年
 - ・行政職員として12年（文教政策室長、高校教育指導課長等）
 - ・高校管理職として10年（最後は埼玉県立浦和高校校長を5年間）
 - ・全国高校長協会理事としても3年
- 2019年より私立武蔵高等学校中学校校長

2 高校現場の受け止め （令和元年11月1日 NHKニュースその2）

●●市の●●高校では新たな入試の対象だった高校2年生が民間試験に向けて、すでに予約金を振り込んだり、対策講座を受けるなどして準備を進めてきました。延期は担任の教員が受験に必要な「共通1D」の申請をしようとしていたやさきの出来事だったといえます。……高校2年生の男子生徒は「やるものだと思って、予約金を払ったりして準備してきたので、はぁというのが感想です」と話していました。また女子生徒は「朝起きてニュースをみて衝撃を覚えました。これまで準備してきたので悲しいです」と話していました。

高校では英語の担当教員が実際に民間試験を受けるなどして対策を進めていたということで、●●校長は「びっくりしました。準備をしてきた生徒はいいだろうなと思うけど、はらわたが煮えくり返る思いです。もっと早い段階で決断して欲しかった。振り回された生徒を考えると気の毒でならない。高校生はいちばんの被害者だ」と憤りをあらわにしていました。

お話の流れ

- 1 高大接続改革の検討史（おさらい）
- 2 高校現場の受け止め
- 3 混迷した要因
- 4 問題の本質は何か
- 5 今後への期待

夏休み中（2020年8月7日）に出された文科省通知

利用者（高校生及び高校卒業生）の皆様、利用者が在籍している高校の関係者の皆様へ

「JAPAN e-Portfolio」の運営許可の取り消しに伴い、一般社団法人教育情報管理機構による運用が停止されるため、これまで利用者が登録した情報は、「JAPAN e-Portfolio」を通じて令和3年度の大学入学選抜に活用することができません。

利用者の登録情報の取扱いについては同法人と文部科学省とで調整を行いました。令和2年9月11日以降「JAPAN e-Portfolio」のシステムは完全に停止しますので、登録した情報を保存したい利用者の皆様は令和2年9月10日までに、以下の方法で情報を保存してください。

【利用者の皆様の登録情報の取扱い】
・利用者が自分でデータを直接保存するためには、学びのデータの画面からコピーアンドペーストしてメモ帳などに貼り付けて保存いただくか、画面を印刷するなどする必要があります。
・上記の印刷・保存作業は、必ず令和2年9月10日（木）までに行ってください。それ以降は登録した情報は、個人情報保護の保持の観点から、確実に消去されます。

1 高大接続改革の検討史（おさらい）

- 平成24年（2012年）8月28日 中央教育審議会へ諮問
「大学入学選抜の改善をはじめとする高等学校教育と大学教育の円滑な連携と連携の強化のための方策について」
- 平成25年（2013年）10月31日 教育再生実行会議第4次提議
「高等学校教育と大学教育との接続：大学入学選抜の在り方について」
- 平成26年（2014年）12月22日 中央教育審議会答申
「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学選抜の一体的改革について」
- 平成28年（2016年）3月31日 「高大接続システム改革会議最終報告」
- 平成29年（2017年）7月13日 文部科学省「高大接続改革の実施方針等の策定」
 - ・大学入学共通テストにおける英語民間検定試験の導入、記述式問題の導入
- 令和元年（2019年）11月1日 文部科学大臣「英語民間検定試験導入見送り表明」
- 令和元年（2019年）12月7日 文部科学大臣「記述式導入見送り表明」
- 令和元年（2020年）12月27日 大学入試ありかた検討会議設置
- 令和2年（2020年）8月7日 文部科学省「JAPAN e-Portfolio」運営許可取り消し

未曾有の大混乱

この間の高大接続改革（大学入試改革）に対する高校現場の受け止め

- 「不信」と「不安」
- 「不安」の中身
 - ・新型コロナウイルス対応はどうなるのか
 - ・ポートフォリオを大学はどう活用するのか
 - ・英語検定試験や記述式は結局どうなるのか
 - ・経済格差・地域格差がさらに影響してくるのではないかと

3 混迷した要因

現在、「大学入試のありかた検討会議」で検証中だが、率直に申し上げさせていただければ…

- ①政治主導の弊害
(そもそも無理があったが、経済再生や国力向上の視点から強引に導入)
- ②政治主導を支えた官僚機構(無理筋であっても止められなかった。むしろ理論武装で補完)
- ③「暴走」を止められなかった高校現場・大学現場の責任(国の政策に大きな懸念があっても批判しない、批判できない)

5 今後への期待

② 格差への対応が考えられているか？

- 「不学不邑」(邑に不学の戸なく家に不学の人なからしめんことを期す)が学制(1872年)の理念だったはず。
- 「教育政策が進めば進むほど社会の格差はなくなる」とうのが日本の近代化を支えた理念ではなかったか。
- 格差の拡大への対応が、とりわけ地方の学校の不安。

4 問題の本質は何か

①「教育という営み」へのリスペクトがあるか？

■教育を「目的」として語るか。「手段」として語るか。

■教育は「人の成長」を扱う営み。

- ・思ったようにはいかない。
- ・いつ効果が出るかわからない。

※瞬間風速を問いがちな「成果主義」とは相容れない部分が根本的にはある。

■そうした性格をもつ「教育という営み」へのリスペクトや現場に対するおおらかさが欠けてはいないだろうか。

5 今後への期待

③「本来の高大接続」に向けての取り組みがなされるか？

■「たった一度の人生をどう構想していくか」(人生の構想力、バッション)で高校・大学の教育の筋を通していくのが本来の高大接続ではないか？

⇒アメリカの大学入試の「エッセイ」が書けるような生徒を育てること。「何になりたいか」と同時に、「どう生きたいか」を考えさせる

■高校と大学が同じテーブルにつくる必要性

ご清聴ありがとうございました

4 問題の本質は何か

② 急激な教育改革はうまくいくのか？

教育現場にも当然課題はある。ただし、平時においては急激な改革というより、旗を高く掲げながらも少しずつ改善していくほうが望ましいのではないか。

(改革には必ず副作用が生じる。教育行政は総合行政であり、一面具理≠全面真理、そのことが直観できる政策立案者の現場への「高度な想像力」が必要)

5 今後への期待

① 実現可能性への配慮がなされるか？

どうすれば実現できるか。⇒ 可能性があるとすれば、生ずる負担への対処方法、施策を実施するための資源の確保

討議—パネルディスカッション—



久保沙織准教授（司会）：

お待たせいたしました。

これより第3部、討議に入ります。ここからは討議司会の担当者にマイクを渡します。

秦野進一特任教授（討議司会）：

皆さん、こんにちは。討議の司会を担当させていただきます東北大学入試センターの秦野と申します。

伊藤博美特任教授（討議司会）：

同じく伊藤です。

秦野進一特任教授（討議司会）：

よろしくお願いいたします。

伊藤博美特任教授（討議司会）：

よろしくお願いいたします。

秦野進一特任教授（討議司会）：

お時間が限られておりますので、すぐに討議に入りたいと思います。

まずは、5人の先生方、ご発表どうもありがとうございました。

本日の進め方ですが、最初にご発表の補足、あるいはほかの方の発表を聞いた上で改めてお話ししたい点などございましたら、お伺いしたいと思います。その間に参加者の皆様からオンラインでいただいた質問の整理をして、こちらで幾つか取り上げさせていただいて、壇上の先生方にご討議いただくという形で進めたいと思います。

ただ、時間の制約がございますので、全ての質問にお答えすることはできませんのでご了承ください。ただければと存じます。

それでは、ご発表順に、まず倉元先生いかがでしょうか。

倉元直樹教授：

基調講演者というよりも、主催者的な視点になってしまうかもしれません。現状報告の先生方のお話をお聞きして、ちょっと感じたことをお話しさせていただこうと思います。



まず、安成先生ですが、実は安成先生をぜひこの場にお呼びしたいと言ったのは私でございます。というのは、お茶の水女子大学の新フンボルト入試は、見た目が東北大学と全く違うのですね。おそらく東北大学では絶対にできないことをやられている。けれども、実は設計思想が似ているなと思ったのです。それは何かと言いますと、お示しいただいたスライドの最後から2つ目と3つ目のところです。入試広報活動を通じて、第1志望の受験生をつくり、彼らが複数の機会を通じて最終的に入ってきてくれる、そのことによって大学を活性化させるというモデルは、実は、我々が考えていたこととそっくりだと思ひまして、それでお呼びした次第です。決して、反省点だとか真逆だとかということではないと思っておりますので、ご理解いただければと思います。

次に、笠井先生のお話は、実は、非常に何とも、ある意味、居心地悪く聞いておりました。というのは、大学入試のあり方が高校現場の指導に対して、やっぱり影響を与えているということ非常によくわかったところなのですが、こんなに一言半句受け止めてもらっていいのだろうかという不安を若干感じます。大学で大事なことというのは、書かれていること以外の世界を読み取ることなんだろうと思うのですね。それは逆

に言えば、高校では書かれていることが全てという前提で教育していただいて、多分、いいんだろうと思います。そこに、大学に入ってからギャップがあるのだろうと思うのですけれども、おそらく、笠井先生は、その書かれていないところまで読み込んで理解しておられるんだけれども、あえて、発表をそこに限定されたのではないかと思って聞いていたというところです。後で種明かしをしていただければと思います。

杉山先生は、ずっといろんな機会でお話を伺ってきて、このような高校側の率直なご意見ということをお伺えてよかったというところです。やはり、ご自分の高校だけではなくていろんなところを御存知なので、多様なのだなということは、改めて実感しました。多分、局面を限定して、ここのことはどうなんだろうという話をしていけないと、高校の実情は1つのプリンシプルで語れないのではないかなと改めて思った次第です。以上です。

秦野進一特任教授（討議司会）：

それでは、宮本先生お願いいたします。

宮本友弘教授：

今日、私の発表では、エビデンスとして、高校側の意見を尊重するというのを強調しました。発表中も申し上げましたが、それだけで決めているわけではありません。さまざまなエビデンスを重ねて、それと学内での議論を踏まえていろいろな決定を下しております。ただ、今回の高大接続改革、特に英語民間試験及び記述式問題、それと主体性評価、これらに限っては、これまで以上に高校側の意見を尊重すべきだと私は個人的には思います。今日最後の杉山先生のご発表を聞きまして、その確信が強まりました。以上です。

秦野進一特任教授（討議司会）：

それでは、安成先生お願いいたします。

安成英樹教授：

取りとめもない話をしましたので申しわけなかったですけども、1つ、この新しい入試を入れるときに想定した相手というのが3者いたというふうに思っております。仮想敵というのはちょっと表現としてきつ過ぎますけれども、1つは文科省です。文部科学省には、このAP経費というのを採択してくれないと、本学の計画をとってくれないとだめだと、そのために文科相が旗を振っている主体性といった要素、これから期待されている評価基準を積極的に入れざるをえなかったという要因がございます。

それから、第2の敵（敵はまずいかな）、相手としては大学教員です。要するに、やる側がやる気にならなきゃいけないという問題があります。この辺が弱い。宮本先生のお話にあったとおりで、学内広報というのがものすごく大事なんです。先ほど言いましたように機密性というか守秘性というか、入試に関わっていない人は例えば今年何を出すなんてことは知らないほうがいいに決まっているんですが、ただ選考の方法が非常に複雑になればなるほど、その辺の意識、意思の疎通というか、制度的な理念の理解等が必要になると。

ただ、これがうまくいっていないというのが、実は大きな課題として残っております。だから、2番目の敵が一番手強いというのが正直なところです。昨今大学教員は完全に疲弊していますので、とにかく新しい仕事があるだけでもう嫌というふうに、ネガティブに反応するわけですね。何でそんなことやるんだと。また理論武装がうまいんです、職業柄です。そういう意味で、そこを説得し、ひたすら耐えていくということが必要になるということです。

もう1つは、やっぱりこれだけいろんな仕掛けを組み込んでお店を構えても、これを受けてくれないと何の意味もないわけです、受験です。そういう意味で、本当にこんなたいへんな入試を受験生が受けに来てくれるのか、という点については学内からもさんざん批判を受け

ました。誰も来ないよ、と。

ただ、入試実施状況、とくに参加人数を見れば、幸いにしてある意味でかなりクリアできていると思っております。ただこれも、なぜなのかという原因、それこそエビデンスが欲しいとずっと考えておりますけれども、なかなかよくわからないのです。それに付随して申し上げると、やはり特別選抜に関しては、やはり高校の先生方との協調というか協働というか、そういうものが不可欠だというふうに思います。というのは、いろんな高校にやっぱりヒアリングに行ったときに、どうしても一般選抜を目指すというふうにお答えになるところ、はっきりとそうおっしゃるところが結構ありました。

1つは、この新フンボルト入試に対して入試対策をどう立てますかと言うと、本当に高校の先生方はお困りになるだろうと思います。そういう意味で、この入試にとっては、言葉は悪いのですけれども、高校の先生方の考え方でちょっと道が閉ざされる可能性が若干あるという傾向があります。入学者というか合格者に聞きましたけれども、高校の先生からこんな入試があるよというふうに勧められて受験した人は、まあほぼいない。むしろ、自分で見つけてきて先生を説得して受けました、やっとなんとか、初めは否定されたけれども、何とか受けられましたとかという回答が非常に多かった。そういう意味では、本当の意味での高大接続が必要なところがあるというふうに思っております。長くなりましたが、以上です。

秦野進一特任教授（討議司会）：

それでは、笠井先生お願いいたします。

笠井敦司教諭：

先ほど倉元先生がおっしゃったように、居心地が悪いというふうに表現されましたけれども、それすごくよくわかります。妥協の芸術というふうに倉元先生おっしゃいましたけれども、まさに高校現場でも、妥協の芸術まではいきませ

んが妥協の産物で、普段の指導もあって入試の指導となれば、かなり過重な負担を強いられます。特に医学部とかになっちゃいますと、かなり時間も限られていますし、なかなかその労力というのは大変なものがあります。ですから、生徒にはアドミッション・ポリシーとかを読ませて、ここにこう書いてあるんだからという形で、創造的思考力なんだぞというふうなことを、その都度言うために読んでいるというようなところはあります。ですから、それをもう原理主義的にそこに問題を、そこから考えるというのはとても無理ですので、さっき言ったパズル型、ブラックボックス型というふうな、いろんな大学の問題を、それをタグ貼りして、その問題を改編して弱いほうを補強していくというような形で実際やらせています。本当に現実問題、一般入試の勉強もありますので、先ほど宿題にしないと言ったのは、生徒から時間を奪わないという意味です。その場で完結させてしまうと、宿題にすれば彼らは、それにばかり労力を割きますので、そういったところで現実を見て、ここは妥協して最小限の労力といいますか、持続可能な労力でやっているというような状況ですので、あまり原理主義的になってしまうと疲弊してしまうというのは、高校現場も同じかなというふうに考えています。以上です。

秦野進一特任教授（討議司会）：

それでは、杉山先生よろしくお願いします。

杉山剛士校長：

私個人のことを言うと、ちょっとしゃべり過ぎたかなというふうに思っ反省をしているところでもあります。気を許して、いろいろ思い切っいろいろな話をさせていただきました。

また、先生方の話を聞いて本当にいろいろ、そうだなと思うことがありました。例えば、今、安成先生と笠井先生の話ですけれども、対策を立てられないように安成先生のほうでは新フンボルト入試をやっている。一方で、笠井先生のほう

は生徒のためにいろいろ読み解いてやる。この辺も、これからの近未来の入試について、我々の指導の方法としても、どうあるべきなのか考える必要があるでしょうね。それから、やっぱり高大接続改革については、共通しているのは、理念は悪くないよね、だけれども、その具体化する方策というのはどうだったのということが多分、これ共通の認識だと思うんですよ。そのために、大学入試学というのが学問体系として今取り組まれようということについて非常に感銘を受けて、ぜひその成果に期待したいなというふうに思いました。以上です。

秦野進一特任教授（討議司会）：

ありがとうございました。

伊藤博美特任教授（討議司会）：

それでは、私のほうから幾つか質問させていただきます。

初めに、倉元先生と宮本先生に質問が来ておりますが、先ほどのお答えであったかもしれませんが、昨年度、急転直下、共通テスト記述式問題が延期されましたが、当初は実施も念頭に置き、AOⅢの内容とタイムスケジュールを模索していたことかと思います。エビデンスに基づき、東北大学としてどのような準備をなさっていたのか、ご質問させていただきます。方向転換で状況が一変して、必要のない議論かもしれませんが、その当時のことについてお聞きしたいということです。

それでは、倉元先生お願いします。

倉元直樹教授：

自己採点利用方式の話ですね。おそらくそれに関するご質問だと思います。要は、細かい話になってきますけれども、記述式が導入されることによって大学入試センターから共通テストの成績が提供される期間が延びるということで、非常に短期間で実施しております本学のAO入試Ⅲ期が、今までどおりできないという問題

に直面しました。その中で、どうしようかということ、何とかひねり出したのが第1次選考は自己採点を利用させてもらうというやり方だったのです。これ、裏を申しますと、大激論でした。最終的に納得しない、とにかく「何人受験して来ても、全員第2次選考をする」と意気込んでいた学部もありました。その中で、いよいよ具体的にどういう方式でやろうかと話を始めていたところだったので、実は、大変ほっとしたのです。その具体的なアイデアは、まだ私の頭の中にあっただけで、それから具体的に議論しようというタイミングでした。まさか、その時点で記述式の導入が見送りになると思っていたものですから、非常に正直助かりました。

もしもあのまま行っていたら、多分、この1年、・・・もし、コロナがなかったらということもあるのですが、・・・具体的な作業に追われていた状況だったと思います。正直、そんな状況でございました。自己採点を使いたいという人は誰もいないわけですから、これは本当にありがたかったです。

伊藤博美特任教授（討議司会）：

宮本先生、お願いいたします。

宮本友弘教授：

なぜ自己採点方式を導入してまでAO入試を維持しようとしたか、その背景を補足します。私も東北大学ではAO入試の定員が全定員に対して30%になることを大学の目標としてまいりました。それは国大協とかでも目標値として設定されていますが、それを実現するために何としてもAO入試をこのまま維持、更に拡充していくという方針が大きく背景としてはございます。その甲斐がございまして、2021年度入試では30%を超えることができました。以上補足でした。

秦野進一特任教授（討議司会）：

それでは、次に安成先生、杉山先生、笠井先生



に、ご発表の補足説明の質問が来ております。

安成先生ですが、興味深く聞かせていただきました。気になったのは、プレゼミナールの入試対象者の選択方式で、特にどのようにして基礎学力を担保するのかが気になります。ご説明があったのかもしれませんが、受験者の選出方法をお教えてください。プレゼミ受験者から図書館演習の対象者を選出する方法は、どのようにするのでしょうか。

それから杉山先生、難しい質問だと思いますが、4節で挙げられた高度な想像力は、どうやれば身につけることができると思われるのでしょうか。

それから笠井先生、生徒の資質・能力を育てる教育の本道と共感いたしました。もっと具体的に指導法のノウハウをお聞かせいただけますでしょうか、よろしくお願いいたします。

それでは、安成先生からお願いできますでしょうか。

安成英樹教授：

第1次選考は、プレゼミナールに出席してもらうことがマストということで実施をしてきました。そして、受験生だけは授業を2コマ聞いてもらった後に教室に残ってもらってレポートを書いてもらいます。最初は、ミニレポートと称して30分でしたが、あまりに短か過ぎるという

か、受験して合格した子から鬼畜の試験だったと言われましたので、今は延ばして 60 分というふうになっています。

ただ、このレポートで決まるわけではございませんので、生徒さんが出された志望理由書、それから活動報告書も当然評価の対象にいたします。ただ、これが非常に評価するのが難しいということは 2 年前のフォーラムでも議論になったところだと思います。

ただ、それから公募段階で AP 経費をとるために、文科省から外部外国語試験を必ず使えというのが必須要件として課されましたので、やはりこれを提出していただくことになっています。ただし、基本的には全て加点主義ですね。全部そろっていなければだめだとか、活動報告書には 5 つも項目が立ててありますが、それを全部埋めなきゃ出願できないなんていう、そういう仕組みにはなっておりません。むしろ、高校で何を学んでそれを将来にどう生かそうとしているか、あるいは大学に入って何がしたいのかというようなことを、その書類の中から我々は読み取ると。そして、特に基礎学力としては英語の検定試験を一応課しておりますので、それは評価対象となります。ただ、種類だけを指定しておりまして、例えば何級以上だとかそういうようなスコア・級を要求しているわけではございませんが、とにかくそれを出していただく。ただ、一般選抜に比べて特別選抜で学力の担保というのが非常に難しい課題であるのも、これはもう当然だと思っております。ということで、お答えになったでしょうか。

秦野進一特任教授（討議司会）：

ありがとうございました。

それでは、笠井先生お願いいたします。

笠井敦司教諭：

具体的にもう少し例を挙げますと、大学の総合問題とか小論文問題が 1 冊になっている本というのは、どの進路指導部でもあると思うんで

すけれども、それを基本的にはベースに使います。あとは新聞の報道とかを使います。あとは、各省庁が出している白書に載っているグラフであるとか、そういったものをピックアップしてネタにしています。

考え方としては、先ほど言ったようにブラックボックス型、パズル型と、それから内容として医療と医療以外というふうなので 4 象限にしまして、医療ネタのブラックボックス型、医療のネタのパズル型、医療以外のブラックボックス型、パズル型という 4 象限を自分の中で置いて、それをバランスよく生徒の得意、不得意に応じて出し入れをすると、ネタをストックを持っておいて、順番を入れかえて差しかえてというふうにやっています。

医療に関しても、例えば遺伝子診断などについてとか、あるいは保健・医療のネタであるとか周辺的なネタもあえて意図的に仕組んで、自分の知識の足りなさをあえて思い知らせるというような形でもやっていて、そこで例えば周辺の知識が足りなければ、じゃあこれ読みなさいというような形で、知識を入れると言えばちょっと語弊がありますけれども、そういうふうに本人が足りないという自覚したら、じゃあこれ読んでみなさいというような形で展開していくように設計をするというような形です。

ただ、本当に簡単に言うと、この原理から追っていったら、このパズル型、ブラックボックス型と選ぶのは、そのほうが楽なんです。この視点で選べば、ああこれだ、これだというふうにすぐ選べるんです。それをすぐ使えるので、ちょっと語弊がありますけれども、こちら楽なんです、こうすることによって。生徒も、先生が何を意図してこの問題やらせているかというのがもうわかるので、お互いそれが、先生、じゃあちょっと宿題くださいとかと言う子もいます。じゃあ本当にやる、でもあまり時間かけないでねとかというふうに生徒と合意形成をして、宿題、先生もう 1 本くださいみたいな感じで、えーっていう感じで、また一生懸命探したりはしますけれども、そ

ういう形でやっています。

一例を挙げると、医療と関係ないネタだと、おもしろかったのは、会社にコーヒーマシンを導入すると業績が上がるという売り文句で売りに来た営業マンの話は信じていいかという問いを出して、その相関があるという図があつて、本当にこれはそういうふうに言えるだろうかというようなことを書かせたりとか、全く医療と関係ないものはそういうものとか、その場で考える、知識がなくても考えられるもの、あるいは逆に知識がないと答えられないものというようなこともちょっと加味して、問題を片っ端から探して、改題したりしてやっています。こちらも、だから持続可能で、隙間時間でぱっと選べるような工夫はとっています。そんな感じです。

秦野進一特任教授（討議司会）：

それでは、杉山先生お願いいたします。

杉山剛士校長：

ご質問ありがとうございます。本当に本質的な質問ではないかなと受け止めました。発表の中で、高度な想像力が必要だと、じゃあどうしたらそれが身につくのかということだと思うんですね。私これ、本当に日本の教育の大きな、教育研究も含めた大きな課題だと思うんですけども、よりよい教育にしていくためにやっぱり高い視点、幅広い視野、その知見が必要だし、もう1つ一方で、やはり教育という営みがなかなか難しいですから、その難しさを知っていること、そして人の痛みというのがわかる、この両面が必要だと思うんですね。意外とその両面が今分かち合ってきている部分があると思うので、どういうふうに今の制度の中で融合できるかということが大事だと思います。

例えば行政担当、ちょっと物を言っちゃって申しわけないです、例えば文科省の行政の職員が教育現場に出向するときに、各地方の課長とか、そういうポストで来るんですね。それでは本当の現場感覚はわかりません。そうではなく

て、例えば現場の先生としてやるとか、1週間でも2週間でも一緒に教育実習ではないけれどもやるとか、そういうことをやるだけでも違うと思います。文部官僚はやっぱり非常に知見がありますので、そういった知見と同時に本当に現場の感覚をつかんでいただくことが、大事だと思います。

一方で現場の教員も、やっぱり現場に埋没しちゃうとまずいと思うんですね。何か現場だ現場だ、みんな現場知らないのかということで終わっちゃだめなわけで、やっぱり現場の中にも変えるべきことがあるわけですから、もう少し視点を高くする。そういう点では、例えば現行でも教職大学院という仕組みがありますけれども、そういった研究とか幅広い視点というものを、できたら主体的にそういった場に行って広げるような、そういった実効性のあるような取り組みができて、お互いに少し歩み寄りというか、融合できればよくなるんじゃないかなと思います。以上です。

伊藤博美特任教授（討議司会）：

ありがとうございました。

それでは続きまして、宮本先生にご質問が来ております。主体性評価で調査書の活用について賛成が少ないのは、本人のチェックシートと調査書の整合性の曖昧さや、調査書で主体性が測れるのかという疑問、更には調査書という形で主体性を測ることの妥当性に疑問があるのではないかと思います。

また、主体性を育てることと逆の効果をもたらすことになるのではないかという危惧もあります。調査書を使うことの妥当性について、調査書を使うことでの悪影響について、その2面についてどのようにお考えでしょうかという質問ですが。

宮本友弘教授：

調査書が選抜資料としてどの程度妥当性があるものか、信頼性があるものかというのは、議論

としては古くからありまして、それこそ倉元先生はその研究もなさっています。ここで一番問題になってくるのは、主体性という態度的側面ですよね、それを入試というハイステークスなテスト、人生左右するようなテストの場面で評価するということ自体が、そもそも問題があるのではないかということです。調査書だろうと何だろうと、e-Portfolio でもいいですよ、今はないかもしれませんが、入試で評価されるよとなったら、本来生徒さんたちは、それだったらそういうボランティアやっちゃおうかなとか、全然自分が思っていないことに手を出したりして入試を有利に進めよう、評価されるように自分を振る舞ってしまおうとする。大学入試で、こういうものを採用するときに起きてしまう弊害の1つだと思います。

これは杉山先生のエッセイのくだりの話であったのですが、そもそもこの時期というのは発達段階でいうと自分のアイデンティティを確立する時期です。アイデンティティというのは一朝一夕ではすぐにはできません。すぐにはできなくて、ああでもない、こうでもないといろいろものがきながら、そしてなかなか時間的展望も持てません。思いつきでやったことが、これもなかなかおもしろいじゃないか、大学行っても続けようかなとか、じゃあこれできるのはどこ大学だろうというような形でなっていくわけです。そういった高校生として、もっと言えば人間の発達において自然に行うことが、阻害されるような、そんなような状況を生み出していたと私は思っております。ですので、調査書云々というよりも、主体性という側面を入試で測る、評価するということにそもそも問題点があったのではないかと私は思っています。

倉元直樹教授：

ちょっと補足をさせていただいてよろしいでしょうか。おそらくご質問なさった先生は非常にまじめに考えておられるのですが、私どもの仕組みを多分十分には御存知ないのかなと思い

ます。先生方にも安心して調査書をつけていただくような工夫はしています。ここでは申し上げられません。入試説明会のような場で申し上げるような話です。

もう1つは、いわゆる合否で同点に並んだときのみ、その主体性のチェックを使うという利用方法です。つまり、一言で言えば、「主体性評価のために日常生活を意識して変えることはないよ」というメッセージです。そんなことを意識するくらいだったら、1点でも多くとれるように勉強なさい、ということです。ただし、いざ出願、チェックするとなったときに自分の良心に呵責がないような、楽しい充実した高校生活を送ってください。そういうメッセージに尽きるんです。ですから、その辺までご理解いただければ、先ほどの調査書を裏づけにするという件も、さほど問題なく誤解を解消できるのではないかなと思います。この辺がやはり通じにくいところで、高等学校に調査をしても私どもの仕組みに賛成が少し少ないということになっているのかな、と思います。

秦野進一特任教授（討議司会）：

ありがとうございました。

それでは、次の質問、ちょっと大きな質問ですが、最初に高等学校の先生にお伺いしてそれに対して大学の先生方はどのようにお考えになるかというふうになります。杉山先生の最後のスライドに、本来の高大接続という表現がございました。本来の高大接続に向けての取り組みがなされているかと。高校が大学に期待すること、つまり本来の高大接続というのはどういうものか、高等学校としては大学に何を期待するのか。そして、それについて大学はどのように応えることができるのかという質問です。

笠井先生と杉山先生、ちょっと大きな質問で難しいかもしれませんが、本来の高大接続とはどのようなものか、大学に何を期待するか。そして、それを受けて大学の先生はどのようにお考えになるかということです。笠井先生、杉山先生、

どちらの先生が先でも構わないんですが、じゃあお願いいたします。

杉山剛士校長：

では、私のほうから話をしたので、申しわけない。本来の高大接続はあのときに、ちょっと大上段でお話しをしますと言ったんですけども、定義というのも定まっていませんよね。

ただ、あのときお話ししたのは、1回しかない人生をどういうふうに生きるのか。それをやっぱり考えさせる。ひょっとするとキャリア教育の側面かもしれない。方法とするとエッセイを書けること、という話をしました。やっぱり、何か知識を知っているということじゃなくて、その知識をどう活用するかということもそうですし、どうやって自分が生きるんだよという、今主体性評価にも関わると思うんですけども、そういったことをやっぱり考えさせるということが大事だと思うんですね。高校もそういうことを考えさせて、大学に送り出していく。そして、大学側もそういった人生を生きる、使命とか理念とか、そういったものを持った生徒を育てていくということだと思うんです。

問題なのは、どうやってそれを測るのかということだと思うんですね。私は先ほどエッセイという話を1つしましたけれども、AO入試なんかでもいろんなインタビューとか、いろんなヒアリングを通して、その生徒が持っているいろんな側面とかパッションとか、そういうものを引き出そうとしていると思うんですね。新フンボルト入試もそうだと思います。それから、今東北大学がやられているAO入試もそうだと思います。そういった手間をかけながら、いろいろな対話を通して、やっぱり生徒にも考えさせながら、生徒の生涯の志というか、そういうものを引き出していく。同時に、それをやっぱり大学側でも、それをベースにしながら教育していくということなのかなと思います。ちょっと抽象的な答えでとどまっていますが、よろしくお願いいたします。

秦野進一特任教授（討議司会）：

ありがとうございました。

笠井先生、いかがでしょうか。

笠井敦司教諭：

私が今日お話ししたものの、資質・能力を高めるというのは決して何も社会に有為な、使える人材を育てるために資質・能力を育てたいと思っているわけではなくて、ただ昨今の改革のニュアンスというかテイストとしては、何かイノベータータイプな人材、使える人材をつくるための何か大学は、人材育成機関的な色彩を何か強く要請されているような印象を受けます。その流れで接続してくるので高校、じゃあ高校段階でこういう力をつけてきてくださいというふうな表面的な人材育成というようなところで何か接続しちゃうと、またそれちょっと違うのかなというふうに思っています。

それよりも、やはり人としてというかどんな、これからの未来をどんなふうに生きていくのか、どんなふうに価値をつくっていくのかという、そういう人材になるために、そういう人間性をはぐくむために資質・能力を育てたいなというふうに思っているの、何か浅い意味での人材育成ということではつながっていかないなと、もっと本質的な部分を大学の教育では、やはり今までどおりやってほしいし、そこに繋がっていききたいなというふうに思うので、その資質・能力という言葉が非常にどっちにとられているのかなというのは、とても、社会の中で今議論している中で、そういった表層的な意味で、この言葉をとられると嫌だなというふうに感じているので、本質的な意味での資質・能力の育成をお互い握り合う、そのためにはそういう対話が必要かなというふうに思っています。

秦野進一特任教授（討議司会）：

ありがとうございました。

それでは、大学の先生方、今の高等学校の先生方のご意見についてどうでしょうか。では、倉元

先生お願いします。

倉元直樹教授：

ちょっと、もしかしたらきちんと直接的な答えとして捉えられないのかもしれないのですけども、お話を伺いながら思っていたのは、やはり、「入試に課さない」ということが大事なんだな、というところです。つまり、「試験あるところに対策あり」なんです。これは絶対にそうなります。「これで合格が決まる」となったら対策します。「人生について考えろ」となったら「人生について考える対策」をします。だから、おそらく選抜に使うツールというのはそこまで深みのないもののほうがいいのだろーと思います。

あと、杉山先生がおっしゃった「エッセイを書ける」能力。これは大事なことだと思うのですが、どのタイミングだったらいいいのか、人によって違っていいのではないかな、と思うのですね。高校生のときにそういうものを書ける人、大学で学んでそういうことが書けるようになる、あるいは・・・もう、この年になっても、まだ私なんか書けないかもしれないですね。そこがやっぱり「教育」というものの真髄なんだろうと思います。その中での入試の役割ということをもう一回考え直したほうがいいのかな、と思います。

つまり、全てのことを測るということはできないという現実、その中で大学にとって必要なもの、高校で学ばせてほしいものを考えるという、そういう仕分けが必要なのかな、と思って聞きました。

秦野進一特任教授（討議司会）：

安成先生、いかがですか。

安成英樹教授：

とても難しい問題なんですけれども、高大接続が大事だというのは、やっぱり入試の重みがあまりに過剰に重くなっていたというか、そこで要するに将来までそこで、どこの大学に入るかで決まるというような風潮に対する強烈なア

ンチテーゼとして出てきたんじゃないかと私は思っております。そういう意味では、先ほど杉山先生からもありましたように、今の流れ全体が、主体性が大事であるとか知識や技能だけではないものを求めるべきだということが強調されていますが、これは総論としては確かに正しいと思うのですが、ただ大学入試でやっぱり評価の基準としてはいけないというのは、これはもう倉元先生と全く同じ考えであります。

とはいえ、とにかく一般選抜までそれらを評価しろというふうにならないう、投網をかけるように大学側は求められていますので、非常にそこが苦しいところで、今でも悩みが深いところです。

先ほどから紹介しているお茶大の新フンボルト入試に関していえば、主体性というべきものは、この入試をあえて受けようとしたこと自体に十分なる主体性があると我々は考えていると、それで十分じゃないかということです。むしろ、自分が単に大学に入りたい、だけじゃなくて、本当に何をしたいのかをじっくり考える、それこそ入試がそういう機会になってくれればいいというふうに考えています。これは多分にきれいごとに聞こえるだろうと思いますし、実施する側と受験する側とは多分、やっぱり当然格差がある問題だと思います。

ただ、そういう意味でなかなか、いわゆる簡単には対策が立たない入試を目指しているんですが、ただ聞くところによるとやっぱり合格した人は、やっぱりいろいろ高校の先生方にいろんなご尽力いただいて準備をしたということも聞いております。だから、結局これはイタチごっこだなというのが偽らざる感想ですということです。

秦野進一特任教授（討議司会）：

宮本先生、いかがですか。

宮本友弘教授：

とても難しい質問ですけども、まず1点目

は、これは今の高大接続改革に対する批判的なコメントになると思うのですが、学力の三要素、これを全部の発達段階に当てはめて考えるのはどうかと思っております。先生方ご存じかと思いますが、幼稚園教育要領や保育所保育指針にも学力の三要素って書いてあります。幼児から大学入試まで全部同じ概念で通そうとする、それを評価しようとする。先ほど私申し上げたように、その中でも例えば、主体性の中の核となる動機づけは発達段階でだんだん変わっていきます。児童期は何でもかんでも頑張ってしまうけれども、発達とともに人間というのはいろんなものが分化、分かれていきます。そういう発達の観点が、先ほど杉山先生は理論武装がなされていたと言っていましたけれども、ちょっと発達の視点が弱いのかなと思います。

やはりスムーズな高大接続ということを考えていく場合は、この18歳のとき、一体どういうことが発達課題として重要なのか、そういったことをよく考える必要性が私はあると思います。私は心理学が専門なので、ついつい心理寄りの発言をしてしまいます。高校側をお願いしたいこととしては、高校生が大学生になって退学しちゃう大きな理由としては、不本意で入ってきた場合なので、その大学を選択して来ることをエンカレッジするような、そういうようなことをしていただくことが先決ではないかなと思います。やはり来てよかったと思わせるような、それは我々の宿題でもあります。そのあたりを一緒に知恵を絞って考えていくことが大事なんじゃないかなと思います。以上です。

秦野進一特任教授（討議司会）：

ありがとうございました。

伊藤博美特任教授（討議司会）：

それと関連しまして、笠井先生にですが、先生のお話の中で入試対策は集中特化型授業だというお話が最後にあったかと思います。単なる入試対策にとどまらずに学びのおもしろさをそこ

で高校生が実感し、それが授業にフィードバックされていくと、それで学びが深まっていくというお話、非常に感銘を受けました。それに関連しまして、そうしたやり方を例えば生徒の指導に生かすためには教員の力が要求されますが、高校内であるいは高校を超えてどういう取り組みが必要で、どうやってその共有化を図っていくのか、あるいは、そうした構想が具体的にあるのか、現場の高校の先生たちが知りたいことはそういうことではないかと思います。それについてご意見いただければと思います。その後に続けて杉山先生にもちょっと補足いただければと思います。

笠井敦司教諭：

集中特化型授業をやることによって、生徒も気づくし私も気づきます。普段の授業で足りていないことが、すごく反省としてわかります。生徒は、ああこれ現代文で読んだのにつながる、みたいな形でだんだん課す課題によってつながっていく瞬間があるのと同時に、自分の授業がとて、ある意味試験範囲を終わらせるためみたいなことをやっているな、みたいな反省もあります。

お互い気づくという形で、普段の授業を変えたいというふうに分も持ってくるし、生徒は学んだことをいろいろつなげたいというふうにやっぱり思ってくれていると、それで成功のかなと思っています。実際に授業に対策で使ったものを試験的に生徒に読ませてみたりとかも、やっています。そうすればやはり、それは2-3人でしかやっていなかったですけども、40人でやるとどうなるのかなみたいな形で実践したりしています。それが投げ込みのイベント型でしかないんですけども、それをどう設定していくか、ちゃんとデフォルトで設定していくかというところに私は課題を感じていますが、可能性も同時に感じています。

生徒には、とは言ってもじゃあ授業を飛び越えて何でもやってみようというのは時間的に部

活もあるし、塾にも行っていますし、今総合的な探究の時間というのがありますし、そことどうつながかということが課題ですね。学校のカリキュラムでそういうことが、発展的な学びが担保されている時間というのは総合的な探究の時間なので、そこは意外に進路とはつながらないんですね。つながりそうだけれども、なかなかつながらない。だから、そこもちょっと難しい問題だなと思いながらも、その探究をどう生徒のそういう発展の場にするかというところに課題があるのかなというふうに思っています。同時に可能性でもあるのかなと思っています。ちょっと答えになっているか、ちょっと自信がないですが。

伊藤博美特任教授（討議司会）：

ありがとうございました。杉山先生、補足などありましたらよろしくお願いいたします。

杉山剛士校長：

教員の読み取る力とか、そういった指導力を上げていくにはどうしたらいいかという受け止めでよろしいでしょうか。

伊藤博美特任教授（討議司会）：

それで結構です。

杉山剛士校長：

ちょっと経験的なお話になりますけれども、自分の学校で生徒と向き合って、そこでいろいろ学んでくこともあるんですが、学校の枠を超えてネットワークを組むことによって、そこからいろんな気づきを得るということが経験的にもたくさんあります。

埼玉県にも協調学習という主体的、対話的、深い学びというもの、例えば国語の先生は国語の先生で自分の学校だけじゃなくていろんな先生たちと対面であったり、あるいは今この時代ですから、ICT を使っている議論をしたりするんですね、当然進路の問題も含めて。そういうつながりができると、すごくいろんなことに気づかされたり、指導力が上がってくることがありました。

それから、校長になってもそうなんですけれども、自分の県を越えて、これはボランティアなネットワークですけども、例えば首都圏の学校で校長先生でお互いに横のつながりをつくらうよということで、首都圏でネットワークを作りました。勉強会や協働した教育活動をしました。やっぱり自ら進んでそういうネットワークをつくらうというのは、いろんな問題についていろいろ話をして、いろんな気づきがあって、そのことがすごくためになったという気がします。

東北のほうにも呼ばれて、そうした動きを広げてくださいというので1回お邪魔したことが



ありますけれども、やっぱり自ら進んでそういうネットワークをつくろうというのは、すごくいろんな気づきや指導力を上げていくような気が経験的にします。すみません、ちょっとお答えの1つですけれども、よろしく願いいたします。

秦野進一特任教授（討議司会）：

ありがとうございました。

それでは、倉元先生、大学入試学について1つご質問が来ております。大学入試学の今後の展開に大いに期待いたしますということです。

ご質問は、大学入試センターが大学入試を専門的に扱う唯一の国家的組織ですので、大学入試学で今後培われるであろうエビデンスなり知見が個別の大学にとどまるのではなく、ぜひともそれらを取りまとめる大学入試学の全国的センターとして、大学入試センターが機能することを願いますが、先生方のご意見はいかがでしょうかということです。

倉元直樹教授：

私もかつて大学入試センターというところに所属をしております、OBですので、あえてOBとして申し上げたいのは、やっぱり大学入試センターにいる研究者の先生方には、入試を大事に思っほしいという1点です。

研究者というのは、やはり自分の専門というものがあります。専門として「大学入試学」という看板を掲げるのは相当勇気がいるのですけれども、だから、大学入試センターの先生方も別な分野をまず基礎学問として専門にしていると思うのです。ただ、そのついでに入試も扱うという態度でいられると、困ります。現場は、本当にある意味、命まではかけないとしても、人の運命をかけて必死でやっているのですから、そこをところをまず分かってほしいなと思います。そのためには、一度は現場に降りてきて、実情を知った上で研究をやってほしいと思います。あえて一番辛口のコメントにしましたが、そういう大

学入試センターであれば我々信頼できる、信頼していろんなもの預けられるかなと思っています。是非、そういうふうになってほしいと期待しています。

秦野進一特任教授（討議司会）：

ありがとうございました。

残り5分ほどとなりましたので、最後に、登壇した方々お一人1分程度で、最後に皆さんにお伝えしたいこと、あるいは今日の討議に参加してお考えになられたこと等をお話しいただければと思います。倉元先生は今お話ししたばかりですので、最後をお願いいたします。

それでは、宮本先生からお願いいたします。

宮本友弘教授：

受験勉強というのをどういうふうに高校生たちが今後認識できるかということが、すごく僕は大事だと思っています。受験勉強は、それは大学に入るための勉強ですけれども、それを意欲的に取り組んでいる場合があります。必ずしも課せられたものだからというわけじゃありません。また、受験勉強を通して人が成長するというような研究結果も出ています。なので、もうちょっと受験勉強というのをポジティブに捉えていくということも1つ大きいことじゃないかなと思っています。それが、新たな入試を生み出していく1つの要素になっていくのではないかと考えております。以上です。

秦野進一特任教授（討議司会）：

ありがとうございました。

安成先生お願いいたします。

安成英樹教授：

入試に携わっていて思うのは、本当に非常に高校生にとって重荷になっているところ強く感じられます。何よりも、結局最終的には入りたい大学よりも入れる大学という選択肢をとってしまうんですね。これは、入学後のモチベ

ーションにも相当影響してくると思います。そういう意味では、自分はそもそも大学何のために行くのかとか、大学へ入って何をしたいのかということを明確化させるという営みは、これは高校側でかなり力を入れていただければいいなと思っておりまして、一方大学側はそのためのプレゼンスをいろいろやると、うちはどういう大学だというような、そういうことをもっと明確に情報発信をしていかなきゃいけないというふうに思っております。

ただ、本当にこれはもう課題としてはわかっているんですが、なかなか難しいというふうに思っております。

秦野進一特任教授（討議司会）：

ありがとうございました。
笠井先生お願いいたします。

笠井敦司教諭：

先ほど宮本先生がおっしゃった言葉で、入試を通じて、勉強を通じて成長するというお話いただきましたけれども、本当にそうだなと思います。

私が最悪だなと思うのは、例えば推薦を、例えばフンボルト入試とかを受けた後に、あんなの受けなければよかった、時間がとられたというふうに思ってしまうような指導をしていると、それは指導者が悪いのかなと思います。

一番いいのは、受かることはもちろんそうなんですけど、先生、落ちたけれども、すぐためになった、次絶対一般で受かりますというふうに力強く言ってくれたときには、やっぱりモチベーションが上がって頑張ってやっていける、前向きになったなというふうに、成長したなというふうに感じる時が一番指導者としてはうれしいです。そういうような指導を可能な範囲で、先ほど言ったような視点で可能な範囲でやって、生徒をその気にさせて生徒が成長していくということが、やっぱり大事なんだなというふうに感想を持ちました。以上です。

秦野進一特任教授（討議司会）：

ありがとうございました。
杉山先生お願いいたします。

杉山剛士校長：

本当にありがとうございました。議論を聞いていて、先ほど高大接続、本来の高大接続とは何かという話とか、主体性評価とは何だという話をまた改めて聞いて、そうなんだなと思うことがいっぱいありました。ありがとうございます。

先ほど、たった1回の人生で一体何を成し遂げようとしているのかということを聞いてみようということで、エッセイが大事だというような話をしたんですけども、実際今私も学校の現場で生徒と面談しながら、一生かけて人生で何獲得しようとしているのと聞くと、いろんなタイプがいて、結構べらべらと答える子もいるし、何この人言っているんだろうと答えに窮する子もいるんですね。それはそれでいいと思うんですよ。答えなんかすぐ出ないんだけど、そういうことをやっぱり考え続ける意味、先ほど安成英樹教授先生がなぜとかどうしてということをお話しされていましたが、自分の人生ってどんな意味があるんだろうと考え続けさせる。

よく何になりたいのまでは考えさせるんだけど、それだけじゃなくて、どんな職業人になりたいのというところまで考えさせる。そのことは、10代の青少年教育ではすごく根幹にあって、大事なことなんじゃないかなと思いました。

もう一方、それを本当に入試で測るかどうかというのも、今日いろいろ考えさせられましたけれども、入試は妥協の芸術ということがあるので、どこかに落ち着くところがあるのかもしれないですね。なかなかまじめに考えると、主体性をどう定義してどう測って、それを本当に評価にしているのかどうかというのは非常に悩ましいところがあるかなと思うんですけども、妥協の芸術というところもあるので、バランスでうまく落としていくことが大事ななんて、い

ろんなことを思ったりしました。どうもありがとうございました。

秦野進一特任教授（討議司会）：

ありがとうございました。

それでは、最後に倉元先生お願いします。

倉元直樹教授：

今日、先生方のお話を聞いていて、1つ良いキーワードが思い浮かんだな、という気がしています。それは「考える」ということです。

「学ぶ」というのとちょっと違うのかな、という気がします。「考えることを面倒くさがない子どもを育てる」ということを、高校と大学で協力してやっているのだな、と思いました。そのためには、制度の中でどういった形で入試選抜の資料、あるいは、そこでの難易度というものを設定するかという問題は、結構、技術的だけれども、大事なことなのではないかと思うのです。

つまり、考えなくても通るような入試ではだめだし、考えてもどうやっても無理な入試ではだめなので、それは、多分、我々のところに来たいと思っている受験生の層との兼ね合いだと思うのですが、そういうところを具体的に技術的に落とし込んでいける、そういうようなものにならないと「大学入試学」というのはだめなのだろうな、というふうに思いました。

以上、感想でした。よろしくお願いします。

秦野進一特任教授（討議司会）：

ご登壇の先生方、長時間にわたりありがとうございました。少々時間が過ぎてしまいました。本日のこの討議が、フォーラム参加者の皆様の、それぞれの現場での実践に何か生かすことができれば幸いです。本日はどうもありがとうございました。



閉 会 の 辞

東北大学理事・副学長

滝澤 博胤

久保沙織准教授（司会）：

最後に、主催者を代表して東北大学理事、滝澤博胤より閉会のご挨拶を申し上げます。

滝澤博胤理事：

本日午後から 4 時間と非常に長丁場でしたが、ご参加頂きましてありがとうございました。いつもながら、高校の先生方と大学の研究者を交えての議論というのは非常に白熱して、皆さんにとっても実りある時間を過ごして頂けたのではないかと思います。

私自身このフォーラムの挨拶は 3 年目ですが、毎回このフォーラムのポスターの写真を見て思う事を一言述べたいと思います。

2 年前のテーマは「主体性とは何だろうか」ということで議論を行い、傾いた天秤の写真が載っていました。それは、主体性というものをきちんと測り取る道具を自分たちは持っているのだろうか、あるいは傾いた天秤・重力に抗いながらもきちんと公平に物事を測り取る力を自分たちは持てるのかと、そういうような意図を感じたポスターでした。

昨年は「入試制度が変わるとき」というキャッチフレーズでした。ポスターの写真は港や岬にある灯台でした。暗い中で明かりを放っている写真であって、それはゴールを照らしながらも足元は真っ暗だったと、そういうような状況を示したのかなと思っていました。

そして今年は「大学入試を設計する」。今年はどんなイメージを持ってこの絵が選ばれたのか私なりに解釈すると、きちんと設計をすれば、どれだけ年月が経って風化しても、最後まで残るという意図なのか、或いはかつて栄華を誇ったこんな時代があったということを示すのかなと思いました。

こういった意味でも、実はこのフォーラムは非常に色々な視点で眺めると、得るものはたく



さんあるのではないかと今日改めて感じた次第です。

また来年、どんな主体・主眼で、どんなポスターで皆様をお招きできるか、私自身も楽しみにしております。本日は長い間ご参加いただきましてどうもありがとうございました。ご登壇いただいた 5 名の先生方には改めて感謝申し上げます。引き続き皆様と共に、よりよい選抜ができるように努力して参りたいと存じます。本日は誠にありがとうございました。

（拍手）

久保沙織准教授（司会）：

滝澤先生、ありがとうございました。

以上をもちまして、本日のフォーラムを終了いたします。お忙しい中、最後までご参加いただき、ありがとうございました。

最後に、来場参加の皆様、そしてオンライン参加の皆様もアンケートへのご協力をお願い申し上げます。スクリーンに表示されている QR コードからも、アンケートのウェブページへアクセスしていただくことができます。用紙にご記入いただいた来場参加の方は、受付に回収箱を設置しておりますので、ご提出ください。改めて、本日はありがとうございました。

講評 1：入試改革と高校教員の立場から

青森県立八戸工業高等学校
教諭 井上 誠之

1. はじめに

コロナ禍中の 2020 年、教育現場で出来ることは何かを、改めて考えさせられる年になった。入試への不安が募る中、記述問題導入見送り、「大学入試英語成績提供システム」の導入延期、教育情報管理機構認可取り消しといった、高大接続改革の三本柱が方針転換した。「公平性の確保」や「適切な能力の判定」が果たして出来るのか、私自身疑問に感じていた。一方、東北大学の入試には殆ど影響していない。宮本先生の発表の中であったように、エビデンスに基づいて設計された入試制度によって頑健性が示されている。そして、大学入試の責任が最終的に大学に帰する以上、当該大学が受験生保護の観点からエビデンスを重視するのは当然であり、また、そうあるべきだと感じた。今回、このような貴重な機会を頂くにあたり、標題の観点から再度講演会を俯瞰してみたい。

2. 基調講演 1 について

高大接続改革が方針転換を迫られた原因の一つとして、「大学入試の二重性」を見落としていた点だと、倉元先生は指摘されていた。入試は国民的関心事であると同時に当事者問題であり、一律トップダウンで行うのは厳しいというものだ。今回の接続改革で「下級学校への悪影響の排除」を中核の理念に持ってきた意図は分かるが「公平性の確保」や「適切な能力の判定」が軽視されたというのは、その通りだと感じた。

杉山先生が話されていたが、学制の理念は「不学不邑」だったはずだ。大学入試は、家庭環境に恵まれない子たちにこそ、開かれているべきだ。これまでのセンター試験で得られた知見をあまりにも軽視し、1つの理念を押し通そうとしてしまった。「大学入試は妥協の芸術」とは、まさに言い得て妙だ。継続性の中で、少しずつ変化して

いくことが望ましいと考える。

3. 基調講演 2 について

宮本先生の発表を聞き、改めて東北大学の入試が入念に練られていると確信した。特に、エビデンスを「つくる」局面において、高校側に何度も意見募集を行っている点だ。受験生と大学の当事者性を重視していることは、合格者数で重みづけしたアンケート結果が示している。また、エビデンスを「伝える」局面においては、国公立大の個別学力試験全教科を調査し、約 9 割が記述試験問題だと公表した。文科省が記述式導入の根拠としていた「国立大の記述式は約 4 割」が国語に限定した調査だったことを知り、唖然とした。そもそも拠るべきデータが偏ったものであれば、エビデンスになり得ない。今後、大学入試研究の成果がエビデンスを担保し、政策立案へ寄与できればと願うと同時に、現場教員として声をあげられなかったもどかしさも感じた。

4. 現状報告 1 について

新フンボルト入試を導入するにあたり、安成先生をはじめ、入試課スタッフが理念をどう維持するのか苦心されている様子が伝わった。第一志望であること、この入試を受けられることが主体性を持っていること、研究者を求めていることなど、東北大学の入試問題と型は異なるが、理念は同一だ。新しい取組を始める際の周囲を巻き込んでいく苦労や、取組を振り返る大切さ（継続性）、少ない人手でプロジェクトを実行する苦労は、大学も高校も変わらないのだと感じた。高校でも、様々な取組が生徒の活動の中に予め組み込まれている。ただ、初期の理念を果たして理解しているのだろうか、何となく継続してしまっていないだろうか、振り返る機会は意外に少ない。アンケートは実施しているが、エ

ビデンスは大学のレベルに遠く及ばない。OODA ループでいうところの Observe (観察), Orient (状況判断) が必要か。

5. 現情報 2 について

資質・能力をみる選抜方式から目を逸らさず、目の前にいる生徒に対しての責任を果たそうとする笠井先生の取組は、現場の教員として学ぶべき点が多い。従来の「推薦 AO 入試」対策は、教科指導とは独立した「対策」で、ともすれば指導教員に対して生徒が付度し、受動的立場に収まってしまう。生徒は合格後「先生のおかげで・・・」と言い、我々教員は疲労と達成感を味わう。一方、笠井先生の指導は、あくまで普通の学びの延長線上で資質・能力を高めていくものだ。受験勉強と推薦 AO 対策が同じ方向を向いていること、生徒が自律して問いを設定できることが大切なのだと思う。

私は物理教員だが、物理は半分国語だと思っている。以前は分かり易さを大切にしていたが、噛み砕いて説明すればするほど、生徒の理解力を奪っていると気づいた。私たち教員は、答えを教えたくて仕方がないし、生徒達も安易に聞いたがる。大学に上がれば難解なテキストと戦わなくてはならない。そのときにくじけないよう、教科書の行間を読み解く読解力を大切にしたいと考えている。入試対策の質的変化は急務だと言える。一方（具体的には書けないが）、過去の成功体験から抜け出すことは容易ではない。校内外に仲間をつくり、孤軍奮闘しないよう心掛けたい。

6. 現場報告 3 について

杉山先生の講演の中で、教育を「目的」として語るか、「手段」として語るかという問いかけがあった。教育は「人の成長」を扱う営みだと話され、私は自分の教育の原点を思い出した。初めて赴任した学校は小さな漁村にあり、四則演算も苦手とするが、精一杯生きようとする素直な子どもたちがいた。目の前の生徒を何とかしてあ

げたいという気持ちだけが残った。教員は、進学校だけでなく、実業高校や地域校にも赴任する。「教育という営み」について改めて考えさせられた。

また、急激な教育改革の問題点を指摘されていた。東北大学は AO 入試の入学定員を 1 割弱から 2 割に拡大するのに 20 年の歳月をかけている。大きな変革ほど年月をかけて綿密に取り組まなければならないと、かつて入試説明会で倉元先生が話されていたが、まさにその通りだと思う。

7. 討議について

討議の中で、主体性という態度的側面を入試で評価すること自体が問題であると宮本先生が指摘されていた。前任校では、生徒たちが「主体的」であらんと、様々なボランティア活動や講演会に積極的に参加していた。前々回のフォーラムでも取り上げられた内容だが、主体性を定量的に評価する難しさと、行動の形骸化が問題点としてあげられる。東北大学のように、主体的な学習行動が学力に反映されると明確に打ち出していただけると分かりやすい。

倉元先生は「入試あるところに、対策あり」と話されていたが、私たち高校現場は、生徒の出口を保証するために、入試問題研究（対策）を当然行う。大学が閾値として設定する入試に高校現場が影響されるのは当然だ。しかし、この対策が学びの本質から外れている、単なる問題演習に終始している授業は未だに多い。学びの質の転換を図ろうとする、高大接続改革の理念は分かるのだが、今回のフォーラムで指摘された課題が浮上してしまった。

8. おわりに

入試はゴールではなく、学びに向かう人生の入り口だと考えると、授業や入試対策の質的変化が必要だと痛感している。数年前、入試結果が思うように伸びず、近視眼的に演習を繰り返していた。そんな中、全国の先生方と学びを共有す

る機会を頂き、以来私自身の学びの質が変化している。このフォーラムのように、学校の枠を超えて人とのつながりや先生方のネットワークがあれば、気づきや指導力が上がっていくと思われる。

講評 2：フォーラムへの所感として

岩手県立一関第一高等学校
指導教諭 吉田 達行

1. はじめに

第 32 回東北大学高等教育フォーラムの開催に関係するすべての方々に感謝と敬意の言葉をお伝えいたします。例年とは異なる環境の中で、折々の場面で行き届いた配慮を感じました。フォーラムの内容と共に、様々な制約、状況の変化がある中での準備、運営の様子は、この時期に人と思いを共有する「集まり」の場をつくる範となる姿があったように思います。今年度初めて職場を離れ参加した会議でしたが、教えるの多いよい時間を戴いたことに心より感謝申し上げます。

2. 過去のフォーラムへの参加から

高校において教員は一定期間で勤務校が変わり、担当する学年も校務の分掌も長く同じものを続けることは稀なことです。毎年このフォーラムの会場に来ることも存外に稀有なことなのかもしれません。初夏を迎える頃、毎年会場へと足を運ぶことが当たり前のことではなかったのだと、この秋晴の折に改めて思いました。今回、講評の執筆依頼を受け、これまでに参加したフォーラムにおける過去の登壇者の方々の様々な言葉に思いを馳せる時間がありました。十年前に初めて参加した頃に耳にした言葉が、不思議と心に長く止まり、歳月とともに、少しずつ自分の中で意味ある言葉に変化する。相当な負担を背負い登壇される方々の言葉は、聴く者の心に様々な形で刻まれて行くように思います。東北大学高等教育フォーラムが意義深いものであり続けてきた理由は、これまでの多くの登壇者の方々の見識とその人間的魅力に寄るところが大きいのだと思います。今年度のフォーラムにもそのことが脈々と受け継がれていると思いました。

3. これまでの大学入試改革の周辺で

高校における進路指導という分掌は、学校の中で生徒を育てる様々な場面を支える数ある仕事の中で実に小さなものであると思います。偶々その仕事を長く続け、自分自身のささやかな規準や判断力が、つまり教育観なるものが、大学入試改革の一連の動きの中で、随分と揺さぶられる時間を経験しました。多様な主催者の会議に参加し、その都度疑念ばかりを積み上げました。進路指導主事という立場で参加した会議の数は年間で二十の数は容易く超え、生徒のために正しい判断を得ようと、間違いのない方向を知ろうと、多くの言葉を聴き考えることが何年も続きました。善し悪しは別として、東北大学高等教育フォーラムから自分自身が答えを探そうようになってしまったのはこの時期の参加からだと思います。

程無く国の方針と手順が公平さという教育の本質を後回しにしたもので、優先していることが世の利を追うことであることが明らかになりました。高校現場が無念に似た感情を持つに至る頃、頑迷な国の方針により打ち出されていた柱は、延期、見送り、取り消しと悉く頓挫しました。抑の当時から教育現場には高校と大学を繋ぐことへの「深い思い」があったと思います。誤解を恐れず言えば、一年一年の入試にその思いは込められていたはずです。思いの深さにそぐわない改革であるから、現場から発信された声に折れたのだと思います。過去の東北大学高等教育フォーラムに登壇し発言されてきた多くの方々の言葉を思い出します。いつの時代も変わらず指針となる見識が求められています。危ういバランスで物事が進み、気を許すと、忽ち誰かの思惑通りということが多すぎる昨今の世の動きの中で、教育に携わる者が思いを交え、真摯に言葉を交わすこのフォーラムは本当に貴

重な機会であると思います。黙認し追従するしかない状況が巧みに作られて行く時代の中で、先頭に立ち声を上げ使命を果たす人や組織への敬意はこれからも持ち続けていたいと思います。

4. 今回のフォーラムについて

今回招待参加という形でフォーラムの会場において登壇者の言葉を拝聴し感じたことは、先を進むものが範を示すという矜持であったように思います。「大学入試を設計する」というテーマは、2つの困難を見据えています。悪い意味ばかりではないにしても大学入試改革は進行中であることと、良い意味の見つからぬ「大学入試設計とは極めて相性の悪い」、世界に暗澹たる影を伸ばす疫病が進行中であること。その2つの困難の中で、これからの大学入試が社会に「資する」、日本に「資する」役割を果たす指針を示さなければならない。そのために、高大接続改革の現状を正しく検証し、大学と高校のそれぞれの現場が声を交わすことが必要であり、未来を担う子どもたちのための入試を共に力を尽くし設計せねばならない。そのような呼びかけの声を持つテーマなのだと思います。

登壇された方々一人ひとりの言葉の行き着く先は、主題として示されていた『大学入試研究』の必要性和その役割を踏まえた実践であり提言でした。招待参加者として書き留めたのは、主題に纏わる言葉だけではなく、登壇者の教育者としての想いの溢れた言葉でした。登壇者の方々の「話し過ぎてしまった」という言葉の前後がやはり心に残ります。ちょうど授業中の個人的な思い出話を卒業後まで覚えている教え子の記憶のように、それは心に深く残る。「私個人の考えだけれど」と、前置きした後に続く言葉が、やはり我々の心を強く捉えます。例えば、入試においてこの国の最良の専門家である教授が口にする言葉が、大学入試を科学する絶対の自信ではなく、子どもたちの未来への深い愛情であることに我々は深く安堵します。例えば、エビデンスという言葉と価値の流布を、妄信せ

ず、主体性の評価という言葉への疑義を正しく持つという言葉に教育者としての品格を感じます。自らの利を容易く操作できるような基準に合わせるように仕向ける教育からは、創造的な人材が育つはずもない。昨今の世の出来事と重ねて思いを巡らせます。登壇者の想いから繋がり残る言葉は、時間の経過とともに更に意味を深めて行くように思います。

入試は志のあるすべての子どもが努力できるもので、今いる環境で得る情報の量に本質が左右されてはいけない。東北大学の入試が高校現場から信頼を得ている理由は、高校が信じて守り続けたいと思う公平さがあるからです。学力重視に異論なし。毎年より良い入試にしようと取り組み続ける職人のような真摯な姿勢に高校現場の教員は共感しています。「大学ごとに志望する学生の層は異なり、同じ物差しで、入試を設計することは一様にできない」ことは承知しています。それでも、東北大学や今回登壇し発表された「お茶大新フンボルト入試」のように、人を育てようとする深い志のある入試を、「新時代の大学教育」の場で実施し続けて欲しいと切に願います。

そのために費やされる膨大な労力と教員の疲弊についての大学からの言葉に我がことと重ね首肯しながら、大学入試に掛けた時間の価値は高校側に正しく伝わっていることはお伝えしたいと思います。高校生の受験する入試の内容は、これからの高校教員に必要な力をも育てています。大学の先生方の労力を無駄にするような「繋ぎ」を我々はしなないと思います。大学入試の質は、それぞれの大学からの最大のメッセージであると信じています。

5. 高校の進路指導の現場から

よい大学が東北にこそあるのだという言葉が伝わっています。震災からやがて十年になります。その当時、我々の地域を大切にしてくれた大学だ、と。世界に目を向け、教養と研究を同等に重んじるよい大学なのだ、と。自分の出会う子

ども達には、そういう言葉を伝え続けています。
時々お休みを戴きながらこのフォーラムに十年
に渡り参加してきた意味は、その言葉を自分な
りに確かめることだったと思っています。

6. 終わりに

今年、寒い季節に倉元直樹教授からお話を戴
き、その後瞬く間に社会の風景が変わり、約束
の五月が過ぎ、夏の終わりに開催の方針が伝え
られた後も、開催を疑い願い、秋の季節に今回
のフォーラムへの参加の機会を戴きました。今
年度のフォーラムの中でのあらゆる場面が長き
に渡り自身の糧となると思っております。大野
英男総長、滝澤博胤理事、倉元直樹教授、宮本
友弘教授、安成英樹教授、笠井敦司先生、杉山
剛士校長先生、登壇された皆様の言葉に様々な
示唆、教示を戴きました。司会を務めた久保沙
織准教授、秦野進一特任教授、伊藤博美特任教
授始め、お世話いただいた事務局の皆様方に心
より感謝申し上げます。身勝手に連ねた言葉は
ここで終わりにいたします。

これからの東北大学並びに本フォーラムの永
続的な発展を心より祈念しております。

講評 3：第 32 回東北大学高等教育フォーラムに参加して

宮城県仙台第三高等学校

教諭 渡部 敦

1. はじめに

今回の大学入学者選抜改革は大学入試の役割を改めて考える良いきっかけとなった。変化にばかり気をとられがちだが、これまで培われた主体性評価の在り方、思考力・判断力・表現力を育成・評価するための研究は大学、高校ともに大学入学者選抜の在り方を再検討する機会となっている。次なる改革は 2025 年度入試であるが、今回の反省を活かしながら次の大学入試がどのように変化することが望ましいかを議論するきっかけになれば良いと考える。高校現場としては 3 年間の高校生活の中で決められたカリキュラムをこなすだけではなく、社会にどのように貢献できるかという課題を持ちながら自分の将来を設計できる「考える力」の育成が不可欠であると思っている。その 1 つのきっかけが大学入試であり、今後どのような方向性が打ち出されるかを念頭に置きながら大学入試の在り方を勉強させて頂いた。

2. 基調講演について

基調講演では東北大学高度教養教育・学生支援機構の倉元直樹氏が入試研究にもとづいて東北大学の入試を理論的に解説して頂き、同所属の宮本友弘氏はその実践と成果をエビデンスにもとづいて説明して頂いた。学校現場においては 2021 年度の大学入試改革への関心が高まっていたが、当初の改革内容には多くの問題が指摘され結果的に先送りの様相を呈した。大学側も入試改革に向けて準備に大きな労力をかけてきたが、英語 4 技能検定資格が不要になり、共通テスト記述問題も見送りとなった。これらの混乱は入学選抜試験を準備していた大学はもちろん、大学入試に向けて準備してきた高校にも、さらにこの年に受験を迎える高校生に大きな混乱をもたらしたのは言うまでもない。その中で東北大学は英語 4 技能検定資格を利用しない、主体性評価については

チェックリストで確認するなど、他大学と異なる基本方針を打ち出した。高校現場では英語 4 技能資格検定取得の準備や主体性評価についての対応に迫られていたため、この方針が打ち出されたときは衝撃を受けた。しかし今回の講演で東北大学が入試を研究し、社会的な影響力や役割を踏まえての結論であったこと、さらにその結論は多様な調査データを裏付けとして導き出されたものであったのだと理解できた。大学入試改革は国民的な関心ごとであるにもかかわらず、本質は当事者間の問題であって今回の改革は当事者側に重心を置けなかったことが改革における混乱の要因であったという説明がとても納得のいく答えであった。大学入試が社会全体の関心ごとになっているのは十分に予想でき、大学入試の在り方が社会全体に及ぼす影響も大きい。もちろん大学入試を改善していこうとする姿勢は常に必要だと思うが、さまざまな変革を受け入れようとして努力してきた高校生に対しては、教育に携わる者として大変申し訳ないという気持ちでいっぱいである。そのような意味でも学校現場に対し丁寧に意見を聴きながら大学入試を設計していく手法はこの変革の中で意義があったと理解できる。

3. 現状報告 1 について

お茶の水女子大学の安成秀樹氏による同大学の新フンボルト入試の実施状況や課題を提示して頂いた。非常に限られた予算・人材のなかでより効果のある大学入試設計を模索している様子が伺えた。印象としては大学の学びと大学入試を融合させた形態であり、単なる合否判定のみならず、社会教育の役割を果たしていると感じた。大学入試は大学に利益をもたらす人材を確保するという側面がありながら、公教育の立場から社会に利益を還元する側面も持ち合わせており、その意味では新フンボルト入試は理想的な形態であ

る。高校の立場から考えると大学入試は合格できるための力をどのように育成するかに力点が置かれやすいが、入試を通して自分自身の特性を再発見できたり、大学へ入学したいという強い気持ちが高校生活を通じて主体性を育んでくれたり、点数だけではないプラスアルファの成長を求めている。今回の大学入学者選抜改革の理念はまさにこの部分を前面に出した改革ではなかったのではなかろうか。新フンボルト入試はこの理念が実現可能であることを示していると感じている。しかしこの形態の入試に係る人的負担は大学側にとって死活問題であり、認知度が高まって受験生が増加することは喜ばしいことであるが、負担が増加して結果的に入試の質が低下してしまう問題がある。高校側からは入学者選抜要項の表面的な部分しか見られていないこともあり、私も十分に理解していなかったが、評価される大学入試には大きな負担があることを改めて考えさせられた。この課題を解決する試みの案の1つとして、大学入試研究を複数の大学で協働で実施し、その成果を広くシェアすることで水準の高い大学入試が維持されるのではないかと感じた。

4. 現状報告2について

青森県立青森高等学校の笠井敦司氏から大学入試の本質にスポットを当て日常の進路指導実践についての具体的な事例を紹介して頂いた。総合型選抜や学校推薦型選抜の指導に関しては多くの学校が担当者を割り当てて個別指導や、教科ごとの添削指導、時には一斉講義などさまざまな対応をしていると考えるが、指導については担当指導者のノウハウに依存している傾向があり手探りの状況も少なからずみられる。また短期間の指導で成果を求めるよりも普段の授業や探究の指導との関連性が十分検討され、集大成という形で指導がなされるのが理想である。笠井氏は受験指導の一環として訓練的な指導法の見直しを実践しており、発表内容はとても緻密な計画に基づいてなされていると感じた。とくに生徒同士や生徒と教師の意見交換などを取り入れているとこ

ろに工夫を感じる。近年の探究活動を担当してみて分かったのだが、課題が明確になれば生徒、教師が互いに意見を出し合い、課題に対しての考えが深まっていくことが感じられる。また論文形式でまとめると本人がどのように課題意識を持っているか、社会に対してどのような貢献を目指しているのかがはっきり書かれている。このような経験を通じて、自分が学びたい学問や大学が明確になっていき、実際の受験期につながっていくことが望ましい。総合型選抜や学校推薦型選抜の受験指導は生徒自身がその大学で学びたいとどれくらい強く思っているかに影響を及ぼすと考えられる。アドミッションポリシーをしっかりと確認して自分の資質・能力を見つめ直しながら受験を1つのきっかけとして成長できる体験を育みたいと改めて感じた。今回の発表は大学入試指導の実践にクローズアップしたものであったがその指導の姿勢から、高校生活を通じた進路指導が活かされているのではないかと感じられた。課題としては大学入試の指導に対する共通理解がとれるかどうかのカギとなる。担当者だけが理解していればよいのではなく、学校全体として大学入試に関する指導方針を議論できたら良いと感じた。ただ労力に関しては際限なく時間があるわけではないため、ある意味効率よくできる部分も必要で、その辺の難しさにどう対応しているかも説明があり、学校現場のありのままの姿を提供して頂いたのだなと強く感じた。

5. 現状報告3について

私立武蔵高等学校中学校の杉山剛士氏による高大接続改革に関する高校側の意見と、改革に対する期待を述べて頂いた。改革の理念に関しては多くの高校現場でも好意的に受け止めている、あるいはこれまでの大学入試の在り方を抜本的に見直し、高校のカリキュラム・マネジメントにも少なからず変化があらわれている。ただ、現高校3年生が費やした時間や費用などを考えると、今回の高大接続改革には十分な検証が必要であると感じている。英語4技能をはかる民間の資格試

験を必須化するため高校2,3年生に共通IDを申請させ、いざ明日発送しようとした矢先の中止はどの学校でも衝撃が走った。そこまでなる前にもっと事前に対応できなかったのかと、大学入試への不信や不安を募らせる結果となってしまった。主体性評価についても2021年度大学入試では、どのような根拠に基づいて主体性を評価するか、明確な指針がでないまま入学選抜者要項で次々と主体性評価の点数化が見送られた。これからは新学習指導要領で取り入れられる観点別評価が必須になることで、調査書段階である程度把握できると考えられるが、大学入試改革もそこまで変えてから実施すればこのような混乱は起きなかったのではないかと考える。また地域格差や経済格差を問題視することもあるが、完全な平等化は現実的に困難である。現状の格差を精査した上で、議論すべきことなのかもしれない。またエッセイに関しては志望理由書に近いものがある。大学での研究のみならず、将来社会に対してどのような貢献をしていきたいのか考えを深めることで、大学での学びを高めることができる。今後の主体性評価について活用できるのではないか。

6. 討議について

大学入試の在り方や本来あるべき高大接続改革とは、というテーマが中心であった。課題は2点に集約できる。1つは、より工夫された入試は受験生自身の成長に繋がるが、大学側の負担はますます増大しているということだろう。講義、レポート作成、グループ討議などの実施に大きな労力がかかり負担になっている現状が垣間見られた。もう1つは学力の三要素のうち、主体性をはかる物差しが明確でないことであろう。私見であるがその大学にどうしても入りたいという熱意があれば、どのような試験であろうとチャレンジするはずであるし、自分なりに工夫して準備するはずである。これは十分な主体性と判断できるため、入学後に意欲的に研鑽に努めると想像できる。また討論の中でもでてきたことであるが、大学入試の在り方は大学入試センターをはじめ全国的

な調査・研究を実施する必要がある。今回の入試改革に関しては理想が先行して、十分なエビデンスを持ち合わせていなかった。大学入試の仕組みを変える前に綿密な調査・検討が必要であったのかもしれない。大学側の負担は入試研究の協働実施で対応できる可能性がある。高校側としては単に大学合格を目指させるのではなく、キャリア教育も含めてその大学でなければならない理由を明確にさせる指導をしていく必要がある。この意味で大学・高校との高大接続が活発になればよいと感じる。

7. おわりに

コロナ禍の影響でフォーラムの実施自体が困難な年であったが、東北大学をはじめ、研究や事例を発表して頂いた発表者のご尽力に大変感謝いたします。大学入学者選抜改革は少なからず混乱があったといえるが、大学、高校ともに大学入学者選抜方法をどのように構築していくべきか、という課題に向き合えた意義は大きい。今後の新学習指導要領全面実施に伴う変化にどのような大学入試を設計していくかを考える上で、今回の経験は大いに役立つと考える。

講評 4：大学入試学の波及効果を期待して

秋田県立秋田北高等学校
教諭 杉田 道子

1. 自身への波及効果

英語科教員として振り返るとき、1 つの大きな改革の波をかぶったのが、「オーラル・コミュニケーション」という科目の導入であった。外国語学習不安 (Foreign Language Learning Anxiety) 研究として、県内の高校生と英語教員へのアンケート等により、音声面に特化した新たな科目は、言語の使用場面や技能により、学習者はもちろん、英語教員にも「不安」を与えることがデータから分かった。全国の先生方による思考錯誤を経て、現在、現場では音声面を含む能力の指導と評価は日常となった。その後、センター試験へのリスニングの導入、共通テストや個別試験における英語の入試改革につながってきた。

そして今、進学校に勤務する身として、新たに「入試改革」という大波を経験している。当初は大きな不安を感じていたものの、それを軽減するきっかけとなったのが、この高等教育フォーラムである。「受験生の保護」という強い姿勢に感銘し、大学入試が学問になり得るということに純粋な驚きを感じるとともに、現状報告をなさる先生方から御助言をいただき、入試改革を前向きにとらえるようになった。この波には乗りたい。

2. 基調講演

(1) 東北大学教授 倉元直樹先生

入試が学問になると教えていただいたのは、第 30 回フォーラムでの倉元先生の御講演であった。因果関係があって歴史が動くように、今の高大接続改革も入試史の 1 ページだとすれば、壮大な大河ドラマが作れそうだという感想を持ったものだ。今回は、再度先生の御講演を拝聴する機会をいただき、入試を学問化することの意義を少しは理解することができた。

まず、入試が本質的には当事者間のものであることに納得した。昨年度の高大接続改革の方針転換は、高校生たちが世論を動かす力になるなど、当事者からの反響や動きが予想以上に大きかった。これにより、メディアを通じ国民的関心事にもなったと思う。わが国における大学入試の持つ構造的困難として、「当事者間」と「国民的関心事」の二重性が挙げられていたが、入試が本質的には当事者間のものならば、入試の三原則の内容等について当事者同士が力を集結して、大学入試をもっと国民的議論のステージへ上げなければいけないと思った。

「東北大学の入試が高校教育に与える影響」のグラフからは、東北大学への志望が強い生徒は、大学を信頼して日々の学習に向かう傾向が表れていた。大学からの「出題の意図」は、大学で研究していくために必要な資質・学力を適切に測ってくれている、と信頼しているようだ。選抜方法云々ではなく、大学の魅力のど真ん中にある研究内容へと、高校生の興味・関心を引き寄せるようなキャリア教育や探究活動が高校側に必要だというエビデンスと思う。

最後には、倉元先生から入試学の応用問題が出題された。コロナ禍での入試の実施である。大学側の対応の難儀さは想像できる。高校でも、例えば事前レポートの指導やオンライン面接の実施など、細かなで急な対応を求められている。前倒しとなった GIGA 構想への対応を含め、高校側の我々の「思考力・判断力・表現力」「主体性」を試される応用問題だととらえて取り組みたい。

(2) 東北大学教授 宮本友弘先生

高大接続改革にかかわる東北大学の対応について、宮本先生から 1 つ 1 つ丁寧な説明をしていただいた。国の方針転換があっても影響がほ

ば無かったという、東北大学の入試制度の頑健性に驚く。入試の専門家集団があつてこそ、研究の成果＝エビデンスがあつてこそ、当然の結果なのであろう。一英語科教員としては、東北大学の英語外部試験や CEFR の基準の扱いは、拍手ものであった。共通テストに関しては、リーディングとリスニングの2技能で続く様相であるが、もし再度、入試で4技能を測ろうとするのであれば、きちんと英語の専門家チームからのエビデンスを「つかった」提言をいただき、次の改革に影響を与えて欲しい。例えば、多言語主義の多いヨーロッパの外国語運用能力の枠組みを日本でそのまま用いることや、大学生でもほとんどがAレベルに収まるような基準で大学入学者を選抜することの妥当性など、エビデンスを示して政策立案に大きな影響を与えて欲しいと思う。

高校の現場を考えたときに、東北大学の入試研究の特徴のうち、他への波及効果があつて欲しいのは、エビデンスを「つくる」段階において志願者側のニーズ、高校側のニーズを重視することである。今後、さらに国が入試改革を進める際の手本である。現場のアンケート結果が、エビデンスを「つくる」「つたえる」「つかう」と3つの局面を経て、政策決定までにつながると考えれば、こちらも責任をもって現状を正しく伝えようという姿勢になる。大学からは、研究の成果を関係機関に「つたえる」ことで、大学入試や教育が国民的関心事になるのが望ましい。

最後に、御講演を拝聴後、大学お願いしたいことを3つ考えた。高校では「つたえる」「つかう」ことに直接関わることは難しいと思われるので、大学側にこれらの局面のリードをお願いしたい。また、意見集約の結果から、調査書の扱いとチェックリストによる主体性評価についても引き続き検討をお願いしたい。最後に、比較文化の観点、例えば「つたえる」ことに特化したアメリカの機関の業務や、学習結果に直結しもっと重視されてもよいと思われる「学習

方略」の研究などについて、情報提供いただく機会を得たいと思う。

3. 現状報告について

(1) お茶の水女子大学教授 安成英樹先生

新フンボルト入試は、秋田にある国際教養大学の県内の高校生を対象とした入試生徒に近い。今年度は異なる形式で実施されるが、昨年度までは泊を伴うセミナーに参加し、議論やディベート、講義受講やレポート作成等を経験することが受験の条件である。実際の試験では日英による面接や集団討議が行われる。時間と手間をかけてじっくりと受験生の資質・能力を見る試験スタイルである。入学前教育も充実している。

課題として時間と手間がかかることを挙げていらっしゃったが、じっくりと人を育てるには当然そうなるのだろうと拝察する。コスパの良い入試だけではないかと思う。入試を経験することで、受験生の能力が高まっていつているはずである。国際教養大学を受験する生徒も、半年位にわたる準備期間と実際の入試を経験し、知識・技能の高まりを筆頭に人としての総合力が上がる。たとえ入試結果が伴わなくともその後に生きる。新フンボルト入試に挑戦した受験生たちも、きっとそうだろう。多様な選抜スタイルがある中で、新フンボルト入試は、波及効果のある入試だと思う。私自身は、英語科教員として心掛けていることに「テストの波及効果」があり、定期考査を評価や診断だけに使うのがもったいなくて、受験している60分の間に生徒の英語力がつくようなテストを理想としている。

(2) 青森県立青森高等学校教諭 笠井敦司先生

笠井先生からは、「対策」8つのステップについて情報提供していただき大変参考となり有り難く思う。フローは理解しやすく、また、各ステップについても丁寧に説明していただい

た。医学科を中心に指導されているとのことであるが、どの学部学科においても活用できる。勤務校では、総合型選抜や学校推薦型選抜に挑戦する生徒に対し、全職員で分担して支援はしているものの、この8つのステップの目が荒く、不明瞭で、職員間の共通理解が不足していると自覚できた。

情報収集については、コロナ禍による選抜方法の急な変更などもあり、最近はますます「一次情報」の確認が重要となっている。笠井先生からは、大学の過去問情報も、一次情報＝自校卒業生による受験報告書の良さを教えていただいた。生徒の資質・能力を実際に指導経験のある教員に直に確認できたり、生徒のコメントの中に我々の指導内容の妥当性を確認できたりするのがよい。各校レベルでデータの蓄積によるエビデンスが次年度の進路指導に活きる。また、生徒と意見交換しながら共に探究するプロセスや、出題のデザイン、答案の振り返り方まで具体的な指導例も示していただいた。これらのエッセンスを、「主体的・対話的で深い学び」を目指す日々の授業に全教科で取り入れるのが理想と感じた。その場合、チーム学校としてのまとまりや管理職のリーダーシップが必要になるのであろう。

(3) 武蔵高等学校中学校校長 杉山剛士先生

杉山先生の御講演は大変説得力があり、拝聴した後は、結局自分たちの身に起きたことは何だったのかがストーンと落ちたような気がした。現場の本音を率直に声に出していただき大変有り難く感じた。地方の学校の不安に共感的理解を示してくださり、教育とは「人の成長」を扱う営みであるという、教育への愛情も伝わってきた。他方、ボトムアップではなかった入試改革に対し、高校現場・大学現場が「暴走」を止められなかったことにも責任があるという点には、耳が痛かった。確かに、政策に懸念があっても批判しないし、ぎりぎりまで批判できなかったことは反省すべきだ。私自身、もう決

定済みなのだから、と内心諦めてしまっていたことは否めない。また、改革には必ず副作用があり、高度な想像力が必要だという。改革は進行中だが、共通テスト枠への情報科目導入などが実効性はあるにしても、実現性があるのか、現場に生ずる負担への対処方法はあるのか、人材資源の確保はできるのかなど、相当な想像力をもって進まなければならない。大学入試研究の必要性がますます高まってくると思う。

4. まとめ

2人の人間の距離が遠いと、互いの行動や思いが伝わりにくく、不安になり誤解による不信感さえ抱くかもしれない。大学と高校も同じようなものであろうし、入試と指導もそうかもしれない。討議を拝聴しながらそう考えた。このフォーラムのように直に高大が接続する機会は継続的に必要だ。距離が離れてしまうと、お互いの立ち位置や方向性が不透明になり、受験生によってよくない。どこかに意見をぶつけたい時は、協働すればより効果的だ。指導して受験生を送り出す高校側と、大学生としての資質を問うための入試設計者及び実行者としての大学側が、距離を縮める機会をもつことが入試設計に大切なことであると思う。

私自身も、専門の英語という教科の観点から「大学入試学」に触れていたい。定期考査などの評価が生徒に与える波及効果、大学入試が受験生の動機付けや学習習慣へ与える波及効果、同じく入試が教員の日々の指導実践や評価方法に与える波及効果などについて、大局的に研究するような力は持ち合わせていないが、身近なエビデンスを集めてこそが、現場に立つ者の役割だと思う。

末筆ですが、コロナ禍で県外越境を遠慮する空気の中、今年度の参加を諦めかけておりましたところ、会場とオンラインの二本立てで本フォーラムを開催してくださいました関係者の方々に深く御礼申し上げます

講評 5：試されるとき

山形県立新庄北高等学校
教諭 植松 弥公

1. はじめに

まず、ご招待いただきありがとうございます。代理での参加ではありましたが、貴重な機会をいただけたと思っております。また、新型コロナウイルス感染症対策に配慮しながらの準備運営は大変なことだったとお察しいたします。

倉元直樹先生には、2015 年 9 月に私が事務局を務める研究会でご講演をいただいたことがありました。テスト学的観点に立脚した高大接続改革のあり方についてのお話でした。当時は大学入試改革の話が出たばかりで困惑していましたが、やるべきことと（まだ）やるべきではないこととを伺い、その後の状況を注視しつつ準備を進めていこうと考えたしだいです。

しかし、結局 2020 年になってなお、私は困惑をしたままです。ここまで色々な取り組みをしたり、2015 年時点では想像もしていなかったような経験も多々させていただいたりしました。それでも、仮に現在の私が 2015 年の私に話をする機会があったとしても、恥ずかしながら曖昧な受け応えしかできないのではないかと想像します。私自身の不勉強さを棚に上げるようですが、それだけ様々なことが一度に変わろうとして、一部のことは把握できても全体像を把握しきれないまま時間が経ってしまったような印象を受けることがあります。

今回のフォーラムには、そうした困惑を少しでも解消して今後はどのような点に留意していくか、学ばせて頂こうと思い参加いたしました。

2. テーマ「大学入試を設計する」に関連して

「大学入試を設計する」というテーマでまず連想したのは AO 入試でした。私は毎年手に入る範囲で AO 入試や個別試験の数学の問題を拝見し、自分でも解いております。2019 年の理学部 AO 入試の問題の中に 1 問、とても苦戦した

ものがあり、11 月でこれを解ける高校 3 年生は素晴らしいと考えたことを思い出しました。仮定として、これをいわゆる入試対策（今は、この言葉の是非はおいておきます）を全くしないで解ける生徒や、少し対策をして解ける生徒を選抜する目的で設計されているのだとしたら、大変理に適っていると感じられました。また、たとえ AO 入試で不合格であっても、あと少しで届く学力の生徒にとっては個別試験に向けた対策にもなりましょう。一方その反対に、そのような生徒向けに設定された試験に対して、ずっと前から対策をしたり、練習を積んで何とか問題を解けるようにしたり、というアプローチはそぐわないのではないかと感じられました。

フォーラムでは、何度か主体性評価の話題も挙がりました。主体性評価は大変難しい、主体性を評価すること自体に問題があるのでは、と伺ってほっとする自分がおります。評価のためにボランティア活動をする生徒のような想定も出ましたが、そうやって「主体性がある」と装うことは高校生の年齢であれば可能でしょう。少なくとも「AO 入試の数学の問題が解ける」と装うことに比べれば、ずっと簡単です。反対に、「AO 入試の数学の問題が解ける」のであれば、主体性の有無にかかわらず大変素晴らしい数学の力量を持っていますし、その力量を持つためには主体性なくしては成しえないのではないかと、とも思えます。もっとも、装うこと自体は問題ではありません。大人も、採用試験や仕事の色々な場面で装っているのですから。ただ、入試としては本質を捉えていないのではないかと考えます。

AO 入試に限らず選抜試験は、マッチする受験者もいればミスマッチの受験者も出てきます。進路指導でも、できるだけミスマッチが少なくなるようにしようとはしますが、なかなか難し

いのが現状です。X が得意な生徒 A には x 方式、Y が得意な生徒 B には y 方式で受験できるようもっと多様化すればいいのと思う一方、いざ多様な方式が出てくると指導も対応も人手が足りず、悩ましいところです。もちろん受験するのは生徒ですから、本人で対策することが筋だとは思いますが、入試対策は学習指導要領に書かれていない、学校の授業の内容としてふさわしくない、と言われることもあります。しかし一方で、近隣にいわゆる予備校がなく、学校が入試対策の役割を担わざるをえない地域もあるのが実情です。本校もそのような面があります。数年前、一浪の末に大学合格した卒業生に対して、予備校のどこが良かったか尋ねたことがあります。その卒業生の答えは「自習室」でした。単なる学習スペースというだけではなく、本気になって集中して学習できる環境という意味に受け取りました。在学中に色々な取り組みをしたつもりでしたが、学習する環境づくりをもっと徹底すべきだったと痛感させられた出来事でした。

生徒を個別に指導したい、という気持ちはありますし、それ以前にまずは授業の内容を改善しようと考えているところですが、十分に考える時間が取れないまま日々が過ぎていくことに焦りを覚えることもあります。現在は立場上、教科の教材研究より総合的な探究の時間の準備運営に時間を多く割いているのが現状です。また今年度は休校期間にもっと考えたり話し合ったりできたのではないかと今になっては思いますが、当時の作業ログを見返す限りは学校再開後を想定して計画を立て直すことに手一杯でした。

国が進める大学入試改革全般に話を移します。確かに趣旨に賛同できる点はありました。変化は確かに必要ですし、今から振り返ってみれば、準備期間もある程度取られていました。それでもこれだけの混乱が続いたことの原因としては、トップダウンで進められたこと、1 つの理念だけを押し通そうとしたこと、という倉元先生の

ご指摘が的を射ていると感じました。現状報告 3（私立武蔵高等学校中学校校長 杉山剛士先生）にも、急激な教育改革はうまくいくのか、というお話もありました。教育は本来遅効性の性質が多いと思われませんが、昨今の社会情勢に合わせるように変化を求められ、即効性が期待されるのもやむを得ないかもしれません。ただ、初めから学習指導要領改訂の時期と併せての実施が検討されていたら、避けられた混乱もあったのではないかと思います。「新テストへ向けた取り組み」と「新課程へ向けた取り組み」とが、（本来であれば同じ方向を向いているものはずなのに）混在してしまっているからです。加えて、「総合的な探究の時間」の早期実施も相まって、より困惑させられる場面があったと思われました。

そもそも、理想の大学入試とは、という問いに解はありません。もし理想のシステムが存在するとしたら、既に知れ渡っているはずですが。そのようなシステムは存在しないとした上で、評価は比較で語られるべきではないかと考えます。大学入試センター試験には確かに課題点もありました。しかし変更をするほどのことではなかったと個人的には思っております。センター試験がベストだと思っているわけではありませんが、ベターであると了解していた、という意味です。

制度を考えるいわゆる《中央》と、《現場》とは断絶しているわけではなく、一応のつながりは有しています。ただ、両者はとても長い棒の両端にあるようなものです。《中央》で考えた「熱」は《現場》に伝わるまでに時間がかかり、だいぶ冷めた状態で届きます。その逆も然りです。またポートフォリオや英語外部試験のような「これまでやっていたことを少し変えて活用する」という発想も、《中央》では「少し」かもしれませんが、棒が長いために《現場》では大きな動きとして認識されます。

そのような中、東北大学の進めるエビデンスに基づく大学改革のお話（基調講演Ⅱ 宮本友

宏先生)は大変興味深く拝聴いたしました。英語認定試験や記述式試験、調査書等の扱いについて、それぞれ調査なさっていましたが、印象での判断ではなく事実(データ)に基づく判断は大切だと改めて感じたところです。また、全体の方針転換があっても、東北大学の入試にはほとんど影響しないという頑健性も印象深いところでした。変えるところは柔軟に変更を加えつつも一貫した方針が保たれている点は、入試のみならず組織や企画の運営にも必要であると感じさせられました。

現状報告1(お茶の水女子大学 安成英樹先生)の新フンボルト入試も、新しい形の入試でした。図書館を活用したレポート作成や討論は、当日の出来栄だけでなく今までにどのように学習に向き合ってきたかの態度も含めて問うているような試験だと思いました。また、プレゼミナールを高校2年生から受講できることも併せて、試験を受験者を成長させるための機会と捉えていました。かなりの手間暇をかけた入試形態で大変なことも多いと思われますが、それをしてでもこのような学生が欲しい、という強いメッセージになっていると感じられました。

国や大学の「大学入試の設計」に対し、では高校側は何をすれば良いのでしょうか。

3. 高校の現状から

「共通テスト対策」という文字が書かれた参考書や問題集を目にするようになりました。個人的には違和感のある言葉です。今年度、あるところから「大学入学共通テスト対策として知っておくべきこと」を書くよう依頼された際に、私は次のように書きました。

「まずは「対策」という考えを一旦捨てましょう。テストのために学ぶのではありません。学んだ結果を試すのがテストです。」

綺麗事かもしれませんが、私はよくこのように生徒に話しています。テストのために学ぶのではなく、学んだことが身についたかテストする。テストに出るから大事なのではなく、大事

だからテストに出るのです。

共通テスト「対策」に違和感を覚えてしまうのは、結局テストのために学習をしているように受け取れるからです。高大接続改革の趣旨から乖離しているように思えてしまいます。

一方で、あくまでも肌感覚ではありますが、授業は変わってきていると感じています。講義型の授業の中にも生徒が対話する場面を取り入れたり、ペーパーテストや提出物以外にレポートやパフォーマンスで評価したり、総合的な探究の時間で主体的に活動させたり、と、本校でも様々な取り組みを目にしたり耳にしたりしています。改革のための改革ではなく、生徒のために前向きに改革に取り組んでいる雰囲気生まれつつあります。まだ個人・教科科目レベルの段階で、どう学校全体の取り組みにしていかが課題ではありますが、こうした教員側の変化が生徒たちにも波及していくことを期待しています。

現状報告2(青森県立青森高等学校 笠井敦司先生)のお話からは、課題へのヒントをいただけたように思いました。入試対策を「合格を目標とした短期集中指導・訓練」ではなく「思考力を鍛え伸ばす集中特化型授業」と捉え、普段の授業とベツモノにしない、という考えです。全体の計画に落とし込むところが今後の課題とおっしゃっていましたが、こうした取り組みの共通理解が図られ、カリキュラム・マネジメントの視点で整理されるのであれば、生徒にとっても学校での色々な学びがつながっていくのだろう、と感じ入りました。

ところで雑誌の付録が充実したり、初回限定版の商品が作られたりし始めたのはだいたい20年前くらいからでしょうか。雑誌であれば記事の内容、CDであれば音楽そのものが本質ですが、それ以外のところに付加価値をつける考えといえます。そのこと自体は構わないと考えます。確かに一時的には売り上げは伸びるかもしれませんが。しかしみんながやり始めて、それが普通になり、どんどんエスカレートすると話

は違ってきます。付録はあくまでも付録なのに、本質に割くべきリソースを奪い始めることがあるかもしれません。

大学の本質は学問だと私は考えています。色々な付加価値をつけること自体は構いませんが、本質に割くリソースが奪われないことを願います。特に、付加価値をつけようとする存在が、大学内部ではなく外部であればなおさらです。

3つのポリシーも、青森高校さんほどではありませんが、本校でもしっかり読むよう指導はしています。ポリシーに書かれている〇〇は自分の●●にあてはまる、といった具合に、3年間の取り組みを振り返りながら自分に落とし込むこともしているところです。その過程を経て書かれた「自分」は、ポリシーを読むことによって思考が惹起されて言語化された本人の本質か、それとも付加価値なのか、見極めは容易ではありません。複数回の面接指導を行うことで整理させることもあります。

4. おわりに

果たしてこれから、どのようなスタンスで臨めばいいのでしょうか。システムに苦言を呈するだけではいけない、とは思います。目の前の生徒の時間はどんどん減っていきます。わからないから今のままで、というわけにはいきません。考えられるのは、わからないなりに仮説を立てて進める、情報を集めて整理・分析し、結果を見て仮説を修正する、といった行動です。これは、まさに探究サイクルに他なりません。生徒に探究的な学びを促す傍らで、我々教員側も同様に探究的なサイクルを試されているかのようです。

フォーラムの終盤間際、ひとつの問いが浮かびました。「もし大学入試選抜が廃止され、志願者が全員入学できるとしたら？」

あくまでも思考実験です。ひとつの大学だけで選抜を廃止するのではなく、全大学が一度に廃止し、全受験生が第一志望に合格するのです。

どのようなことが起こるでしょうか。自分が志望した大学の講義についていけないとしても、それは自分の責任になります。自分で努力することは大前提で、課題未提出や欠席が重なれば単位を落とします。オンライン講義にすれば、講義室に入らない人数の受講者がいても対応はできるでしょう。高校側でも、少なくとも「大学入試を意識した高校の授業」がなくなることは明らかです。その代わり、「何のために学習するのか」が今以上に問われることになりましょう。

もちろん、大学入試をなくせと本気で考えているわけではありません。生徒は「テストのために勉強するのは、やる気が出ない」などと言ったりもしますが、その割には「数学は入試科目にないので」と勉強をやめたりもします。大学入試をなくしても、それで生徒がもっと学ぶようになる想像は、残念ながら自分にはできません。

ただ、「ある」ことを前提として考えるあまり、見落としていることはないだろうか、と顧みた次第です。

講評 6：教育について社会的な議論を

福島県立福島高等学校
教諭 菅野 陽介

1. はじめに

昨年度、本校に赴任して初めて卒業生を送り出した。そのため今回の教育フォーラムにおける基調講演や現状報告を、自らの3年間の指導と重ね合わせて、時折卒業生の具体的な顔を思い浮かべながら聞かせていただいた。

コロナウイルスの本格的な流行が始まった昨年度末、個別試験が中止される大学も一部出てきており、ウイルスがいよいよ身近に迫っている恐怖を実感させられた。緊急事態宣言により全国的に学校活動が制限され、その後も感染者の増大に伴い県単位で休校措置がとられた。昨年度、3年生を指導している際に「来春はどのような生活になっているだろうね。キャンパスを新しい友人たちと歩いているね。」と声をかけ励ましていた。しかし、受験を乗り越え、大学合格を果たした卒業生の多くは、いまだにキャンパスにすら入れないでいる。1年間オンラインとなった大学も数多くある。

卒業生たちを気の毒に思う気持ちと同時に、それ以上に強く考えさせられたのは「私は3年間で本当に生徒の主体性を育てられていたのか」という事であった。現在ほど各人の主体性が求められている時はないであろう。自らのこれまでの教育活動に対して、コロナ禍によって抜き打ち試験を受けているような感覚をもった。受験をクリアする事、大学に入学することが目的で、その後のビジョンが描けていない学生は現在どのような生活をしているのだろうか。自らがどう生きるか、その指針があればこの期間をも糧として自らの目標に向かって一步一步進んでいるはずである。私にとって、現在はそのような生徒を育てられていたのかどうか試されている真っ只中である。

今年度はいよいよ入試改革元年を迎え、センター試験が廃止され共通テストが始まる。今年

度入試を迎える生徒たちは、入学時より新入試を想定した国語や数学における記述力や英語の4技能を高めるための様々な取り組みを行ってきた。そのどれもが本来大切な力であるということ言うまでもなく、今までの準備が無駄になったわけでは決していないが、採点者や教育格差の問題など従前から分かりきっていた問題の指摘により、直前で見送りになるなど、当事者を置き去りにするようなこれまでの変遷には怒りを覚える。しかしながら、コロナ禍による休校や試験の形式の変更、部活動や教育上重要な役割を持つ学校行事の中止など、様々な困難に見舞われながらも前向きに進もうとする生徒達の姿に感動させられている。それ故なおさら生徒達自身が納得のいく入試になることを願ってやまない。

2. 生徒の力を伸ばす入試

現在、生徒を多面的に評価するための独自性のある様々な形式の入試が展開されている。現状報告1ではお茶の水女子大学の安成英樹先生から、新フンボルト入試が実施されるまでの経緯や受験者数の推移、今後の課題などを解説していただいた。私がこの入試を知った際の正直な感想は「誰がこの大変な入試を受けるのだろうか？一般入試より難しいのではないか。」であった。しかし、実際には毎年200名近い生徒が受験し、その入試で不合格であった場合にも推薦入試、一般入試とチャレンジしているという事であった。このお話は私にとって強い説得力があった。というのも昨年度本校で新フンボルト入試に挑戦し、合格した生徒がいた。その生徒は小学校時からお茶の水女子大を1つの目標とし努力してきたという。また、学力だけではなくこれまでの活動で培ってきた力の全てを入試にぶつけてみたいという思いから受験を決意し、

もし不合格であったとしても、残りの全ての入試を受ける覚悟をもって臨んだそうである。安成先生からは多くの生徒が受験している理由の検証はされていないという説明があったが、第一にはお茶の水女子大学自体の魅力、そして第二に新フンボルト入試の理念や目的が受験生にしっかりと浸透してきているからではないだろうか。新フンボルト入試を経験した生徒が、大学でどのように成長し社会で活躍していくのか、大変興味深い。

倉元先生からは新フンボルト入試と東北大学のAO入試は、第一志望を貫く生徒を求めるという点で設計が似ているというお話もあった。昨年、本校で東北大学への入学を強く希望していた生徒は、AOⅡ、AOⅢにチャレンジして共に不合格であったが、前期入試で合格を勝ち取った。まさに第一志望で貫く事を実践した。その生徒は入試を経験する度にギアを上げて力強さを増していき、前期試験の時などは頼もしさを感じるほどであった。入試にはその結果に関わらず（むしろ失敗を経験することで）生徒を成長させる力が確かにあると実感させられた。繰り返し挑戦する事で、生徒が成長するような入試の展開が可能になっているのは、エビデンスにもとづいて入試が設計されているからなのであろう。青森高校の笠井先生からの現状報告にあった、合格のための訓練ではなく、大学入試の指導を通して生徒の思考力を育むという点にも大きく共感した。入試の指導を通して、その場限りのテクニックを身に付けさせるのではなく思考力や主体性、そして粘り強さなどの非認知能力も育てていきたいと強く感じている。

3. 入試改革による教育改革

安成先生のお話の中で、各高校でAO入試について説明する際に、「学力重視」という観点からAO入試自体に難色を示されることも多かったというものがあった。現場で働いている教員として非常に恥ずかしい思いをしたのと同時に、未だに旧態依然とした教育観が根強い現状も理

解できた。一般入試に向けた準備こそが王道で、AO入試や推薦入試を受験することが受験勉強の妨げになるという考え方である。しかしそのような考えが根強く残ってしまう現状も理解できなくもない。というのは、学校教育には変化が求められているが、その社会的な評価の仕方は全く変わらないからである。現場では新しい学習指導要領の実施前から学力の三要素の育成が求められるようになっている。教員として採用されてから15年が経過しようとしているが、その間に授業の形態1つとっても大きく変化してきたことを実感している。また課題研究の実施など生徒の主体的で深い学びを引き出す取り組みも多くの学校でなされている。入試も多様化し、様々な観点から生徒の選抜が行われている。しかしその一方で、学校側が最終的に求められるのは「難関大学に何人合格したか」である。社会的な興味関心もそこに注がれており、年度末には難関大学合格者のランキングが発表される。各学校の特色ある取り組みも、大学の合格者数に担保されてこそはじめて評価される。社会的な評価が変わらないのであれば、これまでの数を出すために培われてきた様々なノウハウを踏襲しようとするのは致し方ないのかもしれない。

新しい学習指導要領では教員が何を教えるかではなく、生徒自身の資質や能力を高めることが求められている。大学入学者選抜改革は、大学入試形態の変更を梃子に新しい学力観と大学入試とをつなげ、高校と大学の現場での教育改革を促進することが狙いであると捉えている。実際に教育は徐々に変化してきているものの、その社会的な興味関心、そして評価という点では以前から何も変化することがなく、そこに大きな解離を感じている。

入試改革により問われる力が変わるのだから、授業をはじめとする学校教育改革に取り組みましようというのは非常に強い説得力があった。確かにそれが教育現場の学びが変わるきっかけとなった面がある。しかし、倉元先生の「入試

で問うと必ず対策する」という言葉が強く心に残っている。主体性や深い学びを育む取り組みも、「入試の為」となった瞬間に色褪せ、「主体性があるように見える生徒」の製造プログラムになってしまう。入試改革をきっかけにするまでは良かったが、入試のためだけの教育改革では本来の意味が失われてしまう。あらゆる教育活動が入試と結び付き本来の色を失ってしまう事については、私達現場で働く教員による部分も大きく、責任を感じている。

そして入試で主体性は測るべきなのだろうか、測るべきではないのだろうか。そもそも測ることができるのだろうか。魅力ある生徒達を多面的に評価してほしいという思いがある一方で、主体性は測るようなものではなく、育むものであるという思いも強く、未だに考えがまとまらない。

4. 入試改革によらない教育改革

学校教育は生徒の自己実現や、社会に資する人材を育成するためにあると考えている。当事者性と公益性の両方が高いという、改めて考えてみると特殊な営みである。ただ当事者性と公益性は別のものではなく、生徒が学校教育を通して自らの資質や能力を高めていく事が将来的には社会を豊かにしていくという繋がりがある。本来は、どのような人材を育てているのかが教育で問われるべきことであるが、現在は未だに入試の実績に一番の注目が集まっている。入試実績も教育活動の成果の1つであることは否定しないが、社会の教育観がもう少し成熟し、様々な観点から教育の評価や、社会全体でどのような生徒を育てていくのかの議論がなされる必要性を感じている。ではどうすれば社会の教育観を成熟させていく事ができるのだろうか。

基調講演Ⅱで宮本先生がお話しされていた中に、エビデンスの3つの局面という内容があった。研究によって積み重ねられたエビデンスは、伝えられ、活用されることで初めて生かされる。このお話を学校の教育活動と重ねて聞かせてい

ただいていた。価値のあるエビデンス（教育活動）も伝えられなければ、無いことと同じである。学校現場では開かれた学校づくりとして積極的な情報開示が求められているが、その情報開示の対象は保護者や生徒、受験生、卒業生、大学関係者など学校関係者に向けたものがほとんどである。学校関係者に向けて情報を開示しても裾野は広がらない。むしろ、学校教育に興味関心があまりない人々にこそ積極的にアプローチし、現状を知ってもらい、興味関心を持ってもらう必要がある。教育に関心を持つ人を増やすことが、社会の教育観を成熟させることにつながると思っている。高大接続についても、つながり（橋）を作る事が大切なのではなく、自ら歩ける生徒の育成が必要であり、それぞれのカテゴリーで地域社会を巻き込んだ教育活動が充実していけば、おのずと実社会を見据えて主体性をもって大学の学びに進んでいく事ができる生徒が増えるのではないだろうか。現在各校で行われている課題研究の取り組みなどは、生徒を育てる面、学校教育に興味関心を持つ人を増やす面の両面で大きな可能性を感じている。教育の公益性が社会全体で理解されるようになれば、入試改革によらない教育改革も可能になるのではないだろうか。

5. 終わりに

今回の教育フォーラムでは、大学入試のあり方を通して教育そのものについて様々な視点から考えさせられた。現状報告3で杉山先生から「高度な想像力」というキーワードが出された。教育改革には行政から現場、現場から行政やその社会背景を想像する広い視野や、生徒一人ひとりの気持ちに寄り添う心が必要なのだと強く感じた。どのような入試が望ましいのか、そしてどのような教育活動が望ましいのか、「答え」が出ることは決してないのだと思う。一面から見て「答えのようなもの」を出したとしても、英語の外部検定の利用中止のように失敗に終わるだろう。しかし、失敗は決して無駄なことで

はない。多くの科学的な研究と同様に、入試や教育についても多くの失敗からエビデンスが積み重なり、より良いものへと変化していくと信じている。今回の入試改革で振り回された生徒達の事を考えれば、そう変化させていかなければならない。過去から学び、現状を批判的な視点で見つめ、これからの学校教育の在り方をできるだけ様々な立場の方々と共に、そして一番は生徒と共に考え続けていきたい。

コロナ禍の中、フォーラムを開催するためにご尽力された東北大学の先生方はじめ、多くの示唆に富む講演をいただいた講師の先生方に心より御礼申し上げます。

アンケート集計結果

令和2年9月23日

第32回東北大学高等教育フォーラムアンケート (回収数87, 回収率 25.9%)¹

1. 御所属

(1) 高校 : 50 名 (58.8%) (2) 大学 : 23 名 (27.1%) (3) その他 : 12 名 (14.1%)

2. フォーラムのテーマは如何でしたか.

(1) よかった : 84 名 (96.6%) (2) どちらとも言えない : 3 名 (3.5%)
(3) 改善すべき : 0 名 (0.0%)

3. 基調講演者の発表は如何でしたか.

(1) よかった : 80 名 (93.0%) (2) どちらとも言えない : 5 名 (5.8%)
(3) 改善すべき : 1 名 (1.2%)

4. 現状報告者の発表は如何でしたか.

(1) よかった : 82 名 (95.4%) (2) どちらとも言えない : 4 名 (4.7%)
(3) 改善すべき : 0 名 (0.0%)

5. ディスカッションは如何でしたか.

(1) よかった : 70 名 (82.4%) (2) どちらとも言えない : 14 名 (16.5%)
(3) 改善すべき : 1 名 (1.2%)

6. 時間は如何でしたか.

(1) 短すぎた : 2 名 (2.3%) (2) ちょうど良い : 79 名 (90.8%)
(3) 長すぎた : 6 名 (6.9%)

7. 今後も「東北大学高等教育フォーラム」を行うとすれば, どのような形式, テーマを望まれますか.

(後述)

8. その他, 全般的な御意見, 御感想をお寄せください.

(後述)

ご協力ありがとうございました.

¹ 多重回答, 無回答は個別の集計から除く.

アンケート自由記述

2. フォーラムのテーマは如何でしたか。²

- 「考えることを楽しむ」ことができる生徒を育てていきたいとモチベーションが高まりました。人間の人生を左右する重大な入試であり、人間が人間を評価する難しさについて改めて深く考えさせられました。個人的には、どんな方法でも人の能力や資質を正確に測定することは不可能だと考えております。しかし、そんなことをいっていたら選抜ができないので、CBT-IRT方式などにより点ではなく面、さらには立体的に能力を測定できる方法が実現可能なのか気になっています。コロナ禍で大変な中、運営していただきましてありがとうございました。オンラインでしたので、長距離運転もせず校内出張できて、その後の会議や生徒指導もできて大変助かりました。今後も是非オンライン参加可能にしていいただければ幸いです。どうぞよろしくお願い申し上げます。（高校、よかった）
- エビデンスをもとに制度設計しており、受験者保護の観点からも評価できる。（高校、よかった）
- これからの教育の在り方、教育政策の方向性に、東北大学のようなエビデンスに基づくものであって欲しいと思った。勉強になった。（高校、よかった）
- コロナの今だからこそ、落ちついて入試制度を考えるのは良いと思いました。（高校、よかった）
- それぞれの多様な考えが認識できた。（高校、よかった）
- タイミングとしてもとても興味関心を持つことができるから。（高校、よかった）
- タイムリーだったから。（高校、よかった）
- テーマに則った内容とそうでない内容の両方が混在していた。（大学、どちらとも言えない）
- まあ。（高校、よかった）
- 改革の先送りに伴い、大学入試のあり方が図らずも過渡期になっている状況に合致したテーマを設定していると感じられた。（その他、よかった）
- 開催方法を工夫され、オンラインでの参加でしたが、視聴者に対する配慮をととても感じることができる会でした。（高校、よかった）
- 学術研究として、入試改革のエビデンスを与えられることがよくわかった。勉強になりました。（高校、よかった）
- 記述式や英語民間試験の活用が見送られたことにより、改めて立ち止まって主体生に対する高校や大学の考え方を知る機会となりました。（大学、よかった）
- 具体的な内容に即した討議がなされていて非常に参考になりました。（高校、よかった）
- 結論を出すことが難しいテーマで議論が尽きないテーマです。（その他、よかった）
- 高校や大学が考える入試において問うべき力について、的確なメッセージを発信していただいたと感じており、「大学入試を設計する」というテーマに相応しい内容だと思う。（高校、よかった）
- 高大接続改革が進む中、大学のご苦労を知ることができた。（その他、よかった）
- 高大接続改革に向かう現状を多方面の角度で考えられました。（高校、よかった）
- 高大接続改革のその後を把握するのに適切でした。（大学、よかった）
- 今一番関心のあるテーマだから。（高校、よかった）
- 今大変関心のある内容について、かなり直接的な意見を聞くことができてよかったです。（高校、よかった）
- 今日的で重要な内容だと思います。（無回答、よかった）
- 今般の時節柄、「大学入試学」の意義を考えるためのよいタイミングだった。（その他、よかった）
- 昨今の大学入試改革について、大学側の声、高校側の声を聴くことができ、勉強になりました

² 末尾の括弧内は所属、選択された御意見。

ました。フンボルト入試についても興味深く拝聴しました。(大学, よかった)

- 時宜にかなっていた。(大学, よかった)
- 初めての参加でしたが, 大学, 高校両方の立場からの見解を聞くことができて大変有意義でした。ありがとうございました。(高校, よかった)
- 新入試で揺れ動いているこの時期に適している。(その他, よかった)
- 真にタイムリーなテーマです。(高校, よかった)
- 総合選抜, 学校推薦選抜に時宜にかなったテーマだった。(大学, よかった)
- 大学, 高校双方の立場から, 現大学入試に対する実情と課題を把握できたこと。(高校, よかった)
- 大学・高校とも, 大学入試で何を測るべきかはやはり共通しているのだなとよくわかった。(わかってはいたが)(高校, よかった)
- 大学側, 高校側からのご発表があり, 大学入試の考え方, 高大接続の考え方について, 改めて考えることができた。(大学, よかった)
- 大学入試について研究することの意義について考えることができたから。(大学, よかった)
- 大学入試の今後のあり方に関心があったためです。(高校, よかった)
- 大学入試の大きな過渡期に, 高校生のための入試について多様な議論がなされました。(高校, よかった)
- 大学入試の変革期にタイムリーなテーマだった。(高校, よかった)
- 大学入試の未来のことをいろいろ考えることができた。特に高大接続の本来の意味を考える機会とできたことは大変意義深かった。知識を問うだけではなく「考える」「考えさせる」場に入試がように今後考えていきたいと思う。(大学, よかった)
- 大学入試を設計すること自体が, 学生を高校・大学でどう成長させるかという視点につながる点が, これまでの受験対策という枠を超えて議論が進んでいく点がよかった。(その他, よかった)
- 大学入試一般ではなく, 入試区分ごとにそれぞれのテーマがあればさらに良かった。(大学, よかった)
- 大学入試改革も含めた高大接続改革が進められていく中で, 大学入試研究というテーマでのフォーラムが開催され, 改革に関わる情報を得られたことは良かったと思います。(高校, よかった)
- 大学入試研究の必要性は理解するが, 実際に入試業務に携わっている者からすると, 取り組み事例紹介の方が役に立つ。(大学, どちらとも言えない)
- 大混乱を極める来年度入試についての話がきけた。(高校, よかった)
- 東北大学が入試に関して, どのようなことを考えているのか, その一端を見られて大変良かったです。(高校, よかった)
- 内容の濃い発表内容と意見交換でした。(高校, よかった)
- 入試と教育の理念が相反するものではないことが, 様々な視点から確認できて, ほっとしています。(高校, よかった)
- 入試についてのそれぞれの立場からの考えを知ることができました。大学と高校の意見交換が出来るという意味でもこの解は意義があります。(高校, よかった)
- 入試のあり方について, どのような思いがそれぞれの立場であるのかを学べる機会だと思い, 参加しました。(その他, よかった)
- 入試の課題について整理できた。(大学, よかった)
- 入試の基本的な考え方に立ち返る機会になりました。悪夢のような入試改革騒動に二度と巻き込まれないためにも, 入試問題の設計自体を学問的研究の対象として研究を進めておくことは社会に必要であると思います。(高校, よかった)
- 入試を設計するというテーマは良かったと思いますが, 基調講演と現状報告が若干かみ合っていないような気がしました。(その他, どちらとも言えない)
- 入試制度が不透明感が増すなかで, 立ち止まり原点を振り返る意味で貴重な時間を得た。(高校, よかった)

- 入試制度を改革するにあたってヒントをいただいた。(大学, よかった)
- 複雑, 多様化する国立大入試に関する課題を取り上げていること。(大学, よかった)
- 報告された先生のとりのくみや本音など具体的に知ることができました。(大学, よかった)
- 本学も入試改革の必要性を感じているので, 興味を惹かれるテーマであったのでよかった。(大学, よかった)
- 毎回, 高大連携に関するタイムリーなテーマである。(高校, よかった)
- 様々な立場, 角度からの話で理解が深まった。(高校, よかった)

3. 基調講演者の発表は如何でしたか.

- 「大学入試学」が教育の本道に則った意義深いものになることを期待しております. 大学入試センターが, 現場目線で心の通った選抜の在り方を模索し続ける機関であって欲しいと願っています. 貴重なご講演ありがとうございました。(高校, よかった)
- 「大学入試学」は興味深く, エビデンスの実態に触れることができた。(大学, よかった)
- 「入試学」について知ることが出来た. その実践的応用についても理解できた。(高校, よかった)
- 「入試学」を知り, 今後のますますの研究成果を願うとともに, 大学だけではなく, 教育に携わる方々にフィードバックしていただきたいです。(その他, よかった)
- 「大学入試学」の実践と成果—エビデンスに基づく東北大学の入試改革。(大学, よかった)
- エビデンスに関する宮本先生の講演。(高校, よかった)
- エビデンスは, 一般には当然ですが教育に関しては軽視されている感じが否めません, 良かったです。(高校, よかった)
- エビデンスを元にした東北大学の入試設計はとても共感が持てました. 東北大学での知見が多く大学の入試改革にまで広がることを期待します。(その他, よかった)
- お二人の先生から大学入試についての考え方を伺い, 今後の高校での教育に活かせると考えさせられました。(高校, よかった)
- 異なる立場の方々の入試への向き合い方について伺うことができた。(その他, よかった)
- 皆さん聞き取りやすかったと感じました。(大学, よかった)
- 学術研究として, 入試改革のエビデンスを与えられることがよくわかった. 勉強になりました。(高校, よかった)
- 学問としての入試学を感じた (高校, よかった)
- 基調講演者1・2ともに「研究紹介」となっており, その筋の「同業者」にとっては良いと思うのだが, 「大学入試一般」に関わる今日的な課題に対しては, どうだろうか. これは, 「本来の高大接続」についての高校教員の期待と大学教員の回答(反応)の温度差の違いにあらわれていた。(大学, 改善すべき)
- 宮本先生の後半の切り口がデータに基づいたもので良かった. 倉元先生の話とお茶大の先生の話も絶妙に噛み合っていて納得がいった。(高校, よかった)
- 宮本先生の発達心理学からの観点と簡潔なご説明が腑に落ちることが多くありました。(高校, よかった)
- 系統的に大学入試の考え方をご説明いただき, 今回の入試改革の問題点についても言及されていたので, 外観が把握できました. 入試設計のエビデンスの蓄積についてはなかなかそこまでできておらず, 難しいですが, 取り組んでいかなければいけないと思いました. 調査のご発表がありましたが, その設計もとても勉強になりました。(大学, よかった)
- 現状報告は具体的な事例が多く良かった。(大学, どちらとも言えない)
- 国の施策に対して, 疑問に思っていることが確信へと変わったから (高校, よかった)
- 今回, 宮本先生の考えの一端に触れる貴重な機会になったと思います。(その他, よかった)
- 今回の政策に対する大学側の考えや方向性を知ることができたから。(高校, よかった)
- 今回の入試改革の問題点の全体像を描くことができたから。(高校, よかった)

- 今後の展望や構想については、こういった場だからこそ、もっと踏み込んだ話を聞きたい。(その他、どちらとも言えない)
- 主体性の評価について、大学側の考え方を確認できたこと。(高校、よかった)
- 取り組みの具体的な話であったので、参考になった。(大学、よかった)
- 受験する側からのエビデンスの求め方について示唆に富んでいた。(大学、よかった)
- 申し訳ありませんが、授業のため、拝聴できませんでした。(高校、無回答)
- 生徒にとっては人生を左右しかねない大学入試というものを高校現場と同じ目線で捉えていただいていると強く感じた。今後もたくさんの意見を集約して、より良い大学入試について研究していただきたい。(高校、よかった)
- 倉元先生の講演では、データの解析に出願、合格者の重みをつけて違いを可視化できて参考になった。一方で対象者、学校の固定化につながらないかも、思った。(高校、よかった)
- 倉元先生の大学入試学のお話で、日ごろあまり考えることがなかった大学入試について基本や本質構造を学ぶことができた。東北大学やお茶の水大学の新しい取り組みも知れてよかった。東北大学のような、国の改革の動きを見据えての、先んじた取り組みを見習いたい。(大学、よかった)
- 大学側のかかえる問題が少し理解できた。全く知識がなかったので興味深かった。(高校、よかった)
- 大学入試の主役があくまでも受験生で、彼らの主体的な成長過程における成果をどうやって正当に評価すべきかという視点が納得のいくものでした。(その他、よかった)
- 大学入試改革の現状やエビデンスの取り方が参考になった。(大学、よかった)
- 大学入試学とはどのような学問なのか興味があったので話が聞けてよかった。また、エビデンスの大切さを再確認できてよかった。(大学、よかった)
- 大学入試学は果たして学問になるのか？という疑問がクリアになったから(大学、よかった)
- 丁寧な発表で大変示唆に富む内容でした。(無回答、よかった)
- 哲学的である。入試を1つの研究領域の学問としている。(その他、よかった)
- 東北大のエビデンスと苦労が理解で来ました。(高校、よかった)
- 東北大のスタンスが分かった。なぜだかガラケイをイメージした。(高校、どちらとも言えない)
- 東北大学がしっかりとエビデンスに基づいた入試を守っていることがよく分かった。ますます、東北大学への信頼が高まった。(高校、よかった)
- 東北大学の「主体性」のとらえ方が明確で分かりやすい。発信の分かりやすさが何よりも重要だと思う。(高校、よかった)
- 東北大学のエビデンスの有効性の証明。(高校、よかった)
- 東北大学の考え方がよくわかり、他大学への影響も大きくなるように感じました。(高校、よかった)
- 東北大学の心(良識)のある取り組み、判断には敬意を表する。(高校、よかった)
- 東北大学の入試は、確固たるエビデンスに基づいて行われていること、また、より良い入試を目指していること。(高校、よかった)
- 東北大学の入試設計の具体的な方策の一端を知ることができました。(大学、よかった)
- 東北大学の入試理念がよくわかり、安心した。(高校、よかった)
- 入試についての学問の話が聞けて良かったです。そして、日本の教育界においては、このような学問がもっと日本において広まるべきだと思いました。(高校、よかった)
- 入試改革の混乱の中、東北大学は極めて冷静な対応を取り続けていたと思います。その東北大学とお茶の水女子大学の取り組みは異なっているにもかかわらず、入試制度の設計理念には共通するものがあると思いました。(高校、よかった)
- 入試改革の変遷やその理論的な解釈など、改めて、今後どのように変化していくべきなのか、考えるきっかけになりました。(高校、よかった)
- 入試改革の変遷やその理論的な解釈など、改めて、今後どのように変化していくべきな

のか、考えるきっかけになりました。(高校, よかった)

- 入試学の概略がとても理解できました。東北大学で発信する入試体系がさらに多くの場面で生かされれば、受験生も安心するのではないかと思います。(高校, よかった)
- 別の角度から入試を考えることを示唆された。(大学, よかった)
- 理論と実践の形で、大学入試がどのように設計されているか、おぼろげながら把握できたこと。(高校, よかった)
- 理論と実践を分担され、わかりやすかった。(大学, よかった)
- 両名の講演内容が関連しており、分かりやすかった。(大学, よかった)

4. 現状報告者の発表は如何でしたか。

- 3者3様の立場は興味深い内容でした。(高校, よかった)
- お茶の水女子大学の新フンボルト入試についてや高校現場で大学入試をどのように思っているのか、生の声が聞けてよかった。(大学, よかった)
- お茶の水女子大学の先生のお話も、変わりゆく入試の前哨戦なら役割を果たした東北大学同様に、これからの入試改革を先導していくような気がしました。青森高校の笠井先生のお話は、学校現場の問題や、影にある苦労などを感じさせてくれながら、自分の学校に足りないものが見えてくるようなお話でした。最後の校長先生のお話は、我々現場しか見ていない教員とは違った視点であり、聞いていて、引き込まれていくような感じで、感心しながら聞き入ってしまいました。(高校, よかった)
- お茶の水女子大学の入試は、国際教養大学のグローバルセミナー入試に似ているなあと考えた。それぞれの大学で疲弊しながら知恵をしぼって頑張っておられる事実の発表に感動した。笠井先生の指導には共感した。(高校, よかった)
- この形式では仕方ありませんが議論の軸を立てていただきたいです。(その他, よかった)
- すべてに共通するのは、人間の尊厳と生き方指導と感じました。人間として生きていくうえで大切な心を核として、生徒たちの幸せな未来のために何をなすべきか深く考えさせられました。お忙しいところ本当にありがとうございました。(高校, よかった)
- それぞれの現場の実態が見えたから。(高校, よかった)
- それぞれの立場でしか語れないことを語っていただけた。(大学, よかった)
- それぞれの立場での課題。視点が分かり、新鮮であった。(その他, よかった)
- それぞれ別の観点から入試について考えることが出来た。特に武蔵高校杉山先生のお話しには感銘した。(高校, よかった)
- フンボルト入試の報告にはいろんな示唆が含まれていた。(大学, よかった)
- 各々の立場から見る大学入試制度の現況を、本音に近い言葉で聞いた。(その他, よかった)
- 各先生の誠実な仕事への向き合い姿勢に感動しました。(大学, よかった)
- 笠井、杉山両先生とも、提案性があり、発見がありました。(高校, よかった)
- 笠井先生のご発表で、具体的な指導のイメージがわきました。個人の力量の向上というよりも、ではなく職員集団の取り組みにできれば理想です。(高校, よかった)
- 具体的な事例も含めた話が聞いたことが良かった。(高校, よかった)
- 現実的な視点から入試改革をみることができた。(大学, よかった)
- 現場での具体的な取り組みや研究の様子がきけた。(高校, よかった)
- 現場のお話はリアリティがあって勉強になります。(その他, よかった)
- 現場の実践事例は理論的考察同様重要。(高校, よかった)
- 現場の声が聞けてよかった。(その他, よかった)
- 現場の率直な意見が話題となっていたと思います。(高校, よかった)
- 現状が良く理解できました。(無回答, よかった)
- 現状報告1は共感できる内容であったが、現状報告2では、特に高大接続が違った方向に動いているのではないかと訝ってしまう(これについては基調講演者からの質問があった)。現状報告3は「1 高大接続改革の検討史(おさらい)」「2 高校現場の受け止め」「3 混迷した要因」はおそらくはほとんどの人が共有している内容だと思う。また「4 問

題の本質は何か」で為されている指摘も大切だが、高校の責任者の立場から「5 今後への期待」をさらに深く掘り下げてほしかった。今後への提題でも良かった。(大学、どちらとも言えない)

- 現状報告②笠井先生の話は同じ教諭という立場から、統合型入試をどう考えていけばよいか、考えさせられた。実例があり、興味深い発表だった。(高校、よかった)
- 個別の発表内容は良かったですが、高校・大学での意識のずれを非常に感じました。(あえてそうしているのかもしれませんが)(その他、どちらとも言えない)
- 高校での指導の現場を知ることができた。(大学、よかった)
- 高校の感覚に触れる貴重な機会になりました。(その他、よかった)
- 高校側の必死な思い、努力、大変さが伝わるお話だった。(大学、よかった)
- 実際に大学で行っているユニークな入試について知ることができ、参考になった。また高校側のこれまでの受け止めも参考になった。(大学、よかった)
- 受験である以上対策を講じる現場と、受験生の主体的な学ぶ意欲とその力を様々な工夫でなんとか見極めようとする大学、それぞれの不断の努力と苦しみが共感できました。(その他、よかった)
- 新フンボルト入試では、こちらの印象では自信満々で学生募集をしていると思いきや、果たして日々悩みながら(抵抗勢力と戦いながら)入試を構築されているとお聞きして、意外でしたが新鮮でした。どの立場でも日々悩まれて入試に携わっておられるその姿に感銘を受けました。(高校、よかった)
- 新フンボルト入試とお茶大の大変さがわかった。(高校、よかった)
- 杉山先生の考え、分析に共感。現場の不満を代行して下さった。又、安成先生の御苦労もよく分かった。(その他、よかった)
- 青高の話が準備を丁寧にされたのであろうに表面的になってしまったことが残念です。(高校、よかった)
- 青森高校の事例は指導の事例としてとても参考になりました。武蔵高等学校中学校の先生の話は教育哲学として示唆に富む内容でした。ありがとうございました。(高校、よかった)
- 総合型選抜の考え方、また、高校現場の実情を知ることができ、とても参考になったから。(高校、よかった)
- 他校での旧 AO 入試への取り組み方、考え方を知ることができたこと(高校、よかった)
- 他大学、高校側の具体的な取り組みがわかりました。笠井先生のご発表から、AP を含めて、高校の教員が大変真剣に取り組んでいることが伝わりました。大学側もそれに応えらえるようにいろいろ考えて、AP や入試方法を検討していき、大学側の意図をお伝えしていきたいと思います。(大学、よかった)
- 大学、高校での状況の一端を知ることができ有意義であった。(大学、よかった)
- 大学から出向して、現職場にいますので、高校の先生方の貴重な意見、考えを聞くことができました。高校、大学の教員がもっと意見を交わせるような場が必要とも感じました。(その他、よかった)
- 大学の現状、それから高校現場からの報告で現状の把握がされ解決すべき課題が明らかになり、目から鱗が落ちました。(高校、よかった)
- 大学も高校の現場も本気になって入試に取り組んでいる様子が具体的に知ることができた。(高校、よかった)
- 大学側も高校側も、大学入試を通して高校生の様々な能力を開発・伸長させていること。(高校、よかった)
- 大変参考になった。いろんなことを考える機会となった(高校、よかった)
- 特に1, 3では講演者の率直な思いを興味深く聞くことができた。(大学、よかった)
- 特に杉山先生のお話がよかった。(高校、よかった)
- 特に杉山先生の広範囲をみたお話が面白かったです。(高校、よかった)
- 特に杉山先生の知見はすばらしかったです。(高校、よかった)
- 特に青森高校の具体的な取り組みが本校でも活かせると思っています。(高校、よかった)

- 入試を考える立場, 指導者として入試に対応させる立場から貴重なご意見をうかがえた。(大学, よかった)
- 入試改革についての高校の認識がわかった (大学, よかった)
- 入試対策としての指導ではなく, 生徒の資質・能力を伸ばすための指導・授業はどのようにすればよいのか, 具体例を示しながら話していただき参考になった. アドミッションポリシーを読み解き, 過去問から試験問題のデザインを探り, 生徒の力を伸ばすような指導を, 受験対策としてではなく, 日常の授業からしていきたい. (高校, よかった)
- 普段見えない高校現場の意見を知ることができた. (大学, よかった)
- 幅広い視野での発表はバランスがよくそれぞれの発表は大変参考になった. (高校, よかった)

5. ディスカッションは如何でしたか.

- 「主体性」や人間としての成長の本質を入試で問うべきではない, というか, 問えないものであることを改めて実感した. 入試になれば対策が行われる, という倉元先生の言葉にも共感いたしました. 高校生のアイデンティティの模索や成長のプロセスを, 大学で途絶えさせることなく継続させていくために, 入試で何を問うべきか, 大変難しい問いですが, 自身の大学に引き付けて改めて考えることができました. (大学, よかった)
- いろいろ考えさせられた. よかったです. (高校, よかった)
- お互いの意見をすりあわせることによって内容の理解が深まる. (高校, よかった)
- ここでも, 本質的な話について議論がなされていてよかったです. (高校, よかった)
- これからやっていく上でたくさんのヒントをいただきました. 参加してよかったです. ありがとうございました. (大学, よかった)
- さらに深くつつこんだ話がきけた. (高校, よかった)
- すみません. 質問投稿もしたのですが, 所用で途中で退室してしまいました. (高校, どちらとも言えない)
- それぞれの立場での本音に近い回答を聞くことができ, とても参考になったから. (高校, よかった)
- ディスカッションは視聴していない. (大学, どちらとも言えない)
- テーマそのものから広がりのある内容が展開されていた. (大学, よかった)
- もう少し時間が取れると突っ込んだ議論になろうかと思う. (高校, どちらとも言えない)
- もう少し質問に対する回答と討議についての時間が必要. 時間 (4 時間) の配分を検討してください. (大学, どちらとも言えない)
- やや話題が散漫になった. (高校, どちらとも言えない)
- より突っ込んだ深いところまで話を聞くことができた. (高校, よかった)
- 安成先生の具体的な率直なお話がありがたかったです. (高校, よかった)
- 各大学が入学後の学生の進路変更や意欲の低下に悩み, その防止のために入試を工夫して取り組んでいることがわかり, 大変参考になりました. また高校側の生徒へのかかわりや願いもよくわかりました. (大学, よかった)
- 疑問に答えていただいた. (大学, よかった)
- 議論をする中で, 今, 学校がどの方向に, どう動いていくべきなのかを考えさせてくれました. (高校, よかった)
- 議論をする中で, 今, 学校がどの方向に, どう動いていくべきなのかを考えさせてくれました. (高校, よかった)
- 業務のため退席したため部分的にしか拝聴できませんでした. (その他, どちらとも言えない)
- 勤務校での会議があったので, 最後まで視聴できなかったのですが, このディスカッションが生声をライブで聴くことができるので, 毎回とても楽しみにしています. (高校, よかった)
- 講演された方の考えがより深く理解できてよかった. (高校, よかった)
- 高校は大学に, 大学は高校に, 入試を通して何を求めているのか, 率直な意見が聞けて

- よかったです。高校と大学の橋渡しに活かせればと思いました。（その他、よかった）
- 高大接続改革に対する熱意を持ったメンバーによる意見交換であり、現状をどうにか好転させたいという思いが伝わってきた。（その他、よかった）
 - 今後の大学入試のあり方について、多種多様な考えが提案され、発展していく予感がしたこと。（高校、よかった）
 - 質問が抽象的なものが多かった。もっと具体的な質問を取り上げてほしかった。（高校、どちらとも言えない）
 - 質問の選択がすばらしく、発表だけでは理解できなかった部分を補っていただけた。（その他、よかった）
 - 質問への回答も大切ですが、できれば5名の方々が激論を交わしていただければよかったと思いました。（高校、改善すべき）
 - 主体性評価についての考え方を知れたのが良かったです。（高校、よかった）
 - 受験対策をしていく上で、生徒の学力は向上するのはもちろんですが、同時に教員の指導力も向上するという一面もあります。ここを避けている高校教員も多く、不甲斐なく思うこともしばしば。（高校、よかった）
 - 秦野先生のリアルタイムのさばきが見事でした。（その他、よかった）
 - 先生方のそれぞれの立場からの意見がとても勉強になりました。（高校、よかった）
 - 全て聴取者からの質問に答える形式ではなく、討議司会を含めた7人が自由に発言あるいは互いに質問する時間を設けてもよかったのではないかと。そうすることにより、もっと深堀できたのではないと思う。（大学、どちらとも言えない）
 - 双方が何を大事にしているかが明瞭に出て、歩み寄れるように思えたから。基調講演のお二人が現場をよく知る先生方だったのが大きい気がします。（高校、よかった）
 - 倉元先生、宮本先生がはっきりとおっしゃられるのがよかった。（高校、よかった）
 - 抽象的な議題で論じるのは、理想論が中心になってしまう。（その他、どちらとも言えない）
 - 登壇者の議論がそれぞれの方の立場をよく表しており、聞きごたえがあった。（その他、よかった）
 - 入試とは、教育とは、という根本を考えるきっかけとなった。（大学、よかった）
 - 入試や受験勉強の方向性、課題について改めて認識することができました。ありがとうございました。（大学、よかった）
 - 発表で聴けなかった、深部と幅を拝聴できた事です。（高校、よかった）
 - 非常に示唆に富む内容でした。（無回答、よかった）
 - 文科省の主張や方向性も聞いてみたいとは思いましたが、高校と大学の現場がそれぞれ本気で生徒を主体的に成長させようという思いが言葉で紡ぎだされており、どちらも共感できました。（その他、よかった）
 - 補足していただき理解が深まった。（高校、よかった）
 - 補足説明が聞けてよかった。（大学、よかった）
 - 本音で語っていたのが、感じられました。（高校、よかった）
 - 様々な意見をそれぞれの立場から出されているのがよい。（その他、よかった）
 - 立場によるニュアンスの違いが興味深いものでした。（高校、よかった）
 - 立場も考え方も異なる先生方の間で行われた議論でしたが、見事に噛み合い、未来志向のヴィジョンを垣間見ることができました。（高校、よかった）
 - 論点が明確になっていてわかりやすかった。（大学、よかった）

7. 今後も「東北大学高等教育フォーラム」を行うとすれば、どのような形式、テーマを望まれますか。

- 「世界の中の日本の未来」にかかわる「日本の教育」の方向性とあるべき姿について。（高校）
- 「大学入試学」のさらなる広がり具体的な形で示せるもの。仙台まで行くのはたいへんなので、Web開催は意外によかった。（その他）

- ・高校での学びと大学での学びのつながり，関連性
- ・日本の将来を考えたときの学びはどうあるべきか．（高校）
- 3つの密は重なりませんので，もっと集まってやっていいのではないのでしょうか．安易にオンラインにし過ぎない方がいいと思っています．テーマは大学入試改革のゆくえ．教育行政の混乱期をどう乗り越えるか．行政への提言にも繋がるようなものを望みます．（高校）
- Web形式が良い．（大学）
- Web形式を望みます．テーマは，入学後の学生の学習支援について．（大学）
- アフターコロナの時代を生き抜く人間のあり方，たくましい人間像，何が必要になっていくのか．（高校）
- あるべき入学者選抜について追究するテーマで．形式は問わず．（大学）
- オンライン参加可の形式を継続して欲しい．できれば，参加申し込みをしたら都合の良い時間帯に参加できるようにアーカイブ化して欲しい．（高校）
- この形式でいいと思います．（高校）
- これまで通りの形式で良いです．引き続き話のわかりやすい講師の先生をお願いします．（大学）
- コロナ禍でのオンライン参加であったが，この形式になった事で初めて参加できた．コロナの状況に関わらず，今後ともオンラインで参加する形式は継続していただければ有り難い．（高校）
- その時の実情を垣間見ることができそうなホットな題名にしてほしい．（高校）
- できれば直接参加したいですが，アフターコロナが移動を制限するものであればオンラインで参加します．（高校）
- ネットで参加させていただきましたが，不具合等全くなく，ストレスなく拝聴できました．ありがとうございました．（高校）
- リアルとバーチャルの2方法にてお願いします．実施運営は大変だと存じますが，宜しく願い申し上げます．（その他）
- 育成すべきものと評価すべきものについて意見が聞きたい．（高校）
- 引き続き高大接続改革について，情報を共有し議論していく場は重要と認識している．（高校）
- 遠隔だとありがたい．（大学）
- 遠方で今まで参加が難しかったので，今回のようにオンラインとの併用は助かります．（その他）
- 遠方なので，今回のようにオンラインでの参加も可能であると非常に助かる．その場合はぜひ参加したい．（高校）
- 各テーマを分散して開催（午前中・午後）．（大学）
- 基調講演でテーマを明らかにし，大学そして高校からも現状報告をし，最後に討論があるという形式はよく考えられているよい形式です．テーマは，学力の三要素と入試の関わり，主体性評価などについてさらに深めていってほしいと思います．そして，望ましい入試制度について提言を続けてください．（高校）
- 共通テスト結果のフィードバックと with コロナ時代の高大接続．（高校）
- 現在の組み立てが良いと思います．（大学）
- 現地会場での参加が望ましい．（高校）
- 講演を拝聴したり，討議を見ている分には引き込まれるので，ちょうどよい時間かとは思いますが，オンラインだとやはり集中力が続かない気もします．休憩を十分にとる，基調講演を1つにする等を考えてもよいのではないかと思います．（その他）
- 高校現場の先生方の発表．（高校）
- 高大接続や連携の具体的な取り組みの紹介．（大学）
- 今，中・高では「探究」の授業に活路や動機付けをみいだそうとしているが，大学の立場から，高校の授業に何を求めたいのか，おしえてほしい．田舎にいくほど，ここ20～30年授業が変化していない，古いまま．探究の授業に対応できていない先生が多い．文

科が求めることと大学が求めることは同じなのか？（高校）

- 今しばらくの間は、このテーマがタイムリーだと思います。（高校）
- 今回のようなハイブリッド型も考慮していただけますようお願いいたします。（高校）
- 今回の形式はとても良かったので、次回も自由に意見が言える雰囲気の会となると思います。（高校）
- 今回の形式は遠方からの参加者としてはありがたいです。（大学）
- 今回の様な、会場＋リモートの形式で良いと思います。（その他）
- 今回は初めて参加しました。おもしろかったです。普段は大学の先生の生の声を聞く機会はあまりないので、今回のものでもまた参加したいと思います。（高校）
- 今回見送りになった改革の三本柱の英語民間試験の導入と、英語教育が入試に与える影響などについて。（高校）
- 今後も是非オンライン参加可能にいただければ幸いです。どうぞよろしくお願い申し上げます。（高校）
- 次年度以降もオンラインで参加できるとありがたいです。（高校）
- 社内の会議室に集まり、希望者を募って拝聴させていただきました。とても有意義でしたので、今後ともオンラインの形式も設けていただけると幸いです。（その他）
- 初めてオンラインで参加致しました。これまで何度か仙台まで参りましたが、コロナのこともあり、オンラインも悪くないと思いました。（主催者の皆様は、準備が大変だったと思います。ありがとうございました）（高校）
- 新学習指導要領を踏まえた高校、大学の教育について。（高校）
- 生徒の学力、主体性を測る適正な入試について。（大学）
- 対面と Web を用いたハイブリット形式は会場の盛り上がりや臨場感という点では課題もあるかもしれませんが、講演者の表情もはっきりと見て取れ、とても参加しやすい方法でした。大学で「書かれていること以外の世界を読み取る」ために必要な高校生の学力をどう育てていくかという視点でもさまざまな議論をみたいと思います。（その他）
- 大学入試（筆記試験）において自宅で CBT で行えるか、CBT の可能性に興味がある。テーマとして、大学入試の CBT に関する内容を望む。（大学）
- 探究活動と入試。（高校）
- 東京からの参加だったため、オンラインで開催いただき大変助かりました。今後もオンラインで開催いただきたいです。（大学）
- 難しいかも知れませんが、「実用主義、効率主義と大学の教育」について考えてみたいです。実用的、効率的、実学的なことを求める風潮がある中で、高校や大学はどう対処しているのか（しないで行っているのか）、それらがどう接続していくべきか。（高校）
- 入試改革初年度の成果。（大学）
- 入試制度の在り方、というもののより、もっと具体性←（人文科学的自然科学別）のあるものもとり入れてもよいと思う。（その他）
- 文科省の答申等に対して、大学側がどのように反応して大学入試を設計・実践しているかについて、詳細は語れないとしても、ある程度の枠組みを発表する内容を聞いてみたいと思います。（高校）
- 落ち着くまでは今年のテーマを数年続けていただきたいと思います。入試の考え方や今後の進展の具合などが気になります。形式は講演型でいいと思います。（高校）

8. その他、全般的な御意見、御感想をお寄せください。

- Web での視聴は仕事をしながら聞けて良い。今後は事例紹介を多めにしたい。特にコロナのこともあって、オンライン入試も増えてきている。オンライン入試をテーマにしてくれると参加者が多くなるのではと思う。（大学）
- Web 視聴でしたが、映像が鮮明だったことに良い意味でたいへん驚きました。カメラの切り替えなども的確で、素人あつらえではないようにお見受けしました。また機会がありましたら、運営方法などを教えていただきたいと思いますところでした。（その他）
- with コロナにおけるシンポジウムの開催は見事でした。（高校）

- Zoom などを用いて、オンラインで討論会などをして、最後に全体で共有するような第2部があってもいいのかと思いました。お世話になりましたありがとうございました。（高校）
- ありがとうございました。（その他）
- いつもながら、大変素晴らしく、大変勉強になりました。ありがとうございました。感謝！！（高校）
- オンラインで静岡県から参加できたことに感謝します。（大学）
- お世話になりました。来年も参加したいと思います。（高校）
- このような中で開催していただきありがとうございました。（高校）
- とても勉強になりました、ありがとうございました。（無回答）
- ライブ配信は今後も続けていただけると助かります。（大学）
- 一連の入試改革騒動が引き起こしたカオス的状况を抜け、もう二度とこのような混乱が引き起こされることのないよう、高校教員のひとりとして「主体性」を保ち、今後は教育への政治的介入に注意を払い、批判的でありつつ、生徒の主体性に積極的に応答していきたいと思います。（高校）
- 感染症収束後も今回のような Web 配信を併用したハイブリッドな会にしていただけると、参加しやすくなります。（高校）
- 関係者の方々、ありがとうございました。（高校）
- 貴重なお話をいただきありがとうございました。（大学）
- 貴重な機会をありがとうございました。（高校）
- 久しぶりに大学入試に関するフォーラムに参加したので新鮮だった。（大学）
- 講演が参加者の学びになるだけでなく、参加者が全国から集まることで、休憩時間なども有効に活用させていただいております。来年は東北地区以外からも直接参加できることを願っています。主催者の皆様、本当にお疲れ様でした。（高校）
- 今回ネット配信で聴講させていただきましたが、問題なく、臨場感あるフォーラムを聴講できて満足できました。ご準備等ご苦労様でした。（大学）
- 今回のようなオンライン開催は、今後ともお願いしたいと思います。会場までの移動の時間や経費を考えると、このような方法での開催はかなり助かります。また質問もオンラインを通して行くととても容易です。（大学）
- 今回は2回目の参加となりましたが、昨年と異なり内容が濃すぎてついていくのに精一杯でした。ありがとうございました！（大学）
- "今回初めてフォーラムに参加させていただきました。
- どのご発表も大変参考になりました。
- ありがとうございました。（大学）"
- 私はこの部署に来てまだ数か月なので、初めて参加させていただきましたが、例年楽しみにしている方も多いです。今後ともよろしくお願いいたします。（その他）
- 授業がどうしてもあったため、途中から参加させていただきましたが、これまでの振り返りと今後どのようにカリキュラムを考えていけばよいのかの一助となりました。ありがとうございました。（高校）
- 初めての参加だったが、非常にためになるフォーラムだった。今後も参加したい。（高校）
- 新潟県からの参加です。コロナと関係なく今後もリモートで参加させていただけるとありがたいです。ご検討お願いいたします。（高校）
- 倉元先生、宮本先生、久保先生、伊藤先生、準備から当日の役割まで、ご苦労様でした。（高校）
- 対面だったので四時間は長いとは感じなかったが、Web だとしたらかなりきついであろう。高等学校と大学をつなぐこのようなフォーラムは貴重。参加しないとその良さは感じてもらえないかもしれない。東北大志望者がいなくとも教育を考えるよい機会だと思う。（高校）
- 大学と高校のどちらからの立場の人もいるのがよかった。（高校）
- 大学側は東北大のような優秀なアドミッションセンターを有する大学以外はいっぱいいっぱいの運営で、そんな、印象でしか語れない入試に向けて、高校側は健気にも生徒の

ニーズに応えようと入試のデザインを読み解いて、入試対策をしてしまいます。全体像が見えないまま、この国の教育はどこへ向かっていくのかと思ってきましたので、「大学入試学」が目線合わせを可能にすることに期待を抱きました。高校現場にいる身としては、これからの社会を生きる生徒の資質能力育成の観点、「大学入試学」により現実に着地する観点の他に、「求められる力」の枠組を設けることでそこに当てはまらない自分をダメだと思ってしまう現状を打破する「生徒の自己肯定感を向上させる観点」が必要だと感じました。受験を通して生徒を成長させていきたいと思える会でした。ありがとうございました。（高校）

- 大変勉強になりました。ありがとうございました。（高校）
- 大変有意義な時間でした。ありがとうございました。（高校）
- 調査書の使い方。大学によって違うのは当然ですが、一方で使います、点数化しますと宣言する大学に合わせて（意識して）指導しなければならない現実があります。そもそも、新調査書。指導要録の写しという性質を保持しつつ枚数に制限を設けない。その意味がよくわかりません。（高校）
- 討議の質問読み上げの音声聞きづらかったです。（高校）
- 特にありません（高校）
- 非常に有意義な時間でした。有難う御座いました。（高校）
- 閉会の挨拶で話があった表紙の意味を改めて考えてみたいと思います。（大学）
- 本フォーラムに参加するのを毎年楽しみにしており、そのたびに得ることがあり、大変感謝しております。今年もコロナ禍の中、工夫して開催していただきありがとうございました。（大学）
- 本日のフォーラムで得たものを今後の業務に生かしたいと思います。登壇いただいた先生方並びに運営に当たられた方々に感謝いたします。（大学）
- 本日は、高校教員の方向性をご指導くださいまして、誠にありがとうございました。今後もフォーラムに期待し、楽しみにしています。（高校）
- 本日はありがとうございました。（高校）
- 本日は参加させていただき、誠にありがとうございました。（大学）
- 毎回、問題点が明らかになり、思考が深まっているように感じます。ありがとうございました。（高校）
- 毎回貴重なお話を聞けて参考になります。コロナの影響で様々な制約があると思いますが、続けていって欲しいと願っています。（高校）
- 毎年、秋なら参加できそうですが...楽しかったです。（高校）
- 予備校ではもちろん様々な対策を今後も積み重ねていきますが、常々苦慮しているのが、「一度やった問題は解ける」だけの生徒がいわゆる難関大学志望者にあまりにも多い現状です。新しい問題を考え抜けるように何を伝え、何を気づいてもらうかという点は近年、より意識して指導し、試行錯誤を重ねています。今回講演者の皆さんがそれぞれ、未来を生きる大切な生徒をどのように成長させて、送り出し、迎え入れるかという点がブレなかった点がとてもすばらしいと感じました。我々も微力ながら、生徒が「考えつづけること」を楽しめる生徒を育てていきたいと思います。本日はありがとうございました。（その他）

参加者統計

1 参加者総数:375 名

(講演者・招待参加者: 16 名, 大学: 149 名, 高校: 110 名, スタッフ等: 3 名, その他: 77 名)

1.1 来場参加者総数: 91 名

(講演者・招待参加者: 14 名, 大学: 10 名, 高校: 31 名, スタッフ等: 22 名, その他: 14 名)

1.2 オンライン参加者総数: 284 名 (参加申込者数)

(講演者・招待参加者: 2 名, 大学: 139 名, 高校: 79 名, スタッフ等: 1 名, その他: 63 名)

2 参加者地域別

宮城県内: 113 名

宮城県以外の東北地方: 66 名

(青森県: 11 名, 岩手県: 16 名, 秋田県: 11 名, 山形県: 15 名, 福島県: 13 名)

東北地方以外 196 名

(北海道: 15 名, 茨城県: 5 名, 栃木県: 4 名, 群馬県: 2 名, 千葉県: 7 名, 埼玉県: 6 名, 東京都: 62 名, 神奈川県: 3 名, 新潟県: 2 名, 富山県: 1 名, 石川県: 1 名, 長野県: 3 名, 静岡県: 9 名, 愛知県: 5 名, 三重県: 1 名, 京都府: 8 名, 大阪府: 7 名, 兵庫県: 9 名, 岡山県: 8 名, 広島県: 6 名, 山口県: 1 名, 徳島県: 1 名, 香川県: 2 名, 愛媛県: 3 名, 高知県: 1 名, 福岡県: 6 名, 佐賀県: 1 名, 熊本県: 2 名, 宮崎県: 1 名, 鹿児島県: 1 名, 沖縄県: 3 名)

2.1 来場参加者地域別

宮城県内: 59 名

宮城県以外の東北地方: 26 名

(青森県: 3 名, 岩手県: 6 名, 秋田県: 1 名, 山形県: 8 名, 福島県: 8 名)

東北地方以外 6 名 (全て講演者・招待参加者)

(茨城県 1 名, 東京都 3 名, 愛知県 1 名, 大阪府 1 名)

2.2 オンライン参加者地域別

宮城県内: 54 名

宮城県以外の東北地方: 40 名

(青森県: 8 名, 岩手県: 10 名, 秋田県: 10 名, 山形県: 7 名, 福島県: 5 名)

東北地方以外:190 名

(北海道: 15 名, 茨城県: 4 名, 栃木県: 4 名, 群馬県: 2 名, 千葉県: 7 名, 埼玉県: 6 名, 東京都: 59 名, 神奈川県: 3 名, 新潟県: 12 名, 富山県: 1 名, 石川県: 1 名, 長野県: 3 名, 静岡県: 9 名, 愛知県: 4 名, 三重県: 1 名, 京都府: 8 名, 大阪府: 6 名, 兵庫県: 9 名, 岡山県: 8 名, 広島県: 6 名, 山口県: 1 名, 徳島県: 1 名, 香川県: 2 名, 愛媛県: 3 名, 高知県: 1 名, 福岡県: 6 名, 佐賀県: 1 名, 熊本県: 2 名, 宮崎県: 1 名, 鹿児島県: 1 名, 沖縄県: 3 名)

多くの方々に御参加いただき、ありがとうございました。

第 32 回東北大学高等教育フォーラム運営スタッフ

統括責任者	倉元直樹	
企画責任者	倉元直樹	宮本友弘
事務局	久保沙織	南紅玉
末永仁	伊藤博美	

当日スタッフ

石上正敏	庄司強	檜田豪利
秦野進一	田中秀樹	鎌田裕子
朱嘉琪	熊井弘子	竹浪綾子
林如玉	高城淳之	

IEHE TOHOKU Report 84

第 32 回東北大学高等教育フォーラム報告書

新時代の大学教育を考える [17]

大学入試を設計する

— 「大学入試研究」の必要性とその役割 —

発行：2021 年 2 月

編集：南 紅玉，倉元 直樹，宮本 友弘，久保 沙織

発行者：東北大学高度教養教育・学生支援機構

Institute for Excellence in Higher Education, Tohoku University

〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内 41

Tel: 022-795-7551

Email: ieheoffice@ihe. tohoku. ac. jp

印刷所： 有限会社 明倫社

*: 本企画の一部は，JSPS 科研費 JP20K20421 の助成を受けた．

第 32 回東北大学高等教育フォーラム（新時代の大学教育を考える [17]）

大学入試を設計する
—— 「大学入試研究」の必要性和その役割 ——

- ◇ 日 時 : 令和 2 年 9 月 23 日（月）13:00～17:00
◇ 会 場 : 東北大学百周年記念会館 川内萩ホール（及びオンライン配信）
〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内 40
◇ 主 催 : 東北大学高度教養教育・学生支援機構

プログラム

- | | | |
|------------|--|----------------|
| 司 会 | 東北大学高度教養教育・学生支援機構准教授 | 久保 沙織 |
| 開会の辞 | 東北大学総長 | 大野 英男 |
| 基調講演 1 | 「大学入試学」の淵源と展開
— 個別大学の入試関連組織と入試戦略 — | |
| | 東北大学高度教養教育・学生支援機構教授 | 倉元 直樹 氏 |
| 基調講演 2 | 「大学入試学」の実践と成果
— エビデンスに基づく東北大学の入試改革 — | |
| | 東北大学高度教養教育・学生支援機構教授 | 宮本 友弘 氏 |
| | (休憩) | |
| 現状報告 1 | 入試改革への挑戦
— お茶大新フンボルト入試の実施状況・課題・展望 — | |
| | お茶の水女子大学教授 | 安成 英樹 氏 |
| 現状報告 2 | 大学入試を読み解き、解きほぐす
— 高校現場の実践と課題 — | |
| | 青森県立青森高等学校教諭 | 笠井 敦司 氏 |
| 現状報告 3 | 「高大接続改革」に対する高校現場の受け止めと今後の期待 | |
| | 武蔵高等学校中学校校長 | 杉山 剛士 氏 |
| | (休憩) | |
| 討 議
司 会 | 東北大学高度教養教育・学生支援機構特任教授
東北大学高度教養教育・学生支援機構特任教授 | 秦野 進一
伊藤 博美 |
| 閉会の辞 | 東北大学理事・副学長 | 滝澤 博胤 |

大学入試を設計する

—— 「大学入試研究」の必要性とその役割 ——

目 次

第 32 回東北大学高等教育フォーラム企画主旨	1
開会の辞	3
第 I 部 基調講演	
基調講演者紹介	7
基調講演 1 : 「大学入試学」の淵源と展開 —個別大学の入試関連組織と入試戦略— 東北大学高度教養教育・学生支援機構教授 倉元 直樹 氏	9
資料	17
基調講演 2 : 「大学入試学」の実践と成果 —エビデンスに基づく東北大学の入試改革— 東北大学高度教養教育・学生支援機構教授 宮本 友弘 氏	21
資料	28
第 II 部 現状報告	
現状報告者紹介	33
現状報告 1 : 入試改革への挑戦 —お茶大新フンボルト入試の実施状況・課題・展望— お茶の水女子大学教授 安成 英樹 氏	36
資料	42
現状報告 2 : 大学入試を読み解き、解きほぐす —高校現場の実践と課題— 青森県立青森高等学校教諭	

	笠井 敦司 氏	45
資料		49
現状報告 3 : 「高大接続改革」に対する高校現場の受け止めと今後の期待 武蔵高等学校中学校校長	杉山 剛士 氏	52
資料		58
第Ⅲ部 討 議 ーパネルディスカッションー		61
閉会の辞		76
講 評		
講評 1 : 入試改革と高校教員の立場から 青森県立八戸工業高等学校	井上 誠之 教諭	77
講評 2 : フォーラムへの所感として 岩手県立一関第一高等学校	吉田 達行 教諭	80
講評 3 : 第 32 回東北大学高等教育フォーラムに参加して 宮城県仙台第三高等学校	渡部 敦 教諭	83
講評 4 : 大学入試学の波及効果を期待して 秋田県立秋田北高等学校	杉田 道子 教諭	86
講評 5 : 試されるとき 山形県立新庄北高等学校	植松 弥公 教諭	89
講評 6 : 教育について社会的な議論を 福島県立福島高等学校	菅野 陽介 教諭	93
アンケート・参加者統計		
アンケート集計結果		97
アンケート自由記述		98
参加者統計		110

第 32 回東北大学高等教育フォーラム企画主旨



令和3年度(2021年度)入試に導入が予定されている新しい入試制度が実施直前になって大きく方向転換した。現状、各大学はその対応に追われている。激変する状況をどう分析して変化を予測し、どのような制約条件の下で何を重視すべきか。適切な決断を下して実行に移すには確たる根拠(エビデンス)が必要となる。内部に専門的かつ実践的に「入試研究」を行う機能を持つか否かで、大学の決断が大きく左右される局面が到来している。

各大学に入学者選抜を研究する部署を設置し、個別大学がそれぞれ研究に基づく最適な入試戦略を描いていくことは、かつての文部省の戦後大学政策で構想されてきた形であった。2000年代にAO入試が拡大し、アドミッションセンターが設置されていった時期は、各大学が入試研究の機能を保有する入試戦略本部を立ち上げる好機でもあった。平成11年度(1999年度)にAO入試を専管する組織として設置された東北大学アドミッションセン

ターは、組織形態と役割を少しずつ変えながら20年以上に渡って個別大学の立場から入試研究を行い、成果を蓄積してきた。高大接続改革に対する独自の対応も従来から積み上げた成果に加え、たゆまぬ情報収集と分析を行い、それを基に学内での議論を積み上げた結果として現れたものである。

本フォーラムでは個別大学における「入試研究」を主題とする。基調講演は東北大学入試センター所属の教授2名が務める。アドミッションセンター発足時から東北大学の入試に携わってきた倉元直樹教授が、主として文部省の構想と個別大学における大学入試研究のイメージについて概説する。それを受けて、高大接続改革に対して東北大学が取ってきた対応の根拠について、宮本友弘教授が具体的に解説を加える。東北大学の対応で最も重視されたのは「東北大学志望の受験生保護」という観点であった。

基調講演に加えて、全国的にユニークな「新

フンボルト入試」を立ち上げて軌道に乗せた
お茶の水女子大学の安成英樹教授の現状報告
と高校側の視点から見た入試研究に関する話
題提供を予定している。

以上の各講演と報告を受け、フロアからの
意見を交えて討論を行い、そこから良好な高
大接続関係の構築における入試研究の役割と
今後の展望を描くことを試みる。高等学校お
よび大学の先生方、関係する方々の多くの参
加と忌憚なき活発な議論を期待している。

本報告書は、フォーラムの録音記録に修正
を加えた原稿、「招待参加者」としてフォーラ
ムに参加し、フロアの立場からフォーラムに
対してお寄せいただいた講評、およびアンケ
ート・参加者統計から成る。招待参加者は、
東北地方 6 県の高等学校進路指導研究会進学
指導部会等を通じ、各県 1 名ずつ選ばれた
方々である。

本報告書は、録音テープから起こした原稿
に対し、発言者が校正を加え、最終的に編集
責任者が表現・体裁の統一・修正を加えたも
のである。招待参加者の原稿の編集について
も、体裁統一と誤字脱字の修正のみにとどめ、
極力臨場感のある会場の雰囲気やそこに参加
された方々が感じられたこと重視することに
した。

尚、編集過程で生じた不具合に関しては、
全て編集者の責任である。

本フォーラムの開催・運営にあたっては大
変多くの方にご協力をいただいた。心より御
礼を申し上げたい。

(編集担当：

東北大学高度教養教育・学生支援機構
高等教育開発部門入試開発室
教授 倉元 直樹・教授 宮本 友弘・
准教授 久保 沙織・助教 南 紅玉)

注：本フォーラムの企画のうち、基調講演及
び安成英樹氏の現状報告は、JSPS 科研
費 JP20K20421 の助成を受けた研究成
果の一部である。

開 会 の 辞

東北大学総長

大野 英男

久保沙織准教授（司会）：

皆様，こんにちは．本日はコロナ禍の大変な状況の中，ご来場，オンラインのそれぞれで，全国から多数の皆様にご参加をいただきまして，誠にありがとうございます．予定の時刻となりましたので，第32回東北大学高等教育フォーラム「大学入試を設計するー「大学入試研究」の必要性とその役割ーを始めさせていただきます．

私は，本日の全体進行を担当いたします東北大学入試センターの久保と申します．どうぞよろしくお願いいたします．

開会に当たりまして，主催者を代表して東北大学総長，大野英男よりご挨拶申し上げます．

大野英男総長：

皆さん，こんにちは．東北大学総長の大野英男でございます．久しぶりの対面も含めた会場でのご挨拶ということで，こういう感じだったと今，私も改めて思っているところでございます．

今回，32回目となりました東北大学高等教育フォーラムの開会に当たりまして，一言ご挨拶をさせていただければと思います．フェイスシールドも用意してもらったのですが，上下がよくわからない状況でしたので，マスクでお話をさせていただきます．十分聞こえますか．はい，ありがとうございます．

本日は，講師をお務めいただくお茶の水女子大学 安成英樹先生，青森県立青森高等学校教諭 笠井敦司先生，武蔵高等学校中学校校長 杉山剛士先生をはじめとして，お忙しい中皆様にご出席あるいはご参加いただきまして，誠にありがとうございます．

本フォーラムは例年2回，春と秋に開催しており，この春の5月にも高大接続をテーマとし



て開催を予定しておりましたが，このたびの新型コロナウイルス感染症の影響によって延期をさせていただきます．関係者力を合わせて，本日より早く，ここに開催できることになりました．

今年の年明けから，もう本当にコロナ一色ということになりましたけれども，急速な世界的広がりを見せた新型コロナウイルス感染症によって世界が大きく変わりつつあります．ニューノーマル，あるいは新しい日常というものが出てつつあり，且つその後にはポストコロナの世界というものが見えつつあるところであります．

本学も，この7月にコネクテッドユニバーシティ戦略というものを定めまして，大学の変革を更に加速することにしております．諸活動のデジタルトランスフォーメーションを強力に進めて，サイバーとリアルの空間，その融合を進め，ボーダレスあるいは多様性，更にはインクルーシブを実現する大学，そして社会を創造していきたいと考えております．

この春の学期の初めから私ども，4,400科目の授業をオンラインで提供してまいりました．10月には2学期が開始されますが，十分な感

染防止対策を講じた上で対面、そしてオンラインを併用する形で実施を予定しております。

また、本日この萩ホールにお越しいただいている皆様のほかに、オンラインでご参加いただいている多くの参加者がいらっしゃいます。こうしたハイブリッド企画というものが、ポストコロナ時代にも、イベントの1つの形として定着すると私たちとしては考えております。

さて、今日のフォーラムのテーマである大学入試制度ですけれども、昨年、ついこの間ですけれども、随分昔のようにも思えますが、昨年から今年にかけて予期せぬ大きな出来事があったことは、私たち共通に記憶しているところであります。まず昨年11月に大学入学共通テストにおける英語民間試験導入が延期されました。12月には記述式の問題の導入も見送られています。受験生、そして受験生を指導される高校の先生、更に私ども大学も、急遽対応に追われた次第であります。

現在、文科省では大学入試のあり方に関する検討会議が立ち上がっており、これらの検証を含めてさまざまな検討が進んでいます。ここに新型コロナウイルス感染症の問題が加わり、不確定要素が極めて多い状況が続いています。いずれにいたしましても、令和3年度入試はウィズコロナ時代の最初の入試になります。そういう意味で、私たちがそれをどういうふうに考え、どういうふうに準備していくかというのは、極めて重要なものであるというふうに思っております。

大学入試を設計する、と題した本日のフォーラムでは、初めに本学の倉元直樹教授、そして宮本友弘教授が、本学における入試研究についてお話をさせていただくことになっています。その後お茶の水女子大学の安成先生から、お茶大新フンボルト入試の状況などをお話いただきます。更に高校の現場から、青森高等学校の笠井先生、そして私立武蔵高等学校中学校の杉山先生にご登壇をいただくことになっています。

現在、各大学では、本学も含めて感染症対策に留意しつつ、予定されたスケジュールに沿って入試の準備を進めているところであります。起こりうる問題を予見し、何より受験生が安心して試験に臨めるよう新しいスタイルで実施することに向けて、本日のフォーラムも新しいスタイルですけれども、本日のフォーラムが皆様に新たな発見をもたらし、更に我々のこういう新型コロナウイルスを含めた新しい状況に対応する一助となることを願ひまして、私からのご挨拶とさせていただきます。本日はご参加いただき、まことにありがとうございます。どうぞよろしくお願いいたします。

(拍手)

久保沙織准教授（司会）：

大野総長、ありがとうございました。

ここでお知らせとお願いがございます。まず、本日の進行についてのお知らせです。来場参加の皆様はお手元の封筒に、オンライン参加の皆様は事前にメールにてご案内させていただいたオンライン参加者用ページに配付資料がございます。配布資料のプログラムをご覧ください。本日は3部構成となっており、第1部の基調講演では東北大学入試センターの倉元先生、宮本先生からそれぞれ35分程度お話をいただきます。第2部は、現状報告として安成先生、笠井先生、杉山先生より、それぞれ20分程度お話をいただきます。その後、第3部では5人の先生方に再びご登壇いただき、基調講演、現状報告を踏まえての討議を行います。第1部終了後と第2部終了後に、それぞれ20分程度の休憩を挟み、本フォーラムの終了は17時頃を予定しております。なお、基調講演、現状報告でお話いただきます先生方の詳しいプロフィールにつきましては、配付資料に含まれておりますのでご覧いただければと思います。

次に、皆様へのお願いです。このたびのフォ



ーラムでは、討議のための質問票及び事後アンケートをウェブ上でご記入いただくようご用意いたしました。まず、討議のための質問票についてご説明させていただきます。来場参加の皆様は、「第32回東北大学高等教育フォーラム 討議質問用」という配付資料に記載されているQRコードを読み取り、当該ウェブページにアクセスしてください。オンライン参加の皆様は、事前にご案内させていただいたオンライン参加者用ページより、「討議質問票へ」を選択してください。現在投影されているスライドに表示されているQRコードからも、質問票のウェブページへアクセスしていただくことができます。第3部の討議に反映させていただきますので、ご記入は第2部終了後の15時50分までに行っていただくようお願いいたします。なお、基調講演、現状報告に対するご質問やご意見は、15時50分までの間であれば、お一人につき何度でもご記入いただくことが可能です。二度目以降続けて入力する場合には、「別の回答を送信」と表示されることがありますが、そちらを選択していただいても構いません。また、大変恐れ入りますが、討議のためのご質問、ご意見の受け付けは、今回はウェブからのみとなりますので、ご理解のほどよろしくお願い申し上げます。

続いて、フォーラム終了後のアンケートへのご協力のお願いです。来場参加の皆様はQRコードを読み取り、ウェブ上でご回答いただく方

法と、用紙に直接ご記入いただく方法のいずれかをご選択いただけます。用紙にご記入いただいた場合には、受付に回収箱を設置しておりますので、お帰りの際にご提出ください。オンライン参加の皆様は、事前にご案内させていただいたオンライン参加者用ページより、「アンケートへ」を選択してください。アンケートへのご回答はフォーラム終了後をお願いいたします。

なお、今年も本フォーラムの内容等を記載した報告書を、参加された皆様にご送付することにしております。皆様のご協力をいただき、本日は有意義な会となりますよう努めさせていただきますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

基調講演者紹介

基調講演者 1

倉元 直樹（くらもと なおき）氏

1961 年北海道生まれ

〔教員歴〕

大学入試センター研究開発部 助手	(1990 年 12 月 ～ 1999 年 3 月)
東北大学アドミッションセンター 助教授	(1999 年 4 月 ～ 2004 年 3 月)
東北大学高等教育開発推進センター 准教授	(2004 年 4 月 ～ 2014 年 3 月)
東北大学高度教養教育・学生支援機構 准教授	(2014 年 4 月 ～ 2015 年 9 月)
東北大学高度教養教育・学生支援機構 教授	(2015 年 10 月 ～ 現在に至る)

〔主な研究歴〕

専門は教育心理学（テスト学，大学入試学）

〔主な著書，研究業績〕

倉元直樹編（2020）．「大学入試学」の誕生，東北大学大学入試研究シリーズ 第 1 巻，金子書房．

倉元直樹編（2020）．大学入試センター試験から大学入学共通テストへ，東北大学大学入試研究シリーズ 第 2 巻，金子書房．

倉元直樹監修（2020）．変革期の大学入試，東北大学大学入試研究シリーズ 第 3 巻，金子書房．

宮本友弘・倉元直樹（2017）．国立大学における個別学力試験の解答形式の分類，日本テスト学会誌，No. 13，69-84

Kuramoto, N & Koizumi, R. (2016). Current issues in large-scale educational assessment in Japan: focus on national assessment of academic ability and university entrance examinations. *Assessment in Education: Principles, Policy & Practice*, in press.

日本テスト学会編（2007）．テスト・スタンダード——日本のテストの将来に向けて——，金子書房（共同執筆）

〔学会活動等〕

日本テスト学会，日本教育心理学会等
日本テスト学会理事（2005 年より）

〔その他の特記事項〕

全国大学入学者選抜研究連絡協議会企画委員会委員（2010 年 5 月より [継続中]）

日本行動計量学会 林知己夫賞（優秀賞） 受賞（第 27 号）（2007 年）

日本教育心理学会 城戸奨励賞受賞（第 37 号）（1995 年）

基調講演者 2

宮本 友弘（みやもと ともひろ）氏

〔教員歴〕

メディア教育開発センター研究開発部助手（8年間）
びわこ成蹊スポーツ大学スポーツ学部准教授（5年間）
聖徳大学大学院教職研究科准教授（8年間）
東北大学高度教養教育・学生支援機構准教授（4年間）
東北大学高度教養教育・学生支援機構教授（1年目，現職）

〔主な研究歴〕

専門は教育心理学（児童期・青年期の学力，動機づけ，学習方略）

〔主な著書，研究業績〕

宮本友弘（編）（2020）．変革期の大学入試 金子書房
宮本友弘・倉元直樹・庄司強（2020）．高校教員は新傾向の国語記述式問題をどう捉えているか
—全国調査から— 大学入試研究ジャーナル， 30， 30-35.
宮本友弘（2019）．「主体性」評価の課題と展望—心理学と東北大学 AO 入試からの示唆大学入
試における— 東北大学高度教養教育・学生支援機構（編）「主体性」の評価
—その理念と現実—（pp. 7-29）東北大学出版会
宮本友弘（2019）．児童期の学力の発達に関する縦断的研究 風間書房
宮本友弘・田中光晴・庄司強（2019）．新共通テスト（イメージ例）が測定する資質・能力の分
析（2）—センター試験及び個別学力試験の遂行状況との比較から—大学入試研究ジャーナル
29， 99-104.
宮本友弘・倉元直樹（2018）．国立大学の個別学力検査における記述式問題の出題状況の分析
—80字以上の記述式問題に焦点を当てて—，大学入試研究ジャーナル， 28， 113-118.
宮本友弘・倉元直樹（2017）．国立大学における個別学力試験の解答形式の分類
日本テスト学会誌， 13， 69-84.

〔学会活動等〕

日本テスト学会理事（4年目）
日本教育心理学会「教育心理学研究」編集委員会委員（2年目）
「指導と評価」（図書文化）編集委員（5年目）

基調講演 1：「大学入試学」の淵源と展開 — 個別大学の入試関連組織と入試戦略 —

東北大学高度教養教育・学生支援機構教授

倉元 直樹 氏

【講師紹介】

久保沙織准教授（司会）：

それでは早速、第 1 部の基調講演に移らせていただきます。基調講演 1、演題は『「大学入試学」の淵源と展開— 個別大学の入試関連組織と入試戦略 —』です。東北大学教授、倉元直樹先生、よろしくお願いいたします。

（拍手）

倉元直樹教授：

ご挨拶

ご紹介にあずかりました東北大学の倉元でございます。どうぞよろしくお願いいたします。本日、たくさんの方にご参加いただきましてありがとうございます。見渡す限りは、あまりたくさんの方はいらっしゃらないのですが、背後に同時配信で聞いておられる方々がたくさんいらっしゃるということで、非常に嬉しく思っている次第でございます。

まず、お詫びですが、タイトルに関して、サブタイトルの方が 5 月にお話をしようと考えていたものをそのままにしております。かなり中身が変わったかもしれません。あらかじめ、お詫びをいたします。

本講演の構成は、このようになっております。講演時間は 35 分ぐらいを予定しております。お聞き苦しいところがあるかと思いますが、どうぞよろしくお願いいたします。

今回の企画と本講演の概要

最初に、このフォーラムは大変異例でございます。私どもの入試関連のテーマとしては 17 回



目なのですが、2 つの点で異例でございます。

まず、開催予定が春から秋へと変更になったということです。これは東日本大震災のときに一度ございまして、今回 2 回目です。

もう 1 つ、今回初めての試みというのが同時配信でございまして、これにはひやひやしております。どうも話がおかしいのは、主催者の立場と基調講演者の立場が、今、入り混じっていることでして、今回、もう 1 つ異例なのは基調講演 2 名とも東北大学入試センターから立てたということです。単独の基調講演というのは一度だけあったのですが、今回はこれが極めて異例なところかなと思っています。と申しますのは、先ほど開演前に金子書房の方から担当者のご紹介があったのですが、この「大学入試学の誕生」という本を皮切りに「東北大学大学入試研究シリーズ」というものを出版したというわけです。それにちなんだフォーラムという性格になるのが今回の企画です。出してはみたものの、ずいぶん大風呂敷を広げてしまったな、と内心ぶるぶ

る震えているところでございます。

それでも、「大学入試学」という大風呂敷を広げたのだから、何かどういうものかということを示すべきであろうと考えました。「入試」でございますので、「解答例」を持ってくる必要があるだろうということで、本日、用意したのが以下の4つのトピックです。それぞれお話をさせていただこうと思います。

大学入試学とは？

まず、「大学入試学」という言葉、今から自分の書いたものを振り返ってみると、十数年前から随分言っていたようなんですね。「これが必要だ」ということは、ずっと思っていたのですが、思い切って表に出してみようということになったのは、やはり、この時代のなせる業かなと思っています。

大学入試学というのは、当然、大学入試をテーマとした研究ですけども、・・・これは私が考えるところということですが、・・・1つは研究母体が設置されている組織に資する研究的成果を生むことを目的とした営み、平たく言えば東北大学の入試センターである以上、東北大学にプラスになるような研究をしなければいけない。これは、あらかじめ与えられたミッションなのだろうと思っています。

もう1つ、日本社会に資する、・・・ちょっと語呂が悪いのですが、・・・大局的な大学入試選抜制度の設計に資する研究的成果を生むことを目的とした試み、学術研究の成果に基づくエビデンスの積み上げが必要である、というわけです。平たく言えば、東北大学の入試センターとしては東北大学のためと同時に、おそらくは日本の社会にプラスになるようなことを目的とした研究というのをしなければいけないのだろうなと思っています。その結果として、大学入試研究、これが普通の研究と違う性質があるだろうと考えるゆえんが、2つ出てまいります。

1つは、研究主体です。もちろん、個人の従来型の研究、純粋な研究として入試を研究、テーマ

とされている方は当然いらっしゃると思います。けれども、おそらく大学を単位とした研究組織による研究という形態が典型になってくるものなのではないかなと思っています。これには歴史的な経緯があるということです。

2つ目には、先ほども申しましたが、研究組織の設立母体の目的と利益に沿った機関研究を含むということです。東北大学の入試センターである以上、東北大学がこのセンターを持つ意義というのは、やはりその成果を大学に還元する必要があるということになってくるだろうと思います。それがなければ、この組織を持つ意味はないだろうという話になってくる。ということは、我々の研究成果を誰が評価をするかというと、仲間内、同じ研究仲間というよりも、それだけではなく、外からの評価が大事になってくるのではないかな、と思います。大風呂敷を広げるのは、結構、勇気がいりまして、多分、同業者からは笑われるのだろうな、と思いながら、あえて大きな「大学入試学」ということばを使ったのは、こういう意図がございます。おそらく、仲間内ではなくて、外から評価を受けるということが必要なだろうと思っています。

おそらく、研究テーマとして大学入試研究が積み上がっていきますと、大きな大学入試政策の策定の根拠、エビデンスを出していくということも期待されるのでありましょう。ただ、結構、難しい部分がありまして、1つは、・・・これは後でお話しますが、・・・少々、格好つけて言ってみますと、我が国の大学入試の持つ構造的困難、1つは二重性、国民的関心事であると同時に当事者間の問題でもあるというところですね。それから、相矛盾する異なる理念、いろんな条件、・・・実施の条件、・・・この均衡点を探っていく必要があるだろう、というわけです。これは、大学入試というものが持つ難しさであり、また学問的に乗り越えなければいけない部分じゃないのかなと思っています部分です。

もう1つは、これは、実は、今日はあまりお話しできないところかなと思いますけれども、

普通に学生を育てるということにはなかなか難しい部分があります。と言いますのは、我々が扱っているデータの機密性、・・・例えば、学生の成績、入試の情報といったようなものは、もう、もろに個人情報ですから、こういったものを学生に触らせることはできないのです。いきおい、学生にはこういったものに関わらないテーマで研究をさせながら、大学入試に関する見識を深めるということをやってもらわざるを得ません。この辺が難しいところでございます。

大学入試の学問化構想

さて、ここから先は、実は、先ほどの「大学入試学の誕生」という本の中に入れてさせていただいたものの中からの紹介になってくるのですが、実は、大学入試学というのは一種の「官製学問」でございまして、・・・これは悪い言葉ではないと私は思っているのですが、・・・要は、戦後、文部省の大学入試政策は、国立大学を対象として科学的客観的選抜を促すということを目途（もくと）とされていた、ということです。したがって、国立大学にかなり力を入れて整備をされております。この辺は第1巻の第2章に詳しく書かれていますが、当時、これを担当されていた文部省の方が、研究方面に転身されまして書き残されたものでございます。

1つは、「入選研」と当時呼ばれたものですが、けれども、国立大学の中に入学選抜の方法を研究する委員会を設ける、という施策です。これは委員会組織であるというところがみそです。1967年からということですので、いわゆる「能研テスト」というのが当時あったのですが、それとセットで考えられたものではないかと思えます。つまり、大学に「入試の研究をなさい」ということは文部科学省のほうから政策として言われていたということですね。実は、今でもこれを後継する組織が続いて存在しています。いわゆる学会のような役割を果たすもので、「入研協」と呼んでおります。国立大学入学選抜研究連絡協議会、これはセンター試験の前身に当たる

共通1次の発足と同時にできた組織でございます。当時は国立大学の入試研究の交流と協力ということを目的にしてできたもので、今は、センター試験利用大学による全国大学入学選抜研究連絡協議会というふうに変わっております。ただ、この頃の精神が、今、受け継がれているかどうかということとはなかなか難しいのかもしれない。

事務体制も同時に整備が行われました。学生課の中の教務係の担当であった入試の業務を入学主幹、入学試験係長、ひいては入試課というふうに格上げしていった時期がございました。今では、各大学に入試課というセクションが当然のようにあるわけですが、当時、こういう政策をとっていただいていたということですね。

2000年代に入りまして、「アドミッションセンター」という組織ができるようになります。私も、東北大学においては、今、「東北大学入試センター」と呼んでいる組織ですが、その前身に当たります。1999年に設立されました。国立大学の中では一番古いアドミッションセンターということになります。その中の大きな役割がAO入試の企画・実施、広報活動といったところだったんですが、同時に入試改善の研究を行うということも大事なミッションとなりました。これまでと違い、・・・一番違ったことは何かというと、委員会組織というのは人が入れ替わってくるんですね。委員として2年務める、4年務める、そこで交代になると積み上げというのはなかなかやはり難しいところがございます。それが教員定員をつけていただくことによって、恒常的に入試研究をする組織ができた、というわけです。

すなわち、戦後文部省は入試の専門性というのを認識し、政策化していったということになります。その器としてアドミッションセンターというものがつくられて20年たったわけですが、今、その成果が問われる時期かなというふうに思います。ということで、ここから具体的なテーマの話に移っていきます。

高大接続改革の方針転換

1 つは、高大接続の方針転換という話です。先ほど、総長のご挨拶にもありましたけれども、高大接続改革はなぜ方針転換を迫られたのか、経緯を簡単にお話しします。これは皆さんもご存じのところだと思いますけれども、2014 年 12 月の高大接続方針で極めてラディカルな入試改革の提案がなされます。センター試験の廃止もここに含まれておりました。それを継いで、これを具体化するべく高大接続システム改革会議で議論をしていただいたのですが、なかなか具体的な像が見えないままに、3 年前、文部科学省のほうで実施方針というのが示されて、改革の 3 本柱が立てられたという経緯です。3 本柱というのは「共通試験への記述式の導入」「英語民間試験の導入」「個別選抜での主体性評価」ということだったわけですが、残念ながらこれが実現に至ることはなく、昨年の末に次々と英語民間試験、記述式導入が見送りになるという経過をたどりました。また、今年 7 月には主体性評価に関わるはずだった教育情報管理機構の認可が取り消されるというようなことで、曲がり角に来ているわけです。ただ、機構の認可が取り消しになったから主体性評価というものが取り下げられたわけではないというふうに私は認識をしております。

この原因に関して、非常に簡単どころではありませんけれども、各論 1 つひとつではなくて総論的なアプローチを試みたいというのが今日の方針でございます。1 つは「大学入試の二重性」、1 つは大学入試が「妥協の芸術」であると、この 2 点について話をさせていただきたいと思っております。

大学入試の二重性

これはもしかしたら刺激的な物言いなのかもしれないのですが、改革がトップダウンで始まったということ、これが問題だったのではないかと思います。つまり、出発点に誤りがあったということです。現実的に目標達成の可能

性がない改革へ行ってしまったのは、おそらく、この「大学入試の二重性」ということの見落としではないかと考えているわけです。高校からも大学からも現行の・・・現行というのはこの改革前の・・・大学入試制度に対する改革の機運は存在しなかったにもかかわらず、性急な改革が始まったのはこの二重性を見落としに由来するのではないかと思うわけです。

この「二重性」とは何のことでしょうか。1 つは、まごうことなく入試は「国民的関心事」でございます。誰もが関心を持ち、また意見を持つことができるテーマであり、持っているテーマであるということです。ただ、それと同時にやはり「当事者性」が強いものであると。入試というのは基本的に当事者間、つまり受験生と大学の問題。ここですね。国民的関心事である以上、大学入試が問題になるということは大きなニュースバリューになります。これはいい意味でも、というか、・・・いい意味で問題になることはあまりなくて悪い意味が多いのですが、入試ミスなどが起こると非常に大きく取り上げられてしまうというのは、やはり皆さんが関心を持っているからだと言えます。その中で大学入試改革というのは、これはやっぱり世間の注目を引くものだったということは思います。

ただ、入試というのは本質的に当事者の問題でもあります。ここを見落としたがために改革に走ってしまったのかな・・・実現性がないというふうに言わざるを得ない改革に走ってしまったのかな、と思うわけです。この二重性の中でも当事者性ということに関しては、実は過去にちょっとした調査をしております。質問は簡単です。「東北大学の入試が、あなたの高校の教育にどの程度影響を与えますか」という質問を全国 2,000 ぐらいの高校に問いまして、1,300 ぐらい返ってきました。これはランダムサンプルではなくて、過去数年間に東北大学に受験生を送ったことがある学校ということです。結果を単純集計しますと、40%以上が「あまりない」と答えたんですね。東北大学の入試、自分ところの教

育にあまり影響はない。ただ、ちょっとした仕掛けをしました。それは集計の仕方を変えたのです。合格者、志願者数で重みをつけました。というのは、例えば、過去5年間で一人しか志願者を送っていない高校には「1」、1,000人送っている高校があるとすれば、それには「1,000」というウェイトをつけたとすると、「かなりある」という回答が跳ね上がってくるのです。

つまり、東北大学、・・・旧帝国大学の1つでもあり、指定国立大学法人の1つでもあり、それなりのプレゼンスを持っているという自負はしているんですが、・・・単体で見たときの影響力というのは、そう大したことはないのです。ただ、東北大学に受験生を送る高校から見ると、非常に大きな影響がある。大学入試は当事者間の問題である、というのは、こういうところです。現在、ご存じのとおり大学入試も多様化していますし、高校教育も非常に多様化しています。それぞれの当事者が抱える問題というのは、場面場面で大きく違うのです。ということは、それは、やはり、1つひとつ、もうちょっと細かく見ていただく必要がある部分かな、と思います。そこに一律、トップダウンの大きな改革をかぶせようとしたところが、多分なかなか難しい結果につながったのかなと思います。

大学入試は妥協の芸術

もう1つは、おそらく、1つの理念だけを押し通そうとしたことにあるのではないかと思います。これ6年前なのですが、私は「大学入試は妥協の芸術だ」ということを言ったことがあります。手前味噌ですが、奥深い、いい言葉だなと思います。というのは、やはりいろんな理念が出てくるんですね。それは相入れないものが多いです。その中で条件、実施できる可能性ということも含めてその均衡点を見出すというところで、何とか皆さんが許容できる制度になっていくわけですが、そういったところを1つだけの理念で押し通すということは、このバランスが崩れてしまうということです。

大学入試の三原則、これはいわゆる四六答申、1971年の答申に過去の日本の大学入試政策を振り返って出てきた言葉なのですが、・・・九州大学の木村先生がこれを発見して、ほかにも同じようなことを言っていた方もいたのですけれども・・・「公平性の確保」、「適切な能力の判定」、「下級学校への悪影響の排除」という3つの原理のバランスで大学入試政策が成り立っていたということをおっしゃいました。これなかなか、非常に有用性の高い概念かなと思います。

高大接続改革は三位一体改革であると言われていました。高校教育、大学教育、大学入試入学選抜の一体的な改革である、と。大学入試の改革というのは、高校教育及び大学教育を改革するための梃子である。すなわち、「下級学校への悪影響の排除」という概念を更に拡張して、プラスの影響を上にも下に及ぼすというところに持ってきた。ただ、その分、公平性に関して、あるいは適切な能力の判定という原理に関しては、あまり重視していただけなかったのかな、というようにあります。

高大接続改革の総括

おそらく、出発点の誤りという指摘が正しいのであれば、それは「大学入試学」というものが担うべきだったエビデンスが欠如していたんだろう、と思うわけです。大学入試の「二重性」、「妥協の芸術」という性質を考えるならば、もうちょっと、・・・理念はいいとして・・・方法に配慮があつてしかるべきだったかなというように思います。

大学入試は、多分に技術的な専門性の要素があります。ここでは詳しく申し上げませんが、数学の記述式問題、最初に「こういった問題が記述式として共通テストに課されるのだ」と言われたところから、最後、いわゆる試行調査で出てきた問題は、相当、急激に変わっていました。これは、やはり、「できる」「できない」の問題ということをあまり重たく考えていただけなかったところが原因なのかな、というふうに思

います。

主体性評価の技術的な困難に関しては、2 回前のフォーラムで取り上げたところです。こういったことを考えると、やはり、我々、入試の研究に携わる者として、おそらく、政策に使っていただけのような結果を十分出してきていないという反省をしなければいけないのかな、ということも思います。

ただ、一連の議論の中で改めて成果として分かったのは、個別選抜で、今、国立大学が課しているような記述式問題、その重要性ということがコンセンサスを得て再認識されたことではないかなと思います。おそらく、これが、次の問題を考える際に重要な役割を持ってきているのではないかな、ということです。

コロナ禍の下での大学入試

最後、コロナ禍の下での大学入試ということについて、今、私が考えているところをお話させていただきます。

まず、コロナウイルス感染症の蔓延というのは、これは、おそらく、世界中の誰も予想していない予想外の出来事だったのではないかなと思います。そういったところで、それでは入試をどう考えるのか、というのは、これは大学入試学にとってはいきなりの応用問題で、ここをある程度整理して考えられなければ、今の状況に耐えられるレベルに達していないということになるのかなと思います。

ということで、まず問題点を整理させていただきます。「長期的な課題」と「当面の課題」、それから「政策的な課題」と「個別大学の課題」ということです。

アフターコロナの時代の大学入試の設計、これは「長期的な課題」になるかなと思います。アフターコロナ、ウイズコロナの時代に入試は根本的に変わるのか。明らかに言えるのは、この COVID-19 という感染症と入試の実施は非常に相性が悪いということです。例えば、試験会場、どのぐらいの間隔をとれば「密になった」と言わ

ないでいただけるのか。準備の、試験問題を作成するところも、どうしても対面でやらざるを得ないようなところもあります。ですので、非常に相性が悪い。さらには、高校入試の場合は近隣の高校を受験するというのが典型ですけども、大学はそうはいきません。広域の移動を伴います。こういった条件が加わったという事実はございます。

ただ、そこで「評価すべき能力」に何か変更を要求されるという事態ではないのだろうと考えます。ということは、やはり、いわゆる必要なスジ、条件、理念に新たな 1 つの要素が加わったということで、「妥協の芸術」としての入試に新たな均衡点を模索するというのが、これからの入試の設計に必要になってくるのかな、と思います。現時点では、やはり材料が不足しています。構造改革的な再設計を語るには時期尚早ということで、この話題のこの切り口は、ここで撤退をさせていただきます。

ということで、短期的な問題、当面の課題です。令和 3 年度の入試をどう実施するかということになります。政策的な課題、これは文部科学省、それから国立大学の場合は国大協でお考えいただいているところですが、総合型選抜、学校推薦型選抜、一般選抜、全て現在進行形で対応中でございます。これに、今年、特別な状況が加わるのが、いわゆる高大接続改革初年度の受験生、彼らに対して何をどうするかということになってきます。

現在のところ、実施時期や選抜資料の配慮、実施上のコロナ対策等さまざまなご批判がありますが、こういったことを各大学に任せるのではなくて、きちんとした指針を持って導いてもらっている、政策的に導いてもらっているということには、実施の現場からいうと感謝の念しかないというところです。もちろん、いろいろと問題はあると思います。では、個別大学としてどうするのか。それは、東北大学の令和 3 年度入試をどう乗り切るかということですが、密状態の回避、これは文部科学省の指針に従うこ

とになると思います。問題は、県境を越えた広域移動というところです。これなかなか悩ましい問題です。ここをどうするのかということを、東北大学の学部入試の構成を考えながら材料を集めてみました、というのが次の話です。

緊急高校調査

東北大学の入試は、大きなところで「AO 入試Ⅱ期」「Ⅲ期」、それから「一般選抜」というくくりで実施をしております。Ⅱ期はもうすぐですね、11月に実施です。10月には募集が始まります。募集期間が10月に設定されています。Ⅲ期は共通テストの後、2月の実施です。一般選抜、これはほかの国立大学と同様に前期日程、後期日程の日は2月25、26日、3月12日とそれぞれ決められております。

緊急の高校調査を行いました。東北大学に志願者・合格者が多い300校ほどが対象で、まだ調査の途中でございます。回収率60%弱というところまでの集計です。状況設定は、新型コロナウイルスが悪化して、県境をまたいだ行動に制限がかかっている上に、大学独自で判断をしなければならない状況ということで設定しました。

まず、現状ぐらいの感染状況であれば、おそらく感染対策をしながら実施をするのに問題はないだろう、ということです。もしも、ものすごく状況が悪くなったら、どういうことを望みますか、ということです。全国で「これはもう大変だ」ということになれば、おそらく大学独自で判断をするという状況ではないので、この間のところ、そういった状況に限定して調査をした結果でございます。

4つの場面を設定いたしました。それぞれ状況が異なりますので、一律に扱えないということで4場面です。ここから先は結果について淡々と申し上げます。

まず、AOⅡ期、これは第1次選考が11月7日に実施予定されています。東北大学のAO入試というのは、いわゆる「学力重視」ということをうたっておりまして、今年度、令和3年度から、

全ての実施学部で第1次選考で筆記試験を課す予定なのですね。そのことに関して伺いました。

選択肢は五つです。「選抜を中止して、定員を一般選抜ないしはAOⅢ期に割り振る」というご意見は単純集計をすると2割ぐらい。「筆記試験を中止して書類で選抜せよ」というのは10%ぐらいあるのですが、全体としていけば少数派です。当事者として一番希望されているのは、実は、「地方会場」なのですね。実は、これは非常に困ったことでして、地方会場という選択肢は入れたのですが、実質的にはCOVID-19に対応する中で、地方会場は不可能だと思います。というのは、これ個別対応に近くなってくるんですね。例えば、東京に地方会場を設けますと、東京の受験者はいいいのですが、県境を越えて東京周辺のところから感染状況のひどい東京に来なさいと言うのか、という話になってきます。それだったら、例えば、長野にも設けてくれ、という話になるので、これは実質的には実施できません。ただ、これを入れておいたのは、もしも、一般選抜で、例えば、国立大学の全てが協調して会場を融通し合うというようなことができれば不可能ではないだろうな、と思ったからです。ただ、圧倒的に回答がここに集中してしまったというのが、結果です。

第2次選考、これは面接中心で行っています。選択肢を1つ増やしました、「オンラインの面接」というのを入れました。「面接試験の中止」に関しては4分の1ぐらいは容認をするという結果です。これは普通に集計しても重みづけをしても変わりません。ほとんど変わりません。1つの特徴は、4割ぐらいはオンラインの面接を容認しているということです。この結果を見て、オンラインの選択肢は筆記試験のところにも入れておけばよかったな、と後になって思いました。というのは、筆記試験はやはり、今、技術的に難しいだろうということで、選択肢には入れなかったのですけれども、面接であれば、「オンライン、まあまあいいんじゃないか」という意見もあるというのも現状です。

AOⅢ期、これは時期が全然違いまして、センター試験の直後で日程がきちきちになっていて、もう特別な対応は難しいということですから、選択肢は3つに絞りました。大変な状況でも「予定どおりに実施」をしてくれ、2次というのは面接が中心になりますけれども、それは中止にして「共通テストで選抜」をしてくれ、選抜を中止にして「定員を一般選抜に」という3つの選択肢の中では、「共通テストで選抜」が多数派です。それはそれで非常によく分かります。というのは、先ほど申しましたタイトな日程ですので、ほかのことはできません。やはり共通テストの比重が重たい選抜をしています。必ずしもそうではない区分もあるんですけども、そういうところをご理解いただいているんだろうなと思います。

最後、一般選抜です。「募集をやめていいよ」という学校は1つもなかったです。あとは、「地方会場」か「個別を中止にする」か「予定どおりやってもらう」か、ということなんですが、これは「地方会場」と「予定どおり」というので半々に分かれている感じです。つまり、全体的に言えば必ずしも全部がそういう意見ということではないのですが、いわゆる筆記試験的なものを望むという回答がやはり多いのだな、というふうに思っております。

まとめ

まとめです。「大学入試学」の目的は個別大学、私の場合は「東北大学の利益」を追求するということと「公共性」との両立ということが必要とされているだろう、ということです。今までの流れからいいますと、このフォーラムを17回実施させていただいていることもあり、個別大学、東北大学への貢献という点ではある程度評価をいただいている証拠かなとは思いますが、ただ、政策には我々の知見が活かされているとは思えないという、ここに大きな課題があるかなと思います。

高大接続改革が方針転換をしなければいけな

かった原因は、おそらく出発点のところで大学入試の当事者性を軽視したこと、それから下級学校、・・・今回は大学もですね・・・への影響ということに、行き過ぎた力点を置いたところにあったのかな、と思います。したがって、この轍を踏まないようにするために、やはり、現場の意見というのが大事になります。そこで、今、高校側に意見を伺っているところです。現在のところ集まった結果が、非常に多様である。ということで、改めて難しさを感じているところです。

あとは、ディスカッションのところでご質問いただければと思います。ご清聴ありがとうございます。

(拍手)

久保沙織准教授(司会)：

倉元先生、ありがとうございました。

冒頭で申し上げたとおり、ご質問等につきましては、来場参加の皆様はお手元のQRコードから、オンライン参加の皆様はオンライン参加者用ページより、ウェブ上での入力をお願いいたします。

注：本講演は、JSPS 科研費 JP20K20421 の助成を受けた研究成果の一部である。

資料



「大学入試学」の淵源と展開

—個別大学の入試関連組織と入試戦略—

東北大学高度教養教育・学生支援機構
倉元 直樹

2020/9/23

大学入試を設計する：基調講演1

1



はじめに (3)

- 中身の実寸に比べてかなり大きな風呂敷???
- **大学入試学 (admission studies)** とは何か? ← 本フォーラムで**解答例**を示すべき
 - トピック1：大学入試学とは?
 - トピック2：大学入試の学問化構想
 - トピック3：高大接続改革の方向転換
 - トピック4：コロナ禍の下での対応戦略

2020/9/23

大学入試を設計する：基調講演1

5



本講演の構成

- はじめに
- 大学入試学とは?
- 大学入試の学問化構想
- 高大接続改革の方針転換
- 大学入試の二重性
- 大学入試は妥協の芸術
- 高大接続改革の総括
- コロナ禍の下での大学入試
- 緊急高校調査
- まとめ

2020/9/23

大学入試を設計する：基調講演1

2



大学入試学とは? (1)

- 大学入試学 (admission studies)
 1. 研究母体が設置された**組織に資する研究的成果**を産むことを目的とした営み
→ 伝統的な学問と異なる二つの要素
 2. 日本社会に資する**大局的な大学入学者選抜制度設計に資する研究的成果**を産むことを目的とした営み
→ 学術研究の成果に基づくエビデンスの積み上げの必要

2020/9/23

大学入試を設計する：基調講演1

6



はじめに (1)

- 東北大学高等教育フォーラム
 - 第1回+偶数回 → 高大連携、入試の企画
 - 今回で実質17回目：2つの点で異例
- 開催予定が春から秋へと変更
 - **東日本大震災** (第14回 [8]) → 9月2日
 - コロナ禍 (今回) → 秋への変更+オンライン参加
 - **イベントの同時配信**は初の試み

2020/9/23

大学入試を設計する：基調講演1

3



大学入試学とは? (2)

- 大学入試研究が持つ**異質な要素**
 1. **研究主体**：研究者の所属大学を単位とした研究組織が典型 ← 歴史的経緯から
 2. **研究目的**：研究組織の設立母体の目的と利益に沿った機関研究を含む
 - 大学入学者選抜に関わる**外部からの組織評価** (←→ 同業者同士の内部的な相互評価)

2020/9/23

大学入試を設計する：基調講演1

7



はじめに (2)

- 基調講演者が2名とも**東北大学入試センター**関係者
 - 単独の基調講演を務めたことはある (第26回 [14])
- 「異例」の理由
 - **東北大学大学入試研究シリーズ**の出版
 - 第1巻「大学入試学」の誕生



2020/9/23

大学入試を設計する：基調講演1

4



大学入試学とは? (3)

- 大学入試研究が持つ公共性
 - 大学入試政策策定の**根拠**、**Eビデンス**創出の期待
- わが国における大学入試の持つ構造的困難
 - 二重性：**国民的関心事**と同時に**当事者**間の問題
 - 相矛盾する異なる理念、条件の**均衡点を探る**必要
- **データの機密性**：大学入試学成立基盤の困難
 - 研究成果の開示、研究者の育成に課題

2020/9/23

大学入試を設計する：基調講演1

8

大学入試の学問化構想 (1)

- 大学入試学は**官製(?) 学問**
- 戦後文部省の大学入試政策：科学的客観的選抜
→ **国立大学**を対象とした制度の整備
- 大学入試方法研究組織の整備（第1巻第2章）
 - 国立大学入学者選抜方法研究委員会**（入選研）
試験実施と追跡調査に基づく選抜方法の研究（1967～）
 - 国立大学入学者選抜研究連絡協議会**（入研協）
国立大学の入試研究の交流と協力（1980～）

2020/9/23

大学入試を設計する：基調講演1

9

大学入試の二重性 (1)

- 【問題点1】改革が**トップダウン**で始まったこと
- 出発点の誤り →
現実的に**目標達成の可能性がない**改革へ
 - 高校からも大学からも現行の大学入試制度に対する改革の機運は存在しなかった
 - なぜ、性急な改革がはじまったのか？
← **大学入試の二重性**（duality）の見落とし

2020/9/23

大学入試を設計する：基調講演1

13

大学入試の学問化構想 (2)

- 入学者選抜事務処理体制の整備（1967～）
 - 学生課 → 入学主幹、入学試験係長、**入試課**
- アドミッションセンター**の整備（1999～）
 - AO入試**の企画・実施、広報活動、**入試改善の研究**
 - 教員定員**の配置
- 戦後、文部省は**入試の専門性**を認識、政策化
- 器ができて20年、その成果は？

2020/9/23

大学入試を設計する：基調講演1

10

大学入試の二重性 (2)

- 大学入試の二重性
 - 入試は**国民的関心事**とであると同時に**当事者性**が強い
- 大学入試は国民的関心事
 - 大学入試が問題になる → 大きな**ニュースバリュー**
 - 大学入試改革 → 世間の耳目を引く
- 一方、大学入試は**本質的に当事者間の問題**
← ここに見落としがあったのでは？

2020/9/23

大学入試を設計する：基調講演1

14

高大接続改革の方針転換 (1)

- 高大接続改革はなぜ**方針転換**を迫られたのか？
- 高大接続改革の経緯
 - 2014年12月：高大接続答申
 - センター試験廃止等のラディカルな入試改革提案
 - 2016年3月：高大接続システム改革会議
 - 2017年7月：文部科学省実施方針
 - 改革の3本柱**（共通試験への記述式の導入、英語民間試験の導入、個別選抜での主体性評価）が明示

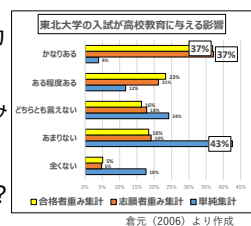
2020/9/23

大学入試を設計する：基調講演1

11

大学入試の二重性 (3)

- 東北大学の入試**の影響力（倉元、2006）
 - 単純集計では「あまりない」
 - 合格者数、志願者数で重みをつけると「かなりある」
- 大学入試は**当事者問題**
- 一律**トップダウン**は可能か？



2020/9/23

大学入試を設計する：基調講演1

15

高大接続改革の方針転換 (2)

- 英語民間試験導入延期（19/11/1）
- 共通テストへの記述式問題導入見送り（19/12/17）
- 教育情報管理機構認可取消（20/7/22）
（← 主体性評価を取り下げたわけではない）
- 本日は各論ではなく、**総論的アプローチ**を試みる
 - 大学入試の二重性
 - 大学入試は妥協の芸術

2020/9/23

大学入試を設計する：基調講演1

12

大学入試は妥協の芸術 (1)

- 【問題点2】**一つの理念**だけを押し通そうとしたこと
- 大学入試は**妥協の芸術**（倉元、2014）
 - 相矛盾する異なる理念、条件の均衡点を見出す
 - 例：手続きの公平性と実施負担
 - 大学入試の三原則**
 - 「公平性の確保」「適切な能力の判定」「下級学校への悪影響の排除」（木村・倉元、2006）

2020/9/23

大学入試を設計する：基調講演1

16

大学入試は妥協の芸術 (2)

- 高大接続改革は三位一体改革
 - 高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革（中教審、2014）
 - 大学入試の改革は高校教育及び大学教育を改革するための梃子 → 公平性に関する意識改革を提言
- 理念の中核：下級学校への悪影響の排除の拡張
- 公平性の確保や適切な能力の判定を軽視？

2020/9/23

大学入試を設計する：基調講演1

17

コロナ禍の下での大学入試 (3)

2. 当面の課題：令和3年度入試の実施
 - 政策的課題：総合型選抜・学校推薦型選抜、一般選抜（共通テスト、個別選抜）
 - ← 現在進行形で対応中
 - 特別な状況：高大接続改革初年度の受験生
 - 実施時期、選抜資料の配慮、実施上のコロナ対策等 ← 批判はあるが、緊急対応の指針に感謝

2020/9/23

大学入試を設計する：基調講演1

21

高大接続改革の総括

- 出発点の誤り ← 大学入試学（エビデンス）の欠如
 - 大学入試の二重性：国民的関心事と当事者性
 - 大学入試は妥協の芸術：三原則のバランス
- 大学入試は多分に技術的な専門性が求められる
 - 英語民間試験、数学の記述式問題にまつわる迷走
 - 主体性評価の技術的な困難（cf. 第28回フォーラム）
- 成果：個別選抜の記述式問題の重要性が再認識

2020/9/23

大学入試を設計する：基調講演1

18

コロナ禍の下での大学入試 (4)

- 個別大学の課題：東北大学の令和3年度入試をどう乗り切るか？
 - 「密」状態の回避 ← 文部科学省の指針に従う
 - 県境を越えた広域移動 ← 入試実施の必須条件
- 東北大学の学部入試構成
 - 総合型選抜：AOⅡ期（11月）、AOⅢ期（2月）
 - 一般選抜（前期日程 2/25・26、後期日程 3/12）

2020/9/23

大学入試を設計する：基調講演1

22

コロナ禍の下での大学入試 (1)

- コロナウイルス感染症（COVID-19）の蔓延
 - ← 全く予想外の出来事
- コロナ禍の下での入試をどう考えるか？
 - ← 大学入試学の応用問題
- 問題点の整理
 - 長期的課題と当面の課題
 - 政策的課題と個別大学の課題

2020/9/23

大学入試を設計する：基調講演1

19

緊急高校調査 (1)

- 対象：東北大学に志願者・合格者が多い325校
- 回収率：58.8%（191校）（9/5回答分まで）
- 状況設定：COVID-19の感染が悪化し、県境をまたいだ行動に制限が掛かっている上、大学独自で判断をしなければならない状況
- 東北大学の入試制度に応じて4場面の設定
 - ← それぞれ状況が異なるので、一律に扱えない

2020/9/23

大学入試を設計する：基調講演1

23

コロナ禍の下での大学入試 (2)

1. 長期的課題：大学入試の再設計
 - ウィズ・コロナ時代に入試は根本的に変わるのか？
 - COVID-19と入試実施の相性の悪さ
 - 大学入試の実施条件に新たな要因が加わった
 - 評価すべき能力に影響を与える要因ではない
 - 妥協の芸術としての入試に新たな均衡点の模索
 - 構造改革的な再設計を語るには時期尚早？

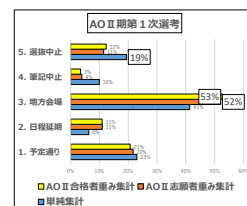
2020/9/23

大学入試を設計する：基調講演1

20

緊急高校調査 (2)

- AOⅡ期第1次選考：筆記試験、11/7実施予定
- 選抜中止、筆記試験中止（＝書類で選抜）は少数派
- 当事者は地方会場希望
- COVID-19対応の地方会場設置は困難



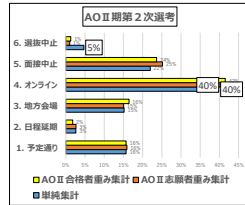
2020/9/23

大学入試を設計する：基調講演1

24

緊急高校調査 (3)

- AOⅡ期第2次選考：面接試験、11/21実施予定
- **面接試験中止**容認（＝書類＋筆記試験で選抜）も**約1/4**は存在
- 多数派（4割）は**オンライン面接試験**を容認



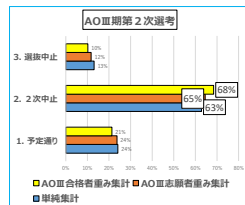
2020/9/23

大学入試を設計する：基調講演1

25

緊急高校調査 (4)

- AOⅢ期第2次選考：面接試験等、2/13実施予定
- **第2次選考(面接中心)中止**（＝大学入学共通テスト＋書類で選抜）が**多数派**
- AOⅢ期のタイトな**日程**
- 実際、**共通テスト**の比重大



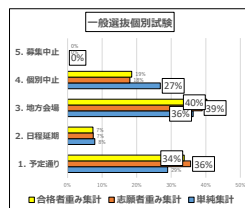
2020/9/23

大学入試を設計する：基調講演1

26

緊急高校調査 (5)

- 一般選抜個別試験：前期日程2/25・26、後期日程3/12実施予定
- **募集中止は皆無**
- **個別試験中止は少数派**
- 多数派は予定通りの実施と地方会場に2分



2020/9/23

大学入試を設計する：基調講演1

27

まとめ

- 大学入試学の目的は**個別大学の利益**と**公共性**
- **個別大学**の入試への**貢献**には一定の評価？
- **政策**には知見が行かされていない ← 大きな**課題**
- 高大接続改革の方針転換の原因は出発点？
 - 大学入試の**当事者性**の軽視、ないしは、無視
 - 下級（＋上級も？）学校への影響の**行き過ぎた力点**
- コロナ禍緊急対応には高校側も**多様な意見**

2020/9/23

大学入試を設計する：基調講演1

28

基調講演 2：「大学入試学」の実践と成果 —エビデンスに基づく東北大学の入試改革—

東北大学高度教養教育・学生支援機構教授

宮本 友弘 氏

【講師紹介】

久保沙織准教授（司会）：

続いて、基調講演 2 に移ります。「『大学入試学』の実践と成果—エビデンスに基づく東北大学の入試改革—」と題して、東北大学教授、宮本友弘先生、よろしくお願いいたします。

（拍手）

宮本友弘教授：

皆さん、こんにちは。東北大学の宮本です。

これから、基調講演 2 としまして「『大学入試学』の実践と成果—エビデンスに基づく東北大学の入試改革—」というタイトルで発表させていただきます。倉元先生の基調講演 1 とつながりがございまして、基調講演 1 が理論編とすれば、この基調講演 2 は実践編ということになります。

本日の内容ですが、この 4 つからなっております（スライド 2）。最初に、大学入試学とエビデンスの関わりについて申し上げます。続いて、東北大学の大学入試研究の特徴、3 番目に、エビデンスに基づく東北大学の入試改革ということで、いくつかの具体例をお示しします。そして、最後にまとめを述べさせていただきたいと思えます。

まず、大学入試学とエビデンスということですが、先ほどの倉元先生のご発表にもございましたように、大学入試学には大きく 2 つの目的があります（スライド 3）。

1 つは、組織に資する研究的成果を産むということです。もう 1 つは、日本に資する研究成果を産むということで、組織のため、日本社会の



ためということです。いずれにせよ、この研究成果が実際に役立つことを目指しているわけです。その意味では、実学と考えることができます。そして、大学入試学あるいは大学入試研究というのを実学として捉えたときに、このような特徴があるのではないかと思います。

まずは、実用的なニーズに応えることです。研究方法は学術研究と同じです。そのため、実際に従事する人には、きちっとしたアカデミックトレーニングを受けていることが必要になります。

次が、実学としての大学入試研究の最大の特徴だと思うのですが、研究成果が意思決定の際のエビデンスとなることです。入試に関することの何か決定をしなければいけないときに、そのためのエビデンスを産み出すということが大事になります。ここにおきまして、大学入試学あるいは大学入試研究とエビデンスの接点が出てくると思います。

では、ここでそもそもエビデンスとは何かということをちょっと考えてみたいと思います（スライド 4）。エビデンスとは、実証性を伴っ

た科学的根拠のことを指します。

ただし、エビデンスは領域によって考え方に違いがございます。単なる量的な根拠だけじゃなくて質的なものも根拠に含める場合もあります。皆さんもご存じかと思いますが、1990年代頃から、さまざまな領域の政策や実践でこのエビデンスが重視されまして、エビデンスに基づく、いわゆるエビデンスベースドということが重視されるようになってきております。

ちなみに日本の教育界ですと、2005年の中央教育審議会義務教育特別部会において、荻谷剛彦先生が、「エビデンスベースドの議論をしましょう」ということをおっしゃったことが、広く知られるようになったきっかけだといわれています。

今申し上げたように、エビデンスは研究の成果ですが、エビデンスという言葉の中には、どういう方向性、どういう志向性を持った研究をするのかというような含みもあります。すなわち、エビデンスを産出する研究とは何かということを考えていく必要性があります。それに関しましておもしろい枠組みがございまして、研究の象限モデルというのがございます(スライド5)。政治学者のストークスという方が研究を2つの次元で分類しています。

1つは、真理を探求する次元です。もう1つは、研究の成果を社会的に活用することを考えるかどうかということです。こうして見た場合、真理探求はするんだけど、あんまり活用の考慮は考えていないというのが純粋基礎研究、例えば、量子論のボーアです。これが事例として書かれています。一方、真理探究はあんまりしていないんですけども、活用をすごく考慮するのが、純粋応用研究で、発明王のエジソンがこれに当たるとしています。最後、活用に刺激された基礎研究というところがございます。パスツールが予防接種を普及させようという発想でワクチン研究をしていたわけなんですけど、エビデンスを産み出すという研究と考えた場合、これが該当するのではないかとというのが言われておりま

す。いずれの研究も重要なんですけども、エビデンスベースドと考えた場合は、この成果の活用というのをかなり意識した基礎研究をするということが重要になってきます。こういった分類に従いますと、大学入試研究はパスツール型、すなわち活用に刺激された基礎研究と位置づけてもよいのではないかと私は思います。

続いて、大学入試学とエビデンスとの関わりを考えたとき、エビデンスのレベルというのも大事になってきます(スライド6)。エビデンスのレベルというのは、よく医療分野のレベルが例示されるんですが、レベルⅠが最もエビデンスとして高い価値があるものが、ランダム化比較試験のシステマティック・レビューです。ランダム化比較試験というのは、ランダムに2つの群に分けて、それを比較して、例えばお薬の効果とか治療法の効果、そういったものを見るものなんです。そういったものをたくさん集めてどうなんだと見るのが、一番レベルが高いと言われるものです。最もレベル低いのが、権威者の意見や専門家委員会の報告書ということになっています。このように、医療の分野ではかなり厳格なエビデンスレベルの段階がございます。

しかし、ランダム化比較試験というのは現実場面ではなかなか適用できるケースが限られておりまして、特に教育の分野では倫理的にも実施するのが結構難しかったりします。更に、大学入試研究は、科学性を放棄しているということではございませんが、科学的厳密さを優先するよりも、特定の文脈で決定に至る判断材料になるかどうか、そういった現実性が重要になってくるという部分もございます。

また、エビデンスには3つの局面があると言われています。エビデンスを「つくる」、これは実際研究者のお仕事です。そして、それを「つかう」、これは活用実践者とか政策立案者の方です。実は両者の間の「つたえる」という部分が非常に重要な役割を持つそうです。いくらい研究をしても、うまくそれが伝わらないと活用には至らないということなんですね。アメリカなどで

は、教育の領域で「つたえる」ことに特化した組織もあるそうです。大学入試研究ではこの「つたえる」というところが非常に重要になってくるのではないかと考えております。以上のエビデンスの考え方に基づいて、東北大学の大学入試研究の特徴について述べたいと思います。

エビデンスをつくる局面におきましては、まず教員の専門性をあげることができます（スライド7）。私たちは、高度教養教育・学生支援機構の中の入試開発室というところに所属していますが、教員の専門は次の領域をカバーしています。まずは、教育心理学で、実証的な研究方法を蓄積しております。また、心理統計学で、文字どおりデータ分析に関する専門知識・技術を備えています。さらに、教育学で、ICT をさまざまな調査で活用しています。加えて比較教育学を専門にする者がおり、海外の情報を収集することも可能となっています。このように非常に強力なエビデンスをつくり出す体制を組んでおります。

もう一点は、私たちのステークホルダーである、高校側の意見を重視しております。これは、先ほどの倉元先生のご発表でも高校調査についてのお話があったと思います。我々は、大学入試における相互関係の原則というのを大事にしております。相互関係の原則というのは入試を実施する側、すなわち大学と志願者との相互関係ということなのですが、大学側が幾ら高邁な理念のもとに入試制度をつくったとしても、受け手である志願者がそれに魅力を感じなければ全然意味がないわけです。したがって、志願者のニーズを適切に把握、冷静に受け止めることが肝要と考えております。

さらに当事者性、これも先ほどの倉元先生のご発表の中でキーワードとして出ていたと思うんですが、やはり大学の入試のあり方というのは、その大学への進学を視野に入れた受験生を数多く抱える高校にとってはすごく大問題なんですね。ですので、そちらの声をしっかりと受け止めていくことが重要だと思っております。

高校調査はそういう意図で実施しているんですが、一部の方によれば、高校教員の方に調査してもいろいろ本音は言ってくれない、そういったご意見もいただくことがあります。しかしながら、本学に志願者をたくさん送っていただいている高校の方の声を聞く限りは、しっかり本音を言っていると私は考えております。大学入試の一番重要な大原則というのは、受験生保護の原則です。更にそれに当事者性を入れるならば、東北大学志望の受験生保護ということが重要になってきます。それがゆえに、ステークホルダーである高校側の意見を重視する、これが我々のエビデンスをつくる局面での特徴の1つでございます。

次に、エビデンスをつたえる局面でも、私たちは特徴があると思っています（スライド8）。1つは情報発信で、これは外部に向けたものです。通常、何か研究した場合は学会が中心になり学会発表や、論文に仕上げてそれを世に知らしめるわけですが、それだけですと、やっぱり数に限りがあります。広く世に広めるために、我々は、マスコミにも積極的に発表しています。更に、情報の速報性ですね。明らかになったことをすぐに伝えるために、ホームページなどを利用して広く周知しています。さらに、本日の東北大学高等教育フォーラムのようなイベントで生の声をお届けする、そうしたことにも我々は力を入れています。

更に、学内の教職員の方々にも、そういったエビデンスを広く伝えることも重要と思います。言ってみれば学内広報ということです。我々はいろいろ明らかになったエビデンスにつきまして、入試に関わる全学的な委員会で逐次周知していますし、政策決定に関わる先生にも丁寧に説明してきております。学内広報をしっかりとやることによって、学内での議論の積み上げがはるかに促進されますし、更には大学の意思決定にも一定程度寄与できていると考えています。つまり、このエビデンスをつかう局面へつながる活動にも力を入れています。

以上を踏まえまして、エビデンスに基づく東北大学の入試改革ということで具体的なお話に入らせていただきたいと思います。基本的には、平成 30 年 12 月 5 日に出した予告をベースに、その背景、その根拠となったエビデンスについて申し上げます。

こちらまず、英語認定試験あるいは英語民間試験の活用ですが、ポイントは、出願要件とはしない（スライド 9）。更に、点数化してこれを合否判定にも用いることはしないということが我々の予告でした。なぜこの予告を出したかというと、1 つのエビデンスとして高校調査 2017、先ほど倉元先生のご発表にもありましたが、高大接続改革に関してやった第 1 回目の調査で、2017 年度に実施しました（スライド 10）。期間は 1 月から 4 月、対象は当事者性を重視しまして、東北大学に志願者、合格者を多数輩出する 269 校に実施しております。平成 26 年から 29 年度入試で通算合格者数が 8 名以上、それ以外で AO 入試Ⅲ期合格者数 2 名以上、こういった基準で対象を定めました。学校数 269 校は、全国の高校の数で考えるとわずか 5.4%しかカバーはしていないのですが、これを志願者の数で重みづけしますと 79.1%、さらに合格者数で重みづけしますと 82.4%になり、相当数の東北大と当事者性がある学校をカバーしています。こうした調査を重ねることによって、当事者からの声を拾い上げる方向で、高校調査を 2017 年からずっと続けてきております。

さて、先ほどの英語認定試験の活用に関する我々の決定に影響を及ぼした調査結果としてはまずこれです（スライド 11）。国大協の基本方針に対する意見を聞きました。そうしますと、単純集計で 8.3%、全志願者数で 6.5%と「賛成」が少なかったわけです。一方では、「やむを得ない」が 49.5%で一番多いのですが、自由記述を見ると、決まったことなので仕方ないといった内容が多く、英語 4 技能の評価の理念には賛同していても、公平性や妥当性には疑義を訴える声もございました。本当にやむを得ないという感じ

でした。

続いて、次の年の高校調査です（スライド 12）。これは 2017 年度調査のフォローアップになっています。我々の予告に対する意見を聞きました。そうしますと、8 割以上が単純集計でも、重みづけしても「賛成」という結果になりました。逆に、「反対」は僅かで、国大協の方針に賛成だと言っていた意見よりもかなり減少しています。直接は比較にはなりませんけれども、我々の予告は支持されたと判断しております。

続いて、記述式問題の活用なんです（スライド 13）。こちらのポイントは、点数化して合否判定には用いられない、同点に並んだ場合だけ記述式問題の成績評価が高い志願者を優先的に合格とすることです。記述式問題の影響力を大きくしないという考え方がベースにはあります。

その背景として、まず、これは直接この予告に関わった調査ではないのですが、国立大学の個別学力試験の実態調査を行いました（スライド 14）。高大接続システム改革会議の最終報告で、一般入試の課題として、知識に偏重した選択問題が中心で記述式問題を実施していない場合もあるという指摘があり、それが共通テストで記述式を入れる理由の 1 つにもなっているのですが、国立大学の個別学力試験を見る限りにおいては、どうもそれは印象と合わないわけです。本当に国立大学に該当するかどうかということの検証を試みました。分析対象は、国立大学 82 校の 2015 年度の一般入試個別学力試験問題、これを校間単位で回答形式を分類しました。その結果、こちらです（スライド 15）。

まず、全部で 2 万 4,066 問収集しまして、そのうちの約 88%が記述問題でした。更に、共通テストの 1 つの目安になっていた 80 文字以上の記述式問題は 1,088 題、既に出題されていました。記述式問題を出題していない大学は 1 大学のみ、80 以上の記述式問題を出題していない大学は 9 大学のみという結果でした。これを受けまして、国立大学におきましては先ほどの指摘は当たらないのではないかと、個別試験で思考

力, 判断力, 表現力も測れるのではないかと考えた次第です。

そして, この調査結果の学外発信ですが, 速報性が大事だと考えまして, まず科研費のホームページに掲載しました。2016 年の 12 月です。それを朝日新聞がいち早く報道してくださいました。しかし, 高大接続改革に影響を与えることなく数年が過ぎていきました。突如として 2019 年 11 月, 昨年, アエラで我々のデータが掲載されました。その頃は, ちょうど国会で記述式導入の議論がなされておりまして, 我々の研究結果が 1 つのエビデンスとして複数回取り上げられました。結果的に, 多少は日本の入試設計に資するような結果になりました。これはあくまで背景にあった研究です。

予告で使われた研究は 2017 年度の高校調査の結果です (スライド 16)。記述式問題をどの程度重視してほしいかについて尋ねたところ, 「とても重視してほしい」は, 単純集計でも 5.6% でした。ただ, 「どちらとも言えない」が一番多かったのですが, 新共通テストの内容がよくわからないのでなかなか判断もしづらい, あるいは個別試験で十分といったようなご意見もありました。我々の予告に対してフォローアップの調査結果を見てみます (スライド 17)。大多数ではないのですが, 単純集計, 志願者ベース, 合格者ベースのいずれも約 6 割が「賛成」です。一方, 「反対」は, 9.6% と若干多いです。ただ, ここの「反対」には, 積極的に活用すべきだ, だけじゃなくて, 一切利用すべきでないというような意見も入っていて, 多様な観点がありました。

では個別式だけでいいのかといいますと, 参考の研究結果があります (スライド 18)。こちらは, 大学入学者選抜改革推進委託事業の中で行った研究ですが, 本学にたくさん志願者を送ってくださる高校だけでなく, 無作為に全国の高校 2,000 校を抽出して実施した調査です。それで, 個別学力試験に対する改善の必要性というのを聞きました。そうしますと, 国語は

現状のままでいいというのが 39.9% で, 半数以上の方が, 改善が必要だとしています。数学は, それに対して現状のままでいい, というが声が多くありました。この結果は軽視し得ないと思いますので, 個別学力試験に対する改善は今後も検討していく必要性はあると思います。

最後に, 調査書等の扱いです (スライド 19)。こちらのポイントはまず, チェックリストで志願者が自己申告するということです。さらに, 使いどころが合否ラインで志願者が同点で並んだ場合, 主体性評価が高いほうを優先的に合格とすること。チェックの根拠は調査書により確認する。これがポイントになっています。これがチェックリストですね, こちらも既に予告で出しております (スライド 20)。これに対しては, 何か調査を行ったということよりも, 2 年前のフォーラムで主体性について皆さんで検討したと思います。そのときに, 心理学的な知見からどう考えるかということで, 言ってみれば間接的なエビデンスなんですけれども, そういう学術的な知見の観点からこの主体性評価を考えてみました。そうしますと, 主体性といった場合, そのコアになるものは何かというと意欲ですね。心理学の用語で申しますと, 動機づけとなります。動機づけには, 最近の学説では, 特性レベル, 領域レベル, 状態レベルというふうに 3 段階の水準があると考えます (スライド 21)。特性レベルというのは, 性格的に何事にも意欲的だということです。それに対して領域レベルというのは, 「私は勉強に意欲的だ」, 「僕は部活動に意欲的だ」というふうに意欲が発揮される領域や分野が分かれることです。さらに状態レベルというのは, この授業はとてもやる気があるけれども, この授業はあまりやりたくないというような, まさに状況に依存するような話です。

重要なことは, 動機づけにはこういう領域固有性があることです。特定の領域ではやる気を出すけれども, 別領域だと発揮されないような場合, 領域固有性があると言います。さらに, 発達段階が進むほど, こうした好みといいますか

領域というのは分化していきます。小学校ぐらいのときはスポーツも頑張る、勉強も頑張るんですけども、だんだん発達が進むと、勉強は頑張るけれども運動は頑張らない、といった場合もあります。また、英語は頑張るけれども数学は、というような状況もあります。こういった領域固有性を考えた場合、主体性評価で大事になってくるのは、大学に入学後の学びの文脈で、学習の文脈で発揮される意欲です。なので、勉強、学業という領域レベルで発揮される意欲、動機づけというのはをしっかり見ていく必要があると考えられます。

さらに、皆さんも日頃感じていると思います。が、学業領域の動機づけは成績に反映されます(スライド 22)。これはどういうことかというと、動機づけがございまして、これが学習方略、これ勉強のやり方ですね、これを媒介にして学習結果に反映されるということは、もう心理学的にはある程度わかってきていることです。したがって、このことから何が言えるかというと、試験成績結果には動機づけ、主体性のコアの概念である意欲、そういったものがしっかり反映されるということが考えられます。すなわち、まずは学力検査の成績というのを重視するというのは、主体性評価にとっては悪くはないということです。

従来から動機づけはどうやって測っているかといいますと、自己報告あるいは行動観察、他者評価ということになります。このことを踏まえますと、自己報告、まさにチェックリストなのです。それを体現したものです。更に、行動観察、他者評価、これは調査書ということになりました。こうした道具立てが、心理学的な理論とも整合するということです。予告の背景には、こういったような考え方があるということです。

調査書の扱いに対する東北大学の方針に対する意見は、「賛成」が一番多かったんですが、半数を切っています(スライド 23)。「どちらとも言えない」と拮抗しておりますので、今後、実際に行った後、追跡しながらしっかり検討してい

く必要があると思います。

ただ、認識しておいていただきたいこととして、中央教育審議会の初等中等教育分科会の教育課程部会が出した 2019 年の「児童生徒の学習評価のあり方について」の報告があります(スライド 24)。これによると、「主体的に学習に取り組む態度」は 2 次元で捉えるとあります。

1 つは「粘り強く学習に取り組む態度」、もう 1 つは「自ら学習を調整しようとする態度」です。取り組む態度のコアとなるのは当然動機づけです。自ら学習を調整しようとする態度は自己調整学習と言われるものですが、そこで鍵を握ってくるのが学習方略です。まさに我々がベースとして考えていたモデルと非常に整合しています。さらにこの報告の中では、知識及び技能の習得や思考力、判断力、表現力等の育成に結びついていることが重要とされています。つまり、そうしたことと結びつかないような主体性じゃないよということです。心理学における学問的知見を活用することも有効であるし、把握する方法として、生徒による自己評価も大事だということも指摘されております。我々の予告の後に出ていますけれども、我々の出した予告の理論的な背景とは整合する内容になっております。

最後に、「おわりに」なんですけれども、今回いろいろなエビデンスに基づいて大学入試改革を行ってきましたが、わかってきたことは、エビデンスに基づいて設計された入試制度の頑健性なんです(スライド 25)。倉元先生の発表にもあったように大学入学共通テストが方針転換しました。大学入試英語成績提供システムの導入延期、英語民間試験の延期、記述式問題の見送り、

「JAPAN e-Portfolio」運営許可の取り消しというように、今回の改革の柱であった 3 つがどれもできないことになってしまいました。状況が一変しました。しかしながら、我々の考えた対応、予告にはほとんど影響しないということです。それはエビデンスに基づいて、いろいろなことを立案していることによる効用だと私は思っ

ております。

しかしながら、大学入試を叫ぶ以上、大きな課題として、倉元先生の発表ともかぶるんですけども、やはり日本社会に資する研究成果をつくって、それを「つくる」だけじゃなくて「つたえる」ことが重要だと思います。やはり政策立案への寄与を目指していくということが、我々にとって大きな使命だとも思っております。

東北大学は、今後もエビデンスを重視していく予定で、東北大学ビジョン 2030 の主要施策の 1 つとして、「エビデンスに裏づけられた新たなアドミッションの展開」というのを掲げております(スライド 26)。詳しくはこちらをご覧くださいのですが、最後に申し上げたいのは、大学入試の責任は最終的にはやっぱり大学にあることです。したがって、当該大学の志願者、受験生の保護の大原則から、やはりエビデンスに基づく意思決定が何よりも大切になってくるのではないかと思います。個別大学に今求められていることは、そういうことではないかと思っています。

以上をもちまして、私の発表を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

(拍手)

久保沙織准教授（司会）：

宮本先生、ありがとうございました。ご質問等につきましては、ウェブ上での入力をお願いいたします。

注：本講演は、JSPS 科研費 JP20K20421 の助成を受けた研究成果の一部である。

資料

第32回東北大学高等教育フォーラム 2020年9月23日 (水)

基調講演2

「大学入試学」の実践と成果 —エビデンスに基づく東北大学の入試改革—

宮本 友弘
(東北大学高度教養教育・学生支援機構)



大学入試学とエビデンス③

● 研究の象限モデル (Stokes 1997, 岩崎 2011をもとに作成)

		活用の考慮	
		No	Yes
真理探究	Yes	純粋基礎研究 Pure basic research (ボア型)	活用に刺激された基礎研究 Use-inspired basic research (バスツール型)
	No		純粋応用研究 Pure applied research (エジソン型)

▶ 大学入試研究はバスツール型

本日の内容

1. 大学入試学とエビデンス
2. 東北大学の大学入試研究の特徴
3. エビデンスに基づく東北大学の入試改革
4. まとめ

大学入試学とエビデンス④

● エビデンスのレベル
医療分野の例(岩崎 2017をもとに作成)

レベルⅠ	ランダム化比較試験のシステマティック・レビュー	▶ ランダム化比較試験は適用できるケースが限られる
レベルⅡ	ランダム化比較試験	
レベルⅢ	非ランダム化比較試験(準実験的研究)	▶ 大学入試研究では、科学的厳密さよりも、特定の文脈で決定にいたる判断材料になるかどうか重要
レベルⅣ	症例対象研究、コホート研究	
レベルⅤ	記述的研究や質的研究のシステマティック・レビュー	
レベルⅥ	記述的研究や質的研究	
レベルⅦ	権威者の意見や専門家委員会の報告書	

● エビデンスの3つの局面

つくる 研究	→	つたえる 普及	→	つかう 活用
-----------	---	------------	---	-----------

大学入試学とエビデンス①

● 大学入試学の2つの目的 (倉元, 2020)

- 研究母体が設置された組織に資する研究的成果を産むこと
- 日本社会に資する大局的な大学入学者選抜制度設計に資する研究成果を産むこと

● 実学としての大学入試研究

- 実用的なニーズに応える
- 研究方法は学術研究と同じ
- 研究成果が意思決定の際のエビデンスとなる

東北大学の大学入試研究の特徴①

● エビデンスを「つくる」局面

▶ 教員の専門性

- 教育心理学・・・実証的研究方法
- 心理統計学・・・データ分析
- 教育学・・・ICT利用
- 比較教育学・・・海外の情報収集

▶ ステークホルダーである高校側の意見を重視

- 大学入試における「相互関係」の原則 (倉元, 2018): 志願者側のニーズを適切に把握、冷静に受けとめることが肝要
- 当事者性: 大学の入試の在り方は、当該の大学への進学を視野に入れた受験生を数多く抱える高校にとっては大問題

▶ 東北大学志望の受験生保護

大学入試学とエビデンス②

● エビデンス (evidence) とは

- 実証性を伴った科学的根拠
- 1990年代頃から、さまざまな領域の政策や実践で「エビデンスに基づく (evidence-based)」が重視される
- 日本の教育界では、2005年の中央教育審議会義務教育特別部会における議論で広く知られるようになった (惣脇, 2009)

● エビデンス = 研究の成果

- エビデンスを産出する研究とは?

東北大学の大学入試研究の特徴②

● エビデンスを「つたえる」局面

▶ 情報発信

- 学会: 全国大学入学者選抜研究連絡協議会、日本テスト学会等
- マスコミ: 新聞、雑誌
- インターネット: 科研費ホームページ
- イベント: 東北大学高等教育フォーラム、学会シンポジウム

▶ 学内広報

- 入試に関わる全学的な委員会等での周知
- 政策決定者に対する説明
- ▶ 学内での議論の積み上げ、大学の意思決定に寄与 (エビデンスを「つかう」局面)

エビデンスに基づく東北大学の入試改革①

9

1. 大学入学共通テストへの対応：英語認定試験

● 予告（平成30年12月5日）

- ① 本学では英語 4 技能の修得を重視しており、受験に当たっては「CEFR における A2 レベル以上の能力を備えていることが望ましい」ことを出願基準とします。
- ② ただし、この出願基準は出願に当たって英語認定試験の受検とその結果提出を求めるものではありません。本学は英語認定試験の受検と CEFR の A2 レベルの成績を志願者全員に求める「出願要件」とはしません。また英語認定試験成績を CEFR 対照表に基づいて点数化し、これを合否判定に用いることもしません。

エビデンスに基づく東北大学の入試改革⑤

13

2. 大学入学共通テストへの対応：記述式問題の活用

● 予告（平成30年12月5日）

- ① 国語の記述式問題の活用については、以下のとおり取り扱いいます。
 - 1) 段階別評価を点数化して合否判定に用いることはしません。
 - 2) ただし、合否ラインに志願者が同点で並んだ場合、記述式問題の成績評価が高い志願者を優先的に合格とします。
 詳細については、大学入試センターによる成績表示方法の決定発表を待って改めて公表します。
- ② 数学の記述式問題については点数表示の成績を合否判定に用います。

エビデンスに基づく東北大学の入試改革②

10

▶ 高校調査2017（倉元・長瀬, 2018；倉元・宮本・長瀬, 2019）

➤ 調査方法

- ・ 調査期間 2018年1月～4月
- ・ 調査対象 東北大学に志願者、合格者を多数輩出する269校（①平成26年～29年度入試で通算合格者数8名以上。②AO入試前期合格者数2名以上）

	調査票 送付校	対象数	調査設計 カバー率	返送率	実質 カバー率
単純集計	269	4,972	5.4%	81.0%	4.4%
全志願者数	24,047	30,395	79.1%	89.1%	70.5%
全合格者数	8,442	10,249	82.4%	89.6%	73.8%

エビデンスに基づく東北大学の入試改革⑥

14

▶ 国立大学の個別学力試験の実態調査（宮本・倉元, 2017, 2018）

➤ 調査目的

- ・ 高大接続システム改革会議「最終報告」（2016年3月）：一般入試の課題として「知識に偏重した選択式問題が中心で記述式問題を実施していない場合もある」という指摘が、国立大学に該当するかどうかの検証

➤ 調査方法

- ・ 分析対象 大学院大学4校を除く国立大学82校の2015年度一般入試個別学力試験問題（前期日程、後期日程）
- ・ 分析方法 校間単位で解答形式を分類

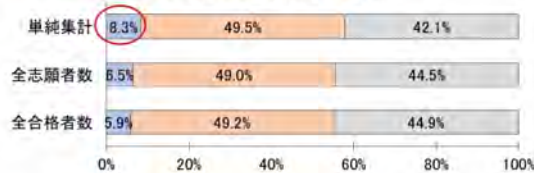
エビデンスに基づく東北大学の入試改革③

11

➤ 調査結果

□ 国立大学協会の「基本方針」（外部試験を一般選抜の全受験者に課す）に対する意見

■ 賛成 ■ やむを得ない ■ 反対



エビデンスに基づく東北大学の入試改革⑦

15

➤ 調査結果

- ・ 全24,066問中、約88%が記述式問題
- ・ 80字以上の記述式問題は1,088問
- ・ 記述式問題を出題していない大学は1大学のみ
- ・ 80字以上の記述式問題を出題していない大学は9大学のみ

➤ 調査結果の学外発信

- ・ 科研費ホームページに掲載（2016年12月）
- ・ 朝日新聞（2016年12月）→ AERA（2019年11月）

➤ 記述式導入の議論への影響

- ・ 2019年11月の国会において一つのエビデンスとして複数回取り上げられる

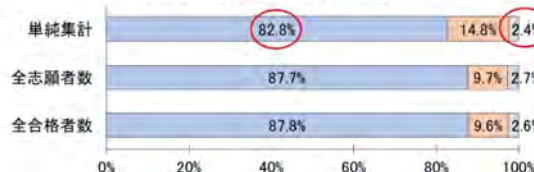
エビデンスに基づく東北大学の入試改革④

12

▶ フォローアップ：高校調査2018（2018年12月～2019年4月実施。詳しくは、倉元・宮本・長瀬, 2020）

□ 英語認定試験に関する東北大学の方針に対する意見

■ 賛成 ■ どちらとも言えない ■ 反対



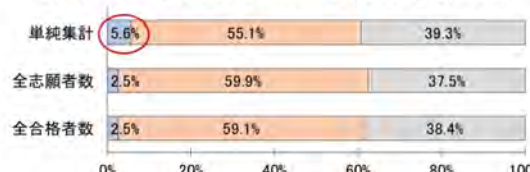
エビデンスに基づく東北大学の入試改革⑧

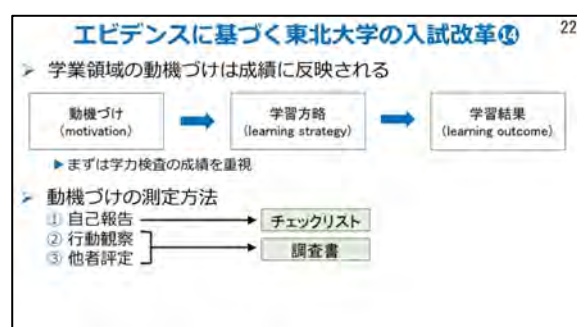
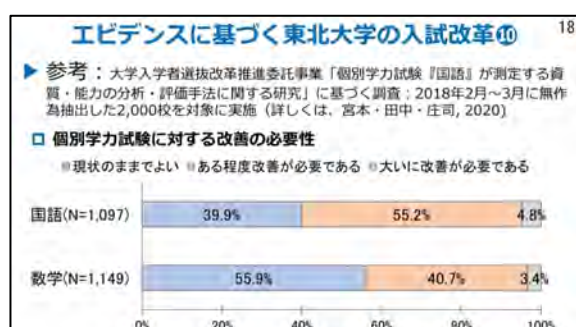
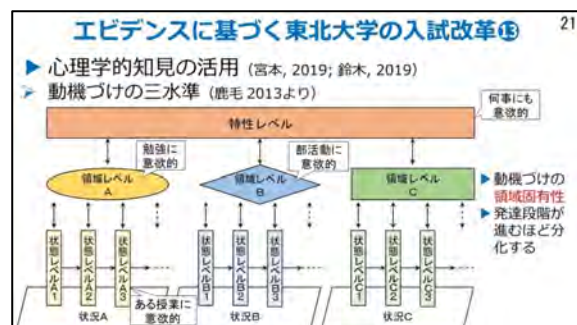
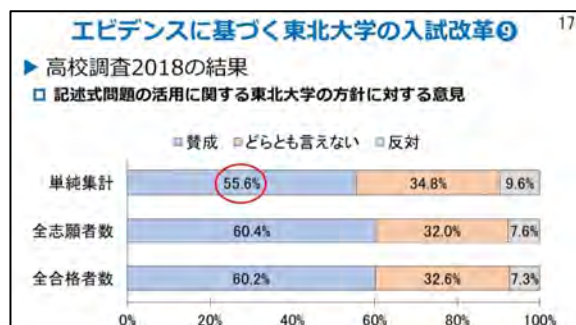
16

▶ 高校調査2017の結果

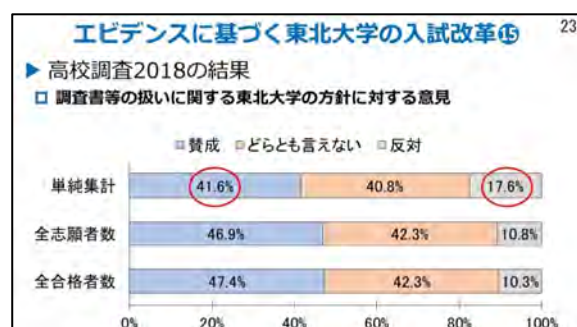
□ 記述式問題をどの程度重視してほしいか

■ とても重視してほしい ■ どちらとも言えない ■ あまり重視してほしい

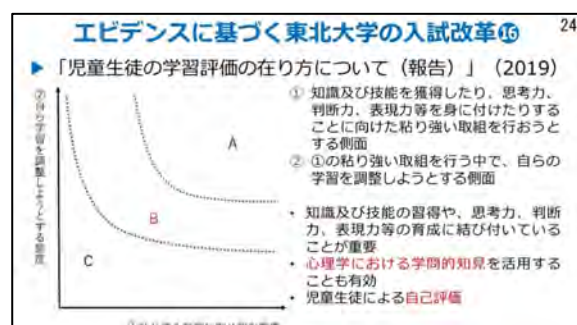




- ### エビデンスに基づく東北大学の入試改革⑬
- 19
- ### 3. 調査書等の扱い
- 予告（平成30年12月5日）
- ① 学力3要素における「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」の評価（主体性評価）については、志願票に調査書と対応した5項目程度のチェックリスト項目を設け、志願者がこれをチェックする自己申告方式をとります。
 - ② その活用については、合否ラインで志願者が同点で並んだ場合、チェックリストによる主体性評価が高い志願者を優先的に合格とします。
 - ③ チェックリストにおけるチェックの根拠を調査書により確認することとし、その他の資料を求めることはしません。
 - ④ チェックリスト及びその評価方法等の詳細については改めて公表します。



- ### エビデンスに基づく東北大学の入試改革⑮
- 20
- ▶ チェックリスト
- (A) 高校における学習活動に主体的に取り組んできた
 - (B) 部活動・ボランティア活動等に主体的に取り組んできた
 - (C) 生徒会・学校行事等に主体的に取り組んできた
 - (D) その他の活動に主体的に取り組んできた
 - (E) 高校時代に取得した資格、獲得した賞がある
- ※ ①のみで、自由記述欄はなし



おわりに

25

- エビデンスに基づいて設計された入試制度の頑健性
 - 大学入学共通テストの方針転換
 - ✓ 「大学入試英語成績提供システム」の導入延期
 - ✓ 記述式問題の見送り
 - ✓ 「JAPAN e-Portfolio」運営許可の取り消し
 - 東北大学の入試にはほとんど影響しない
- 日本社会に資する大局的な大学入学選抜制度設計に資する研究成果をつくり、つたえる
 - 政策立案への寄与を目指す

おわりに

26

- 東北大学では今後もエビデンスを重視
 - 「東北大学ビジョン2030」の主要施策の一つとして「エビデンスに裏付けられた新たなアドミッションの展開」を掲げる

アドミッション・センターの機能を拡充・強化し、これまでの入学者等の実績や各種入試動向調査などのエビデンスを踏まえ、本学で学ぶ意欲の高い学生を受け入れる AO 入試を拡大するとともに、アドミッション・ポリシーに合致した多様な学生を広く国内外から確保するための入試制度を開発・実施します。また、戦略的な入試広報および高大接続活動を強化します。

第32回東北大学高等教育フォーラム 2020年9月23日（水）

ご清聴ありがとうございました



引用文献

28

- 堀崎久美子(2017) 教育研究エビデンスの課題—知識社会における産出・普及・活用— 国立教育政策研究所紀要 第140集 95-112.
- 前嶋久美子(2017) エビデンスに基づく教育 研究の政策活用を考える 情報管理 60(1) 20-27
- 倉元直樹(編)(2020) 「大学入試」の歴史 命子書房
- 倉元直樹・長澤裕幸(2016) 高次接続改革への対応に関する高校側の意見—自己採点利用方式による第1次選考、認定試験及び新共通テスト記述式問題の活用— 全国大学入学選抜研究連絡協議会大会(第13回)研究発表予稿集 78-82
- 倉元直樹・宮本友弘・長澤裕幸(2019) 高次接続改革への対応に関する高校側の意見—東北大学のAO入試を事例として— 日本テスト学会誌 15 99-119
- 倉元直樹・宮本友弘・長澤裕幸(2020) 高次接続改革に対する高校側の意見とその変化—「受験生保護の大原則」の観点から— 日本テスト学会誌 16 87-108
- 宮本友弘(2019) 「主権性」評価の課題と展望—心理学と東北大学AO入試からの示唆 高度教育・学生支援機構(編) 大学入試における「主権性」の意義—その理念と現実—(pp.7-25) 東北大学出版会
- 宮本友弘・倉元直樹(2017) 国立大学における個別学力試験の報告形式の分類 日本テスト学会誌 13 89-94
- 宮本友弘・倉元直樹(2016) 国立大学の前期学力検査における記述式問題の出題状況の分析—40年以上の記述式問題に焦点を当てて— 大学入試研究ジャーナル 28 113-118
- 宮本友弘・倉元直樹・石川強(2020) 高校教員は新傾向の国語記述式問題をどう扱っているか—全国調査から— 大学入試研究ジャーナル 20 30-35
- 惣橋進(2009) より一層エビデンスに基づいた教育政策と実践を OECD教育研究センター(編) 教育とエビデンス—研究と政策の両側に向けて(pp.3-13) 明石書店
- Stake, D.E.(1997) *Partners in governance: Basic evidence and technological innovation* Washington, DC: Brookings Institution Press.
- 鈴木寛之(2019) 教育の標準から見た「主権性」—自己調査データの観点から— 高度教育・学生支援機構(編) 大学入試における「主権性」の評価—その理念と現実—(pp.31-48) 東北大学出版会

現状報告者紹介

現状報告者 1

安成 英樹（やすなり ひでき）氏

1963 年福岡県生まれ

〔教員歴〕

東京大学文学部西洋史学専修課程助手（7 年間）

お茶の水女子大学大学文教育学部人文科学科比較歴史学コース准教授（14 年間）

お茶の水女子大学大学文教育学部人文科学科比較歴史学コース教授（8 年間）

〔主な研究歴〕

専門は西洋史学（フランス絶対王制の統治構造・官僚制研究）

〔主な著書，研究業績〕

『フランス絶対王政とエリート官僚』（日本エディタースクール出版部，1998）

〔学会活動等〕

日仏歴史学会幹事（4 年間）・理事（14 年間）

史学会理事（2020 年～）

〔その他の特記事項〕

お茶の水女子大学入試推進室長・教育研究評議員（2014～2018）

現状報告者 2

笠井 敦司（かさい あつし）氏

1975 年青森県生まれ

〔教員歴〕

青森県立鱒ヶ沢高等学校 教諭（6 年間）

青森県立青森東高等学校 教諭（9 年間）

青森県立青森高等学校（現職） 教諭（9 年目）

〔主な教育活動〕

教科 ：国語

進路指導主事：平成 29 年度～令和元年度

教務主任 ：令和 2 年度～現在

現状報告者 3

杉山 剛士（すぎやま たけし）氏

1957 年東京都生まれ

〔教員歴〕

埼玉県高等学校教諭（入間高校，所沢東高校，与野高校）（13 年間）

埼玉県庁及び埼玉県教育委員会（県総合政策部主幹，教育委員会文教政策室長，高校教育指導課長等）（12 年間）

埼玉県立高校管理職（浦和第一女子高校教頭（2 年間），熊谷西高校校長（3 年間），浦和高校校長（5 年間））

私立武蔵高等学校中学校校長（現職）（2 年目）

〔主な教育活動〕

- ・教諭時代は公民科のほか，主に進路指導を担当．部活動ではバレーボール部顧問
- ・行政時代は，主に県の総合計画や教育振興計画を策定するとともに，指導行政を担当
- ・管理職としては，男子校・女子高・共学校を経験．また公立私立の双方も経験

〔その他の特記事項〕

- ・日本教育社会学会会員
- ・全国高校長協会理事（3 年間）
- ・主な著書「埼玉県立浦和高校」（佐藤優共著 講談社現代新書 2018 年）「ポケットいっぱいのお宝」（世界通信 2018 年）「大学入試がわかる本」（中村高康編 岩波書店 2020 年）等

現状報告 1：入試改革への挑戦

—お茶大新フンボルト入試の実施状況・課題・展望—

お茶の水女子大学教授

安成 英樹 氏

〔講師紹介〕

久保沙織准教授（司会）：

お時間になりましたので、これより第 2 部現状報告に入らせていただきます。

現状報告 1「入試改革への挑戦—お茶大新フンボルト入試の実施状況・課題・展望—」，お茶の水女子大学教授，安成英樹先生よりお願いいたします。

安成英樹氏：

こんにちは。お茶の水女子大学の安成と申します。

本日は，お茶大が 4 年前に本格的に導入しました新フンボルト入試（AO 入試，今年から総合型選抜）について，ごく簡単に概要をご説明しましたその課題についてお話ししたいと思っております。お手元の略歴をご覧くださいればおわかりのように，私は入試分野についてはそもそも全くの素人です。本日ご参加の方々の中でも専門分野においては最も遠いところにいる人間だと思います。実のところ私の専門は歴史学（西洋史，フランス史）なのですが，巡り合わせというか，6 年前に入試の責任者（本学では入試推進室長と申します）を任されました。ちょうど同じタイミングで，文科省の大学教育再生加速プログラム（以下，AP と略称）の公募があり，これにアプライして新しい入試改革を実働させるようにと当時の学長・副学長に申しつかりまして，以後 5 年間（AO 入試としては 6 年間）この入試部門の責任者，かつ新入試の主務設計者を務めて参りました。

まずは，新フンボルト入試の概要をご説明いたします。お茶大というのは，東北大学のような



大規模大学に比べれば本当に小さな大学です。全学で 3 つの学部しかなく，学生の定員も合わせて 452 人です。その 452 人の学生を，ありとあらゆる入試方法で選抜しているというのが現状です。その入試の 1 つとして，AO 入試を 2008 年度から導入していましたが，その AO 入試をさらに大きく改革して，これからの社会のニーズあるいは期待に沿うような入試をつくり上げよ，という命題が与えられました。これが本日お話しする新フンボルト入試という入試です（名称の由来をお話すると 15 分必要ですので，後で資料をご参照ください）。

当初の制度設計段階でまず念頭に置いていた狙いは，新しい学力の三要素を踏まえた上で，自ら考える力を持つ学生，入学時に知的ピークを迎えるのではなく，むしろ入学してから，あるいは社会に羽ばたいてから能力をますます発揮していくようなポテンシャルのある学生を選抜することにあります。それが実際にはきわめて難しいことは皆さんもよくご承知だと思います。とはいえ，単に知識の量，頭の中に詰め込んだ暗記の量の多寡ではなく，そうした知識をどう活かせるか，それを問う入試を目指しました。またせっかく新しいものを作るのであれば，受験する側にとってもこれまでに例を見ない知的に

「面白い」、受験すること自体に意義のある入試にしたいとも考えました。他方、簡単には測りえない受験生のポテンシャルを測るためには、(実施側の負担はいったん置いておいて) 時間と手間のかかる丁寧な入試を設計するしかないとの判断にいたりました。

実際の入試の仕組みですが、まず第1次選考においてはプレゼミナールという、大学の専門的な授業(90分2コマ)を受験生に実際に受講してもらい、大学での学びがどのようなものであるか、またお茶大の気風、どんな先生がどのような授業をするのかということを高校生に直に体験してもらおうというかたちを設定しました。しかも、入試としては非常に特殊だと思いますけれども、このプレゼミナールを高校2年生以上にも参加できるようにいたしました。一方、第2次選考では、文系諸学科を目指す受験生には、図書館入試を、理系志望者には実験室入試を課しております(それぞれに特徴のある入試形態ですが、中身については後述します)。

次に、この入試の4年間の実施状況を資料に即してお話しします。第1次選考のプレゼミナールは受験生以外も参加可能という特殊な形態であり、その点では学内にも強い批判、懸念がありました。また、受験生は選考のために本学に2回も来なきゃいけないわけですから、受験する側にも非常に負担の重い入試です。しかも定員は全学でわずか20人。それでも旧AO入試の10人から倍増させたのですが、それでもお茶大の入学定員のわずか4%の枠を目指すわけです。このような過酷な、合格を目指すだけなら分の悪い入試を高校生が果たして受けてくれるのかという強い危惧がございました。6年前に制度設計を始めて(幸いにしてAPに採択されたのでこれを原資として)、さまざまな事前調査や長時間の議論を重ねて、2015年度にはプレゼミナールのみを先行実施し、ようやく2016年度から本格導入をしたわけですが、はっきり言って初年度は不安でいっぱいでした。ですが、結果としては資料を見ていただければ分かるように、

毎年200人弱の受験生が出願してくれるといううれしい誤算になりました。初年度についていえば、20人に対して198人(倍率約10倍)が出願をしてくれました。どこをおもしろいと思ってもらえたのかはしかとはわかりませんが、高校生がこの入試を非常に興味を持ってくれたことは確かでしょう。

加えて、毎年プレゼミナールには、高校2年生あるいはAO入試を受けない3年生が百何十人参加してくれています。受験生との比率は大体1対1ぐらいです。一般的にいう新しい入試制度というのは初年度こそ勢いがあるものの、2年目には出願者が落ち込むというケースが多いように見受けられます。ところが本入試に関していえば、2年目も受験生192人、さらにはプレゼミナールを受講した非受験者は、前年より増えたというような状況です。3年目には受験生が177名で、さすがにちょっと減ったかなと思いますが、昨年度(導入4年目)にはなぜか受験生、受講者ともに反転して大幅に増えました。今年度以降の入試改革(の混乱)を見越して、受験生に特別選抜への指向が見られたのかとも思いますが、ともかくもいい意味でこちらの予想に反して、昨年度は過去最高の222人の出願者を得ることができました。プレゼミの参加者も同様に大きく増えました。本学としては非常にうれしい、ありがたい数字になりました。

ここで入試の中身について簡単に申しあげると、第1次選考のプレゼミナールでは、大体文系、理系ともに90分の大学の授業を2コマ、フルに聞いてもらいます。毎年メニューを変えますから、あつかう分野やテーマ、内容も授業担当者も変わります。プレゼミナールではAP経費を利用して毎年参加者に悉皆的な受講アンケートを取っています。それによれば、全体に満足できるものだったか、あるいは今後の学びに有益だったかという質問に対して、非常に高い満足度を示しています。お手元のグラフにありますように、両方の質問ともほぼ99%に近いプラス評価を過去4年間、毎年得ることができています。

私はこれを専制国家の国民投票状態というふう
にしておりますけれども、これだけ多くの高
校生がプレゼミに来てくれて、かつ高い満足度
を持って帰っていているといえるでしょう。
プレゼミの設計理念としては、大学そのものを
知ってもらう機会にするのと同時に、学ぶこと、
自分で考えることのおもしろさを実感してもら
うというのが、当初からの大きな目標になって
おります。そういう意味で、このアンケート結果
からしてプレゼミナールの実施状況については
かなり肯定的に捉えていいのではないかと考え
ています。またプレゼミナールの参加者は、もち
ろん首都圏が多いのは当然ながら、それこそ全
国から集まっていることも付け加えておきます。

第2次選考では、前述の通り図書館入試、実
験室入試というものを受験生に課します。理系
の場合はそれぞれ学科の専門性をふまえた思考
力を問う課題を解いてもらいますが、一部の学
科では高校でグループ研究、自由課題研究をず
っとしてきているような人たちに、その研究成
果をポスターの形で持って来てもらって、ポス
ター発表とそれに対する質疑応答をベースにし
た入試を行っております。

最も特徴があると我々が考えているのは図書
館入試です。第1次選考を突破した人たちには
本学の附属図書館に6時間こもってレポートを
書くという仕組みです。要するに長時間にわた
って図書館に缶詰になってもらって、その資料
の何も見てもいいという、そういう入試を実
施いたします。附属図書館は幸いにして4年前
に増改築工事が終わり、とてもきれいな居心地
のいい空間となりましたので、ここでじっくり
ものを考えるという経験をしてもらうわけです。

最初にレポートの共通課題を出すわけですが
けれども、いわゆる簡単に正解が出る（ある）たぐ
いのものではありません。初年度のレポート課
題は「言語の持つ力について自由に論じなさい」、
2年目は「人間と動物の関わりについて自由に論
じなさい」です。一筋縄ではいきません。また図
書館入試は、本棚に向かって正解探しにヨーイ

ドンで徒競争するわけじゃない。すなわち、自分
は与えられたテーマについてどう考えるかをま
ずじっくりと考え、必要な資料を探し、その上で
自分の考えを答案にまとめるという経験をして
もらうわけです。受験生にはお弁当を持って来
てもらい、またこちらでも茶菓をふんだんに用
意し自由に使ってもらいます。この附属図書館
でのレポート作成が初日、2日目は午前中にグル
ープ討論、午後には個別面接を課します。丸2日
間、手間暇かけた丁寧でユニークな入試であり、
受験生は濃密な時間を過ごし、まさに真の実力
（ポテンシャル）を問われることになります。

合格者数など最終的な入試結果をまとめた表
を資料に入れてありますのでご覧ください。過
去4年間、実績としてはこのような数値になっ
ております。参加者の人数のみをとっても、受験
生も受講してくれた高校2年生以上の人たちも、
基本的にこの入試に対してポジティブに捉え強
い関心をもって新フンボルト入試に挑んでくれ
ているというふうに考えています。さらに、この
入試合格者にとっては入学までの半年が非常に
大事だと考えておりますので、合格者にはマン
ツーマンで上級生（多くは自身がAO合格者で
す）をチューターとして配置し、入学前にさまざ
まな相談ができ、勉強・学びのサポートをして
もらうという体制を組み上げています。また英語
力育成のためのe-learningを活用しての課題を
こなしてもらいます。

こういう形で運用をしてきてあつという間の
4年間でした。この新型AO入試では、わずか
20人の選抜のためにしては、非常に大がかりで
たくさんの人手とお金がかかります。これだけ
の労力をかけてやる甲斐があるのかということ
は、学内からもさんざん指摘をされてきました。
ただここで強調しておきたいことは、プレゼミ
がまさにそうだといえると思いますが、この入
試を受験することが、もちろん一義的には合格
を目標とすることは当然のことながら、それを
唯一の目標にしない入試、すなわち（これはちょ
っと傲慢な言い方ですけども）「合否にかかわ

らず」受験することで今後の有益な経験になる、あるいは自分の学びの将来ビジョンを明確にする、そういう仕組みを織り込んでいる点です。受験して損はない入試、です。

我々としても、お茶大をよく知ってもらった上で、ここで学びたいと思った人はぜひ新フンボルト入試以外の入試も受けてください、ということのアピールいたします。それに応えてくれていると言うべきなのか、例えば昨年には222人が出願してくれましたが、逆にいうと23人のみ合格しましたので、199人、ほとんど9割以上が落ちたわけです。ところが、不合格だった人たちのかなりの部分がすぐに気を取り直して、推薦入試や一般入試に挑んでくれて、そこであらためて合格を勝ち取って、最終的に合計62名が今年4月に本学の門をくぐっています（とはいえ、実際にはコロナ禍でほとんど登校できていないのですが）。あるいはプレゼミは受講したものの新フンボルト入試は受験せず、その他の入試区分で合格した人も9名おります。500名弱の新入生の中に、合わせて70名近くのプレゼミナール受講経験者が含まれているというわけですね。そういう意味で、たった20名をとる入試に留まらず、他入試への波及効果が相当に大きいものと考えています。

さて、残り時間わずかとなってしまいましたが、実は今日お話ししなければいけないのは（今日のフォーラムのテーマとしては）、このあとの今後の課題のほうだというふうに思っております。先ほど倉元先生、それから宮本先生の話聞いていて、もうとにかく耳が痛くてしょうがなかったですけども、本学の場合、小規模校であるということも含めて、非常に多くの課題があります。

まず、人の面、組織の面ということで申し上げますと、とにかくお茶大は掛け値なしに小規模の大学です。常勤の教員はわずか180人しかいません。さらには全ての入試を事務方として司ってくれている入試課には、課長以下常勤職員がわずか5人しかいません。一方、教員から選

ばれる入試委員というのは、どの大学でも恐らくそうでしょうけれども、非常に激務であり、通常2年任期で交替します（そうでなければ保ちません）。私はこのAP事業の運営・実施の責任者であったこともあり入試責任者を例外的に5年務めました。見てわかりますように、もう身も心も痩せ細りました。それはもう本当にどうしようもないぐらいに消耗いたします。ただ、教員の場合、とにかく2年で委員が交替してしまう。そうすると、なかなか制度的な維持ができません。もちろん交替しないと人の方が保たないのだけれども、一方で交替してしまうと情報が共有できない。先ほど宮本先生のお話にありましたように、入試では機密性がかなり重要です。そうすると、そう簡単にこういうやり方をするのだよということを大っぴらに伝達・共有したり、広く議論し検討する機会というのが少ないわけです。入試委員になって初めて、こんなことをやっているのかというのを理解するわけで、とくにAO入試はまさにそういうケースです。

それから、制度的なことでは、本学のような小さい大学では入試を担当する部門、アドミッションセンターというものは人的にも予算的にも立ち上げられません。常勤の教職員を回す余裕がないのです。したがって、それこそ任期で選ばれた（運の悪い）人が、その制度をなんとか維持していくしかない。当然のことながら、その過程で基本理念が徐々に失われていかざるをえません。また、新フンボルト入試は相当な負担のかかる入試ですので、今後どう維持していくかは正直にいったいへんな困難があるものと思います。AP事業もこの3月で終了し、外部資金も切れましたので、財政的にも本学自前の財源でやっていくほかありません。

この4年間で新フンボルト入試を立ち上げることにある程度成功したというふうに評価しております。とはいえ、思い起こせば何ととっても初年度が一番大変でした。新しい制度を立ち上げ細部を詰めていく過程で、どうしてこうする

のかというような批判や反論がすぐに出てまいります。それを1つずつ説得したり、解決したり、妥協したり、さらには黙っていじめられたりしながら乗り越えていくしかないわけです。ですが、そのなかで実感したことは、制度というのは一回作り上げてしまうと、もっと具体的にいえば去年こうしたのですから、という先例ができると、意外に皆さん素直に（これは多分に日本人の特性かもしれませんが）前例踏襲で動いていただけるように感じました。一方で、年月を重ねていく過程で今度は制度そのものがルーティン化、形骸化してくるのです。いわゆる創業か守成かどちらが難いかという議論に直結する問題だと思います。制度の理念を堅持しつつ、しかも柔軟に修正するというさじ加減こそが大事ということになりますが、そのためには先ほどから話題に出ているエビデンスが大事なのです。ただこのエビデンス自体を集約し分析していく体制がなかなかとれないというのが、本学の正直な現状です。人的、物的な余裕が本当にありません。

たとえばこのAO入試でどんな学生が入学してきたのかという点については、もちろん入学後の多角的な追跡調査が不可欠なのですが、それがなかなか難しい。先ほど言ったように常勤の教職員には余裕がありません。ようやく今年、自前の財源で入試担当の特任講師を雇用する体制が整いましたけれども、たった1人で何もかもやれるわけではないですし、通常の入試業務というものはあたりまえですが毎年繰り返し続いていくわけですね。さらに入学後の学生をどう追跡するかということに関しては、そもそも入試の職掌なのかという話とすぐに結びつきます。本来、これは学務課や学生キャリア支援課といった部署と協働しなきゃいけないのです。ところが、大学というところはお承知のとおり、いわゆる縦割り行政的な性向が非常に強くて、そこを突破するのは難しいものがあります。もう1つ、現状では個人情報という壁がどんどん高くなっている、その分情報やデータの扱い

に慎重にならざるをえません。本学ではまだ十分な追跡調査あるいは評価方法が開発できていないというのが正直なところですが、また、全学で20人しかとっていない入試ですので、AO合格者のGPAを単純にほかの入試合格者グループと比較するというだけでは、ほとんど意味がないわけです。量的な比較が困難だとすれば質的評価ということになりますが、これまたたいへん難しい。入学した学生は非常に個性的です。そういう意味では、身近に接している合格者の言動を元にした経験値というか印象でしか合格者像を語れないという問題を現在も克服できていません。

それから、もう一点付け加えておきますと、入試広報についての課題が非常に大きいと思っています。この4年間つくづく思い知らされましたが、我々は高校の先生方あるいは生徒の皆さんに直接働きかける術を持ちません。とくにAO入試に対しては世間の印象がもともと非常に悪いものがあります。この数年いろいろな高校に訪問調査にお邪魔しましたけれど、その際にうちはAOや推薦ではなく一般入試を目指させますということを明言される高校（の先生方）が結構ありました。これは恐らく今後変わっていくとは思いますが、そういう意味では特別選抜というのが、高大接続の問題と相俟って非常に難しい問題を抱えているということを実感しております。

以上、非常に簡略ではありますが、本学の入試改革の経験をお話ししました。そして、新フンボルト入試は今のところなんとかうまくテイクオフできたとはいえ、依然として多くの課題を抱えていると申し上げるべきだと思います。その点でお茶大のケースは、先ほど伺った東北大学の着実な入試施策の企画立案に対する、ある意味での反面教師のようなものではないかというふうに私は思っております。そもそもどの大学の入試制度も、学部学科においてボトムアップで営々とつくられてきたものです。それを、今回のお茶大の事例のようにトップダウンで、外部

経費をとってきて改革するのは極めて難しいことをつくづく思い知らされました。そして改革を企図する場合、当然学内の説得が必要不可欠になりますが、その説得をするにもやはりエビデンスがないとどうしようもないのですね。入試に正解や完成型はないわけですから。たとえばこれだけ受験生が来ているじゃないかと幾ら言っても、質はどうなんだとすぐ切り返されます。大学の教員というのはそういう論争には非常に長けておりますので。したがって、新たな入試制度を作るにしても維持するにしても、まことに難しい問題をはらんでいるということです。以上、現状報告というか半分以上愚痴になりましたけれど、これで報告を終わらせていただきます。持ち時間を超過してしまいました。誠に申し訳ありません。

(拍手)

久保沙織准教授（司会）：

安成先生、ありがとうございました。ご質問等につきましては、ウェブ上での入力をお願いいたします。

注：本報告は、JSPS 科研費 JP20K20421 の助成を受けた研究成果の一部である。

資料

入試改革への挑戦
—お茶大新フンボルト入試の実施状況・課題・展望—

第32回東北大学高等教育フォーラム
(2020年9月23日)

お茶の水女子大学
文教育学部教授 安成 英樹

【実施方法およびアドミッションポリシー】

第一次選考を兼ねるプレゼミナールと第二次選考を各々丁寧かつユニークな形式で実施

成果やプロセスを評価することで、ペーパーテストで測れない潜在的な力（ポテンシャル）を見極める

↓

単なる知識量の多寡を測るのではなく、その知識をいかに「活用」し「応用」できる力（ポテンシャル）を持っているかを問う

選考方法(二段階)

- ・ 定員は旧制度から倍増して全学で20名
- ・ 第1次選考：9月下旬開催のプレゼミナール受講後、受験生のみレポート作成 → 出願書類と合わせて総合的に評価
- ・ 第2次選考：10月中旬の土曜・日曜（理系は土曜のみ）：
文系学科は「図書館入試」、理系学科は「実験室入試」

お茶の水女子大学
多様な入学選抜試験

AO入試（新フンボルト入試）
推薦入試
帰国子女・外国学校出身者特別入試
一般入試（前期日程）
一般入試（後期日程）
高大連携特別入試
私費外国人留学生特別入試
第3年次編入学試験

プレゼミナール実施状況

2016年度プレゼミナール

2016年9月24・25日開催
プレゼミナール2日間の参加者はのべ489名（両日参加者をダブルカウント）

- ・ 初日各セミナー受講者 358名（AO受験者197名、非AOの受講者161名）
- ・ 2日目（計 131名）
図書館情報検索演習 76名
生物学科ポスター発表・相談会 38名
高校教員見学者 17名

2017年度プレゼミナール

2017年9月23・24日開催
プレゼミナール2日間の参加者はのべ524名（両日参加者をダブルカウント）

- ・ 初日各セミナー受講者 382名（AO受験者192名、非AOの受講者190名）
- ・ 2日目（計 142名）
図書館情報検索演習 77名
生物学科ポスター発表 45名
自主研究相談会 12名
高校教員見学者 8名

旧AO入試状況

入試統計

年度	出願者数	合格者数	入学者数
2008	99	9	9
2009	63	10	10
2010	81	6	6
2011	57	8	8
2012	47	8	8
2013	46	8	8
2014	52	9	9
2015	59	9	9
2016	64	6	6

定員10名を充足したのは2009年度のみ

旧AO合格者 追跡調査結果

2008年入学者の成績（GPA調査）

旧AO一期生の進路
(2008年度合格者)

- ・ 本学大学院・・・5名
- ・ 東京大学大学院・・・2名
- ・ 千葉大学・・・1名
- ・ その他・・・1名

2018年度プレゼミナール

2018年9月29・30日開催
プレゼミナール2日間の参加者はのべ480名（両日参加者をダブルカウント）

- ・ 初日各セミナー受講者 364名（AO受験者173名、非AOの受講者191名）
- ・ 2日目（計 116名）
図書館情報検索演習 88名
生物学科ポスター発表 28名

2019年度プレゼミナール

2019年9月28日(土)開催
プレゼミナール参加者はのべ454名
(今年度より1日完結型で実施)

- ・ 各セミナー受講者 442名（AO受験者219名、非AOの受講者223名）
- ・ 図書館情報検索演習参加者 50名
同見学企画参加者 70名
・ 生物学科ポスター発表 48名
自主研究課題相談会 9名

「新フンボルト入試」の由来

時間と手間をかけてじっくりと受験生の資質、能力を見る入試（学力以外の資質を測るには不可欠）
→「科学」のイメージ（ただし暗記ではないので名称として却下）

↓

近代大学の祖型ベルリン大学を創立したヴィルヘルム・フォン・フンボルトや初代総長フィヒテの理念を援用

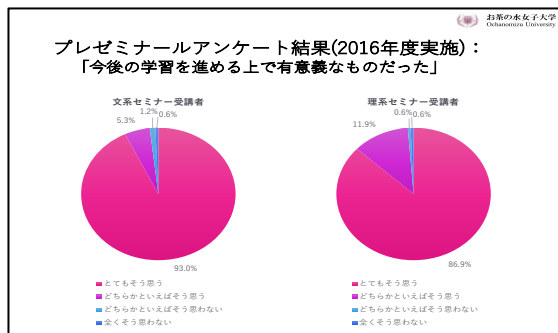
「[高校までの]学校というものは出来あいで解決済みの知識を教え学ぶ場所であるのに対して、高等教育施設[＝大学]は、学問をつねにまだ完全に解決されていない「問題」として、したがって絶えず研究されつつあるものとして扱うところにその特色をもつものである。・・・教師も学生も、学問のためにそこにいるのである。」(フンボルト)

「われわれが学問を学ぶのは、一生涯いつでも試験に備えて、学んだことをそのまま言えるようにしておくためではない。そうではなくて、**学んだことを人生の来たるべき場合に応用するためであり**、したがって学んだことを一つの働きに実えるためである。・・・究極の目的は決して単なる知識ではなくて、むしろ知識を駆使する技法[を]体得することにある。」(フィヒテ)

プレゼミナールアンケート結果(2016年度実施)：
「全体的に満足できるものだったか」

文系セミナー受講者

理系セミナー受講者

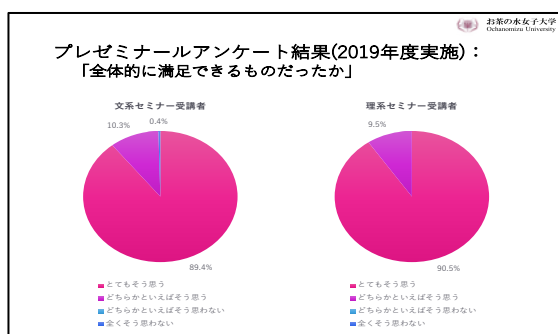


お茶の水女子大学
Chuo University

第2次選考 (10月中・下旬の土・日実施)
図書館入試 実験室入試

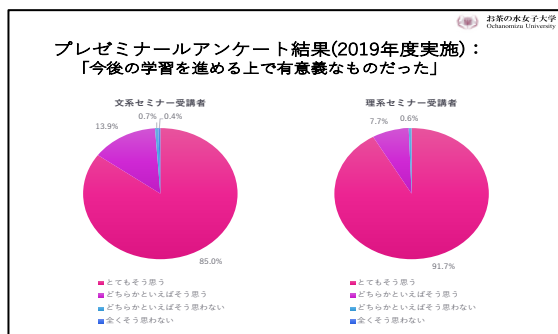
1日目は、附属図書館で、図書・資料を自由に参照しつつ課題についてのレポートを6時間かけて作成する。手書きでもWordで作成してもよい(ノートPCを全員に貸与)初年度のテーマは、「言葉の持つ力について論じよ」。2日目には、グループ討論と個別面接を課す。

自主研究課題のポスター発表(理学部生物学科、生活科学部食物栄養学科)、思考力や探究力などの能力をみる(考えを黒板を使って説明させるなど)といった課題を課す(理系の専攻は土曜日のみ) → R2年度より、学校推薦型選抜と統合し、11月末に選考を実施予定



お茶の水女子大学
Chuo University

図書館入試一附属図書館を試験会場として
人類の知の宝庫としての「図書館」の重要性
お茶大附属図書館の先進的な取組一大学内で最も居心地のいい空間へ
H29年度増改修工事...導入2年目にして「図書館が使えない図書館入試」を実施
リニューアルオープンした附属図書館(2018.4.2.)



お茶の水女子大学
Chuo University

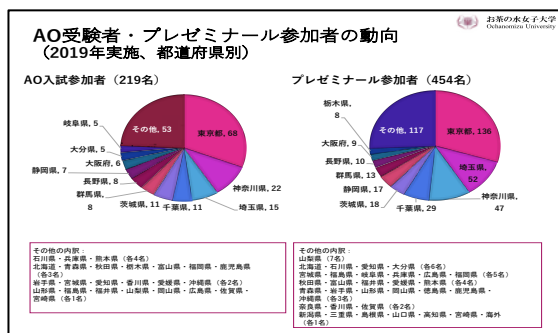
図書館入試の特徴
長時間(6時間)かけてレポートを作成
お弁当持参、茶菓用意
レポート作成の前に、情報検索レクチャーを受講

【過去4年間のレポートのテーマ】

- ・言語のもつ力について自由に論じなさい。(H29年度入試)
- ・動物と人間との関わりについて論じなさい。(H30年度入試)
- ・「役に立たないこと/もの」が存在することの意味について論じなさい。(H31年度入試)
- ・よい人生とは何か。よい人生を送るために、どのような学びが必要か?自由に論じなさい。(R2年度入試)

↓

正解のない問いをどう論じるか



お茶の水女子大学
Chuo University

入試実施状況一出席者・合格者の推移(4年間)

年度	平成27	平成28	平成29	平成30	令和1
プレゼミナール初日参加者数	265(試行)	358	382	364	454
新フロンティア入試出席者数	(64)	198	192	177	222
うち文系出席者	—	113	118	120	151
うち理系出席者	—	85	74	57	71
第1次選考合格者数	—	83	75	80	83
第2次選考(最終)合格者数	(6)	20	21	23	23

- ・新フロンティア入試実施状況 (年度は入試の実施年度を示す)
- ・H27はプレゼミのみ先行実施、同年のAO入試は旧制度による実施(定員10名)
- ・H28から新フロンティア入試完全実施
- ・R2年度は、9月13日段階でプレゼミナールエントリー283名、うち出席予定者135名(文系のみ)、いずれも速報値

お茶の水女子大学
Ochanomizu University

入学前教育の目的と内容、入学手続きの説明、キャンパスツアー、大学生活・教育についての質問・相談（チューターとの懇談）

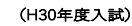
E-Learning英語教材

自宅でもできるE-Learningの活用。それぞれ、週約50分ずつ取り組んだ(H29年度)。

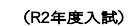
高校の学習を優先、学業の妨げにならない範囲で実施

主にチューターとやり取りしながら自主的に進める

 お茶の水女子大学
Ochanomizu University



 お茶の水女子大学
Ochanomizu University



 お茶の水女子大学
Ochanomizu University

- 課題(山積)と展望

- 時間がかかる入試方法→過重負担をいかに軽減するか(制度の見直し)
 - 専任教員は全学で180名、入試課員5名の1
 - 二次選考でも文系で試験官10名以上、理系各学科は総動員体制
- プレゼンとの実施方法、評価方法などのフラッシュアップ
- APBを経た後の財政的措置 (任期付講師の採用、必要経費の学本財源からの支出)
- 合格者の追跡調査 (マンパワーの不足)
- 有望な志願者を恒常的に惹きつけ、確保しようか……高校生への広報手段の開拓
- 「人」の問題……オ디션・オーディションの弱体化(弱体化とヒトナ)
 - 任期で交替する教員
 - 入試業務のルーティン化→制度の簡便化、関係の喪失

現状報告 2：大学入試を読み解き，解きほぐす — 高校現場の実践と課題 —

青森県立青森高等学校教諭

笠井 敦司 氏

〔講師紹介〕

久保沙織准教授（司会）：

引き続きまして，現状報告 2「大学入試を読み解き，解きほぐす—高校現場の実践と課題—」，青森県立青森高等学校教諭，笠井敦司先生，よろしくお願いいたします。

笠井敦司教諭：

青森県立青森高等学校の笠井と申します。本校は，県庁所在地青森市にごきます進学校であり，本年創立 120 周年を迎えました。また，県下屈指の進学校として地域の期待も大きい学校でございます。本日は，「入試を読み解き，解きほぐす」と題しまして，実践事例報告をいたしたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

さて，本日のトピックと展開です。全体として 3 部構成，対策を問い直す，入試を解きほぐす，対策を展開する，以上で進めてまいります。

では，早速まいります。「対策を問い直す」です。いよいよ 2021 年入試より，大学入学共通テストが導入されます。高大接続改革の要である入試改革は，知識偏重，一方的で受動的な高等学校教育を，いわば逆向き設計で改善を促すものだというふうに認識しております。そのことは共通テストの導入のみならず，ごらんのように，一般選抜，総合型選抜，学校推薦型選抜というふうに，選抜という表現に改められた点に端的に表れているんだと思います。

合格点を取ることにばかり意を注ぎがちになる入試から，多面的かつ本質的に，生徒の資質・能力を測る，見極める選抜へと転換を図る，そういうメッセージだと受け止めております。折しも現在，コロナ禍により，それぞれの選抜方式の全き形での実施が危ぶまれる状況下ではありま



すが，だからといって，当初掲げた理念までが反故になったわけではありません。コロナ禍があるがなかろうが，以前の入試に戻ることはなく，資質・能力を見とる選抜方式の比重が大きくなることは間違いありません。そこから目をそらすことなく，これまでの指導をどう評価し，変えていくべきなのかということにつきまして，本校の医学科推薦 AO 対策を具体的な材料としながらお話しをまいります。

ここで，従来の古典的な指導スタイルと，本校が実施している指導スタイルを対比的に見ていきたいと思います。従来の指導スタイルは，端的に言うとは指導・訓練型です。普段の学びとは別物，そして短期集中特訓，マン・ツー・マンの徒弟制度，一方的な指導で生徒は受け身になりがち。指導内情がその先生でないとわからないブラックボックスになっている。そもそも教員と生徒の関係は垂直的でありますから，指導教員がこうしろ，そうするなど言えば従わざるを得ないのが，生徒です。この関係性で指導するという観念にとらわれてしまいますと，どうしても文章の書き方だとか受け答えの仕方といった「方」の指導，技術的，表面的な指導に終始してしまいがちです。これでは単なる訓練で，生徒は苦痛であるばかりです。

しかし、考えてみれば簡単ですが、教え込まれたものを自分にたたき込んでそれを再現するというスタイルは、各大学が求める見とりたい力と合致しているとは思えません。ここには、対策を通じて生徒の資質・能力を高めるという発想が欠落しているんだと思います。入試対策におけるこうした構造的な弊害を取り除くためには、指導者としてではなく、プロデューサーとしての立ち位置で関わるのが大事なのではないでしょうか。

画面、こちらのプロジェクト型が本校の医学科指導の形でございます。普段の学びの延長であること、計画的・継続的であること、グループ化をして1対多、たまにマン・ツー・マンという形、柔軟な形、双方向的な意見交換が生じ、生徒との双方向の意見交換が生じ、また指導内容は他の教員の意見を取り入れながら、順次更新していくというような形です。

ただ、恐らく多くの進学校で、さまざまな名称でこうした進学グループをつくって指導なさっていらっしゃると思いますので、これ自体特に目新しいものではないと思います。ただ、大切なのはこうした指導形式ではなく、あるいは指導内容がどれだけ実際の入試と一致しているかでもありません。対策の局面で、どのような資質・能力の育成を目指しているのかということが一番大事だと思います。その際に、私が大事にしているのが次の8つのステップです。

順番に、読み解く、洗い出す、集める、探る、見極める、実践する、振り返る、修正する、以上の8つのステップです。これをこれから4つずつ、2つに分けてご説明をしていきたいと思います。

まず、入試を解きほぐすという1から4の段階です。例といたしまして、東北大学医学科のAOⅡ期、Ⅲ期のアドミッション・ポリシーをかいつまんで読み上げたいと思います。

AOⅡ期、人を対象とする生命科学や医学・医療に関わる学問に強い関心を持ち、旺盛な探究心と創造的な思考能力と高い倫理観を有する人

を求めています。研究医として世界的な活躍をめざす情熱と積極性を有する人を歓迎します。

AOⅢ期、医学・医療の指導者として世界で活躍をめざす人を求めています。対話による相互理解力と医学への強い学習意欲と探求心を持ち、リーダーシップを発揮できる人を歓迎します。

こう読み比べますと、Ⅱ期とⅢ期では重きを置く能力に違いがあることがわかります。資質・能力の観点の違いに着目して、私は次のように読み解き、洗い出しました。

Ⅱ期に掲げる創造的な思考力とは、定式的な思考パターンにこだわらず、多角的な視点で捉え、柔軟な発想で解決に導く能力ではないかと考えました。

Ⅲ期の対話による相互理解力は、端的に言ってコミュニケーション能力、詳しく言うと相手の意図や考えをしっかりと受け止めて理解し、その上で自分の考えを相手に伝えるように言語化できる力、こう読み解きました。

しかし、これが、では過去問とどのように対応しているのだろうか。確かめ算として情報を集めます。そういたしますと、生徒の報告書は、こういったものは各校でも当然のようにやられていることだと思います。これによりますと、創造的な思考力に相当するような設問、「風が吹けば桶屋が儲かる」の原因から結果を導き出す問題が出されました。

それから、私と練習していたので、安心しながら書けたというような対応の妥当性もある程度確認できました。これに基づきまして、また次の年の指導をアレンジしていくということになります。こうしたレポートの聞き取りから、可能な限り実際の試験を再現しようとはしますが、大切なのは再現性ではなくて、そうした設問内容、形式から見てとれる原理的なデザインを読み取ることが何よりも大事だと私は考えます。

対策のしようがないと、よく耳にしますが、それは対策イコール実際の出題形式に習熟するという発想をするからであって、対策イコール出題のデザインに沿って創造的に手だてを講じ、

生徒の資質・能力をレベルアップさせることだと考えれば、指導者としては気が楽であり、何よりも生徒と一緒に考え探求するという楽しい時間を共有することができます。

そこで、私が考えた2つのデザインがこちらです。1つがブラックボックス型、もう1つはパズル型です。ブラックボックス型は「風が吹けば桶屋が儲かる」のように、示された結論から見えない因果関係を探求するもの、パズル型は逆に目に見える事象を因果関係で結び、結論を導くものです。この一対の思考を、志望する大学が求める学生像とも照らし合わせて調整しながら指導していくという設計をしています。

では、具体的にいよいよ対策を展開する、の局面にお話を進めていきたいと思います。デザインの軸足を決めて、それに基づいて対策問題をつくるわけですが、これは宿題にするのではなくて、実際に私の目の前で時間を与えて解かせて、その状況を見て、生徒の様子を見極めて生徒自身にも感想を聞き、その双方向性の中でやりとりをして、指導の重みづけをしていくというような、もうそういう双方向性を大事にしております。

その1つとして、例題1と例題2をつくって取り上げてきました。例題1のみ、ちょっと読んでみたいと思います。ペナルティによってルールを守らせることはできないという原則がある。ルールを守らせるためにペナルティを設定することに効果がないのはなぜか、具体例を挙げつつ論証しなさい。そして、その論理に基づき「ルールを守らせる」ためにはどのような方法があるか、考えを述べなさい。という創作問題です。これについては、このような生徒の回答が書かれました。たとえ後でペナルティを受けたとしても、今、ルールを破って好き勝手するほうがいいと考える人が一定数いるとき、ルールは守られない。だから、ペナルティを厳罰化してペナルティを軽視できないようにすればよいというふうなレポートを書きました。それを私がまず読んで、それに対して一言一言、突っ込みを入れて

いくというような形です。それだと、ルールを守るよりペナルティを避けることが目的になってしまわないかというふうに、そしてまた思考を一段深めさせる。この問答をしていくということをやっております。これをするによって、おのずと面接練習にもなっているでしょうし、自分の書いたものを自己評価、メタ認知することにもなりますし、また指導者としても、この生徒の課題はここだなという形で、指導の計画を微調整したり修正したりすることができます。

もう一例あります。これはAOⅢ期のときにやった課題なんですが、画面はホワイトボードになります。学術的な文章を20分ほど読んで要点をメモさせて、それをホワイトボードに書いてプレゼンをするというような作業、対策であります。そこでもまたホワイトボードを指さしながら、これどういう意味ですか、そこはどういう意味かもう少し詳しく教えてくださいというような形でやりとりをしています。このような取り組みをして、生徒の資質・能力を高めていく。ごらんのように、医学科ですから、医学に寄せた内容もちろんやりますけれども、全く関係ないもののほうが多く出題をしているという感じです。

さて、もう早いものでまとめになるんですが、「対策」のその先へということでございます。入試対策という言葉のイメージはとにかく即物的で、合格のための訓練という認識がどうしてもあるように感じます。

しかし、どれくらいよく訓練されているかを見とるのが入試ではないと思っています。むしろ、訓練では身につかない本質的な思考力の質を見るのが大学入試なのではないでしょうか。実際、ある大学の面接で、受験した生徒が面接を退室する際に、高校の先生に言っておいて、あまり練習させないで、というふうに受験生に言ったそうです。これをその受験生から聞かされて、とても衝撃といいますか、ああ、そういうことだなというふうに思ったのを今でも忘れません。結局は、ですから思考力を、本質的な力をつける

しかないのだと思います。そう言ってしまえば、取りつく島もないんですけれども、その島に当たるのが先ほど述べたブラックボックス型とパズル型という考えではないかなと思っております。これを軸に、さまざまな創意工夫を凝らして指導していけば、自信を持って大学に生徒を送り出せるのかなというふうに考えています。

また、入試対策を合格のための短期集中指導、訓練ではなく、思考力を鍛え伸ばす集中特化型授業と捉えれば、ここでのノウハウを普段の授業に活用することができます。入試対策を別物扱いするのではなく、平時の授業にも転移し得る実践研究の場としても捉えることができます。そうしていけば、コロナ禍後の新しい学びの様式を紡ぎ出す1つのヒントとなる知の場になるのではないかなというふうに考えております。指導したことを軸に、新しいあり方、学び方というものを今後も研究していきたいなというふうに考えております。簡単ですが、以上で発表を終わらせていただきます。ありがとうございました。

(拍手)

久保沙織准教授（司会）：

笠井先生、ありがとうございました。ご質問等につきましては、ウェブ上での入力をお願いいたします。

資料

大学入試を読み解き、 解きほぐす

—高校現場の現状と課題

2020/09/23 東北大学教育フォーラム 現状報告
青森県立青森高等学校 笠井敦司



2 「指導・訓練型」から「プロジェクト型」へ「対策」観の転換

「指導・訓練型」	「プロジェクト型」
□ 普段の学びと「ベツモノ」 □ 短期集中特訓 □ マン・ツウ・マンの徒弟制 □ 一方的な指導 □ 指導の内情がブラックボックス	□ 普段の学びの延長 □ 計画的・継続的 □ グループ化 □ 双方向的な意見交換 □ 指導内容をオープンに

本日のトピックと展開

「対策」を問い直す	「入試」を解きほぐす	「対策」を展開する
□ 高校現場の考え方と実際 □ 訓練型からプロジェクト型へ □ 本校の対策スタイル	□ アドミッション・ポリシーを読み解く □ 求められる資質・能力を洗い出す □ 過去問の情報を集める □ 試験問題の「デザイン」を探る	□ 指導を実践する □ 意見交換して、答案を振り返る □ まとめ「対策」のその先に

3 本校の対策スタイル「医学科AO対策」を中心に

「対策」8つのステップ

- 1 アドミッション・ポリシーを**読み解く**
- 2 求められる資質・能力を**洗い出す**
- 3 過去問の情報を**集める**
- 4 試験問題の「デザイン」を**探る**
- 5 生徒の資質・能力を**見極める**
- 6 指導を**実践する**
- 7 意見交換して、答案を**振り返る**
- 8 指導内容・順序を**修正する**

「対策」を問い直す

大学入試を読み解き、解きほぐす 2020/09/23



「入試」を解きほぐす

大学入試を読み解き、解きほぐす 2020/09/23



1 高校現場の考え方と実際—「入試」から「選抜」へ

■ 一般入試 ■ AO入試 ■ 推薦入試	■ 一般選抜 ■ 総合型選抜 ■ 学校推薦型選抜
--	--

知識・技能
思考力・判断力・表現力
学びに向かう力・人間性

広い意味での「学力」を3つ意識、重視する

アドミッション・ポリシーを読み解く

AO入試Ⅱ期（東北大・医学科）	AO入試Ⅲ期（東北大・医学科）
人を対象とする生命科学や医学・医療に関わる学問に強い関心を持ち、旺盛な探究心と創造的な思考能力と高い倫理観を有する人を求めています。東北大学で学部・大学院教育を受けることを希望し、大学や研究所で研究医として世界的な活躍をめざす情熱と積極性を有する人を歓迎します。筆記試験、書類審査、面接試験によって、医学・医療に関わる学問への関心、探究心、思考能力、倫理観などを評価します。	将来、医学・医療の指導者として世界で活躍をめざす人を求めています。東北大学で医学教育を受けることを熱望し、対話による相互理解力と医学への強い学習意欲と探究心を持ち、リーダーシップを発揮できる人を歓迎します。大学入試センター試験の成績に加え、筆記試験、書類審査、面接試験によって、医学・医療に関わるなど学問への関心、探究心、思考能力、倫理観を評価します。

（東北大学入試センターホームページより引用、傍線は発表者）

求められる資質・能力を洗い出す

A O入試Ⅱ期（東北大・医学科）

「創造的な思考能力」

➡「一見して解決方法が見出しにくい課題に対して、定式的な思考パターンにこだわらず、多角的な視点でとらえ、柔軟な発想で解決に導く能力」

「研究医として世界的な活躍をめざす情熱と積極性」

➡「解決困難な具体的課題を見据え、その解決を目指す強い志とそのためのビジョンを持ち、行動に移す力」

思考力 # 判断力 # 表現力 # コミュニケーション能力 # 柔軟性 # プレない

A O入試Ⅲ期（東北大・医学科）

「対話による相互理解力」

➡「指導者として世界で活躍する人」に必要な、コミュニケーション能力。対話を通して相手の意図や考えをしっかりと受け止めて理解し、その上で自分の考えを相手に伝えるように言語化できる力」

「リーダーシップ」

➡「対話による相互理解力」に基づいて、考えを整理し、自分の言葉で解決策や方針を打ち出すことのできる力」

指導を実践する一指導の実践

「思考力・判断力・表現力」を問う二つのバケツ

【例題1】ペナルティの効果

「ペナルティによってルールを守らせることはできない」という原則がある。ルールを守らせるためにペナルティを設定することに効果がないのはなぜか。具体例を挙げつつ論証しなさい。そして、その論理に基づき「ルールを守らせる」ためにはどのような方法があるか、考えを述べなさい。

ブラックボックス型 # 資料なし

【例題2】所得と生活習慣病

平成26年国民健康・栄養調査表2を参照し、★印の有意差のあった項目に基づき読みとることができている状況を説明せよ。また、そのような状況になる要因を考え、その因果関係を説明せよ。そしてそれを踏まえて、効果的と思われる対策を立てよ。

パズル型 # 資料読解

過去問の情報を集める

前年に同学科を受験した生徒の受験報告書を参考にします。

無い場合は、情報サイトを探るか、現場のネットワークを通じて入手に努める。

「風が吹けば桶屋が儲かる」ように一見関連のない原因から結果が導き出される過程を論理的に記述させる問題。

アドミッション・ポリシー「創造的な思考能力」に対応していると分析する。

指導内容の妥当性が確認できる

「原因から結果を筋道立てて書く練習は並井先生としていたので、安心しながら書けた。」

意見交換して、答案を振り返る

【例題1】ペナルティの効果

たとえばでペナルティを受けたとしても、今、ルールを破って好き勝手する方がいい」と考える人が一定数いるとき、ルールは守られない。だから、ペナルティを厳罰化してペナルティを軽視できないようにすればよい

しかし、それだと「ルールを守ること」が目的になってしまわないか？とすれば、「ばれなければ大丈夫」と考えて不正が横行し、やっぱりルールは守られないのではないかな？

試験問題の「デザイン」を調べる

「思考力・判断力・表現力」を問う二つのバケツ

【ブラックボックス型】

一見ない因果関係を探る

因で出来上がっている家を見て、その構造がどうなっているか図面に書き起こす。

風が吹けば # 桶屋が儲かる

【パズル型】

一目に見える事象を因果関係で結ぶ

山積みになっている資材を見極めて、それを適切に使って家を組み立てる。

風 # 土ほぐり # 目が不自由になった人 # 三味線 # ネコの皮 # ネズミ # 桶

意見交換して、答案を振り返る

【表現重視の課題】プレゼン

学術的な文章を読み、要点をホワイトボードにわかりやすくまとめ、それに基づいて口頭で説明する。

〈画像は四本棒子「ヒトのこころの測定法」を読み、まとめた生徒のプレゼン〉

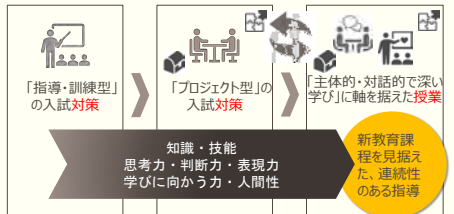
「因果関係」と「相関関係」は、どう違うのですか？なにか具体例を挙げてわかりやすく説明してください

「対策」を展開する

大学入試を読み解き、解きほぐす 2020/09/23



6 まとめ「対策」のその先へ



大学入試を読み解き、
解きほぐす 終わり

2020/09/23 東北大学教育フォーラム 現状報告
青森県立青森高等学校 笠井敦司



現状報告 3：「高大接続改革」に対する高校現場の受け止めと 今後の期待

私立武蔵高等学校中学校校長
杉山 剛士 氏

〔講師紹介〕

久保沙織准教授（司会）：

それでは、最後の現状報告となります。現状報告 3 『「高大接続改革」に対する高校現場の受け止めと今後の期待』、武蔵高等学校中学校校長、杉山剛士先生、よろしくお願いいたします。

杉山剛士校長：

皆さん、こんにちは。東京にあります私立武蔵高等学校中学校校長の杉山でございます。本日はお招きをいただき、また貴重なお時間をいただきまして本当にありがとうございます。3 人目の報告ということで、少々お疲れかと思えますけれども、この後休み時間もございますので、あともう少しお付き合いください。

私のほうからは、「高大接続改革」に対する高校現場の受け止めと、それから今後の期待ということでお話しをいたします。

最初に、自己紹介をいたします。私は埼玉県職員として 35 年間を過ごしました。まず最初に高校の社会科教員として 13 年、それから行政職員として 12 年、高校の管理職として 12 年、最後は浦和高校という学校の校長を 5 年間務めました。

また、その間、全国校長会の理事としても務めさせていただきました。そして、昨年度からは母校であります私立武蔵高校中学校の校長として戻ってまいりました。

今日のお話の流れでございます。そこに書いてあるとおりですけれども、あまりデータに基づいたお話はできないかもしれないんですが、せっきくの機会ですので、この間の動きを通し



て感じてきたことを今日はざっくばらんにお伝えしたい、そんなふうに思います。

まず、高大接続改革の現場の受け止めをお話しする前提としてこの間の議論の流れ、おさらいをしたいと思います。スライドにありますように、高大接続改革については平成 24 年に中教審への諮問がありました。そのときの諮問は、大学入学者選抜の改善をはじめとする高等学校教育と大学教育の円滑な実施と連携の強化のための方策についてということで、まずは大学入試、そして特に、低学力のまま大学に入学してくる学生をどうするか。そして、その課題を解決するための大学入試のあり方や高校の学習指導のあり方、特に質の保障という問題が非常に大きな問題としてあったというふうに思います。

その後政権交代がございまして、政府直属の教育再生実行会議が立ち上がります。その中で、高大接続の言葉が前面に出てまいりました。そして、実行会議の第 4 次提言を改めて受ける形で平成 26 年に中教審答申が出されます。この答申への当時の私の率直な感想ですけれども、例えば合教科型入試の複数回実施を提言するなど、

教育再生実行会議の提言以上に力が入った答申、そんな印象を持ちました。

ただ、その後高大接続システム改革会議、これは高校、大学の現場の関係者も入った平場の公開の会議でしたけれども、この中で現実的な制度設計が議論される中で、この合教科型入試や複数回実施はなくなりまして、いわばちょっとトーンダウンした形で平成 28 年 3 月に最終報告が出されました。

ところが、その後今度はクローズされた中で文科省での検討が進みまして、高大接続改革システム改革の最終報告から 1 年半後、文科省から高大接続改革の実施方針等の策定が示されました。その中では、英語民間検定試験の積極的導入が示され、正直びっくりしました。

また、記述式については当時は実施時期が問題の焦点になっておりました。記述式のみ前倒しするという考えが出ていたんですけども、これについては現状の時期と変えないという結論になり、ほっとした記憶がございます。

そして、その 2 年後、令和元年 11 月 1 日、この日は大学入試センターに英語民間検定実施のための共通 ID を送付する、まさに初日でありました。文科大臣から突然の見送り表明がされました。そして、12 月には記述式も見送りになりました。そして、社会からのいろんな批判を受けまして、12 月末にはこの間の流れを検証するとともに、記述式や英語民間検定試験の今後の扱いについて検討いたします大学入試のあり方に関する検討会議が急遽設置されまして、公開の場での議論が始まりました。

そして、この夏のことですけれども、今度は主体性評価を目指していた「JAPAN e-Portfolio」の運営許可取り消しが突然なされました。私も 40 年近く高校現場に携わってきましたが、こんなことはこれまでなかった。まさに未曾有の大混乱でありました。

それでは、高校現場の実際の受け止めはどうだったのか、英語民間検定試験の見送りを例に若干裏話も含めてお話をしたい、そういうふ

うに思います。11 月 1 日の朝、NHK から連絡がありまして、コメントが欲しいということで電話取材を受けました。その記事です。

東京練馬区にある私立武蔵高校の杉山剛士校長は「今さら延期することで生まれる混乱もあると思うが、教育現場では都内の進学校ですら不安や疑問が広がっていた。保護者会も質問の嵐ですでに大混乱の序章が始まっていた中で延期されたことは現場として評価したい」と話しました。その上で、「英語の技能を高めようということに異論はないが、50 万人の受験生が受ける国家的なテストに民間試験を活用するということにそもそも無理があった。地域格差や経済格差といった根源的な課題が解決されないまま実施ありきで進んできたことが大きな問題だった」と指摘しました。このコメントはそのままネットニュースに流れました。

NHK からは生徒のインタビューが欲しいということだったんですが、これ以上この問題に生徒をわずらわせるのはイヤでしたので、それはお断りして、校長の映像だけ後に取材に来るのでよろしくということで電話が切れました。

しかし、その後もう一回電話ありまして、別の学校の取材ができそうなので本校には来ないということで、そこで夜の 7 時のニュースに映像とともに流れたのが、以下のコメントであります。

〇〇市の〇〇高校では新たな入試の対象だった高校 2 年生が民間試験に向けて、すでに予約金を振り込んだり、対策講座を受けたりするなどして準備を進めてきました。延期は担任の教員が受験に必要な「共通 ID」の申請をしようとしていた矢先の出来事だったといいます。高校 2 年生の男子生徒は「やるものだと思って、予約金を払ったりして準備してきたので、はぁというのが感想です」と話していました。また女子生徒は「朝起きてニュースを見て衝撃を覚えました。これまで準備してきたので悲しいです」と話していました。

高校では英語の担当教員が実際に民間試験を

受けるなどして対策を進めてきたということで、○○校長は「びっくりしました。準備をしてきた生徒は一体どうなるんだろうと、はらわたが煮えくり返る思いです。もっと早い段階で決断して欲しかった、振り回された生徒を考えると気の毒でならない。高校生が一番の被害者だ」と憤りをあらわにしました。地域によって、あるいは学校によって、受け止めの差はありました。ただ、高校生が振り回されたというのは全くそのとおり、まさに未曾有の大混乱でありました。

その後、記述式も見送られまして、更にこの夏休みの8月7日には、e-Portfolioの運営許可取り消しというニュースが流れました。これはその対応についての文科省から学校現場への通知であります。ちょっと読んでみます。

「JAPAN e-Portfolio」の運営許可の取り消しに伴い、一般財団法人教育情報管理機構による運用が停止されるため、これまで利用者が登録した情報は「JAPAN e-Portfolio」を通じては令和3年度の大学入学者選抜に活用することができません。利用者の登録情報の取り扱いに関しては同法人と文部科学省での調整を行いましたが、令和2年9月11日以降「JAPAN e-Portfolio」のシステムは完全に停止しますので、登録した情報を保存したい利用者の皆様は令和2年9月10日までに、以下の情報を保存してください。ちょっと1段落飛ばしますけれども、上記の印刷・保存作業は、必ず令和2年9月10日までに行ってください。それ以降は登録した情報は、個人情報秘密の保持の観点から、確実に消去されます。

夏休みに、9月10日までにデータを取り出して保存しなさい、この通知をもらった「JAPAN e-Portfolio」を利用していた学校現場というのは、本当に困ったと思います。その現場の混乱も想像されてください。

この間の高大接続改革、特に大学入試改革に対する高校現場の受け止めですけれども、これはやっぱりデータに基づくものではなくて私見になってしまいますが、さまざまな校長先生方

のお話をお伺いする限り、不信と不安だと思います。一連の流れについて、国の教育行政に対する不信は、残念ながら大きなものになってしまいました。同時に現在は現場を預かる者として、不安のほう大きい。

まず、新型コロナウイルスの対応はどうなるのか。「JAPAN e-Portfolio」は運用停止になった中で、Portfolioを大学はどう活用するのか。また、主体性入試はどうなるのか。そして、英語の民間検定試験や記述式、これは結局どうなるのか。更に、これは特に地方の公立高校の校長先生とお話ししていると、すごく心配されていることなんですが、今後大学入試改革に伴って経済格差や地域格差が更に影響してくるのではないかと、そういった不安であります。

それでは、これだけ混乱した要因は何か。これについては現在、大学入試のあり方に関する検討会議で検証中だと思いますけれども、せっかくの機会ですので、率直に申し上げさせていたきたい、そんなふうに思います。

まず、政治主導の弊害があったと思います。この辺の意思決定過程はブラックボックスでわかりにくい、わかりかねるところがあるんですが、メディアの報道を見る限り、英語の民間検定試験についても、そもそも無理な面があったにもかかわらず、民間企業の教育界参入という経済再生の視点や、グローバル化が進む中で、日本が世界から取り残されてはまずい、そういった日本の国力向上の視点から、若干強引に導入されようとしていた面があった、そんなことがうかがわれます。

次に、その政治主導の動きを支えた官僚機構があると思います。これも難しいところなんです。無理筋な政策であっても、それを止められない。むしろ理論武装で補完してしまう。例えば複数回実施が消えたときに、記述式の導入によって、それが実質的な複数回実施だと言い換えたり、あるいは当初大学生の学力低下の問題に焦点が当たっていたりしたのが、やがて高大接続という非常に大きな仕立て、非常に何でも織

り込んだ大きな仕立てになる際に、この学力の三要素というのが大きな理論的基盤として位置づけられたようになってきた。戦線が拡大する中で、理論も補強されてきた、そんな印象を持っています。

そして、最後に「暴走」を止められなかった高校現場、大学現場の責任、私たちも全国校長会の中で精一杯の取り組みをしてきましたが、また東北大学さんのように真摯にこの問題に向き合うという動きがありますが、やはり国の政策に大きな懸念があっても、残念ながら批判しない、あるいは批判できないという構造があったように思います。これは率直に反省すべき点だというふうに私は思います。

それでは、この3つの要因の背景にある問題の本質は何か。問うべき問題の本質について、2つ指摘をしたいと思います。

1つは、教育という人の成長を扱う営みに対してリスペクトがあるのかということです。私は学校現場や教育行政を長年歩いてきて、つくづく思ったことがあります。それは、教育という問題はとても身近な問題であるので、誰もが一家言持っているけれども、教育それ自体に価値があると考えて教育を目的として語っている人と、教育を手段として語っている人、例えば政治の手段であったり、ビジネスの手段であったり、そういった人の2種類があるのではないかと思います。もっとも、それは私自身にも言えることで、教育で給料をもらっているわけですから、教育は手段でもあるわけですが、常々目的として語れる人でありたい、そんなふうに思っています。教育というのは人の成長を扱う営みです。

でも、この成長というのは厄介です。思ったようにはいかない、いつ効果が出るかわからない。お金を投じたらすぐ効果が出る、そういったような分野とは違います。現在は成果主義の風潮も強く、成果を出すことの重要性、それももちろんあるんですけれども、どうしても瞬間風速を追い及ばない成果主義とは相入れない部分という

のが教育の根本にはあると、そんなふうに思っています。なかなか変わらない現場に対して、改革論者はいら立ちを示しがちです。

でも、今お話ししたような性格を持つ教育という営みに対して、そういったものへのリスペクト、そして現場に対するおおらかさが欠けてはいなかったか。この間の混乱の様子を見て思います。

もう1つの問題は、急激な教育改革はうまくいくのかという問題です。教育現場にも当然課題はあります。ただ、戦時ならともかく、平時においては急激な改革というより、つまり目指すべき理念、到達すべき目標というのは旗として高く掲げながらも、成果の確認や意識の変容を伴いながら、先ほど安成先生が新フンボルト入試の話を本当に苦勞されていると言われましたけれども、私はあれは旗を高く掲げながら少しずつ改善されている、そういうふうに思います。そして気がついたら以前とは全く違うことをやっていた、というくらいの改革のほうが望ましいように思います。というのも、改革には必ず副作用が生じます。教育行政はまさに総合行政でありまして、一面真理が必ずしも全面真理にはなりません。例えば、かつて東京都は受験競争を緩和するために、都立高校に学校群のシステムを導入しました。

しかし、そのことにより受験競争が緩和したかということ、決してそうではありません。逆に都立高離れ、そして私学への受験生流入を招きまして、豊かでないと高い教育達成ができないのではないかと、そういった方向に進んできました。

また、今般の大学入試改革においても、大学入学共通テストで記述式を導入したり英語の民間検定試験を活用したりする、たとえその方向性は望ましいにしても、かえって共通テストが敬遠され志願者が減ってしまうのではないかと、そういったことも考えられます。教育政策の立案者は、こうした作用、反作用を直感できる高度な想像力、これが求められていると思います。

それでは、最後に、今後の期待についてお話し

をしたいと思います。現在、大学入試のあり方に関する検討会議において、今後の大学入試のあり方について議論を進めています。当初は年内にも結論をとということでしたが、新型コロナウイルスのこともあり、現在これまでの意見の概要もまとめられ、国民の意見も求めつつ、じっくりと考えようというふうに進んでいます。ぜひ実りある議論を進めてほしいと願っていますが、ここでは3つの視点から今後の高大接続改革についての期待を述べたいと思います。

まず1つ目は、実現可能性への配慮がなされるかということです。理念や目指すべき方向性を掲げるだけでなく、どうしたら実現できるのか、実現可能性があるとすれば、そこに生ずる負担への対処方法、また施策を実現するための資源の確保についても検討してほしいと思います。例えば英語教育を小中学校、更に高校でも充実させようという話があると、それを実現させるためには質の高い教える人を量的にも確保する必要があります。

しかしながら、学校現場はどうか。例えば、産休育休などの臨時教員、代替教員が必要なときに、英語の教員を確保することに苦労しているという話をよく聞きます。アクティブラーニング、主体的、対話的で深い学びの実現もそうです。これは、教員にこれまで以上にその教材研究や授業の準備を周到に行う、そういったことを強いることになりますが、教員に新たな課題を課すときに、それを実現させるための資源もセットで議論することが必要だと思います。

2つ目は、格差への対応が考えられているかということです。明治5年、1872年、明治政府は新しい時代の教育を進めていく上で、学制を發布しました。その中の有名なフレーズですが、「不学不邑」があります。邑に不学の戸なく家に不学の人なからしめんことを期す、士農工商という江戸時代の身分制度を打破して学問を社会全体に広げることににより、出自にかかわらず、学問があれば立身出世できる。そうした活力のある社会をつくる。つまり、学制という教育政策を

進めることにより、身分社会は解消され、そして社会の格差はなくなる。それが日本の近代化を支えた教育政策のベクトルでありました。

一方、英語民間検定試験の導入のときに課題として、その政策を推し進めれば推し進めるほど地域的格差、経済的格差が広がるのではないかと、そういったことがさんざん指摘されました。教育政策が進めば進むほど格差が広がるというのは、学制の政策ベクトルとは真逆になります。この教育と格差の問題は難しい問題です。

私は東京におりますので、中学校においては、もう多くの生徒が中高一貫校に通っている東京の状況を見ますと、もはやこの課題というのは新しい状況に入っているかなとも思いますけれども、先ほども申しましたように、特に地方の学校ほど、このことを強く心配されていると思います。国としても、この問題にどう向き合うかということをはっきり示すことが求められていると思います。

そして、最後に、本来の高大接続に向けての取り組みがなされるかということです。それでは本来の高大接続とは何かというと、これ大上段の議論になりますけれども、私はたった一度の人生をどう構想していくかという、いわば人生の構想力、あるいは価値ある人生をつくり上げようとするパッション、そういった視点から高校と大学の教育の筋を通していくことが必要ではないか、そんなふうに思っています。キャリア教育ということかもしれませんが、何かもっと単純に、そしてわかりやすく筋を通せないかな、そんなふうに思います。

個人的な体験ですけれども、今から4年前に夏休みを利用してアメリカの10大学を訪問し、そこでアドミッション・オフィサーや現地の学生、そして日本からの留学生に話を聞いたことがありました。そこで感じたことは2つです。

1つ目は、アメリカのアドミッション・オフィサーの数が多く、力のある高校生を発掘するために、入試に本当に手間をかけている、そういったこと。

そして、もう 1 つは、アドミッション・オフィサーが探そうとしているのは、まさに人生の構想力、それがアメリカでは問われていると、そんなふうに思いました。特にアメリカの入試で問われているエッセイ、それを書くことができる力を日本の教育では本当に育ててきたのか、そういったことを自問自答しました。エッセイは将来自分が何になりたいかだけでなく、どう生きたいか、これを問い続けているものであり、その答えは発達、成長の途中で変わるかもしれないけれども、そのことを考え続けさせ、高校から大学へと送り出していくこと、これが本来の高大接続ではないか、そんなふうに思った次第です。

もっとも、隣の芝生は青く見えますので、アメリカの制度自体にも課題はあるのは重々承知しております。ただ単に制度を導入すればよいということではなく、制度の背景にある歴史や文化、人々の意識が大事だと思った次第です。

加えて高大接続、そういった高大接続を図るために、高校側と大学側が同じテーブルにつくこと、これはとても重要だと思います。本日のフォーラムはまさにそういった機会を提供していただいている 1 つだと思いますけれども、私自身も埼玉県在校長のとき、地元の埼玉大学の学長さんと話し合って、高大への意見交換の場を設け、極めて有意義な時間を共有できたことを思い出します。お互いなかなか忙しいんですけども、やはり高校と大学が同じテーブルについて共に教育を語る、まさに目的としての教育を語ることが大切だというふうに思います。

以上、取りとめのない話をまた若干早口でお話しをしました。ちょっとお聞き苦しいところがあつたかもしれませんが、以上で私の報告を終わります。どうもご清聴ありがとうございました。

(拍手)

久保沙織准教授（司会）：

杉山先生、ありがとうございました。

ここで休憩をとらせていただきます。再開は、前方のデジタル時計で 16 時ちょうどいたします。

なお、基調講演及び現状報告の 5 名の先生方への質問等の受付は、5 分延長し 15 時 55 分で締め切らせていただきます。来場参加の皆様はお手元の QR コードから、オンライン参加の皆様はオンライン参加者用のページより、あるいはスクリーンに今表示されております QR コードからウェブ上での入力をお願いいたします。

密集、密接を避けるようご配慮いただき、ソーシャルディスタンスを保ってのご休憩をお願いいたします。それでは、休憩に入ります。

[休憩]

資料

第32回東北大学高等教育フォーラム

令和2年9月23日（水）

「高大接続改革」に対する高校現場の受け止めと今後の期待

私立武蔵高等学校中学校 校長
杉山 剛士

2 高校現場の受け止め （令和元年11月1日 NHKニュース）

東京 練馬区にある私立武蔵高校の杉山剛士校長は「いまさら延期することで生まれる混乱もあると思うが、教育現場では都内の進学校ですら不安や疑問が広がっていた。保護者会も質問の嵐です。大混乱の序章が始まっていた中で延期されたことは現場として評価したい」と話しました。そのうえで「英語の技能を高めようという点に異論はないが、50万人の受験生が受ける国家的なテストに民間試験を活用することにそもそも無理があった。地域格差や経済格差という根源的な課題が解決されないまま実施ありきで進んできたことが大きな問題だった」と指摘しました。

自己紹介

- 埼玉県職員として35年間
 - ・高校社会科教員として13年
 - ・行政職員として12年（文教政策室長、高校教育指導課長等）
 - ・高校管理職として10年（最後は埼玉県立浦和高校校長を5年間）
 - ・全国高校長協会理事としても3年
- 2019年より私立武蔵高等学校中学校校長

2 高校現場の受け止め （令和元年11月1日 NHKニュースその2）

●●市の●●高校では新たな入試の対象だった高校2年生が民間試験に向けて、すでに予約金を振り込んだり、対策講座を受けるなどして準備を進めてきました。延期は担任の教員が受験に必要な「共通1D」の申請をしようとしていたやさきの出来事だったといえます。……高校2年生の男子生徒は「やるものだと思って、予約金を払ったりして準備してきたので、はぁというのが感想です」と話していました。また女子生徒は「朝起きてニュースをみて衝撃を覚えました。これまで準備してきたので悲しいです」と話していました。

高校では英語の担当教員が実際に民間試験を受けるなどして対策を進めていたということで、●●校長は「びっくりしました。準備をしてきた生徒はいいだろうなと思うんですが、はらわたが煮えくり返る思いです。もっと早い段階で決断して欲しかった。振り回された生徒を考えると気の毒でならない。高校生はいちばんの被害者だ」と憤りをあらわにしていました。

お話の流れ

- 1 高大接続改革の検討史（おさらい）
- 2 高校現場の受け止め
- 3 混迷した要因
- 4 問題の本質は何か
- 5 今後への期待

夏休み中（2020年8月7日）に出された文科省通知

利用者（高校生及び高校卒業生）の皆様、利用者が在籍している高校の関係者の皆様へ

「JAPAN e-Portfolio」の運営許可の取り消しに伴い、一般社団法人教育情報管理機構による運用が停止されるため、これまで利用者が登録した情報は、「JAPAN e-Portfolio」を通じて令和3年度の大学入学選抜に活用することができません。

利用者の登録情報の取扱いについては同法人と文部科学省とで調整を行いました。令和2年9月11日以降「JAPAN e-Portfolio」のシステムは完全に停止しますので、登録した情報を保存したい利用者の皆様は令和2年9月10日までに、以下の方法で情報を保存してください。

【利用者の皆様の登録情報の取扱い】

- ・利用者が自分でデータを直接保存するためには、学びのデータの画面からコピーアンドペーストしてメモ帳などに貼り付けて保存いただくか、画面を印刷するなどする必要があります。
- ・上記の印刷・保存作業は、必ず令和2年9月10日（木）までに行ってください。それ以降は登録した情報は、個人情報保護の保持の観点から、確実に消去されます。

1 高大接続改革の検討史（おさらい）

- 平成24年（2012年）8月28日 中央教育審議会へ諮問
「大学入学選抜の改善をはじめとする高等学校教育と大学教育の円滑な連携と連携の強化のための方策について」
- 平成25年（2013年）10月31日 教育再生実行会議第4次提議
「高等学校教育と大学教育との接続：大学入学選抜の在り方について」
- 平成26年（2014年）12月22日 中央教育審議会答申
「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学選抜の一体的改革について」
- 平成28年（2016年）3月31日 「高大接続システム改革会議最終報告」
- 平成29年（2017年）7月13日 文部科学省「高大接続改革の実施方針等の策定」
 - ・大学入学共通テストにおける英語民間検定試験の導入、記述式問題の導入
- 令和元年（2019年）11月1日 文部科学大臣「英語民間検定試験導入見送り表明」
- 令和元年（2019年）12月7日 文部科学大臣「記述式導入見送り表明」
- 令和元年（2020年）12月27日 大学入試ありかた検討会議設置
- 令和2年（2020年）8月7日 文部科学省「JAPAN e-Portfolio」運営許可取り消し

この間の高大接続改革（大学入試改革）に対する高校現場の受け止め

- 「不信」と「不安」
- 「不安」の中身
 - ・新型コロナウイルス対応はどうなるのか
 - ・ポートフォリオを大学はどう活用するのか
 - ・英語検定試験や記述式は結局どうなるのか
 - ・経済格差・地域格差がさらに影響してくるのではないかと

3 混迷した要因

現在、「大学入試のありかた検討会議」で検証中だが、率直に申し上げさせていただければ…

- ①政治主導の弊害
(そもそも無理があったが、経済再生や国力向上の視点から強引に導入)
- ②政治主導を支えた官僚機構(無理筋であっても止められなかった。むしろ理論武装で補完)
- ③「暴走」を止められなかった高校現場・大学現場の責任(国の政策に大きな懸念があっても批判しない、批判できない)

5 今後への期待

② 格差への対応が考えられているか？

- 「不学不邑」(邑に不学の戸なく家に不学の人なからしめんことを期す)が学制(1872年)の理念だったはず。
- 「教育政策が進めば進むほど社会の格差はなくなる」とうのが日本の近代化を支えた理念ではなかったか。
- 格差の拡大への対応が、とりわけ地方の学校の不安。

4 問題の本質は何か

①「教育という営み」へのリスペクトがあるか？

■教育を「目的」として語るか。「手段」として語るか。

■教育は「人の成長」を扱う営み。

- ・思ったようにはいかない。
- ・いつ効果が出るかわからない。

※瞬間風速を問いがちな「成果主義」とは相容れない部分が根本的にはある。

■そうした性格をもつ「教育という営み」へのリスペクトや現場に対するおおらかさが欠けてはいないだろうか。

5 今後への期待

③「本来の高大接続」に向けての取り組みがなされるか？

■「たった一度の人生をどう構想していくか」(人生の構想力、バッション)で高校・大学の教育の筋を通していくのが本来の高大接続ではないか？

⇒アメリカの大学入試の「エッセイ」が書けるような生徒を育てること。「何になりたいか」と同時に、「どう生きたいか」を考えさせる

■高校と大学が同じテーブルにつくる必要性

ご清聴ありがとうございました

4 問題の本質は何か

② 急激な教育改革はうまくいくのか？

教育現場にも当然課題はある。ただし、平時においては急激な改革というより、旗を高く掲げながらも少しずつ改善していくほうが望ましいのではないか。

(改革には必ず副作用が生じる。教育行政は総合行政であり、一面具理≠全面真理、そのことが直観できる政策立案者の現場への「高度な想像力」が必要)

5 今後への期待

① 実現可能性への配慮がなされるか？

どうすれば実現できるか。⇒ 可能性があるとすれば、生ずる負担への対処方法、施策を実施するための資源の確保

討議—パネルディスカッション—



久保沙織准教授（司会）：

お待たせいたしました。

これより第3部、討議に入ります。ここからは討議司会の担当者にマイクを渡します。

秦野進一特任教授（討議司会）：

皆さん、こんにちは。討議の司会を担当させていただきます東北大学入試センターの秦野と申します。

伊藤博美特任教授（討議司会）：

同じく伊藤です。

秦野進一特任教授（討議司会）：

よろしくお願いいたします。

伊藤博美特任教授（討議司会）：

よろしくお願いいたします。

秦野進一特任教授（討議司会）：

お時間が限られておりますので、すぐに討議に入りたいと思います。

まずは、5人の先生方、ご発表どうもありがとうございました。

本日の進め方ですが、最初にご発表の補足、あるいはほかの方の発表を聞いた上で改めてお話ししたい点などございましたら、お伺いしたいと思います。その間に参加者の皆様からオンラインでいただいた質問の整理をして、こちらで幾つか取り上げさせていただいて、壇上の先生方にご討議いただくという形で進めたいと思います。

ただ、時間の制約がございますので、全ての質問にお答えすることはできませんのでご了承ください。ただけだと存じます。

それでは、ご発表順に、まず倉元先生いかがでしょうか。

倉元直樹教授：

基調講演者というよりも、主催者的な視点になってしまうかもしれません。現状報告の先生方のお話をお聞きして、ちょっと感じたことをお話しさせていただこうと思います。



まず、安成先生ですが、実は安成先生をぜひこの場にお呼びしたいと言ったのは私でございます。というのは、お茶の水女子大学の新フンボルト入試は、見た目が東北大学と全く違うのですね。おそらく東北大学では絶対にできないことをやられている。けれども、実は設計思想が似ているなと思ったのです。それは何かと言いますと、お示しいただいたスライドの最後から2つ目と3つ目のところです。入試広報活動を通じて、第1志望の受験生をつくり、彼らが複数の機会を通じて最終的に入ってきてくれる、そのことによって大学を活性化させるというモデルは、実は、我々が考えていたこととそっくりだと思ひまして、それでお呼びした次第です。決して、反省点だとか真逆だとかということではないと思っておりますので、ご理解いただければと思います。

次に、笠井先生のお話は、実は、非常に何とも、ある意味、居心地悪く聞いておりました。というのは、大学入試のあり方が高校現場の指導に対して、やっぱり影響を与えているということ非常によくわかったところなのですが、こんなに一言半句受け止めてもらっていいのだろうかという不安を若干感じます。大学で大事なことというのは、書かれていること以外の世界を読み取ることなんだろうと思うのですね。それは逆

に言えば、高校では書かれていることが全てという前提で教育していただいて、多分、いいんだろうと思います。そこに、大学に入ってからギャップがあるのだろうと思うのですけれども、おそらく、笠井先生は、その書かれていないところまで読み込んで理解しておられるんだけれども、あえて、発表をそこに限定されたのではないかと思って聞いていたというところです。後で種明かしをしていただければと思います。

杉山先生は、ずっといろんな機会でお話を伺ってきて、このような高校側の率直なご意見ということをお伺えてよかったというところです。やはり、ご自分の高校だけではなくていろんなところを御存知なので、多様なのだなということは、改めて実感しました。多分、局面を限定して、ここのことはどうなんだろうという話をしていけないと、高校の実情は1つのプリンシプルで語れないのではないかなと改めて思った次第です。以上です。

秦野進一特任教授（討議司会）：

それでは、宮本先生お願いいたします。

宮本友弘教授：

今日、私の発表では、エビデンスとして、高校側の意見を尊重するというのを強調しました。発表中も申し上げましたが、それだけで決めているわけではありません。さまざまなエビデンスを重ねて、それと学内での議論を踏まえていろいろな決定を下しております。ただ、今回の高大接続改革、特に英語民間試験及び記述式問題、それと主体性評価、これらに限っては、これまで以上に高校側の意見を尊重すべきだと私は個人的には思います。今日最後の杉山先生のご発表を聞きまして、その確信が強まりました。以上です。

秦野進一特任教授（討議司会）：

それでは、安成先生お願いいたします。

安成英樹教授：

取りとめもない話をしましたので申しわけなかったですけども、1つ、この新しい入試を入れるときに想定した相手というのが3者いたというふうに思っております。仮想敵というのはちょっと表現としてきつ過ぎますけれども、1つは文科省です。文部科学省には、このAP経費というのを採択してくれないと、本学の計画をとってくれないとだめだと、そのために文科相が旗を振っている主体性といった要素、これから期待されている評価基準を積極的に入れざるをえなかったという要因がございます。

それから、第2の敵（敵はまずいかな）、相手としては大学教員です。要するに、やる側がやる気にならなきゃいけないという問題があります。この辺が弱い。宮本先生のお話にあったとおりで、学内広報というのがものすごく大事なんですね。先ほど言いましたように機密性というか守秘性というか、入試に関わっていない人は例えば今年何を出すなんてことは知らないほうがいいに決まっているんですが、ただ選考の方法が非常に複雑になればなるほど、その辺の意識、意思の疎通というか、制度的な理念の理解等が必要になると。

ただ、これがうまくいっていないというのが、実は大きな課題として残っております。だから、2番目の敵が一番手強いというのが正直なところです。昨今大学教員は完全に疲弊していますので、とにかく新しい仕事があるだけでもう嫌というふうに、ネガティブに反応するわけですね。何でそんなことやるんだと。また理論武装がうまいんです、職業柄です。そういう意味で、そこを説得し、ひたすら耐えていくということが必要になるということです。

もう1つは、やっぱりこれだけいろんな仕掛けを組み込んでお店を構えても、これを受けてくれないと何の意味もないわけです、受験です。そういう意味で、本当にこんなたいへんな入試を受験生が受けに来てくれるのか、という点については学内からもさんざん批判を受け

ました。誰も来ないよ、と。

ただ、入試実施状況、とくに参加人数を見れば、幸いにしてある意味でかなりクリアできていると思っております。ただこれも、なぜなのかという原因、それこそエビデンスが欲しいとずっと考えておりますけれども、なかなかよくわからないのです。それに付随して申し上げると、やはり特別選抜に関しては、やはり高校の先生方との協調というか協働というか、そういうものが不可欠だというふうに思います。というのは、いろんな高校にやっぱりヒアリングに行ったときに、どうしても一般選抜を目指すというふうにお答えになるところ、はっきりとそうおっしゃるところが結構ありました。

1つは、この新フンボルト入試に対して入試対策をどう立てますかと言うと、本当に高校の先生方はお困りになるだろうと思います。そういう意味で、この入試にとっては、言葉は悪いのですけれども、高校の先生方の考え方でちょっと道が閉ざされる可能性が若干あるという傾向があります。入学者というか合格者に聞きましたけれども、高校の先生からこんな入試があるよというふうに勧められて受験した人は、まあほぼいない。むしろ、自分で見つけてきて先生を説得して受けました、やっとなんとか、初めは否定されたけれども、何とか受けられましたとかという回答が非常に多かった。そういう意味では、本当の意味での高大接続が必要などころがあるというふうに思っております。長くなりましたが、以上です。

秦野進一特任教授（討議司会）：

それでは、笠井先生お願いいたします。

笠井敦司教諭：

先ほど倉元先生がおっしゃったように、居心地が悪いというふうに表現されましたけれども、それすごくよくわかります。妥協の芸術というふうに倉元先生おっしゃいましたけれども、まさに高校現場でも、妥協の芸術まではいきませ

んが妥協の産物で、普段の指導もあって入試の指導となれば、かなり過重な負担を強いられます。特に医学部とかになっちゃいますと、かなり時間も限られていますし、なかなかその労力というのは大変なものがあります。ですから、生徒にはアドミッション・ポリシーとかを読ませて、ここにこう書いてあるんだからという形で、創造的思考力なんだぞというふうなことを、その都度言うために読んでいるというようなところはあります。ですから、それをもう原理主義的にそこに問題を、そこから考えるというのはとても無理ですので、さっき言ったパズル型、ブラックボックス型というふうな、いろんな大学の問題を、それをタグ貼りして、その問題を改編して弱いほうを補強していくというような形で実際やらせています。本当に現実問題、一般入試の勉強もありますので、先ほど宿題にしないと言ったのは、生徒から時間を奪わないという意味です。その場で完結させてしまうと、宿題にすれば彼らは、それにばかり労力を割きますので、そういったところで現実を見て、ここは妥協して最小限の労力といいますか、持続可能な労力でやっているというような状況ですので、あまり原理主義的になってしまうと疲弊してしまうというのは、高校現場も同じかなというふうに考えています。以上です。

秦野進一特任教授（討議司会）：

それでは、杉山先生よろしくお願いします。

杉山剛士校長：

私個人のことを言うと、ちょっとしゃべり過ぎたかなというふうに思っ反省をしているところでもあります。気を許して、いろいろ思い切っいろいろな話をさせていただきました。

また、先生方の話を聞いて本当にいろいろ、そうだなと思うことがありました。例えば、今、安成先生と笠井先生の話ですけれども、対策を立てられないように安成先生のほうでは新フンボルト入試をやっている。一方で、笠井先生のほう

は生徒のためにいろいろ読み解いてやる。この辺も、これからの近未来の入試について、我々の指導の方法としても、どうあるべきなのか考える必要があるでしょうね。それから、やっぱり高大接続改革については、共通しているのは、理念は悪くないよね、だけれども、その具体化する方策というのはどうだったのということが多分、これ共通の認識だと思うんですね。そのために、大学入試学というのが学問体系として今取り組まれようということについて非常に感銘を受けて、ぜひその成果に期待したいなというふうに思いました。以上です。

秦野進一特任教授（討議司会）：

ありがとうございました。

伊藤博美特任教授（討議司会）：

それでは、私のほうから幾つか質問させていただきます。

初めに、倉元先生と宮本先生に質問が来ておりますが、先ほどのお答えであったかもしれませんが、昨年度、急転直下、共通テスト記述式問題が延期されましたが、当初は実施も念頭に置き、AOⅢの内容とタイムスケジュールを模索していたことかと思います。エビデンスに基づき、東北大学としてどのような準備をなさっていたのか、ご質問させていただきます。方向転換で状況が一変して、必要のない議論かもしれませんが、その当時のことについてお聞きしたいということです。

それでは、倉元先生お願いします。

倉元直樹教授：

自己採点利用方式の話ですね。おそらくそれに関するご質問だと思います。要は、細かい話になってきますけれども、記述式が導入されることによって大学入試センターから共通テストの成績が提供される期間が延びるということで、非常に短期間で実施しております本学のAO入試Ⅲ期が、今までどおりできないという問題

に直面しました。その中で、どうしようかということ、何とかひねり出したのが第1次選考は自己採点を利用させてもらうというやり方だったのです。これ、裏を申しますと、大激論でした。最終的に納得しない、とにかく「何人受験して来ても、全員第2次選考をする」と意気込んでいた学部もありました。その中で、いよいよ具体的にどういう方式でやろうかと話を始めていたところだったので、実は、大変ほっとしたのです。その具体的なアイデアは、まだ私の頭の中にあっただけで、それから具体的に議論しようというタイミングでした。まさか、その時点で記述式の導入が見送りになると思っていたものですから、非常に正直助かりました。

もしもあのまま行っていたら、多分、この1年、・・・もし、コロナがなかったらということもあるのですが、・・・具体的な作業に追われていた状況だったと思います。正直、そんな状況でございました。自己採点を使いたいという人は誰もいないわけですから、これは本当にありがたかったです。

伊藤博美特任教授（討議司会）：

宮本先生、お願いいたします。

宮本友弘教授：

なぜ自己採点方式を導入してまでAO入試を維持しようとしたか、その背景を補足します。私も東北大学ではAO入試の定員が全定員に対して30%になることを大学の目標としてまいりました。それは国大協とかでも目標値として設定されていますが、それを実現するために何としてもAO入試をこのまま維持、更に拡充していくという方針が大きく背景としてはございます。その甲斐がございまして、2021年度入試では30%を超えることができました。以上補足でした。

秦野進一特任教授（討議司会）：

それでは、次に安成先生、杉山先生、笠井先生



に、ご発表の補足説明の質問が来ております。

安成先生ですが、興味深く聞かせていただきました。気になったのは、プレゼミナールの入試対象者の選択方式で、特にどのようにして基礎学力を担保するのかが気になります。ご説明があったのかもしれませんが、受験者の選出方法をお教えてください。プレゼミ受験者から図書館演習の対象者を選出する方法は、どのようにするのでしょうか。

それから杉山先生、難しい質問だと思いますが、4節で挙げられた高度な想像力は、どうやれば身につけることができると思われるのでしょうか。

それから笠井先生、生徒の資質・能力を育てる教育の本道と共感いたしました。もっと具体的に指導法のノウハウをお聞かせいただけますでしょうか、よろしくお願いいたします。

それでは、安成先生からお願いできますでしょうか。

安成英樹教授：

第1次選考は、プレゼミナールに出席してもらうことがマストということで実施をしてきました。そして、受験生だけは授業を2コマ聞いてもらった後に教室に残ってもらってレポートを書いてもらいます。最初は、ミニレポートと称して30分でしたが、あまりに短か過ぎるという

か、受験して合格した子から鬼畜の試験だったと言われましたので、今は延ばして 60 分というふうになっています。

ただ、このレポートで決まるわけではございませんので、生徒さんが出された志望理由書、それから活動報告書も当然評価の対象にいたします。ただ、これが非常に評価するのが難しいということは 2 年前のフォーラムでも議論になったところだと思います。

ただ、それから公募段階で AP 経費をとるために、文科省から外部外国語試験を必ず使えというのが必須要件として課されましたので、やはりこれを提出していただくことになっています。ただし、基本的には全て加点主義ですね。全部そろっていなければだめだとか、活動報告書には 5 つも項目が立ててありますが、それを全部埋めなきゃ出願できないなんていう、そういう仕組みにはなっておりません。むしろ、高校で何を学んでそれを将来にどう生かそうとしているか、あるいは大学に入って何がしたいのかというようなことを、その書類の中から我々は読み取ると。そして、特に基礎学力としては英語の検定試験を一応課しておりますので、それは評価対象となります。ただ、種類だけを指定しておりまして、例えば何級以上だとかそういうようなスコア・級を要求しているわけではございませんが、とにかくそれを出していただく。ただ、一般選抜に比べて特別選抜で学力の担保というのが非常に難しい課題であるのも、これはもう当然だと思っております。ということで、お答えになったでしょうか。

秦野進一特任教授（討議司会）：

ありがとうございました。

それでは、笠井先生お願いいたします。

笠井敦司教諭：

具体的にもう少し例を挙げますと、大学の総合問題とか小論文問題が 1 冊になっている本というのは、どの進路指導部でもあると思うんで

すけれども、それを基本的にはベースに使います。あとは新聞の報道とかを使います。あとは、各省庁が出している白書に載っているグラフであるとか、そういったものをピックアップしてネタにしています。

考え方としては、先ほど言ったようにブラックボックス型、パズル型と、それから内容として医療と医療以外というふうなので 4 象限にしまして、医療ネタのブラックボックス型、医療のネタのパズル型、医療以外のブラックボックス型、パズル型という 4 象限を自分の中で置いて、それをバランスよく生徒の得意、不得意に応じて出し入れをすると、ネタをストックを持っておいて、順番を入れかえて差しかえてというふうにやっています。

医療に関しても、例えば遺伝子診断などについてとか、あるいは保健・医療のネタであるとか周縁的なネタもあえて意図的に仕組んで、自分の知識の足りなさをあえて思い知らせるというような形でやっていて、そこで例えば周辺の知識が足りなければ、じゃあこれ読みなさいというような形で、知識を入れると言えちよっと語弊がありますけれども、そういうふうに本人が足りないという自覚したら、じゃあこれ読んでみなさいというような形で展開していくように設計をするというような形です。

ただ、本当に簡単に言うと、この原理から追っていったら、このパズル型、ブラックボックス型と選ぶのは、そのほうが楽なんです。この視点で選べば、ああこれだ、これだというふうにすぐ選べるんです。それをすぐ使えるので、ちよっと語弊がありますけれども、こちら楽なんです、こうすることによって。生徒も、先生が何を意図してこの問題やらせているかというのがもうわかるので、お互いそれが、先生、じゃあちよっと宿題くださいとかと言う子もいます。じゃあ本当にやる、でもあまり時間かけないでねとかというふうに生徒と合意形成をして、宿題、先生もう 1 本くださいみたいな感じで、えーっていう感じで、また一生懸命探したりはしますけれども、そ

ういう形でやっています。

一例を挙げると、医療と関係ないネタだと、おもしろかったのは、会社にコーヒーマシンを導入すると業績が上がるという売り文句で売りに来た営業マンの話は信じていいかという問いを出して、その相関があるという図があつて、本当にこれはそういうふうに言えるだろうかというようなことを書かせたりとか、全く医療と関係ないものはそういうものとか、その場で考える、知識がなくても考えられるもの、あるいは逆に知識がないと答えられないものというようなこともちょっと加味して、問題を片っ端から探して、改題したりしてやっています。こちら、だから持続可能で、隙間時間でぱっと選べるような工夫はとっています。そんな感じです。

秦野進一特任教授（討議司会）：

それでは、杉山先生お願いいたします。

杉山剛士校長：

ご質問ありがとうございます。本当に本質的な質問ではないかなと受け止めました。発表の中で、高度な想像力が必要だと、じゃあどうしたらそれが身につくのかということだと思うんですね。私これ、本当に日本の教育の大きな、教育研究も含めた大きな課題だと思うんですけども、よりよい教育にしていくなためにやっぱり高い視点、幅広い視野、その知見が必要だし、もう1つ一方で、やはり教育という営みがなかなか難しいですから、その難しさを知っていること、そして人の痛みというのがわかる、この両面が必要だと思うんですね。意外とその両面が今分かち合ってきている部分があると思うので、どういうふうに今の制度の中で融合できるかということが大事だと思います。

例えば行政担当、ちょっと物を言っちゃって申しわけないです、例えば文科省の行政の職員が教育現場に出向するときに、各地方の課長とか、そういうポストで来るんですね。それでは本当の現場感覚はわかりません。そうではなく

て、例えば現場の先生としてやるとか、1週間でも2週間でも一緒に教育実習ではないけれどもやるとか、そういうことをやるだけでも違うと思います。文部官僚はやっぱり非常に知見がありますので、そういった知見と同時に本当に現場の感覚をつかんでいただくことが、大事だと思います。

一方で現場の教員も、やっぱり現場に埋没しちゃうとまずいと思うんですね。何か現場だ現場だ、みんな現場知らないのかということで終わっちゃだめなわけで、やっぱり現場の中にも変えるべきことがあるわけですから、もう少し視点を高くする。そういう点では、例えば現行でも教職大学院という仕組みがありますけれども、そういった研究とか幅広い視点というものを、できたら主体的にそういった場に行って広げるような、そういった実効性のあるような取り組みができて、お互いに少し歩み寄りというか、融合できればよくなるんじゃないかなと思います。以上です。

伊藤博美特任教授（討議司会）：

ありがとうございました。

それでは続きまして、宮本先生にご質問が来ております。主体性評価で調査書の活用について賛成が少ないのは、本人のチェックシートと調査書の整合性の曖昧さや、調査書で主体性が測れるのかという疑問、更には調査書という形で主体性を測ることの妥当性に疑問があるのではないかと思います。

また、主体性を育てることと逆の効果をもたらすことになるのではないかという危惧もあります。調査書を使うことの妥当性について、調査書を使うことでの悪影響について、その2面についてどのようにお考えでしょうかという質問ですが。

宮本友弘教授：

調査書が選抜資料としてどの程度妥当性があるものか、信頼性があるものかというのは、議論

としては古くからありまして、それこそ倉元先生はその研究もなさっています。ここで一番問題になってくるのは、主体性という態度的側面ですよね、それを入試というハイスタークスなテスト、人生左右するようなテストの場面で評価するということ自体が、そもそも問題があるのではないかということです。調査書だろうと何だろうと、e-Portfolio でもいいですよ、今はないかもしれませんが、入試で評価されるよとなったら、本来生徒さんたちは、それだったらそういうボランティアやっちゃおうかなとか、全然自分が思っていないことに手を出したりして入試を有利に進めよう、評価されるように自分を振る舞ってしまおうとする。大学入試で、こういうものを採用するときに起きてしまう弊害の1つだと思います。

これは杉山先生のエッセイのくだりの話であったのですが、そもそもこの時期というのは発達段階でいうと自分のアイデンティティを確立する時期です。アイデンティティというのは一朝一夕ではすぐにはできません。すぐにはできなくて、ああでもない、こうでもないといろいろものがきながら、そしてなかなか時間的展望も持てません。思いつきでやったことが、これもなかなかおもしろいじゃないか、大学行っても続けようかなとか、じゃあこれできるのはどこ大学だろうというような形でなっていくわけです。そういった高校生として、もっと言えば人間の発達において自然に行うことが、阻害されるような、そんなような状況を生み出していたと私は思っております。ですので、調査書云々というよりも、主体性という側面を入試で測る、評価するということにそもそも問題点があったのではないかと私は思っています。

倉元直樹教授：

ちょっと補足をさせていただいてよろしいでしょうか。おそらくご質問なさった先生は非常にまじめに考えておられるのですが、私どもの仕組みを多分十分には御存知ないのかなと思い

ます。先生方にも安心して調査書をつけていただくような工夫はしています。ここでは申し上げられません。入試説明会のような場で申し上げるような話です。

もう1つは、いわゆる合否で同点に並んだときのみ、その主体性のチェックを使うという利用方法です。つまり、一言で言えば、「主体性評価のために日常生活を意識して変えることはないよ」というメッセージです。そんなことを意識するくらいだったら、1点でも多くとれるように勉強なさい、ということです。ただし、いざ出願、チェックするとなったときに自分の良心に呵責がないような、楽しい充実した高校生活を送ってください。そういうメッセージに尽きるんです。ですから、その辺までご理解いただければ、先ほどの調査書を裏づけにするという件も、さほど問題なく誤解を解消できるのではないかなと思います。この辺がやはり通じにくいところで、高等学校に調査をしても私どもの仕組みに賛成が少し少ないということになっているのかな、と思います。

秦野進一特任教授（討議司会）：

ありがとうございました。

それでは、次の質問、ちょっと大きな質問ですが、最初に高等学校の先生にお伺いしてそれに対して大学の先生方はどのようにお考えになるかというふうになります。杉山先生の最後のスライドに、本来の高大接続という表現がございました。本来の高大接続に向けての取り組みがなされているかと。高校が大学に期待すること、つまり本来の高大接続というのはどういうものか、高等学校としては大学に何を期待するのか。そして、それについて大学はどのように応えることができるのかという質問です。

笠井先生と杉山先生、ちょっと大きな質問で難しいかもしれませんが、本来の高大接続とはどのようなものか、大学に何を期待するか。そして、それを受けて大学の先生はどのようにお考えになるかということです。笠井先生、杉山先生、

どちらの先生が先でも構わないんですが、じゃあお願いいたします。

杉山剛士校長：

では、私のほうから話をしたので、申しわけない。本来の高大接続はあのときに、ちょっと大上段でお話しをしますと言ったんですけども、定義というのも定まっていませんよね。

ただ、あのときお話ししたのは、1回しかない人生をどういうふうに生きるのか。それをやっぱり考えさせる。ひょっとするとキャリア教育の側面かもしれない。方法とするとエッセイを書けること、という話をしました。やっぱり、何か知識を知っているということじゃなくて、その知識をどう活用するかということもそうですし、どうやって自分が生きるんだよという、今主体性評価にも関わると思うんですけども、そういったことをやっぱり考えさせるということが大事だと思うんですね。高校もそういうことを考えさせて、大学に送り出していく。そして、大学側もそういった人生を生きる、使命とか理念とか、そういったものを持った生徒を育てていくということだと思うんです。

問題なのは、どうやってそれを測るのかということだと思うんですね。私は先ほどエッセイという話を1つしましたけれども、AO入試なんかでもいろんなインタビューとか、いろんなヒアリングを通して、その生徒が持っているいろんな側面とかパッションとか、そういうものを引き出そうとしていると思うんですね。新フンボルト入試もそうだと思います。それから、今東北大学がやられているAO入試もそうだと思います。そういった手間をかけながら、いろいろな対話を通して、やっぱり生徒にも考えさせながら、生徒の生涯の志というか、そういうものを引き出していく。同時に、それをやっぱり大学側でも、それをベースにしながら教育していくということなのかなと思います。ちょっと抽象的な答えでとどまっていますが、よろしくお願いいたします。

秦野進一特任教授（討議司会）：

ありがとうございました。

笠井先生、いかがでしょうか。

笠井敦司教諭：

私が今日お話ししたものの、資質・能力を高めるというのは決して何も社会に有為な、使える人材を育てるために資質・能力を育てたいと思っているわけではなくて、ただ昨今の改革のニュアンスというかテイストとしては、何かイノベータータイプな人材、使える人材をつくるための何か大学は、人材育成機関的な色彩を何か強く要請されているような印象を受けます。その流れで接続してくるので高校、じゃあ高校段階でこういう力をつけてきてくださいというふうな表面的な人材育成というようなところで何か接続しちゃうと、またそれちょっと違うのかなというふうに思っています。

それよりも、やはり人としてというかどんな、これからの未来をどんなふうに生きていくのか、どんなふう to 価値をつくっていくのかという、そういう人材になるために、そういう人間性をはぐくむために資質・能力を育てたいなというふうに思っているの、何か浅い意味での人材育成ということではつながっていかないなと、もっと本質的な部分を大学の教育では、やはり今までどおりやってほしいし、そこに繋がっていききたいなというふうに思うので、その資質・能力という言葉が非常にどっちにとられているのかなというのは、とても、社会の中で今議論している中で、そういった表層的な意味で、この言葉をとられると嫌だなというふうに感じているので、本質的な意味での資質・能力の育成をお互い握り合う、そのためにはそういう対話が必要かなというふうに思っています。

秦野進一特任教授（討議司会）：

ありがとうございました。

それでは、大学の先生方、今の高等学校の先生方のご意見についてどうでしょうか。では、倉元

先生お願いします。

倉元直樹教授：

ちょっと、もしかしたらきちんと直接的な答えとして捉えられないのかもしれないのですけども、お話を伺いながら思っていたのは、やはり、「入試に課さない」ということが大事なんだな、というところです。つまり、「試験あるところに対策あり」なんです。これは絶対にそうなります。「これで合格が決まる」となったら対策します。「人生について考えろ」となったら「人生について考える対策」をします。だから、おそらく選抜に使うツールというのはそこまで深みのないもののほうがいいのだろうと思います。

あと、杉山先生がおっしゃった「エッセイを書ける」能力。これは大事なことだと思うのですが、どのタイミングだったらいいいのか、人によって違っていいのではないかな、と思うのですね。高校生のときにそういうものを書ける人、大学で学んでそういうことが書けるようになる、あるいは・・・もう、この年になっても、まだ私なんか書けないかもしれないですね。そこがやっぱり「教育」というものの真髄なんだろうと思います。その中での入試の役割ということをもう一回考え直したほうがいいのかな、と思います。

つまり、全てのことを測るということはできないという現実、その中で大学にとって必要なもの、高校で学ばせてほしいものを考えるという、そういう仕分けが必要なのかな、と思って聞きました。

秦野進一特任教授（討議司会）：

安成先生、いかがですか。

安成英樹教授：

とても難しい問題なんですけれども、高大接続が大事だというのは、やっぱり入試の重みがあまりに過剰に重くなっていたというか、そこで要するに将来までそこで、どこの大学に入るかで決まるというような風潮に対する強烈なア

ンチテーゼとして出てきたんじゃないかと私は思っております。そういう意味では、先ほど杉山先生からもありましたように、今の流れ全体が、主体性が大事であるとか知識や技能だけではないものを求めるべきだということが強調されていますが、これは総論としては確かに正しいと思うのですが、ただ大学入試でやっぱり評価の基準としてはいけないというのは、これはもう倉元先生と全く同じ考えであります。

とはいえ、とにかく一般選抜までそれらを評価しろというふうにならう、投網をかけるように大学側は求められていますので、非常にそこが苦しいところで、今でも悩みが深いところです。

先ほどから紹介しているお茶大の新フンボルト入試に関していえば、主体性というべきものは、この入試をあえて受けようとしたこと自体に十分なる主体性があると我々は考えていると、それで十分じゃないかということです。むしろ、自分が単に大学に入りたい、だけじゃなくて、本当に何をしたいのかをじっくり考える、それこそ入試がそういう機会になってくれればいいというふうに考えています。これは多分にきれいごとに聞こえるだろうと思いますし、実施する側と受験する側とは多分、やっぱり当然格差がある問題だと思います。

ただ、そういう意味でなかなか、いわゆる簡単には対策が立たない入試を目指しているんですが、ただ聞くところによるとやっぱり合格した人は、やっぱりいろいろ高校の先生方にいろんなご尽力いただいて準備をしたということも聞いております。だから、結局これはイタチごっこだなというのが偽らざる感想ですということです。

秦野進一特任教授（討議司会）：

宮本先生、いかがですか。

宮本友弘教授：

とても難しい質問ですけども、まず1点目

は、これは今の高大接続改革に対する批判的なコメントになると思うのですが、学力の三要素、これを全部の発達段階に当てはめて考えるのはどうかと思っております。先生方ご存じかと思いますが、幼稚園教育要領や保育所保育指針にも学力の三要素って書いてあります。幼児から大学入試まで全部同じ概念で通そうとする、それを評価しようとする。先ほど私申し上げたように、その中でも例えば、主体性の中の核となる動機づけは発達段階でだんだん変わっていきます。児童期は何でもかんでも頑張ってしまうけれども、発達とともに人間というのはいろんなものが分化、分かれていきます。そういう発達の観点が、先ほど杉山先生は理論武装がなされていたと言っていましたけれども、ちょっと発達の視点が弱いのかなと思います。

やはりスムーズな高大接続ということを考えていく場合は、この18歳のとき、一体どういうことが発達課題として重要なのか、そういったことをよく考える必要性が私はあると思います。私は心理学が専門なので、ついつい心理寄りの発言をしてしまいます。高校側にお願いしたいこととしては、高校生が大学生になって退学しちゃう大きな理由としては、不本意で入ってきた場合なので、その大学を選択して来ることをエンカレッジするような、そういうようなことをしていただくことが先決ではないかなと思います。やはり来てよかったと思わせるような、それは我々の宿題でもあります。そのあたりを一緒に知恵を絞って考えていくことが大事なんじゃないかなと思います。以上です。

秦野進一特任教授（討議司会）：

ありがとうございました。

伊藤博美特任教授（討議司会）：

それと関連しまして、笠井先生にですが、先生のお話の中で入試対策は集中特化型授業だというお話が最後にあったかと思います。単なる入試対策にとどまらずに学びのおもしろさをそこ

で高校生が実感し、それが授業にフィードバックされていくと、それで学びが深まっていくというお話、非常に感銘を受けました。それに関連しまして、そうしたやり方を例えば生徒の指導に生かすためには教員の力が要求されますが、高校内であるいは高校を超えてどういう取り組みが必要で、どうやってその共有化を図っていくのか、あるいは、そうした構想が具体的にあるのか、現場の高校の先生たちが知りたいことはそういうことではないかと思います。それについてご意見いただければと思います。その後に続けて杉山先生にもちょっと補足いただければと思います。

笠井敦司教諭：

集中特化型授業をやることによって、生徒も気づくし私も気づきます。普段の授業で足りていないことが、すごく反省としてわかります。生徒は、ああこれ現代文で読んだのにつながる、みたいな形でだんだん課す課題によってつながっていく瞬間があるのと同時に、自分の授業がとて、ある意味試験範囲を終わらせるためみたいなことをやっているな、みたいな反省もあります。

お互い気づくという形で、普段の授業を変えたいというふうに分も持ってくるし、生徒は学んだことをいろいろつなげたいというふうにやっぱり思ってくれていると、それで成功のかなと思っています。実際に授業に対策で使ったものを試験的に生徒に読ませてみたりとかも、やっています。そうすればやはり、それは2-3人でしかやっていなかったですけども、40人でやるとどうなるのかなみたいな形で実践したりしています。それが投げ込みのイベント型でしかないんですけども、それをどう設定していくか、ちゃんとデフォルトで設定していくかというところに私は課題を感じていますが、可能性も同時に感じています。

生徒には、とは言ってもじゃあ授業を飛び越えて何でもやってみようというのは時間的に部

活もあるし、塾にも行っていますし、今総合的な探究の時間というのがありますし、そこどうつながかということが課題ですね。学校のカリキュラムでそういうことが、発展的な学びが担保されている時間というのは総合的な探究の時間なので、そこは意外に進路とはつながらないんですね。つながりそうだけれども、なかなかつながらない。だから、そこもちょっと難しい問題だなと思いながらも、その探究をどう生徒のそういう発展の場にするかというところに課題があるのかなというふうに思っています。同時に可能性でもあるのかなと思っています。ちょっと答えになっているか、ちょっと自信がないですが。

伊藤博美特任教授（討議司会）：

ありがとうございました。杉山先生、補足などありましたらよろしくお願いいたします。

杉山剛士校長：

教員の読み取る力とか、そういった指導力を上げていくにはどうしたらいいかという受け止めでよろしいでしょうか。

伊藤博美特任教授（討議司会）：

それで結構です。

杉山剛士校長：

ちょっと経験的なお話になりますけれども、自分の学校で生徒と向き合って、そこでいろいろ学んでくこともあるんですが、学校の枠を超えてネットワークを組むことによって、そこからいろんな気づきを得ることが経験的にもたくさんあります。

埼玉県にも協調学習という主体的、対話的、深い学びというもの、例えば国語の先生は国語の先生で自分の学校だけじゃなくていろんな先生たちと対面であったり、あるいは今この時代ですから、ICT を使っている議論をしたりするんですね、当然進路の問題も含めて。そういうつながりができると、すごくいろんなことに気づかされたり、指導力が上がってくるということがありました。

それから、校長になってもそうなんですけれども、自分の県を越えて、これはボランティアなネットワークですけれども、例えば首都圏の学校で校長先生でお互いに横のつながりをつくろうよということで、首都圏でネットワークを作りました。勉強会や協働した教育活動をしました。やっぱり自ら進んでそういうネットワークをつくろうというのは、いろんな問題についていろいろ話をして、いろんな気づきがあって、そのことがすごくためになったという気がします。

東北のほうにも呼ばれて、そうした動きを広げてくださいというので1回お邪魔したことが



ありますけれども、やっぱり自ら進んでそういうネットワークをつくろうというのは、すごくいろんな気づきや指導力を上げていくような気が経験的にします。すみません、ちょっとお答えの1つですけれども、よろしくお願いいたします。

秦野進一特任教授（討議司会）：

ありがとうございました。

それでは、倉元先生、大学入試学について1つご質問が来ております。大学入試学の今後の展開に大いに期待いたしますということです。

ご質問は、大学入試センターが大学入試を専門的に扱う唯一の国家的組織ですので、大学入試学で今後培われるであろうエビデンスなり知見が個別の大学にとどまるのではなく、ぜひともそれらを取りまとめる大学入試学の全国的センターとして、大学入試センターが機能することを願いますが、先生方のご意見はいかがでしょうかということです。

倉元直樹教授：

私もかつて大学入試センターというところに所属をしております、OBですので、あえてOBとして申し上げたいのは、やっぱり大学入試センターにいる研究者の先生方には、入試を大事に思ってもらいたいという1点です。

研究者というのは、やはり自分の専門というものがあります。専門として「大学入試学」という看板を掲げるのは相当勇気がいるのですけれども、だから、大学入試センターの先生方も別な分野をまず基礎学問として専門にしていると思うのです。ただ、そのついでに入試も扱うという態度でいられると、困ります。現場は、本当にある意味、命まではかけないとしても、人の運命をかけて必死でやっているのですから、そこをまず分かってほしいなと思います。そのためには、一度は現場に降りてきて、実情を知った上で研究をやってほしいと思います。あえて一番辛口のコメントにしましたが、そういう大

学入試センターであれば我々信頼できる、信頼していろんなもの預けられるかなと思っています。是非、そういうふうになってほしいと期待しています。

秦野進一特任教授（討議司会）：

ありがとうございました。

残り5分ほどとなりましたので、最後に、登壇した方々お一人1分程度で、最後に皆さんにお伝えしたいこと、あるいは今日の討議に参加してお考えになられたこと等をお話しいただければと思います。倉元先生は今お話ししたばかりですので、最後をお願いいたします。

それでは、宮本先生からお願いいたします。

宮本友弘教授：

受験勉強というのをどういうふうに高校生たちが今後認識できるかということが、すごく僕は大事だと思っています。受験勉強は、それは大学に入るための勉強ですけれども、それを意欲的に取り組んでいる場合があります。必ずしも課せられたものだからというわけじゃありません。また、受験勉強を通して人が成長するというような研究結果も出ています。なので、もうちょっと受験勉強というのをポジティブに捉えていくということも1つ大きいことじゃないかなと思っています。それが、新たな入試を生み出していく1つの要素になっていくのではないかと考えております。以上です。

秦野進一特任教授（討議司会）：

ありがとうございました。

安成先生お願いいたします。

安成英樹教授：

入試に携わっていて思うのは、本当に非常に高校生にとって重荷になっているところが強く感じられます。何よりも、結局最終的には入りたい大学よりも入れる大学という選択肢をとってしまうんですね。これは、入学後のモチベ

ーションにも相当影響してくると思います。そういう意味では、自分はそもそも大学何のために行くのかとか、大学へ入って何をしたいのかということを明確化させるという営みは、これは高校側でかなり力を入れていただければいいなと思っておりまして、一方大学側はそのためのプレゼンスをいろいろやると、うちはどういう大学だというような、そういうことをもっと明確に情報発信をしていかなきゃいけないというふうに思っております。

ただ、本当にこれはもう課題としてはわかっているんですが、なかなか難しいというふうに思っております。

秦野進一特任教授（討議司会）：

ありがとうございました。
笠井先生お願いいたします。

笠井敦司教諭：

先ほど宮本先生がおっしゃった言葉で、入試を通じて、勉強を通じて成長するというお話いただきましたけれども、本当にそうだなと思います。

私が最悪だなと思うのは、例えば推薦を、例えばフンボルト入試とかを受けた後に、あんなの受けなければよかった、時間がとられたというふうに思ってしまうような指導をしていると、それは指導者が悪いのかなと思います。

一番いいのは、受かることはもちろんそうなんですけど、先生、落ちたけれども、すぐためになった、次絶対一般で受かりますというふうに力強く言ってくれたときには、やっぱりモチベーションが上がって頑張ってやっていける、前向きになったなというふうに、成長したなというふうに感じる時が一番指導者としてはうれしいです。そういうような指導を可能な範囲で、先ほど言ったような視点で可能な範囲でやって、生徒をその気にさせて生徒が成長していくということが、やっぱり大事なんだなというふうに感想を持ちました。以上です。

秦野進一特任教授（討議司会）：

ありがとうございました。
杉山先生お願いいたします。

杉山剛士校長：

本当にありがとうございました。議論を聞いていて、先ほど高大接続、本来の高大接続とは何かという話とか、主体性評価とは何だという話をまた改めて聞いて、そうなんだなと思うことがいっぱいありました。ありがとうございます。

先ほど、たった1回の人生で一体何を成し遂げようとしているのかということを聞いてみようということで、エッセイが大事だというような話をしたんですけども、実際今私も学校の現場で生徒と面談しながら、一生かけて人生で何獲得しようとしているのと聞くと、いろんなタイプがいて、結構べらべらと答える子もいるし、何この人言っているんだろうと答えに窮する子もいるんですよね。それはそれでいいと思うんですよ。答えなんかすぐ出ないんだけど、そういうことをやっぱり考え続ける意味、先ほど安成英樹教授先生がなぜとかどうしてということをお話しされていましたが、自分の人生ってどんな意味があるんだろうと考え続けさせる。

よく何になりたいのまでは考えさせるんだけど、それだけじゃなくて、どんな職業人になりたいのというところまで考えさせる。そのことは、10代の青少年教育ではすごく根幹にあって、大事なことなんじゃないかなと思いました。

もう一方、それを本当に入試で測るかどうかというのも、今日いろいろ考えさせられましたけれども、入試は妥協の芸術ということがあるので、どこかに落ち着くところがあるのかもしれないですね。なかなかまじめに考えると、主体性をどう定義してどう測って、それを本当に評価にしているのかどうかというのは非常に悩ましいところがあるかなと思うんですけども、妥協の芸術というところもあるので、バランスでうまく落としていくことが大事ななんて、い

ろんなことを思ったりしました。どうもありがとうございました。

秦野進一特任教授（討議司会）：

ありがとうございました。

それでは、最後に倉元先生お願いします。

倉元直樹教授：

今日、先生方のお話を聞いていて、1つ良いキーワードが思い浮かんだな、という気がしています。それは「考える」ということです。

「学ぶ」というのとちょっと違うのかな、という気がします。「考えることを面倒くさがない子どもを育てる」ということを、高校と大学で協力してやっているのだな、と思いました。そのためには、制度の中でどういった形で入試選抜の資料、あるいは、そこでの難易度というものを設定するかという問題は、結構、技術的だけれども、大事なことなのではないかと思うのです。

つまり、考えなくても通るような入試ではだめだし、考えてもどうやっても無理な入試ではだめなので、それは、多分、我々のところに来たいと思っている受験生の層との兼ね合いだと思うのですが、そういうところを具体的に技術的に落とし込んでいける、そういうようなものにならないと「大学入試学」というのはだめなのだろうな、というふうに思いました。

以上、感想でした。よろしくお願いします。

秦野進一特任教授（討議司会）：

ご登壇の先生方、長時間にわたりありがとうございました。少々時間が過ぎてしまいました。本日のこの討議が、フォーラム参加者の皆様の、それぞれの現場での実践に何か生かすことができれば幸いです。本日はどうもありがとうございました。



閉 会 の 辞

東北大学理事・副学長

滝澤 博胤

久保沙織准教授（司会）：

最後に、主催者を代表して東北大学理事、滝澤博胤より閉会のご挨拶を申し上げます。

滝澤博胤理事：

本日午後から 4 時間と非常に長丁場でしたが、ご参加頂きましてありがとうございます。いつもながら、高校の先生方と大学の研究者を交えての議論というのは非常に白熱して、皆さんにとっても実りある時間を過ごして頂けたのではないかと思います。

私自身このフォーラムの挨拶は 3 年目ですが、毎回このフォーラムのポスターの写真を見て思う事を一言述べたいと思います。

2 年前のテーマは「主体性とは何だろうか」ということで議論を行い、傾いた天秤の写真が載っていました。それは、主体性というものをきちんと測り取る道具を自分たちは持っているのだろうか、あるいは傾いた天秤・重力に抗いながらもきちんと公平に物事を測り取る力を自分たちは持てるのかと、そういうような意図を感じたポスターでした。

昨年は「入試制度が変わるとき」というキャッチフレーズでした。ポスターの写真は港や岬にある灯台でした。暗い中で明かりを放っている写真であって、それはゴールを照らしながらも足元は真っ暗だったと、そういうような状況を示したのかなと思っていました。

そして今年は「大学入試を設計する」。今年はどんなイメージを持ってこの絵が選ばれたのか私なりに解釈すると、きちんと設計をすれば、どれだけ年月が経って風化しても、最後まで残るという意図なのか、或いはかつて栄華を誇ったこんな時代があったということを示すのかなと思いました。

こういった意味でも、実はこのフォーラムは非常に色々な視点で眺めると、得るものはたく



さんあるのではないかと今日改めて感じた次第です。

また来年、どんな主体・主眼で、どんなポスターで皆様をお招きできるか、私自身も楽しみにしております。本日は長い間ご参加いただきましてどうもありがとうございました。ご登壇いただいた 5 名の先生方には改めて感謝申し上げます。引き続き皆様と共に、よりよい選抜ができるように努力して参りたいと存じます。本日は誠にありがとうございました。

（拍手）

久保沙織准教授（司会）：

滝澤先生、ありがとうございました。

以上をもちまして、本日のフォーラムを終了いたします。お忙しい中、最後までご参加いただき、ありがとうございました。

最後に、来場参加の皆様、そしてオンライン参加の皆様もアンケートへのご協力をお願い申し上げます。スクリーンに表示されている QR コードからも、アンケートのウェブページへアクセスしていただくことができます。用紙にご記入いただいた来場参加の方は、受付に回収箱を設置しておりますので、ご提出ください。改めて、本日はありがとうございました。

講評 1：入試改革と高校教員の立場から

青森県立八戸工業高等学校
教諭 井上 誠之

1. はじめに

コロナ禍中の 2020 年、教育現場で出来ることは何かを、改めて考えさせられる年になった。入試への不安が募る中、記述問題導入見送り、「大学入試英語成績提供システム」の導入延期、教育情報管理機構認可取り消しといった、高大接続改革の三本柱が方針転換した。「公平性の確保」や「適切な能力の判定」が果たして出来るのか、私自身疑問に感じていた。一方、東北大学の入試には殆ど影響していない。宮本先生の発表の中であったように、エビデンスに基づいて設計された入試制度によって頑健性が示されている。そして、大学入試の責任が最終的に大学に帰する以上、当該大学が受験生保護の観点からエビデンスを重視するのは当然であり、また、そうあるべきだと感じた。今回、このような貴重な機会を頂くにあたり、標題の観点から再度講演会を俯瞰してみたい。

2. 基調講演 1 について

高大接続改革が方針転換を迫られた原因の一つとして、「大学入試の二重性」を見落としていた点だと、倉元先生は指摘されていた。入試は国民的関心事であると同時に当事者問題であり、一律トップダウンで行うのは厳しいというものだ。今回の接続改革で「下級学校への悪影響の排除」を中核の理念に持ってきた意図は分かるが「公平性の確保」や「適切な能力の判定」が軽視されたというのは、その通りだと感じた。

杉山先生が話されていたが、学制の理念は「不学不邑」だったはずだ。大学入試は、家庭環境に恵まれない子たちにこそ、開かれているべきだ。これまでのセンター試験で得られた知見をあまりにも軽視し、1つの理念を押し通そうとしてしまった。「大学入試は妥協の芸術」とは、まさに言い得て妙だ。継続性の中で、少しずつ変化して

いくことが望ましいと考える。

3. 基調講演 2 について

宮本先生の発表を聞き、改めて東北大学の入試が入念に練られていると確信した。特に、エビデンスを「つくる」局面において、高校側に何度も意見募集を行っている点だ。受験生と大学の当事者性を重視していることは、合格者数で重みづけしたアンケート結果が示している。また、エビデンスを「伝える」局面においては、国公立大の個別学力試験全教科を調査し、約 9 割が記述試験問題だと公表した。文科省が記述式導入の根拠としていた「国立大の記述式は約 4 割」が国語に限定した調査だったことを知り、唖然とした。そもそも拠るべきデータが偏ったものであれば、エビデンスになり得ない。今後、大学入試研究の成果がエビデンスを担保し、政策立案へ寄与できればと願うと同時に、現場教員として声をあげられなかったもどかしさも感じた。

4. 現状報告 1 について

新フンボルト入試を導入するにあたり、安成先生をはじめ、入試課スタッフが理念をどう維持するのか苦心されている様子が伝わった。第一志望であること、この入試を受けられることが主体性を持っていること、研究者を求めていることなど、東北大学の入試問題と型は異なるが、理念は同一だ。新しい取組を始める際の周囲を巻き込んでいく苦労や、取組を振り返る大切さ（継続性）、少ない人手でプロジェクトを実行する苦労は、大学も高校も変わらないのだと感じた。高校でも、様々な取組が生徒の活動の中に予め組み込まれている。ただ、初期の理念を果たして理解しているのだろうか、何となく継続してしまっていないだろうか、振り返る機会は意外に少ない。アンケートは実施しているが、エ

ビデンスは大学のレベルに遠く及ばない。OODA ループでいうところの Observe (観察), Orient (状況判断) が必要か。

5. 現情報 2 について

資質・能力をみる選抜方式から目を逸らさず、目の前にいる生徒に対しての責任を果たそうとする笠井先生の取組は、現場の教員として学ぶべき点が多い。従来の「推薦 AO 入試」対策は、教科指導とは独立した「対策」で、ともすれば指導教員に対して生徒が付度し、受動的立場に収まってしまう。生徒は合格後「先生のおかげで・・・」と言い、我々教員は疲労と達成感を味わう。一方、笠井先生の指導は、あくまで普通の学びの延長線上で資質・能力を高めていくものだ。受験勉強と推薦 AO 対策が同じ方向を向いていること、生徒が自律して問いを設定できることが大切なのだと思う。

私は物理教員だが、物理は半分国語だと思っている。以前は分かり易さを大切にしていたが、噛み砕いて説明すればするほど、生徒の理解力を奪っていると気づいた。私たち教員は、答えを教えたくて仕方がないし、生徒達も安易に聞いたがる。大学に上がれば難解なテキストと戦わなくてはならない。そのときにくじけないよう、教科書の行間を読み解く読解力を大切にしたいと考えている。入試対策の質的変化は急務だと言える。一方（具体的には書けないが）、過去の成功体験から抜け出すことは容易ではない。校内外に仲間をつくり、孤軍奮闘しないよう心掛けたい。

6. 現場報告 3 について

杉山先生の講演の中で、教育を「目的」として語るか、「手段」として語るかという問いかけがあった。教育は「人の成長」を扱う営みだと話され、私は自分の教育の原点を思い出した。初めて赴任した学校は小さな漁村にあり、四則演算も苦手とするが、精一杯生きようとする素直な子どもたちがいた。目の前の生徒を何とかしてあ

げたいという気持ちだけが残った。教員は、進学校だけでなく、実業高校や地域校にも赴任する。「教育という営み」について改めて考えさせられた。

また、急激な教育改革の問題点を指摘されていた。東北大学は AO 入試の入学定員を 1 割弱から 2 割に拡大するのに 20 年の歳月をかけている。大きな変革ほど年月をかけて綿密に取り組まなければならないと、かつて入試説明会で倉元先生が話されていたが、まさにその通りだと思う。

7. 討議について

討議の中で、主体性という態度的側面を入試で評価すること自体が問題であると宮本先生が指摘されていた。前任校では、生徒たちが「主体的」であらんと、様々なボランティア活動や講演会に積極的に参加していた。前々回のフォーラムでも取り上げられた内容だが、主体性を定量的に評価する難しさと、行動の形骸化が問題点としてあげられる。東北大学のように、主体的な学習行動が学力に反映されると明確に打ち出していただけると分かりやすい。

倉元先生は「入試あるところに、対策あり」と話されていたが、私たち高校現場は、生徒の出口を保証するために、入試問題研究（対策）を当然行う。大学が閾値として設定する入試に高校現場が影響されるのは当然だ。しかし、この対策が学びの本質から外れている、単なる問題演習に終始している授業は未だに多い。学びの質の転換を図ろうとする、高大接続改革の理念は分かるのだが、今回のフォーラムで指摘された課題が浮上してしまった。

8. おわりに

入試はゴールではなく、学びに向かう人生の入り口だと考えると、授業や入試対策の質的変化が必要だと痛感している。数年前、入試結果が思うように伸びず、近視眼的に演習を繰り返していた。そんな中、全国の先生方と学びを共有す

る機会を頂き、以来私自身の学びの質が変化している。このフォーラムのように、学校の枠を超えて人とのつながりや先生方のネットワークがあれば、気づきや指導力が上がっていくと思われる。

講評 2：フォーラムへの所感として

岩手県立一関第一高等学校
指導教諭 吉田 達行

1. はじめに

第 32 回東北大学高等教育フォーラムの開催に関係するすべての方々に感謝と敬意の言葉をお伝えいたします。例年とは異なる環境の中で、折々の場面で行き届いた配慮を感じました。フォーラムの内容と共に、様々な制約、状況の変化がある中での準備、運営の様子は、この時期に人と思いを共有する「集まり」の場をつくる範となる姿があったように思います。今年度初めて職場を離れ参加した会議でしたが、教えの多いよい時間を戴いたことに心より感謝申し上げます。

2. 過去のフォーラムへの参加から

高校において教員は一定期間で勤務校が変わり、担当する学年も校務の分掌も長く同じものを続けることは稀なことです。毎年このフォーラムの会場に来ることも存外に稀有なことなのかもしれません。初夏を迎える頃、毎年会場へと足を運ぶことが当たり前のことではなかったのだと、この秋晴の折に改めて思いました。今回、講評の執筆依頼を受け、これまでに参加したフォーラムにおける過去の登壇者の方々の様々な言葉に思いを馳せる時間がありました。十年前に初めて参加した頃に耳にした言葉が、不思議と心に長く止まり、歳月とともに、少しずつ自分の中で意味ある言葉に変化する。相当な負担を背負い登壇される方々の言葉は、聴く者の心に様々な形で刻まれて行くように思います。東北大学高等教育フォーラムが意義深いものであり続けてきた理由は、これまでの多くの登壇者の方々の見識とその人間的魅力に寄るところが大きいのだと思います。今年度のフォーラムにもそのことが脈々と受け継がれていると思いました。

3. これまでの大学入試改革の周辺で

高校における進路指導という分掌は、学校の中で生徒を育てる様々な場面を支える数ある仕事の中で実に小さなものであると思います。偶々その仕事を長く続け、自分自身のささやかな規準や判断力が、つまり教育観なるものが、大学入試改革の一連の動きの中で、随分と揺さぶられる時間を経験しました。多様な主催者の会議に参加し、その都度疑念ばかりを積み上げました。進路指導主事という立場で参加した会議の数は年間で二十の数は容易く超え、生徒のために正しい判断を得ようと、間違いのない方向を知ろうと、多くの言葉を聴き考えることが何年も続きました。善し悪しは別として、東北大学高等教育フォーラムから自分自身が答えを探そうようになってしまったのはこの時期の参加からだと思います。

程無く国の方針と手順が公平さという教育の本質を後回しにしたもので、優先していることが世の利を追うことであることが明らかになりました。高校現場が無念に似た感情を持つに至る頃、頑迷な国の方針により打ち出されていた柱は、延期、見送り、取り消しと悉く頓挫しました。抑の当時から教育現場には高校と大学を繋ぐことへの「深い思い」があったと思います。誤解を恐れず言えば、一年一年の入試にその思いは込められていたはずです。思いの深さにそぐわない改革であるから、現場から発信された声に折れたのだと思います。過去の東北大学高等教育フォーラムに登壇し発言されてきた多くの方々の言葉を思い出します。いつの時代も変わらず指針となる見識が求められています。危ういバランスで物事が進み、気を許すと、忽ち誰かの思惑通りということが多すぎる昨今の世の動きの中で、教育に携わる者が思いを交え、真摯に言葉を交わすこのフォーラムは本当に貴

重な機会であると思います。黙認し追従するしかない状況が巧みに作られて行く時代の中で、先頭に立ち声を上げ使命を果たす人や組織への敬意はこれからも持ち続けていたいと思います。

4. 今回のフォーラムについて

今回招待参加という形でフォーラムの会場において登壇者の言葉を拝聴し感じたことは、先を進むものが範を示すという矜持であったように思います。「大学入試を設計する」というテーマは、2つの困難を見据えています。悪い意味ばかりではないにしても大学入試改革は進行中であることと、良い意味の見つからぬ「大学入試設計とは極めて相性の悪い」、世界に暗澹たる影を伸ばす疫病が進行中であること。その2つの困難の中で、これからの大学入試が社会に「資する」、日本に「資する」役割を果たす指針を示さなければならない。そのために、高大接続改革の現状を正しく検証し、大学と高校のそれぞれの現場が声を交わすことが必要であり、未来を担う子どもたちのための入試を共に力を尽くし設計せねばならない。そのような呼びかけの声を持つテーマなのだと思います。

登壇された方々一人ひとりの言葉の行き着く先は、主題として示されていた『大学入試研究』の必要性和その役割を踏まえた実践であり提言でした。招待参加者として書き留めたのは、主題に纏わる言葉だけではなく、登壇者の教育者としての想いの溢れた言葉でした。登壇者の方々の「話し過ぎてしまった」という言葉の前後がやはり心に残ります。ちょうど授業中の個人的な思い出話を卒業後まで覚えている教え子の記憶のように、それは心に深く残る。「私個人の考えだけれど」と、前置きした後に続く言葉が、やはり我々の心を強く捉えます。例えば、入試においてこの国の最良の専門家である教授が口にする言葉が、大学入試を科学する絶対の自信ではなく、子どもたちの未来への深い愛情であることに我々は深く安堵します。例えば、エビデンスという言葉と価値の流布を、妄信せ

ず、主体性の評価という言葉への疑義を正しく持つという言葉に教育者としての品格を感じます。自らの利を容易く操作できるような基準に合わせるように仕向ける教育からは、創造的な人材が育つはずもない。昨今の世の出来事と重ねて思いを巡らせます。登壇者の想いから繋がり残る言葉は、時間の経過とともに更に意味を深めて行くように思います。

入試は志のあるすべての子どもが努力できるもので、今いる環境で得る情報の量に本質が左右されてはいけない。東北大学の入試が高校現場から信頼を得ている理由は、高校が信じて守り続けたいと思う公平さがあるからです。学力重視に異論なし。毎年より良い入試にしようと取り組み続ける職人のような真摯な姿勢に高校現場の教員は共感しています。「大学ごとに志望する学生の層は異なり、同じ物差しで、入試を設計することは一様にできない」ことは承知しています。それでも、東北大学や今回登壇し発表された「お茶大新フンボルト入試」のように、人を育てようとする深い志のある入試を、「新時代の大学教育」の場で実施し続けて欲しいと切に願います。

そのために費やされる膨大な労力と教員の疲弊についての大学からの言葉に我がことと重ね首肯しながら、大学入試に掛けた時間の価値は高校側に正しく伝わっていることはお伝えしたいと思います。高校生の受験する入試の内容は、これからの高校教員に必要な力をも育てています。大学の先生方の労力を無駄にするような「繋ぎ」を我々はしなないと思います。大学入試の質は、それぞれの大学からの最大のメッセージであると信じています。

5. 高校の進路指導の現場から

よい大学が東北にこそあるのだという言葉が伝わっています。震災からやがて十年になります。その当時、我々の地域を大切にしてくれた大学だ、と。世界に目を向け、教養と研究を同等に重んじるよい大学なのだ、と。自分の出会う子

ども達には, そういう言葉を伝え続けています.
時々お休みを戴きながらこのフォーラムに十年
に渡り参加してきた意味は, その言葉を自分な
りに確かめることだったと思っています.

6. 終わりに

今年, 寒い季節に倉元直樹教授からお話を戴
き, その後瞬く間に社会の風景が変わり, 約束
の五月が過ぎ, 夏の終わりに開催の方針が伝え
られた後も, 開催を疑い願ひ, 秋の季節に今回
のフォーラムへの参加の機会を戴きました. 今
年度のフォーラムの中でのあらゆる場面が長き
に渡り自身の糧となると思っております. 大野
英男総長, 滝澤博胤理事, 倉元直樹教授, 宮本
友弘教授, 安成英樹教授, 笠井敦司先生, 杉山
剛士校長先生, 登壇された皆様の言葉に様々な
示唆, 教示を戴きました. 司会を務めた久保沙
織准教授, 秦野進一特任教授, 伊藤博美特任教
授始め, お世話いただいた事務局の皆様方に心
より感謝申し上げます. 身勝手に連ねた言葉は
ここで終わりにいたします.

これからの東北大学並びに本フォーラムの永
続的な発展を心より祈念しております.

講評 3：第 32 回東北大学高等教育フォーラムに参加して

宮城県仙台第三高等学校

教諭 渡部 敦

1. はじめに

今回の大学入学者選抜改革は大学入試の役割を改めて考える良いきっかけとなった。変化にばかり気をとられがちだが、これまで培われた主体性評価の在り方、思考力・判断力・表現力を育成・評価するための研究は大学、高校ともに大学入学者選抜の在り方を再検討する機会となっている。次なる改革は 2025 年度入試であるが、今回の反省を活かしながら次の大学入試がどのように変化することが望ましいかを議論するきっかけになれば良いと考える。高校現場としては 3 年間の高校生活の中で決められたカリキュラムをこなすだけではなく、社会にどのように貢献できるかという課題を持ちながら自分の将来を設計できる「考える力」の育成が不可欠であると思っている。その 1 つのきっかけが大学入試であり、今後どのような方向性が打ち出されるかを念頭に置きながら大学入試の在り方を勉強させて頂いた。

2. 基調講演について

基調講演では東北大学高度教養教育・学生支援機構の倉元直樹氏が入試研究にもとづいて東北大学の入試を理論的に解説して頂き、同所属の宮本友弘氏はその実践と成果をエビデンスにもとづいて説明して頂いた。学校現場においては 2021 年度の大学入試改革への関心が高まっていたが、当初の改革内容には多くの問題が指摘され結果的に先送りの様相を呈した。大学側も入試改革に向けて準備に大きな労力をかけてきたが、英語 4 技能検定資格が不要になり、共通テスト記述問題も見送りとなった。これらの混乱は入学選抜試験を準備していた大学はもちろん、大学入試に向けて準備してきた高校にも、さらにこの年に受験を迎える高校生に大きな混乱をもたらしたのは言うまでもない。その中で東北大学は英語 4 技能検定資格を利用しない、主体性評価については

チェックリストで確認するなど、他大学と異なる基本方針を打ち出した。高校現場では英語 4 技能資格検定取得の準備や主体性評価についての対応に迫られていたため、この方針が打ち出されたときは衝撃を受けた。しかし今回の講演で東北大学が入試を研究し、社会的な影響力や役割を踏まえての結論であったこと、さらにその結論は多様な調査データを裏付けとして導き出されたものであったのだと理解できた。大学入試改革は国民的な関心ごとであるにもかかわらず、本質は当事者間の問題であって今回の改革は当事者側に重心を置けなかったことが改革における混乱の要因であったという説明がとても納得のいく答えであった。大学入試が社会全体の関心ごとになっているのは十分に予想でき、大学入試の在り方が社会全体に及ぼす影響も大きい。もちろん大学入試を改善していこうとする姿勢は常に必要だと思うが、さまざまな変革を受け入れようとして努力してきた高校生に対しては、教育に携わる者として大変申し訳ないという気持ちでいっぱいである。そのような意味でも学校現場に対し丁寧に意見を聴きながら大学入試を設計していく手法はこの変革の中で意義があったと理解できる。

3. 現状報告 1 について

お茶の水女子大学の安成秀樹氏による同大学の新フンボルト入試の実施状況や課題を提示して頂いた。非常に限られた予算・人材のなかでより効果のある大学入試設計を模索している様子が伺えた。印象としては大学の学びと大学入試を融合させた形態であり、単なる合否判定のみならず、社会教育の役割を果たしていると感じた。大学入試は大学に利益をもたらす人材を確保するという側面がありながら、公教育の立場から社会に利益を還元する側面も持ち合わせており、その意味では新フンボルト入試は理想的な形態であ

る。高校の立場から考えると大学入試は合格できるための力をどのように育成するかに力点が置かれやすいが、入試を通して自分自身の特性を再発見できたり、大学へ入学したいという強い気持ちが高校生活を通じて主体性を育んでくれたり、点数だけではないプラスアルファの成長を求めている。今回の大学入学者選抜改革の理念はまさにこの部分を前面に出した改革ではなかったのではなかろうか。新フンボルト入試はこの理念が実現可能であることを示していると感じている。しかしこの形態の入試に係る人的負担は大学側にとって死活問題であり、認知度が高まって受験生が増加することは喜ばしいことであるが、負担が増加して結果的に入試の質が低下してしまう問題がある。高校側からは入学者選抜要項の表面的な部分しか見られていないこともあり、私も十分に理解していなかったが、評価される大学入試には大きな負担があることを改めて考えさせられた。この課題を解決する試みの案の1つとして、大学入試研究を複数の大学で協働で実施し、その成果を広くシェアすることで水準の高い大学入試が維持されるのではないかと感じた。

4. 現状報告2について

青森県立青森高等学校の笠井敦司氏から大学入試の本質にスポットを当て日常の進路指導実践についての具体的な事例を紹介して頂いた。総合型選抜や学校推薦型選抜の指導に関しては多くの学校が担当者を割り当てて個別指導や、教科ごとの添削指導、時には一斉講義などさまざまな対応をしていると考えるが、指導については担当指導者のノウハウに依存している傾向があり手探りの状況も少なからずみられる。また短期間の指導で成果を求めるよりも普段の授業や探究の指導との関連性が十分検討され、集大成という形で指導がなされるのが理想である。笠井氏は受験指導の一環として訓練的な指導法の見直しを実践しており、発表内容はとても緻密な計画に基づいてなされていると感じた。とくに生徒同士や生徒と教師の意見交換などを取り入れているとこ

ろに工夫を感じる。近年の探究活動を担当してみて分かったのだが、課題が明確になれば生徒、教師が互いに意見を出し合い、課題に対しての考えが深まっていくことが感じられる。また論文形式でまとめると本人がどのように課題意識を持っているか、社会に対してどのような貢献を目指しているのかがはっきり書かれている。このような経験を通じて、自分が学びたい学問や大学が明確になっていき、実際の受験期につながっていくことが望ましい。総合型選抜や学校推薦型選抜の受験指導は生徒自身がその大学で学びたいとどれくらい強く思っているかに影響を及ぼすと考えられる。アドミッションポリシーをしっかりと確認して自分の資質・能力を見つめ直しながら受験を1つのきっかけとして成長できる体験を育みたいと改めて感じた。今回の発表は大学入試指導の実践にクローズアップしたものであったがその指導の姿勢から、高校生活を通じた進路指導が活かされているのではないかと感じられた。課題としては大学入試の指導に対する共通理解がとれるかどうかのカギとなる。担当者だけが理解していればよいのではなく、学校全体として大学入試に関する指導方針を議論できたら良いと感じた。ただ労力に関しては際限なく時間があるわけではないため、ある意味効率よくできる部分も必要で、その辺の難しさにどう対応しているかも説明があり、学校現場のありのままの姿を提供して頂いたのだなと強く感じた。

5. 現状報告3について

私立武蔵高等学校中学校の杉山剛士氏による高大接続改革に関する高校側の意見と、改革に対する期待を述べて頂いた。改革の理念に関しては多くの高校現場でも好意的に受け止めている、あるいはこれまでの大学入試の在り方を抜本的に見直し、高校のカリキュラム・マネジメントにも少なからず変化があらわれている。ただ、現高校3年生が費やした時間や費用などを考えると、今回の高大接続改革には十分な検証が必要であると感じている。英語4技能をはかる民間の資格試

験を必須化するため高校2,3年生に共通IDを申請させ、いざ明日発送しようとした矢先の中止はどの学校でも衝撃が走った。そこまでなる前にもっと事前に対応できなかったのかと、大学入試への不信や不安を募らせる結果となってしまった。主体性評価についても2021年度大学入試では、どのような根拠に基づいて主体性を評価するか、明確な指針がでないまま入学選抜者要項で次々と主体性評価の点数化が見送られた。これからは新学習指導要領で取り入れられる観点別評価が必須になることで、調査書段階である程度把握できると考えられるが、大学入試改革もそこまで変えてから実施すればこのような混乱は起きなかったのではないかと考える。また地域格差や経済格差を問題視することもあるが、完全な平等化は現実的に困難である。現状の格差を精査した上で、議論すべきことなのかもしれない。またエッセイに関しては志望理由書に近いものがある。大学での研究のみならず、将来社会に対してどのような貢献をしていきたいのか考えを深めることで、大学での学びを高めることができる。今後の主体性評価について活用できるのではないか。

6. 討議について

大学入試の在り方や本来あるべき高大接続改革とは、というテーマが中心であった。課題は2点に集約できる。1つは、より工夫された入試は受験生自身の成長に繋がるが、大学側の負担はますます増大しているということだろう。講義、レポート作成、グループ討議などの実施に大きな労力がかかり負担になっている現状が垣間見られた。もう1つは学力の三要素のうち、主体性をはかる物差しが明確でないことであろう。私見であるがその大学にどうしても入りたいという熱意があれば、どのような試験であろうとチャレンジするはずであるし、自分なりに工夫して準備するはずである。これは十分な主体性と判断できるため、入学後に意欲的に研鑽に努めると想像できる。また討論の中でもでてきたことであるが、大学入試の在り方は大学入試センターをはじめ全国的

な調査・研究を実施する必要がある。今回の入試改革に関しては理想が先行して、十分なエビデンスを持ち合わせていなかった。大学入試の仕組みを変える前に綿密な調査・検討が必要であったのかもしれない。大学側の負担は入試研究の協働実施で対応できる可能性がある。高校側としては単に大学合格を目指させるのではなく、キャリア教育も含めてその大学でなければならない理由を明確にさせる指導をしていく必要がある。この意味で大学・高校との高大接続が活発になればよいと感じる。

7. おわりに

コロナ禍の影響でフォーラムの実施自体が困難な年であったが、東北大学をはじめ、研究や事例を発表して頂いた発表者のご尽力に大変感謝いたします。大学入学者選抜改革は少なからず混乱があったといえるが、大学、高校ともに大学入学者選抜方法をどのように構築していくべきか、という課題に向き合えた意義は大きい。今後の新学習指導要領全面実施に伴う変化にどのような大学入試を設計していくかを考える上で、今回の経験は大いに役立つと考える。

講評 4：大学入試学の波及効果を期待して

秋田県立秋田北高等学校
教諭 杉田 道子

1. 自身への波及効果

英語科教員として振り返るとき、1 つの大きな改革の波をかぶったのが、「オーラル・コミュニケーション」という科目の導入であった。外国語学習不安 (Foreign Language Learning Anxiety) 研究として、県内の高校生と英語教員へのアンケート等により、音声面に特化した新たな科目は、言語の使用場面や技能により、学習者はもちろん、英語教員にも「不安」を与えることがデータから分かった。全国の先生方による思考錯誤を経て、現在、現場では音声面を含む能力の指導と評価は日常となった。その後、センター試験へのリスニングの導入、共通テストや個別試験における英語の入試改革につながってきた。

そして今、進学校に勤務する身として、新たに「入試改革」という大波を経験している。当初は大きな不安を感じていたものの、それを軽減するきっかけとなったのが、この高等教育フォーラムである。「受験生の保護」という強い姿勢に感銘し、大学入試が学問になり得るということに純粋な驚きを感じるとともに、現状報告をなさる先生方から御助言をいただき、入試改革を前向きにとらえるようになった。この波には乗りたい。

2. 基調講演

(1) 東北大学教授 倉元直樹先生

入試が学問になると教えていただいたのは、第 30 回フォーラムでの倉元先生の御講演であった。因果関係があって歴史が動くように、今の高大接続改革も入試史の 1 ページだとすれば、壮大な大河ドラマが作れそうだという感想を持ったものだ。今回は、再度先生の御講演を拝聴する機会をいただき、入試を学問化することの意義を少しは理解ことができた。

まず、入試が本質的には当事者間のものであることに納得した。昨年度の高大接続改革の方針転換は、高校生たちが世論を動かす力になるなど、当事者からの反響や動きが予想以上に大きかった。これにより、メディアを通じ国民的関心事にもなったと思う。わが国における大学入試の持つ構造的困難として、「当事者間」と「国民的関心事」の二重性が挙げられていたが、入試が本質的には当事者間のものならば、入試の三原則の内容等について当事者同士が力を集結して、大学入試をもっと国民的議論のステージへ上げなければいけないと思った。

「東北大学の入試が高校教育に与える影響」のグラフからは、東北大学への志望が強い生徒は、大学を信頼して日々の学習に向かう傾向が表れていた。大学からの「出題の意図」は、大学で研究していくために必要な資質・学力を適切に測ってくれている、と信頼しているようだ。選抜方法云々ではなく、大学の魅力のど真ん中にある研究内容へと、高校生の興味・関心を引き寄せるようなキャリア教育や探究活動が高校側に必要だというエビデンスと思う。

最後には、倉元先生から入試学の応用問題が出題された。コロナ禍での入試の実施である。大学側の対応の難儀さは想像できる。高校でも、例えば事前レポートの指導やオンライン面接の実施など、細かなで急な対応を求められている。前倒しとなった GIGA 構想への対応を含め、高校側の我々の「思考力・判断力・表現力」「主体性」を試される応用問題だととらえて取り組みたい。

(2) 東北大学教授 宮本友弘先生

高大接続改革にかかわる東北大学の対応について、宮本先生から 1 つ 1 つ丁寧な説明をしていただいた。国の方針転換があっても影響がほ

ば無かったという、東北大学の入試制度の頑健性に驚く。入試の専門家集団があつてこそ、研究の成果＝エビデンスがあつてこそ、当然の結果なのであろう。一英語科教員としては、東北大学の英語外部試験や CEFR の基準の扱いは、拍手ものであつた。共通テストに関しては、リーディングとリスニングの2技能で続く様相であるが、もし再度、入試で4技能を測ろうとするのであれば、きちんと英語の専門家チームからのエビデンスを「つかった」提言をいただき、次の改革に影響を与えて欲しい。例えば、多言語主義の多いヨーロッパの外国語運用能力の枠組みを日本でそのまま用いることや、大学生でもほとんどがAレベルに収まるような基準で大学入学者を選抜することの妥当性など、エビデンスを示して政策立案に大きな影響を与えて欲しいと思う。

高校の現場を考えたときに、東北大学の入試研究の特徴のうち、他への波及効果があつて欲しいのは、エビデンスを「つくる」段階において志願者側のニーズ、高校側のニーズを重視することである。今後、さらに国が入試改革を進める際の手本である。現場のアンケート結果が、エビデンスを「つくる」「つたえる」「つかう」と3つの局面を経て、政策決定までにつながると考えれば、こちらも責任をもって現状を正しく伝えようという姿勢になる。大学からは、研究の成果を関係機関に「つたえる」ことで、大学入試や教育が国民的関心事になるのが望ましい。

最後に、御講演を拝聴後、大学お願いしたいことを3つ考えた。高校では「つたえる」「つかう」ことに直接関わることは難しいと思われるので、大学側にこれらの局面のリードをお願いしたい。また、意見集約の結果から、調査書の扱いとチェックリストによる主体性評価についても引き続き検討をお願いしたい。最後に、比較文化の観点、例えば「つたえる」ことに特化したアメリカの機関の業務や、学習結果に直結しもっと重視されてもよいと思われる「学習

方略」の研究などについて、情報提供いただく機会を得たいと思う。

3. 現状報告について

(1) お茶の水女子大学教授 安成英樹先生

新フンボルト入試は、秋田にある国際教養大学の県内の高校生を対象とした入試生徒に近い。今年度は異なる形式で実施されるが、昨年度までは泊を伴うセミナーに参加し、議論やディベート、講義受講やレポート作成等を経験することが受験の条件である。実際の試験では日英による面接や集団討議が行われる。時間と手間をかけてじっくりと受験生の資質・能力を見る試験スタイルである。入学前教育も充実している。

課題として時間と手間がかかることを挙げていらっしゃったが、じっくりと人を育てるには当然そうなるのだろうと拝察する。コスパの良い入試だけではないかと思う。入試を経験することで、受験生の能力が高まっていつているはずである。国際教養大学を受験する生徒も、半年位にわたる準備期間と実際の入試を経験し、知識・技能の高まりを筆頭に人としての総合力が上がる。たとえ入試結果が伴わなくともその後に生きる。新フンボルト入試に挑戦した受験生たちも、きっとそうだろう。多様な選抜スタイルがある中で、新フンボルト入試は、波及効果のある入試だと思う。私自身は、英語科教員として心掛けていることに「テストの波及効果」があり、定期考査を評価や診断だけに使うのがもったいなくて、受験している60分の間に生徒の英語力がつくようなテストを理想としている。

(2) 青森県立青森高等学校教諭 笠井敦司先生

笠井先生からは、「対策」8つのステップについて情報提供していただき大変参考となり有り難く思う。フローは理解しやすく、また、各ステップについても丁寧に説明していただい

た。医学科を中心に指導されているとのことであるが、どの学部学科においても活用できる。勤務校では、総合型選抜や学校推薦型選抜に挑戦する生徒に対し、全職員で分担して支援はしているものの、この8つのステップの目が荒く、不明瞭で、職員間の共通理解が不足していると自覚できた。

情報収集については、コロナ禍による選抜方法の急な変更などもあり、最近はますます「一次情報」の確認が重要となっている。笠井先生からは、大学の過去問情報も、一次情報＝自校卒業生による受験報告書の良さを教えていただいた。生徒の資質・能力を実際に指導経験のある教員に直に確認できたり、生徒のコメントの中に我々の指導内容の妥当性を確認できたりするのがよい。各校レベルでデータの蓄積によるエビデンスが次年度の進路指導に活きる。また、生徒と意見交換しながら共に探究するプロセスや、出題のデザイン、答案の振り返り方まで具体的な指導例も示していただいた。これらのエッセンスを、「主体的・対話的で深い学び」を目指す日々の授業に全教科で取り入れるのが理想と感じた。その場合、チーム学校としてのまとまりや管理職のリーダーシップが必要になるのであろう。

(3) 武蔵高等学校中学校校長 杉山剛士先生

杉山先生の御講演は大変説得力があり、拝聴した後は、結局自分たちの身に起きたことは何だったのかがストーンと落ちたような気がした。現場の本音を率直に声に出していただき大変有り難く感じた。地方の学校の不安に共感的理解を示してくださり、教育とは「人の成長」を扱う営みであるという、教育への愛情も伝わってきた。他方、ボトムアップではなかった入試改革に対し、高校現場・大学現場が「暴走」を止められなかったことにも責任があるという点には、耳が痛かった。確かに、政策に懸念があっても批判しないし、ぎりぎりまで批判できなかったことは反省すべきだ。私自身、もう決

定済みなのだから、と内心諦めてしまっていたことは否めない。また、改革には必ず副作用があり、高度な想像力が必要だという。改革は進行中だが、共通テスト枠への情報科目導入などが実効性はあるにしても、実現性があるのか、現場に生ずる負担への対処方法はあるのか、人材資源の確保はできるのかなど、相当な想像力をもって進まなければならない。大学入試研究の必要性がますます高まってくると思う。

4. まとめ

2人の人間の距離が遠いと、互いの行動や思いが伝わりにくく、不安になり誤解による不信感さえ抱くかもしれない。大学と高校も同じようなものであろうし、入試と指導もそうかもしれない。討議を拝聴しながらそう考えた。このフォーラムのように直に高大が接続する機会は継続的に必要だ。距離が離れてしまうと、お互いの立ち位置や方向性が不透明になり、受験生によってよくない。どこかに意見をぶつけたい時は、協働すればより効果的だ。指導して受験生を送り出す高校側と、大学生としての資質を問うための入試設計者及び実行者としての大学側が、距離を縮める機会をもつことが入試設計に大切なことであると思う。

私自身も、専門の英語という教科の観点から「大学入試学」に触れていたい。定期考査などの評価が生徒に与える波及効果、大学入試が受験生の動機付けや学習習慣へ与える波及効果、同じく入試が教員の日々の指導実践や評価方法に与える波及効果などについて、大局的に研究するような力は持ち合わせていないが、身近なエビデンスを集めてこそが、現場に立つ者の役割だと思う。

末筆ですが、コロナ禍で県外越境を遠慮する空気の中、今年度の参加を諦めかけておりましたところ、会場とオンラインの二本立てで本フォーラムを開催してくださいました関係者の方々に深く御礼申し上げます

講評 5：試されるとき

山形県立新庄北高等学校
教諭 植松 弥公

1. はじめに

まず、ご招待いただきありがとうございます。代理での参加ではありましたが、貴重な機会をいただけたと思っております。また、新型コロナウイルス感染症対策に配慮しながらの準備運営は大変なことだったとお察いたします。

倉元直樹先生には、2015 年 9 月に私が事務局を務める研究会でご講演をいただいたことがありました。テスト学的観点に立脚した高大接続改革のあり方についてのお話でした。当時は大学入試改革の話が出たばかりで困惑していましたが、やるべきことと（まだ）やるべきではないこととを伺い、その後の状況を注視しつつ準備を進めていこうと考えたしだいです。

しかし、結局 2020 年になってなお、私は困惑をしたままです。ここまで色々な取り組みをしたり、2015 年時点では想像もしていなかったような経験も多々させていただいたりしました。それでも、仮に現在の私が 2015 年の私に話をする機会があったとしても、恥ずかしながら曖昧な受け応えしかできないのではないかと想像します。私自身の不勉強さを棚に上げるようですが、それだけ様々なことが一度に変わろうとして、一部のことは把握できても全体像を把握しきれないまま時間が経ってしまったような印象を受けることがあります。

今回のフォーラムには、そうした困惑を少しでも解消して今後はどのような点に留意していくか、学ばせて頂こうと思い参加いたしました。

2. テーマ「大学入試を設計する」に関連して

「大学入試を設計する」というテーマでまず連想したのは AO 入試でした。私は毎年手に入る範囲で AO 入試や個別試験の数学の問題を拝見し、自分でも解いております。2019 年の理学部 AO 入試の問題の中に 1 問、とても苦戦した

ものがあり、11 月でこれを解ける高校 3 年生は素晴らしいと考えたことを思い出しました。仮定として、これをいわゆる入試対策（今は、この言葉の是非はおいておきます）を全くしないで解ける生徒や、少し対策をして解ける生徒を選抜する目的で設計されているのだとしたら、大変理に適っていると感じられました。また、たとえ AO 入試で不合格であっても、あと少しで届く学力の生徒にとっては個別試験に向けた対策にもなりましょう。一方その反対に、そのような生徒向けに設定された試験に対して、ずっと前から対策をしたり、練習を積んで何とか問題を解けるようにしたり、というアプローチはそぐわないのではないかと感じられました。

フォーラムでは、何度か主体性評価の話題も挙がりました。主体性評価は大変難しい、主体性を評価すること自体に問題があるのでは、と伺ってほっとする自分がおります。評価のためにボランティア活動をする生徒のような想定も出ましたが、そうやって「主体性がある」と装うことは高校生の年齢であれば可能でしょう。少なくとも「AO 入試の数学の問題が解ける」と装うことに比べれば、ずっと簡単です。反対に、「AO 入試の数学の問題が解ける」のであれば、主体性の有無にかかわらず大変素晴らしい数学の力量を持っていますし、その力量を持つためには主体性なくしては成しえないのではないかと、とも思えます。もっとも、装うこと自体は問題ではありません。大人も、採用試験や仕事の色々な場面で装っているのですから。ただ、入試としては本質を捉えていないのではないかと考えます。

AO 入試に限らず選抜試験は、マッチする受験者もいればミスマッチの受験者も出てきます。進路指導でも、できるだけミスマッチが少なくなるようにしようとはしますが、なかなか難し

いのが現状です。X が得意な生徒 A には x 方式、Y が得意な生徒 B には y 方式で受験できるようもっと多様化すればいいのと思う一方、いざ多様な方式が出てくると指導も対応も人手が足りず、悩ましいところです。もちろん受験するのは生徒ですから、本人で対策することが筋だとは思いますが、入試対策は学習指導要領に書かれていない、学校の授業の内容としてふさわしくない、と言われることもあります。しかし一方で、近隣にいわゆる予備校がなく、学校が入試対策の役割を担わざるをえない地域もあるのが実情です。本校もそのような面があります。数年前、一浪の末に大学合格した卒業生に対して、予備校のどこが良かったか尋ねたことがあります。その卒業生の答えは「自習室」でした。単なる学習スペースというだけではなく、本気になって集中して学習できる環境という意味に受け取りました。在学中に色々な取り組みをしたつもりでしたが、学習する環境づくりをもっと徹底すべきだったと痛感させられた出来事でした。

生徒を個別に指導したい、という気持ちはありますし、それ以前にまずは授業の内容を改善しようと考えているところですが、十分に考える時間が取れないまま日々が過ぎていくことに焦りを覚えることもあります。現在は立場上、教科の教材研究より総合的な探究の時間の準備運営に時間を多く割いているのが現状です。また今年度は休校期間にもっと考えたり話し合ったりできたのではないかと今になっては思いますが、当時の作業ログを見返す限りは学校再開後を想定して計画を立て直すことに手一杯でした。

国が進める大学入試改革全般に話を移します。確かに趣旨に賛同できる点はありました。変化は確かに必要ですし、今から振り返ってみれば、準備期間もある程度取られていました。それでもこれだけの混乱が続いたことの原因としては、トップダウンで進められたこと、1 つの理念だけを押し通そうとしたこと、という倉元先生の

ご指摘が的を射ていると感じました。現状報告 3（私立武蔵高等学校中学校校長 杉山剛士先生）にも、急激な教育改革はうまくいくのか、というお話もありました。教育は本来遅効性の性質が多いと思われませんが、昨今の社会情勢に合わせるように変化を求められ、即効性が期待されるのもやむを得ないかもしれません。ただ、初めから学習指導要領改訂の時期と併せての実施が検討されていたら、避けられた混乱もあったのではないかと思います。「新テストへ向けた取り組み」と「新課程へ向けた取り組み」とが、（本来であれば同じ方向を向いているものはずなのに）混在してしまっているからです。加えて、「総合的な探究の時間」の早期実施も相まって、より困惑させられる場面があったと思われました。

そもそも、理想の大学入試とは、という問いに解はありません。もし理想のシステムが存在するとしたら、既に知れ渡っているはずですが。そのようなシステムは存在しないとした上で、評価は比較で語られるべきではないかと考えます。大学入試センター試験には確かに課題点もありました。しかし変更をするほどのことではなかったと個人的には思っております。センター試験がベストだと思っているわけではありませんが、ベターであると了解していた、という意味です。

制度を考えるいわゆる《中央》と、《現場》とは断絶しているわけではなく、一応のつながりは有しています。ただ、両者はとても長い棒の両端にあるようなものです。《中央》で考えた「熱」は《現場》に伝わるまでに時間がかかり、だいぶ冷めた状態で届きます。その逆も然りです。またポートフォリオや英語外部試験のような「これまでやっていたことを少し変えて活用する」という発想も、《中央》では「少し」かもしれませんが、棒が長いために《現場》では大きな動きとして認識されます。

そのような中、東北大学の進めるエビデンスに基づく大学改革のお話（基調講演Ⅱ 宮本友

宏先生)は大変興味深く拝聴いたしました。英語認定試験や記述式試験、調査書等の扱いについて、それぞれ調査なさっていましたが、印象での判断ではなく事実(データ)に基づく判断は大切だと改めて感じたところです。また、全体の方針転換があっても、東北大学の入試にはほとんど影響しないという頑健性も印象深いところでした。変えるところは柔軟に変更を加えつつも一貫した方針が保たれている点は、入試のみならず組織や企画の運営にも必要であると感じさせられました。

現状報告1(お茶の水女子大学 安成英樹先生)の新フンボルト入試も、新しい形の入試でした。図書館を活用したレポート作成や討論は、当日の出来栄だけでなく今までにどのように学習に向き合ってきたかの態度も含めて問うているような試験だと思いました。また、プレゼミナールを高校2年生から受講できることも併せて、試験を受験者を成長させるための機会と捉えていました。かなりの手間暇をかけた入試形態で大変なことも多いと思われますが、それをしてでもこのような学生が欲しい、という強いメッセージになっていると感じられました。

国や大学の「大学入試の設計」に対し、では高校側は何をすれば良いのでしょうか。

3. 高校の現状から

「共通テスト対策」という文字が書かれた参考書や問題集を目にするようになりました。個人的には違和感のある言葉です。今年度、あるところから「大学入学共通テスト対策として知っておくべきこと」を書くよう依頼された際に、私は次のように書きました。

「まずは「対策」という考えを一旦捨てましょう。テストのために学ぶのではありません。学んだ結果を試すのがテストです。」

綺麗事かもしれませんが、私はよくこのように生徒に話しています。テストのために学ぶのではなく、学んだことが身についたかテストする。テストに出るから大事なのではなく、大事

だからテストに出るのです。

共通テスト「対策」に違和感を覚えてしまうのは、結局テストのために学習をしているように受け取れるからです。高大接続改革の趣旨から乖離しているように思えてしまいます。

一方で、あくまでも肌感覚ではありますが、授業は変わってきていると感じています。講義型の授業の中にも生徒が対話する場面を取り入れたり、ペーパーテストや提出物以外にレポートやパフォーマンスで評価したり、総合的な探究の時間で主体的に活動させたり、と、本校でも様々な取り組みを目にしたり耳にしたりしています。改革のための改革ではなく、生徒のために前向きに改革に取り組んでいる雰囲気生まれつつあります。まだ個人・教科科目レベルの段階で、どう学校全体の取り組みにしていかが課題ではありますが、こうした教員側の変化が生徒たちにも波及していくことを期待しています。

現状報告2(青森県立青森高等学校 笠井敦司先生)のお話からは、課題へのヒントをいただけたように思いました。入試対策を「合格を目標とした短期集中指導・訓練」ではなく「思考力を鍛え伸ばす集中特化型授業」と捉え、普段の授業とベツモノにしない、という考えです。全体の計画に落とし込むところが今後の課題とおっしゃっていましたが、こうした取り組みの共通理解が図られ、カリキュラム・マネジメントの視点で整理されるのであれば、生徒にとっても学校での色々な学びがつながっていくのだろう、と感じ入りました。

ところで雑誌の付録が充実したり、初回限定版の商品が作られたりし始めたのはだいたい20年前くらいからでしょうか。雑誌であれば記事の内容、CDであれば音楽そのものが本質ですが、それ以外のところに付加価値をつける考えといえます。そのこと自体は構わないと考えます。確かに一時的には売り上げは伸びるかもしれませんが。しかしみんながやり始めて、それが普通になり、どんどんエスカレートすると話

は違ってきます。付録はあくまでも付録なのに、本質に割くべきリソースを奪い始めることがあるかもしれません。

大学の本質は学問だと私は考えています。色々な付加価値をつけること自体は構いませんが、本質に割くリソースが奪われないことを願います。特に、付加価値をつけようとする存在が、大学内部ではなく外部であればなおさらです。

3つのポリシーも、青森高校さんほどではありませんが、本校でもしっかり読むよう指導はしています。ポリシーに書かれている〇〇は自分の●●にあてはまる、といった具合に、3年間の取り組みを振り返りながら自分に落とし込むこともしているところです。その過程を経て書かれた「自分」は、ポリシーを読むことによって思考が惹起されて言語化された本人の本質か、それとも付加価値なのか、見極めは容易ではありません。複数回の面接指導を行うことで整理させることもあります。

4. おわりに

果たしてこれから、どのようなスタンスで臨めばいいのでしょうか。システムに苦言を呈するだけではいけない、とは思います。目の前の生徒の時間はどんどん減っていきます。わからないから今のままで、というわけにはいきません。考えられるのは、わからないなりに仮説を立てて進める、情報を集めて整理・分析し、結果を見て仮説を修正する、といった行動です。これは、まさに探究サイクルに他なりません。生徒に探究的な学びを促す傍らで、我々教員側も同様に探究的なサイクルを試されているかのようです。

フォーラムの終盤間際、ひとつの問いが浮かびました。「もし大学入試選抜が廃止され、志願者が全員入学できるとしたら？」

あくまでも思考実験です。ひとつの大学だけで選抜を廃止するのではなく、全大学が一度に廃止し、全受験生が第一志望に合格するのです。

どのようなことが起こるでしょうか。自分が志望した大学の講義についていけないとしても、それは自分の責任になります。自分で努力することは大前提で、課題未提出や欠席が重なれば単位を落とします。オンライン講義にすれば、講義室に入らない人数の受講者がいても対応はできるでしょう。高校側でも、少なくとも「大学入試を意識した高校の授業」がなくなることは明らかなです。その代わり、「何のために学習するのか」が今以上に問われることになりましょう。

もちろん、大学入試をなくせと本気で考えているわけではありません。生徒は「テストのために勉強するのは、やる気が出ない」などと言ったりもしますが、その割には「数学は入試科目にないので」と勉強をやめたりもします。大学入試をなくしても、それで生徒がもっと学ぶようになる想像は、残念ながら自分にはできません。

ただ、「ある」ことを前提として考えるあまり、見落としていることはないだろうか、と顧みた次第です。

講評 6：教育について社会的な議論を

福島県立福島高等学校
教諭 菅野 陽介

1. はじめに

昨年度、本校に赴任して初めて卒業生を送り出した。そのため今回の教育フォーラムにおける基調講演や現状報告を、自らの3年間の指導と重ね合わせて、時折卒業生の具体的な顔を思い浮かべながら聞かせていただいた。

コロナウイルスの本格的な流行が始まった昨年度末、個別試験が中止される大学も一部出てきており、ウイルスがいよいよ身近に迫っている恐怖を実感させられた。緊急事態宣言により全国的に学校活動が制限され、その後も感染者の増大に伴い県単位で休校措置がとられた。昨年度、3年生を指導している際に「来春はどのような生活になっているだろうね。キャンパスを新しい友人たちと歩いているね。」と声をかけ励ましていた。しかし、受験を乗り越え、大学合格を果たした卒業生の多くは、いまだにキャンパスにすら入れないでいる。1年間オンラインとなった大学も数多くある。

卒業生たちを気の毒に思う気持ちと同時に、それ以上に強く考えさせられたのは「私は3年間で本当に生徒の主体性を育てられていたのか」という事であった。現在ほど各人の主体性が求められている時はないであろう。自らのこれまでの教育活動に対して、コロナ禍によって抜き打ち試験を受けているような感覚をもった。受験をクリアする事、大学に入学することが目的で、その後のビジョンが描けていない学生は現在どのような生活をしているのだろうか。自らがどう生きるか、その指針があればこの期間をも糧として自らの目標に向かって一步一步進んでいるはずである。私にとって、現在はそのような生徒を育てられていたのかどうか試されている真っ只中である。

今年度はいよいよ入試改革元年を迎え、センター試験が廃止され共通テストが始まる。今年

度入試を迎える生徒たちは、入学時より新入試を想定した国語や数学における記述力や英語の4技能を高めるための様々な取り組みを行ってきた。そのどれもが本来大切な力であるということ言うまでもなく、今までの準備が無駄になったわけでは決していないが、採点者や教育格差の問題など従前から分かりきっていた問題の指摘により、直前で見送りになるなど、当事者を置き去りにするようなこれまでの変遷には怒りを覚える。しかしながら、コロナ禍による休校や試験の形式の変更、部活動や教育上重要な役割を持つ学校行事の中止など、様々な困難に見舞われながらも前向きに進もうとする生徒達の姿に感動させられている。それ故なおさら生徒達自身が納得のいく入試になることを願ってやまない。

2. 生徒の力を伸ばす入試

現在、生徒を多面的に評価するための独自性のある様々な形式の入試が展開されている。現状報告1ではお茶の水女子大学の安成英樹先生から、新フンボルト入試が実施されるまでの経緯や受験者数の推移、今後の課題などを解説していただいた。私がこの入試を知った際の正直な感想は「誰がこの大変な入試を受けるのだろうか？一般入試より難しいのではないか。」であった。しかし、実際には毎年200名近い生徒が受験し、その入試で不合格であった場合にも推薦入試、一般入試とチャレンジしているという事であった。このお話は私にとって強い説得力があった。というのも昨年度本校で新フンボルト入試に挑戦し、合格した生徒がいた。その生徒は小学校時からお茶の水女子大を1つの目標とし努力してきたという。また、学力だけではなくこれまでの活動で培ってきた力の全てを入試にぶつけてみたいという思いから受験を決意し、

もし不合格であったとしても、残りの全ての入試を受ける覚悟をもって臨んだそうである。安成先生からは多くの生徒が受験している理由の検証はされていないという説明があったが、第一にはお茶の水女子大学自体の魅力、そして第二に新フンボルト入試の理念や目的が受験生にしっかりと浸透してきているからではないだろうか。新フンボルト入試を経験した生徒が、大学でどのように成長し社会で活躍していくのか、大変興味深い。

倉元先生からは新フンボルト入試と東北大学のAO入試は、第一志望を貫く生徒を求めるという点で設計が似ているというお話もあった。昨年、本校で東北大学への入学を強く希望していた生徒は、AOⅡ、AOⅢにチャレンジして共に不合格であったが、前期入試で合格を勝ち取った。まさに第一志望で貫く事を実践した。その生徒は入試を経験する度にギアを上げて力強さを増していき、前期試験の時などは頼もしさを感じるほどであった。入試にはその結果に関わらず（むしろ失敗を経験することで）生徒を成長させる力が確かにあると実感させられた。繰り返し挑戦する事で、生徒が成長するような入試の展開が可能になっているのは、エビデンスにもとづいて入試が設計されているからなのであろう。青森高校の笠井先生からの現状報告にあった、合格のための訓練ではなく、大学入試の指導を通して生徒の思考力を育むという点にも大きく共感した。入試の指導を通して、その場限りのテクニックを身に付けさせるのではなく思考力や主体性、そして粘り強さなどの非認知能力も育てていきたいと強く感じている。

3. 入試改革による教育改革

安成先生のお話の中で、各高校でAO入試について説明する際に、「学力重視」という観点からAO入試自体に難色を示されることも多かったというものがあった。現場で働いている教員として非常に恥ずかしい思いをしたのと同時に、未だに旧態依然とした教育観が根強い現状も理

解できた。一般入試に向けた準備こそが王道で、AO入試や推薦入試を受験することが受験勉強の妨げになるという考え方である。しかしそのような考えが根強く残ってしまう現状も理解できなくもない。というのは、学校教育には変化が求められているが、その社会的な評価の仕方は全く変わらないからである。現場では新しい学習指導要領の実施前から学力の三要素の育成が求められるようになっている。教員として採用されてから15年が経過しようとしているが、その間に授業の形態1つとっても大きく変化してきたことを実感している。また課題研究の実施など生徒の主体的で深い学びを引き出す取り組みも多くの学校でなされている。入試も多様化し、様々な観点から生徒の選抜が行われている。しかしその一方で、学校側が最終的に求められるのは「難関大学に何人合格したか」である。社会的な興味関心もそこに注がれており、年度末には難関大学合格者のランキングが発表される。各学校の特色ある取り組みも、大学の合格者数に担保されてこそはじめて評価される。社会的な評価が変わらないのであれば、これまでの数を出すために培われてきた様々なノウハウを踏襲しようとするのは致し方ないのかもしれない。

新しい学習指導要領では教員が何を教えるかではなく、生徒自身の資質や能力を高めることが求められている。大学入学者選抜改革は、大学入試形態の変更を梃子に新しい学力観と大学入試とをつなげ、高校と大学の現場での教育改革を促進することが狙いであると捉えている。実際に教育は徐々に変化してきているものの、その社会的な興味関心、そして評価という点では以前から何も変化することがなく、そこに大きな解離を感じている。

入試改革により問われる力が変わるのだから、授業をはじめとする学校教育改革に取り組みましようというのは非常に強い説得力があった。確かにそれが教育現場の学びが変わるきっかけとなった面がある。しかし、倉元先生の「入試

で問うと必ず対策する」という言葉が強く心に残っている。主体性や深い学びを育む取り組みも、「入試の為」となった瞬間に色褪せ、「主体性があるように見える生徒」の製造プログラムになってしまう。入試改革をきっかけにするまでは良かったが、入試のためだけの教育改革では本来の意味が失われてしまう。あらゆる教育活動が入試と結び付き本来の色を失ってしまう事については、私達現場で働く教員による部分も大きく、責任を感じている。

そして入試で主体性は測るべきなのだろうか、測るべきではないのだろうか。そもそも測ることができるのだろうか。魅力ある生徒達を多面的に評価してほしいという思いがある一方で、主体性は測るようなものではなく、育むものであるという思いも強く、未だに考えがまとまらない。

4. 入試改革によらない教育改革

学校教育は生徒の自己実現や、社会に資する人材を育成するためにあると考えている。当事者性と公益性の両方が高いという、改めて考えてみると特殊な営みである。ただ当事者性と公益性は別のものではなく、生徒が学校教育を通して自らの資質や能力を高めていく事が将来的には社会を豊かにしていくという繋がりがある。本来は、どのような人材を育てているのかが教育で問われるべきことであるが、現在は未だに入試の実績に一番の注目が集まっている。入試実績も教育活動の成果の1つであることは否定しないが、社会の教育観がもう少し成熟し、様々な観点から教育の評価や、社会全体でどのような生徒を育てていくのかの議論がなされる必要性を感じている。ではどうすれば社会の教育観を成熟させていく事ができるのだろうか。

基調講演Ⅱで宮本先生がお話しされていた中に、エビデンスの3つの局面という内容があった。研究によって積み重ねられたエビデンスは、伝えられ、活用されることで初めて生かされる。このお話を学校の教育活動と重ねて聞かせてい

ただいていた。価値のあるエビデンス（教育活動）も伝えられなければ、無いことと同じである。学校現場では開かれた学校づくりとして積極的な情報開示が求められているが、その情報開示の対象は保護者や生徒、受験生、卒業生、大学関係者など学校関係者に向けたものがほとんどである。学校関係者に向けて情報を開示しても裾野は広がらない。むしろ、学校教育に興味関心があまりない人々にこそ積極的にアプローチし、現状を知ってもらい、興味関心を持ってもらう必要がある。教育に関心を持つ人を増やすことが、社会の教育観を成熟させることにつながると思っている。高大接続についても、つながり（橋）を作る事が大切なのではなく、自ら歩ける生徒の育成が必要であり、それぞれのカテゴリーで地域社会を巻き込んだ教育活動が充実していけば、おのずと実社会を見据えて主体性をもって大学の学びに進んでいく事ができる生徒が増えるのではないだろうか。現在各校で行われている課題研究の取り組みなどは、生徒を育てる面、学校教育に興味関心を持つ人を増やす面の両面で大きな可能性を感じている。教育の公益性が社会全体で理解されるようになれば、入試改革によらない教育改革も可能になるのではないだろうか。

5. 終わりに

今回の教育フォーラムでは、大学入試のあり方を通して教育そのものについて様々な視点から考えさせられた。現状報告3で杉山先生から「高度な想像力」というキーワードが出された。教育改革には行政から現場、現場から行政やその社会背景を想像する広い視野や、生徒一人ひとりの気持ちに寄り添う心が必要なのだと強く感じた。どのような入試が望ましいのか、そしてどのような教育活動が望ましいのか、「答え」が出ることは決してないのだと思う。一面から見て「答えのようなもの」を出したとしても、英語の外部検定の利用中止のように失敗に終わるだろう。しかし、失敗は決して無駄なことで

はない。多くの科学的な研究と同様に、入試や教育についても多くの失敗からエビデンスが積み重なり、より良いものへと変化していくと信じている。今回の入試改革で振り回された生徒達の事を考えれば、そう変化させていかなければならない。過去から学び、現状を批判的な視点で見つめ、これからの学校教育の在り方をできるだけ様々な立場の方々と共に、そして一番は生徒と共に考え続けていきたい。

コロナ禍の中、フォーラムを開催するためにご尽力された東北大学の先生方はじめ、多くの示唆に富む講演をいただいた講師の先生方に心より御礼申し上げます。

アンケート集計結果

令和2年9月23日

第32回東北大学高等教育フォーラムアンケート (回収数87, 回収率 25.9%)¹

1. 御所属

(1) 高校 : 50 名 (58.8%) (2) 大学 : 23 名 (27.1%) (3) その他 : 12 名 (14.1%)

2. フォーラムのテーマは如何でしたか.

(1) よかった : 84 名 (96.6%) (2) どちらとも言えない : 3 名 (3.5%)
(3) 改善すべき : 0 名 (0.0%)

3. 基調講演者の発表は如何でしたか.

(1) よかった : 80 名 (93.0%) (2) どちらとも言えない : 5 名 (5.8%)
(3) 改善すべき : 1 名 (1.2%)

4. 現状報告者の発表は如何でしたか.

(1) よかった : 82 名 (95.4%) (2) どちらとも言えない : 4 名 (4.7%)
(3) 改善すべき : 0 名 (0.0%)

5. ディスカッションは如何でしたか.

(1) よかった : 70 名 (82.4%) (2) どちらとも言えない : 14 名 (16.5%)
(3) 改善すべき : 1 名 (1.2%)

6. 時間は如何でしたか.

(1) 短すぎた : 2 名 (2.3%) (2) ちょうど良い : 79 名 (90.8%)
(3) 長すぎた : 6 名 (6.9%)

7. 今後も「東北大学高等教育フォーラム」を行うとすれば, どのような形式, テーマを望まれますか.

(後述)

8. その他, 全般的な御意見, 御感想をお寄せください.

(後述)

ご協力ありがとうございました.

¹ 多重回答, 無回答は個別の集計から除く.

アンケート自由記述

2. フォーラムのテーマは如何でしたか。²

- 「考えることを楽しむ」ことができる生徒を育てていきたいとモチベーションが高まりました。人間の人生を左右する重大な入試であり、人間が人間を評価する難しさについて改めて深く考えさせられました。個人的には、どんな方法でも人の能力や資質を正確に測定することは不可能だと考えております。しかし、そんなことをいっていたら選抜ができないので、CBT-IRT方式などにより点ではなく面、さらには立体的に能力を測定できる方法が実現可能なのか気になっています。コロナ禍で大変な中、運営していただきましてありがとうございました。オンラインでしたので、長距離運転もせず校内出張できて、その後の会議や生徒指導もできて大変助かりました。今後も是非オンライン参加可能にしていいただければ幸いです。どうぞよろしくお願い申し上げます。（高校、よかった）
- エビデンスをもとに制度設計しており、受験者保護の観点からも評価できる。（高校、よかった）
- これからの教育の在り方、教育政策の方向性に、東北大学のようなエビデンスに基づくものであって欲しいと思った。勉強になった。（高校、よかった）
- コロナの今だからこそ、落ちついて入試制度を考えるのは良いと思いました。（高校、よかった）
- それぞれの多様な考えが認識できた。（高校、よかった）
- タイミングとしてもとても興味関心を持つことができるから。（高校、よかった）
- タイムリーだったから。（高校、よかった）
- テーマに則った内容とそうでない内容の両方が混在していた。（大学、どちらとも言えない）
- まあ。（高校、よかった）
- 改革の先送りに伴い、大学入試のあり方が図らずも過渡期になっている状況に合致したテーマを設定していると感じられた。（その他、よかった）
- 開催方法を工夫され、オンラインでの参加でしたが、視聴者に対する配慮をととても感じることができる会でした。（高校、よかった）
- 学術研究として、入試改革のエビデンスを与えられることがよくわかった。勉強になりました。（高校、よかった）
- 記述式や英語民間試験の活用が見送られたことにより、改めて立ち止まって主体生に対する高校や大学の考え方を知る機会となりました。（大学、よかった）
- 具体的な内容に即した討議がなされていて非常に参考になりました。（高校、よかった）
- 結論を出すことが難しいテーマで議論が尽きないテーマです。（その他、よかった）
- 高校や大学が考える入試において問うべき力について、的確なメッセージを発信していただいたと感じており、「大学入試を設計する」というテーマに相応しい内容だと思う。（高校、よかった）
- 高大接続改革が進む中、大学のご苦労を知ることができた。（その他、よかった）
- 高大接続改革に向かう現状を多方面の角度で考えられました。（高校、よかった）
- 高大接続改革のその後を把握するのに適切でした。（大学、よかった）
- 今一番関心のあるテーマだから。（高校、よかった）
- 今大変関心のある内容について、かなり直接的な意見を聞くことができてよかったです。（高校、よかった）
- 今日的で重要な内容だと思います。（無回答、よかった）
- 今般の時節柄、「大学入試学」の意義を考えるためのよいタイミングだった。（その他、よかった）
- 昨今の大学入試改革について、大学側の声、高校側の声を聴くことができ、勉強になり

² 末尾の括弧内は所属、選択された御意見。

ました。フンボルト入試についても興味深く拝聴しました。(大学, よかった)

- 時宜にかなっていた。(大学, よかった)
- 初めての参加でしたが, 大学, 高校両方の立場からの見解を聞くことができて大変有意義でした。ありがとうございました。(高校, よかった)
- 新入試で揺れ動いているこの時期に適している。(その他, よかった)
- 真にタイムリーなテーマです。(高校, よかった)
- 総合選抜, 学校推薦選抜に時宜にかなったテーマだった。(大学, よかった)
- 大学, 高校双方の立場から, 現大学入試に対する実情と課題を把握できたこと。(高校, よかった)
- 大学・高校とも, 大学入試で何を測るべきかはやはり共通しているのだなとよくわかった。(わかってはいたが)(高校, よかった)
- 大学側, 高校側からのご発表があり, 大学入試の考え方, 高大接続の考え方について, 改めて考えることができた。(大学, よかった)
- 大学入試について研究することの意義について考えることができたから。(大学, よかった)
- 大学入試の今後のあり方に関心があったためです。(高校, よかった)
- 大学入試の大きな過渡期に, 高校生のための入試について多様な議論がなされました。(高校, よかった)
- 大学入試の変革期にタイムリーなテーマだった。(高校, よかった)
- 大学入試の未来のことをいろいろ考えることができた。特に高大接続の本来の意味を考える機会とできたことは大変意義深かった。知識を問うだけではなく「考える」「考えさせる」場に入試がように今後考えていきたいと思う。(大学, よかった)
- 大学入試を設計すること自体が, 学生を高校・大学でどう成長させるかという視点につながる点が, これまでの受験対策という枠を超えて議論が進んでいく点がよかった。(その他, よかった)
- 大学入試一般ではなく, 入試区分ごとにそれぞれのテーマがあればさらに良かった。(大学, よかった)
- 大学入試改革も含めた高大接続改革が進められていく中で, 大学入試研究というテーマでのフォーラムが開催され, 改革に関わる情報を得られたことは良かったと思います。(高校, よかった)
- 大学入試研究の必要性は理解するが, 実際に入試業務に携わっている者からすると, 取り組み事例紹介の方が役に立つ。(大学, どちらとも言えない)
- 大混乱を極める来年度入試についての話がきけた。(高校, よかった)
- 東北大学が入試に関して, どのようなことを考えているのか, その一端を見られて大変良かったです。(高校, よかった)
- 内容の濃い発表内容と意見交換でした。(高校, よかった)
- 入試と教育の理念が相反するものではないことが, 様々な視点から確認できて, ほっとしています。(高校, よかった)
- 入試についてのそれぞれの立場からの考えを知ることができました。大学と高校の意見交換が出来るという意味でもこの解は意義があります。(高校, よかった)
- 入試のあり方について, どのような思いがそれぞれの立場であるのかを学べる機会だと思い, 参加しました。(その他, よかった)
- 入試の課題について整理できた。(大学, よかった)
- 入試の基本的な考え方に立ち返る機会になりました。悪夢のような入試改革騒動に二度と巻き込まれないためにも, 入試問題の設計自体を学問的研究の対象として研究を進めておくことは社会に必要であると思います。(高校, よかった)
- 入試を設計するというテーマは良かったと思いますが, 基調講演と現状報告が若干かみ合っていないような気がしました。(その他, どちらとも言えない)
- 入試制度が不透明感が増すなかで, 立ち止まり原点を振り返る意味で貴重な時間を得た。(高校, よかった)

- 入試制度を改革するにあたってヒントをいただいた。(大学, よかった)
- 複雑, 多様化する国立大入試に関する課題を取り上げていること。(大学, よかった)
- 報告された先生のとりのくみや本音など具体的に知ることができました。(大学, よかった)
- 本学も入試改革の必要性を感じているので, 興味を惹かれるテーマであったのでよかった。(大学, よかった)
- 毎回, 高大連携に関するタイムリーなテーマである。(高校, よかった)
- 様々な立場, 角度からの話で理解が深まった。(高校, よかった)

3. 基調講演者の発表は如何でしたか.

- 「大学入試学」が教育の本道に則った意義深いものになることを期待しております. 大学入試センターが, 現場目線で心の通った選抜の在り方を模索し続ける機関であって欲しいと願っています. 貴重なご講演ありがとうございました。(高校, よかった)
- 「大学入試学」は興味深く, エビデンスの実態に触れることができた。(大学, よかった)
- 「入試学」について知ることが出来た. その実践的応用についても理解できた。(高校, よかった)
- 「入試学」を知り, 今後のますますの研究成果を願うとともに, 大学だけではなく, 教育に携わる方々にフィードバックしていただきたいです。(その他, よかった)
- 「大学入試学」の実践と成果—エビデンスに基づく東北大学の入試改革。(大学, よかった)
- エビデンスに関する宮本先生の講演。(高校, よかった)
- エビデンスは, 一般には当然ですが教育に関しては軽視されている感じが否めません, 良かったです。(高校, よかった)
- エビデンスを元にした東北大学の入試設計はとても共感が持てました. 東北大学での知見が多く大学の入試改革にまで広がることを期待します。(その他, よかった)
- お二人の先生から大学入試についての考え方を伺い, 今後の高校での教育に活かせると考えさせられました。(高校, よかった)
- 異なる立場の方々の入試への向き合い方について伺うことができた。(その他, よかった)
- 皆さん聞き取りやすかったと感じました。(大学, よかった)
- 学術研究として, 入試改革のエビデンスを与えられることがよくわかった. 勉強になりました。(高校, よかった)
- 学問としての入試学を感じた (高校, よかった)
- 基調講演者1・2ともに「研究紹介」となっており, その筋の「同業者」にとっては良いと思うのだが, 「大学入試一般」に関わる今日的な課題に対しては, どうだろうか. これは, 「本来の高大接続」についての高校教員の期待と大学教員の回答(反応)の温度差の違いにあらわれていた。(大学, 改善すべき)
- 宮本先生の後半の切り口がデータに基づいたもので良かった. 倉元先生の話とお茶大の先生の話も絶妙に噛み合っていて納得がいった。(高校, よかった)
- 宮本先生の発達心理学からの観点と簡潔なご説明が腑に落ちることが多くありました。(高校, よかった)
- 系統的に大学入試の考え方をご説明いただき, 今回の入試改革の問題点についても言及されていたので, 外観が把握できました. 入試設計のエビデンスの蓄積についてはなかなかそこまでできておらず, 難しいですが, 取り組んでいかなければいけないと思いました. 調査のご発表がありましたが, その設計もとても勉強になりました。(大学, よかった)
- 現状報告は具体的な事例が多く良かった。(大学, どちらとも言えない)
- 国の施策に対して, 疑問に思っていることが確信へと変わったから (高校, よかった)
- 今回, 宮本先生の考えの一端に触れる貴重な機会になったと思います。(その他, よかった)
- 今回の政策に対する大学側の考えや方向性を知ることができたから。(高校, よかった)
- 今回の入試改革の問題点の全体像を描くことができたから。(高校, よかった)

- 今後の展望や構想については、こういった場だからこそ、もっと踏み込んだ話を聞きたい。(その他、どちらとも言えない)
- 主体性の評価について、大学側の考え方を確認できたこと。(高校、よかった)
- 取り組みの具体的な話であったので、参考になった。(大学、よかった)
- 受験する側からのエビデンスの求め方について示唆に富んでいた。(大学、よかった)
- 申し訳ありませんが、授業のため、拝聴できませんでした。(高校、無回答)
- 生徒にとっては人生を左右しかねない大学入試というものを高校現場と同じ目線で捉えていただいていると強く感じた。今後もたくさんの意見を集約して、より良い大学入試について研究していただきたい。(高校、よかった)
- 倉元先生の講演では、データの解析に出願、合格者の重みをつけて違いを可視化できて参考になった。一方で対象者、学校の固定化につながらないかも、思った。(高校、よかった)
- 倉元先生の大学入試学のお話で、日ごろあまり考えることがなかった大学入試について基本や本質構造を学ぶことができた。東北大学やお茶の水大学の新しい取り組みも知れてよかった。東北大学のような、国の改革の動きを見据えての、先んじた取り組みを見習いたい。(大学、よかった)
- 大学側のかかえる問題が少し理解できた。全く知識がなかったので興味深かった。(高校、よかった)
- 大学入試の主役があくまでも受験生で、彼らの主体的な成長過程における成果をどうやって正当に評価すべきかという視点が納得のいくものでした。(その他、よかった)
- 大学入試改革の現状やエビデンスの取り方が参考になった。(大学、よかった)
- 大学入試学とはどのような学問なのか興味があったので話が聞けてよかった。また、エビデンスの大切さを再確認できてよかった。(大学、よかった)
- 大学入試学は果たして学問になるのか？という疑問がクリアになったから(大学、よかった)
- 丁寧な発表で大変示唆に富む内容でした。(無回答、よかった)
- 哲学的である。入試を1つの研究領域の学問としている。(その他、よかった)
- 東北大のエビデンスと苦労が理解で来ました。(高校、よかった)
- 東北大のスタンスが分かった。なぜだかガラケイをイメージした。(高校、どちらとも言えない)
- 東北大学がしっかりとエビデンスに基づいた入試を守っていることがよく分かった。ますます、東北大学への信頼が高まった。(高校、よかった)
- 東北大学の「主体性」のとらえ方が明確で分かりやすい。発信の分かりやすさが何よりも重要だと思う。(高校、よかった)
- 東北大学のエビデンスの有効性の証明。(高校、よかった)
- 東北大学の考え方がよくわかり、他大学への影響も大きくなるように感じました。(高校、よかった)
- 東北大学の心(良識)のある取り組み、判断には敬意を表する。(高校、よかった)
- 東北大学の入試は、確固たるエビデンスに基づいて行われていること、また、より良い入試を目指していること。(高校、よかった)
- 東北大学の入試設計の具体的な方策の一端を知ることができました。(大学、よかった)
- 東北大学の入試理念がよくわかり、安心した。(高校、よかった)
- 入試についての学問の話が聞けて良かったです。そして、日本の教育界においては、このような学問がもっと日本において広まるべきだと思いました。(高校、よかった)
- 入試改革の混乱の中、東北大学は極めて冷静な対応を取り続けていたと思います。その東北大学とお茶の水女子大学の取り組みは異なっているにもかかわらず、入試制度の設計理念には共通するものがあると思いました。(高校、よかった)
- 入試改革の変遷やその理論的な解釈など、改めて、今後どのように変化していくべきなのか、考えるきっかけになりました。(高校、よかった)
- 入試改革の変遷やその理論的な解釈など、改めて、今後どのように変化していくべきな

のか、考えるきっかけになりました。(高校, よかった)

- 入試学の概略がとても理解できました。東北大学で発信する入試体系がさらに多くの場面で生かされれば、受験生も安心するのではないかと思います。(高校, よかった)
- 別の角度から入試を考えることを示唆された。(大学, よかった)
- 理論と実践の形で、大学入試がどのように設計されているか、おぼろげながら把握できたこと。(高校, よかった)
- 理論と実践を分担され、わかりやすかった。(大学, よかった)
- 両名の講演内容が関連しており、分かりやすかった。(大学, よかった)

4. 現状報告者の発表は如何でしたか。

- 3者3様の立場は興味深い内容でした。(高校, よかった)
- お茶の水女子大学の新フンボルト入試についてや高校現場で大学入試をどのように思っているのか、生の声が聞けてよかった。(大学, よかった)
- お茶の水女子大学の先生のお話も、変わりゆく入試の前哨戦なら役割を果たした東北大学同様に、これからの入試改革を先導していくような気がしました。青森高校の笠井先生のお話は、学校現場の問題や、影にある苦労などを感じさせてくれながら、自分の学校に足りないものが見えてくるようなお話でした。最後の校長先生のお話は、我々現場しか見ていない教員とは違った視点であり、聞いていて、引き込まれていくような感じで、感心しながら聞き入ってしまいました。(高校, よかった)
- お茶の水女子大学の入試は、国際教養大学のグローバルセミナー入試に似ているなあと考えた。それぞれの大学で疲弊しながら知恵をしぼって頑張っておられる事実の発表に感動した。笠井先生の指導には共感した。(高校, よかった)
- この形式では仕方ありませんが議論の軸を立てていただきたいです。(その他, よかった)
- すべてに共通するのは、人間の尊厳と生き方指導と感じました。人間として生きていくうえで大切な心を核として、生徒たちの幸せな未来のために何をなすべきか深く考えさせられました。お忙しいところ本当にありがとうございました。(高校, よかった)
- それぞれの現場の実態が見えたから。(高校, よかった)
- それぞれの立場でしか語れないことを語っていただけた。(大学, よかった)
- それぞれの立場での課題。視点が分かり、新鮮であった。(その他, よかった)
- それぞれ別の観点から入試について考えることが出来た。特に武蔵高校杉山先生のお話しには感銘した。(高校, よかった)
- フンボルト入試の報告にはいろんな示唆が含まれていた。(大学, よかった)
- 各々の立場から見る大学入試制度の現況を、本音に近い言葉で聞いた。(その他, よかった)
- 各先生の誠実な仕事への向き合い姿勢に感動しました。(大学, よかった)
- 笠井、杉山両先生とも、提案性があり、発見がありました。(高校, よかった)
- 笠井先生のご発表で、具体的な指導のイメージがわきました。個人の力量の向上というよりも、ではなく職員集団の取り組みにできれば理想です。(高校, よかった)
- 具体的な事例も含めた話が聞いたことが良かった。(高校, よかった)
- 現実的な視点から入試改革をみることができた。(大学, よかった)
- 現場での具体的な取り組みや研究の様子がきけた。(高校, よかった)
- 現場のお話はリアリティがあって勉強になります。(その他, よかった)
- 現場の実践事例は理論的考察同様重要。(高校, よかった)
- 現場の声が聞けてよかった。(その他, よかった)
- 現場の率直な意見が話題となっていたと思います。(高校, よかった)
- 現状が良く理解できました。(無回答, よかった)
- 現状報告1は共感できる内容であったが、現状報告2では、特に高大接続が違った方向に動いているのではないかと訝ってしまう(これについては基調講演者からの質問があった)。現状報告3は「1 高大接続改革の検討史(おさらい)」「2 高校現場の受け止め」「3 混迷した要因」はおそらくはほとんどの人が共有している内容だと思う。また「4 問

題の本質は何か」で為されている指摘も大切だが、高校の責任者の立場から「5 今後への期待」をさらに深く掘り下げてほしかった。今後への提題でも良かった。(大学、どちらとも言えない)

- 現状報告②笠井先生の話は同じ教諭という立場から、統合型入試をどう考えていけばよいか、考えさせられた。実例があり、興味深い発表だった。(高校、よかった)
- 個別の発表内容は良かったですが、高校・大学での意識のずれを非常に感じました。(あえてそうしているのかもしれませんが)(その他、どちらとも言えない)
- 高校での指導の現場を知ることができた。(大学、よかった)
- 高校の感覚に触れる貴重な機会になりました。(その他、よかった)
- 高校側の必死な思い、努力、大変さが伝わるお話だった。(大学、よかった)
- 実際に大学で行っているユニークな入試について知ることができ、参考になった。また高校側のこれまでの受け止めも参考になった。(大学、よかった)
- 受験である以上対策を講じる現場と、受験生の主体的な学ぶ意欲とその力を様々な工夫でなんとか見極めようとする大学、それぞれの不断の努力と苦しみが共感できました。(その他、よかった)
- 新フンボルト入試では、こちらの印象では自信満々で学生募集をしていると思いきや、果たして日々悩みながら(抵抗勢力と戦いながら)入試を構築されているとお聞きして、意外でしたが新鮮でした。どの立場でも日々悩まれて入試に携わっておられるその姿に感銘を受けました。(高校、よかった)
- 新フンボルト入試とお茶大の大変さがわかった。(高校、よかった)
- 杉山先生の考え、分析に共感。現場の不満を代行して下さった。又、安成先生の御苦労もよく分かった。(その他、よかった)
- 青高の話が準備を丁寧にされたのであろうに表面的になってしまったことが残念です。(高校、よかった)
- 青森高校の事例は指導の事例としてとても参考になりました。武蔵高等学校中学校の先生の話は教育哲学として示唆に富む内容でした。ありがとうございました。(高校、よかった)
- 総合型選抜の考え方、また、高校現場の実情を知ることができ、とても参考になったから。(高校、よかった)
- 他校での旧 AO 入試への取り組み方、考え方を知ることができたこと(高校、よかった)
- 他大学、高校側の具体的な取り組みがわかりました。笠井先生のご発表から、AP を含めて、高校の教員が大変真剣に取り組んでいることが伝わりました。大学側もそれに応えられるようにいろいろ考えて、AP や入試方法を検討していき、大学側の意図をお伝えしていきたいと思います。(大学、よかった)
- 大学、高校での状況の一端を知ることができ有意義であった。(大学、よかった)
- 大学から出向して、現職場にいますので、高校の先生方の貴重な意見、考えを聞くことができました。高校、大学の教員がもっと意見を交わせるような場が必要とも感じました。(その他、よかった)
- 大学の現状、それから高校現場からの報告で現状の把握がされ解決すべき課題が明らかになり、目から鱗が落ちました。(高校、よかった)
- 大学も高校の現場も本気になって入試に取り組んでいる様子が具体的に知ることができた。(高校、よかった)
- 大学側も高校側も、大学入試を通して高校生の様々な能力を開発・伸長させていること。(高校、よかった)
- 大変参考になった。いろんなことを考える機会となった(高校、よかった)
- 特に 1, 3 では講演者の率直な思いを興味深く聞くことができた。(大学、よかった)
- 特に杉山先生のお話がよかった。(高校、よかった)
- 特に杉山先生の広範囲をみたお話が面白かったです。(高校、よかった)
- 特に杉山先生の知見はすばらしかったです。(高校、よかった)
- 特に青森高校の具体的な取り組みが本校でも活かせると思っています。(高校、よかった)

- 入試を考える立場, 指導者として入試に対応させる立場から貴重なご意見をうかがえた。(大学, よかった)
- 入試改革についての高校の認識がわかった (大学, よかった)
- 入試対策としての指導ではなく, 生徒の資質・能力を伸ばすための指導・授業はどのようにすればよいのか, 具体例を示しながら話していただき参考になった. アドミッションポリシーを読み解き, 過去問から試験問題のデザインを探り, 生徒の力を伸ばすような指導を, 受験対策としてではなく, 日常の授業からしていきたい. (高校, よかった)
- 普段見えない高校現場の意見を知ることができた. (大学, よかった)
- 幅広い視野での発表はバランスがよくそれぞれの発表は大変参考になった. (高校, よかった)

5. ディスカッションは如何でしたか.

- 「主体性」や人間としての成長の本質を入試で問うべきではない, というか, 問えないものであることを改めて実感した. 入試になれば対策が行われる, という倉元先生の言葉にも共感いたしました. 高校生のアイデンティティの模索や成長のプロセスを, 大学で途絶えさせることなく継続させていくために, 入試で何を問うべきか, 大変難しい問いですが, 自身の大学に引き付けて改めて考えることができました. (大学, よかった)
- いろいろ考えさせられた. よかったです. (高校, よかった)
- お互いの意見をすりあわせることによって内容の理解が深まる. (高校, よかった)
- ここでも, 本質的な話について議論がなされていてよかったです. (高校, よかった)
- これからやっていく上でたくさんのヒントをいただきました. 参加してよかったです. ありがとうございました. (大学, よかった)
- さらに深くつつこんだ話がきけた. (高校, よかった)
- すみません. 質問投稿もしたのですが, 所用で途中で退室してしまいました. (高校, どちらとも言えない)
- それぞれの立場での本音に近い回答を聞くことができて, とても参考になったから. (高校, よかった)
- ディスカッションは視聴していない. (大学, どちらとも言えない)
- テーマそのものから広がりのある内容が展開されていた. (大学, よかった)
- もう少し時間が取れると突っ込んだ議論になろうかと思う. (高校, どちらとも言えない)
- もう少し質問に対する回答と討議についての時間が必要. 時間 (4 時間) の配分を検討してください. (大学, どちらとも言えない)
- やや話題が散漫になった. (高校, どちらとも言えない)
- より突っ込んだ深いところまで話を聞くことができた. (高校, よかった)
- 安成先生の具体的な率直なお話がありがたかったです. (高校, よかった)
- 各大学が入学後の学生の進路変更や意欲の低下に悩み, その防止のために入試を工夫して取り組んでいることがわかり, 大変参考になりました. また高校側の生徒へのかかわりや願いもよくわかりました. (大学, よかった)
- 疑問に答えていただいた. (大学, よかった)
- 議論をする中で, 今, 学校がどの方向に, どう動いていくべきなのかを考えさせてくれました. (高校, よかった)
- 議論をする中で, 今, 学校がどの方向に, どう動いていくべきなのかを考えさせてくれました. (高校, よかった)
- 業務のため退席したため部分的にしか拝聴できませんでした. (その他, どちらとも言えない)
- 勤務校での会議があったので, 最後まで視聴できなかったのですが, このディスカッションが生声をライブで聴くことができるので, 毎回とても楽しみにしています. (高校, よかった)
- 講演された方の考えがより深く理解できてよかった. (高校, よかった)
- 高校は大学に, 大学は高校に, 入試を通して何を求めているのか, 率直な意見が聞けて

- よかったです。高校と大学の橋渡しに活かせればと思いました。（その他、よかった）
- 高大接続改革に対する熱意を持ったメンバーによる意見交換であり、現状をどうにか好転させたいという思いが伝わってきた。（その他、よかった）
 - 今後の大学入試のあり方について、多種多様な考えが提案され、発展していく予感がしたこと。（高校、よかった）
 - 質問が抽象的なものが多かった。もっと具体的な質問を取り上げてほしかった。（高校、どちらとも言えない）
 - 質問の選択がすばらしく、発表だけでは理解できなかった部分を補っていただけた。（その他、よかった）
 - 質問への回答も大切ですが、できれば5名の方々が激論を交わしていただければよかったと思いました。（高校、改善すべき）
 - 主体性評価についての考え方を知れたのが良かったです。（高校、よかった）
 - 受験対策をしていく上で、生徒の学力は向上するのはもちろんですが、同時に教員の指導力も向上するという一面もあります。ここを避けている高校教員も多く、不甲斐なく思うこともしばしば。（高校、よかった）
 - 秦野先生のリアルタイムのさばきが見事でした。（その他、よかった）
 - 先生方のそれぞれの立場からの意見がとても勉強になりました。（高校、よかった）
 - 全て聴取者からの質問に答える形式ではなく、討議司会を含めた7人が自由に発言あるいは互いに質問する時間を設けてもよかったのではないかと。そうすることにより、もっと深堀できたのではないと思う。（大学、どちらとも言えない）
 - 双方が何を大事にしているかが明瞭に出て、歩み寄れるように思えたから。基調講演のお二人が現場をよく知る先生方だったのが大きい気がします。（高校、よかった）
 - 倉元先生、宮本先生がはっきりとおっしゃられるのがよかった。（高校、よかった）
 - 抽象的な議題で論じるのは、理想論が中心になってしまう。（その他、どちらとも言えない）
 - 登壇者の議論がそれぞれの方の立場をよく表しており、聞きごたえがあった。（その他、よかった）
 - 入試とは、教育とは、という根本を考えるきっかけとなった。（大学、よかった）
 - 入試や受験勉強の方向性、課題について改めて認識することができました。ありがとうございました。（大学、よかった）
 - 発表で聴けなかった、深部と幅を拝聴できた事です。（高校、よかった）
 - 非常に示唆に富む内容でした。（無回答、よかった）
 - 文科省の主張や方向性も聞いてみたいとは思いましたが、高校と大学の現場がそれぞれ本気で生徒を主体的に成長させようという思いが言葉で紡ぎだされており、どちらも共感できました。（その他、よかった）
 - 補足していただき理解が深まった。（高校、よかった）
 - 補足説明が聞けてよかった。（大学、よかった）
 - 本音で語っていたのが、感じられました。（高校、よかった）
 - 様々な意見をそれぞれの立場から出されているのがよい。（その他、よかった）
 - 立場によるニュアンスの違いが興味深いものでした。（高校、よかった）
 - 立場も考え方も異なる先生方の間で行われた議論でしたが、見事に噛み合い、未来志向のヴィジョンを垣間見ることができました。（高校、よかった）
 - 論点が明確になっていてわかりやすかった。（大学、よかった）

7. 今後も「東北大学高等教育フォーラム」を行うとすれば、どのような形式、テーマを望まれますか。

- 「世界の中の日本の未来」にかかわる「日本の教育」の方向性とあるべき姿について。（高校）
- 「大学入試学」のさらなる広がり具体的な形で示せるもの。仙台まで行くのはたいへんなので、Web開催は意外によかった。（その他）

- ・高校での学びと大学での学びのつながり，関連性
- ・日本の将来を考えたときの学びはどうあるべきか．（高校）
- 3つの密は重なりませんので，もっと集まってやっていいのではないのでしょうか．安易にオンラインにし過ぎない方がいいと思っています．テーマは大学入試改革のゆくえ．教育行政の混乱期をどう乗り越えるか．行政への提言にも繋がるようなものを望みます．（高校）
- Web形式が良い．（大学）
- Web形式を望みます．テーマは，入学後の学生の学習支援について．（大学）
- アフターコロナの時代を生き抜く人間のあり方，たくましい人間像，何が必要になっていくのか．（高校）
- あるべき入学者選抜について追究するテーマで．形式は問わず．（大学）
- オンライン参加可の形式を継続して欲しい．できれば，参加申し込みをしたら都合の良い時間帯に参加できるようにアーカイブ化して欲しい．（高校）
- この形式でいいと思います．（高校）
- これまで通りの形式で良いです．引き続き話のわかりやすい講師の先生をお願いします．（大学）
- コロナ禍でのオンライン参加であったが，この形式になった事で初めて参加できた．コロナの状況に関わらず，今後ともオンラインで参加する形式は継続していただければ有り難い．（高校）
- その時の実情を垣間見ることができそうなホットな題名にしてほしい．（高校）
- できれば直接参加したいですが，アフターコロナが移動を制限するものであればオンラインで参加します．（高校）
- ネットで参加させていただきましたが，不具合等全くなく，ストレスなく拝聴できました．ありがとうございました．（高校）
- リアルとバーチャルの2方法にてお願いします．実施運営は大変だと存じますが，宜しくお願い申し上げます．（その他）
- 育成すべきものと評価すべきものについて意見が聞きたい．（高校）
- 引き続き高大接続改革について，情報を共有し議論していく場は重要と認識している．（高校）
- 遠隔だとありがたい．（大学）
- 遠方で今まで参加が難しかったので，今回のようにオンラインとの併用は助かります．（その他）
- 遠方なので，今回のようにオンラインでの参加も可能であると非常に助かる．その場合はぜひ参加したい．（高校）
- 各テーマを分散して開催（午前中・午後）．（大学）
- 基調講演でテーマを明らかにし，大学そして高校からも現状報告をし，最後に討論があるという形式はよく考えられているよい形式です．テーマは，学力の三要素と入試の関わり，主体性評価などについてさらに深めていってほしいと思います．そして，望ましい入試制度について提言を続けてください．（高校）
- 共通テスト結果のフィードバックと with コロナ時代の高大接続．（高校）
- 現在の組み立てが良いと思います．（大学）
- 現地会場での参加が望ましい．（高校）
- 講演を拝聴したり，討議を見ている分には引き込まれるので，ちょうどよい時間かとは思いますが，オンラインだとやはり集中力が続かない気もします．休憩を十分にとる，基調講演を1つにする等を考えてもよいのではないかと思います．（その他）
- 高校現場の先生方の発表．（高校）
- 高大接続や連携の具体的な取り組みの紹介．（大学）
- 今，中・高では「探究」の授業に活路や動機付けをみいだそうとしているが，大学の立場から，高校の授業に何を求めたいのか，おしえてほしい．田舎にいくほど，ここ20～30年授業が変化していない，古いまま．探究の授業に対応できていない先生が多い．文

科が求めることと大学が求めることは同じなのか？（高校）

- 今しばらくの間は、このテーマがタイムリーだと思います。（高校）
- 今回のようなハイブリッド型も考慮していただけますようお願いいたします。（高校）
- 今回の形式はとても良かったので、次回も自由に意見が言える雰囲気の会となると思います。（高校）
- 今回の形式は遠方からの参加者としてはありがたいです。（大学）
- 今回の様な、会場＋リモートの形式で良いと思います。（その他）
- 今回は初めて参加しました。おもしろかったです。普段は大学の先生の生の声を聞く機会はあまりないので、今回のものでもまた参加したいと思います。（高校）
- 今回見送りになった改革の三本柱の英語民間試験の導入と、英語教育が入試に与える影響などについて。（高校）
- 今後も是非オンライン参加可能にいただければ幸いです。どうぞよろしくお願い申し上げます。（高校）
- 次年度以降もオンラインで参加できるとありがたいです。（高校）
- 社内の会議室に集まり、希望者を募って拝聴させていただきました。とても有意義でしたので、今後ともオンラインの形式も設けていただけると幸いです。（その他）
- 初めてオンラインで参加致しました。これまで何度か仙台まで参りましたが、コロナのこともあり、オンラインも悪くないと思いました。（主催者の皆様は、準備が大変だったと思います。ありがとうございました）（高校）
- 新学習指導要領を踏まえた高校、大学の教育について。（高校）
- 生徒の学力、主体性を測る適正な入試について。（大学）
- 対面と Web を用いたハイブリット形式は会場の盛り上がりや臨場感という点では課題もあるかもしれませんが、講演者の表情もはっきりと見て取れ、とても参加しやすい方法でした。大学で「書かれていること以外の世界を読み取る」ために必要な高校生の学力をどう育てていくかという視点でもさまざまな議論をみたいと思います。（その他）
- 大学入試（筆記試験）において自宅で CBT で行えるか、CBT の可能性に興味がある。テーマとして、大学入試の CBT に関する内容を望む。（大学）
- 探究活動と入試。（高校）
- 東京からの参加だったため、オンラインで開催いただき大変助かりました。今後もオンラインで開催いただきたいです。（大学）
- 難しいかも知れませんが、「実用主義、効率主義と大学の教育」について考えてみたいです。実用的、効率的、実学的なことを求める風潮がある中で、高校や大学はどう対処しているのか（しないで行っているのか）、それらがどう接続していくべきか。（高校）
- 入試改革初年度の成果。（大学）
- 入試制度の在り方、というもののより、もっと具体性←（人文科学的自然科学別）のあるものもとり入れてもよいと思う。（その他）
- 文科省の答申等に対して、大学側がどのように反応して大学入試を設計・実践しているかについて、詳細は語れないとしても、ある程度の枠組みを発表する内容を聞いてみたいと思います。（高校）
- 落ち着くまでは今年のテーマを数年続けていただきたいと思います。入試の考え方や今後の進展の具合などが気になります。形式は講演型でいいと思います。（高校）

8. その他、全般的な御意見、御感想をお寄せください。

- Web での視聴は仕事をしながら聞けて良い。今後は事例紹介を多めにしたい。特にコロナのこともあって、オンライン入試も増えてきている。オンライン入試をテーマにしてくれると参加者が多くなるのではと思う。（大学）
- Web 視聴でしたが、映像が鮮明だったことに良い意味でたいへん驚きました。カメラの切り替えなども的確で、素人あつらえではないようにお見受けしました。また機会がありましたら、運営方法などを教えていただきたいと思いますところでした。（その他）
- with コロナにおけるシンポジウムの開催は見事でした。（高校）

- Zoom などを用いて、オンラインで討論会などをして、最後に全体で共有するような第2部があってもいいのかと思いました。お世話になりましたありがとうございました。（高校）
- ありがとうございました。（その他）
- いつもながら、大変素晴らしく、大変勉強になりました。ありがとうございました。感謝！！（高校）
- オンラインで静岡県から参加できたことに感謝します。（大学）
- お世話になりました。来年も参加したいと思います。（高校）
- このような中で開催していただきありがとうございました。（高校）
- とても勉強になりました、ありがとうございました。（無回答）
- ライブ配信は今後も続けていただけると助かります。（大学）
- 一連の入試改革騒動が引き起こしたカオス的状况を抜け、もう二度とこのような混乱が引き起こされることのないよう、高校教員のひとりとして「主体性」を保ち、今後は教育への政治的介入に注意を払い、批判的でありつつ、生徒の主体性に積極的に応答していきたいと思います。（高校）
- 感染症収束後も今回のような Web 配信を併用したハイブリッドな会にしていただけると、参加しやすくなります。（高校）
- 関係者の方々、ありがとうございました。（高校）
- 貴重なお話をいただきありがとうございました。（大学）
- 貴重な機会をありがとうございました。（高校）
- 久しぶりに大学入試に関するフォーラムに参加したので新鮮だった。（大学）
- 講演が参加者の学びになるだけでなく、参加者が全国から集まることで、休憩時間なども有効に活用させていただいております。来年は東北地区以外からも直接参加できることを願っています。主催者の皆様、本当にお疲れ様でした。（高校）
- 今回ネット配信で聴講させていただきましたが、問題なく、臨場感あるフォーラムを聴講できて満足できました。ご準備等ご苦労様でした。（大学）
- 今回のようなオンライン開催は、今後ともお願いしたいと思います。会場までの移動の時間や経費を考えると、このような方法での開催はかなり助かります。また質問もオンラインを通して行くととても容易です。（大学）
- 今回は2回目の参加となりましたが、昨年と異なり内容が濃すぎてついていくのに精一杯でした。ありがとうございました！（大学）
- "今回初めてフォーラムに参加させていただきました。
- どのご発表も大変参考になりました。
- ありがとうございました。（大学）"
- 私はこの部署に来てまだ数か月なので、初めて参加させていただきましたが、例年楽しみにしている方も多いです。今後ともよろしくお願いいたします。（その他）
- 授業がどうしてもあったため、途中から参加させていただきましたが、これまでの振り返りと今後どのようにカリキュラムを考えていけばよいのかの一助となりました。ありがとうございました。（高校）
- 初めての参加だったが、非常にためになるフォーラムだった。今後も参加したい。（高校）
- 新潟県からの参加です。コロナと関係なく今後もリモートで参加させていただけるとありがたいです。ご検討お願いいたします。（高校）
- 倉元先生、宮本先生、久保先生、伊藤先生、準備から当日の役割まで、ご苦労様でした。（高校）
- 対面だったので四時間は長いとは感じなかったが、Web だとしたらかなりきついであろう。高等学校と大学をつなぐこのようなフォーラムは貴重。参加しないとその良さは感じてもらえないかもしれない。東北大志望者がいなくとも教育を考えるよい機会だと思う。（高校）
- 大学と高校のどちらからの立場の人もいるのがよかった。（高校）
- 大学側は東北大のような優秀なアドミッションセンターを有する大学以外はいっぱいいっぱいの運営で、そんな、印象でしか語れない入試に向けて、高校側は健気にも生徒の

ニーズに応えようと入試のデザインを読み解いて、入試対策をしてしまいます。全体像が見えないまま、この国の教育はどこへ向かっていくのかと思ってきましたので、「大学入試学」が目線合わせを可能にすることに期待を抱きました。高校現場にいる身としては、これからの社会を生きる生徒の資質能力育成の観点、「大学入試学」により現実に着地する観点の他に、「求められる力」の枠組を設けることでそこに当てはまらない自分をダメだと思ってしまう現状を打破する「生徒の自己肯定感を向上させる観点」が必要だと感じました。受験を通して生徒を成長させていきたいと思える会でした。ありがとうございました。（高校）

- 大変勉強になりました。ありがとうございました。（高校）
- 大変有意義な時間でした。ありがとうございました。（高校）
- 調査書の使い方。大学によって違うのは当然ですが、一方で使います、点数化しますと宣言する大学に合わせて（意識して）指導しなければならない現実があります。そもそも、新調査書。指導要録の写しという性質を保持しつつ枚数に制限を設けない。その意味がよくわかりません。（高校）
- 討議の質問読み上げの音声聞きづらかったです。（高校）
- 特にありません（高校）
- 非常に有意義な時間でした。有難う御座いました。（高校）
- 閉会の挨拶で話があった表紙の意味を改めて考えてみたいと思います。（大学）
- 本フォーラムに参加するのを毎年楽しみにしており、そのたびに得ることがあり、大変感謝しております。今年もコロナ禍の中、工夫して開催していただきありがとうございました。（大学）
- 本日のフォーラムで得たものを今後の業務に生かしたいと思います。登壇いただいた先生方並びに運営に当たられた方々に感謝いたします。（大学）
- 本日は、高校教員の方向性をご指導くださいまして、誠にありがとうございました。今後もフォーラムに期待し、楽しみにしています。（高校）
- 本日はありがとうございました。（高校）
- 本日は参加させていただき、誠にありがとうございました。（大学）
- 毎回、問題点が明らかになり、思考が深まっているように感じます。ありがとうございました。（高校）
- 毎回貴重なお話を聞けて参考になります。コロナの影響で様々な制約があると思いますが、続けていって欲しいと願っています。（高校）
- 毎年、秋なら参加できそうですが...楽しかったです。（高校）
- 予備校ではもちろん様々な対策を今後も積み重ねていきますが、常々苦慮しているのが、「一度やった問題は解ける」だけの生徒がいわゆる難関大学志望者にあまりにも多い現状です。新しい問題を考え抜けるように何を伝え、何を気づいてもらうかという点は近年、より意識して指導し、試行錯誤を重ねています。今回講演者の皆さんがそれぞれ、未来を生きる大切な生徒をどのように成長させて、送り出し、迎え入れるかという点がブレなかった点がとてもすばらしいと感じました。我々も微力ながら、生徒が「考えつづけること」を楽しめる生徒を育てていきたいと思います。本日はありがとうございました。（その他）

参加者統計

1 参加者総数:375 名

(講演者・招待参加者: 16 名, 大学: 149 名, 高校: 110 名, スタッフ等: 3 名, その他: 77 名)

1.1 来場参加者総数: 91 名

(講演者・招待参加者: 14 名, 大学: 10 名, 高校: 31 名, スタッフ等: 22 名, その他: 14 名)

1.2 オンライン参加者総数: 284 名 (参加申込者数)

(講演者・招待参加者: 2 名, 大学: 139 名, 高校: 79 名, スタッフ等: 1 名, その他: 63 名)

2 参加者地域別

宮城県内: 113 名

宮城県以外の東北地方: 66 名

(青森県: 11 名, 岩手県: 16 名, 秋田県: 11 名, 山形県: 15 名, 福島県: 13 名)

東北地方以外 196 名

(北海道: 15 名, 茨城県: 5 名, 栃木県: 4 名, 群馬県: 2 名, 千葉県: 7 名, 埼玉県: 6 名, 東京都: 62 名, 神奈川県: 3 名, 新潟県: 2 名, 富山県: 1 名, 石川県: 1 名, 長野県: 3 名, 静岡県: 9 名, 愛知県: 5 名, 三重県: 1 名, 京都府: 8 名, 大阪府: 7 名, 兵庫県: 9 名, 岡山県: 8 名, 広島県: 6 名, 山口県: 1 名, 徳島県: 1 名, 香川県: 2 名, 愛媛県: 3 名, 高知県: 1 名, 福岡県: 6 名, 佐賀県: 1 名, 熊本県: 2 名, 宮崎県: 1 名, 鹿児島県: 1 名, 沖縄県: 3 名)

2.1 来場参加者地域別

宮城県内: 59 名

宮城県以外の東北地方: 26 名

(青森県: 3 名, 岩手県: 6 名, 秋田県: 1 名, 山形県: 8 名, 福島県: 8 名)

東北地方以外 6 名 (全て講演者・招待参加者)

(茨城県 1 名, 東京都 3 名, 愛知県 1 名, 大阪府 1 名)

2.2 オンライン参加者地域別

宮城県内: 54 名

宮城県以外の東北地方: 40 名

(青森県: 8 名, 岩手県: 10 名, 秋田県: 10 名, 山形県: 7 名, 福島県: 5 名)

東北地方以外: 190 名

(北海道: 15 名, 茨城県: 4 名, 栃木県: 4 名, 群馬県: 2 名, 千葉県: 7 名, 埼玉県: 6 名, 東京都: 59 名, 神奈川県: 3 名, 新潟県: 12 名, 富山県: 1 名, 石川県: 1 名, 長野県: 3 名, 静岡県: 9 名, 愛知県: 4 名, 三重県: 1 名, 京都府: 8 名, 大阪府: 6 名, 兵庫県: 9 名, 岡山県: 8 名, 広島県: 6 名, 山口県: 1 名, 徳島県: 1 名, 香川県: 2 名, 愛媛県: 3 名, 高知県: 1 名, 福岡県: 6 名, 佐賀県: 1 名, 熊本県: 2 名, 宮崎県: 1 名, 鹿児島県: 1 名, 沖縄県: 3 名)

多くの方々に御参加いただき、ありがとうございました。

第 32 回東北大学高等教育フォーラム運営スタッフ

統括責任者	倉元直樹	
企画責任者	倉元直樹	宮本友弘
事務局	久保沙織	南紅玉
末永仁	伊藤博美	

当日スタッフ

石上正敏	庄司強	檜田豪利
秦野進一	田中秀樹	鎌田裕子
朱嘉琪	熊井弘子	竹浪綾子
林如玉	高城淳之	

IEHE TOHOKU Report 84

第 32 回東北大学高等教育フォーラム報告書

新時代の大学教育を考える [17]

大学入試を設計する

— 「大学入試研究」の必要性とその役割 —

発行：2021 年 2 月

編集：南 紅玉，倉元 直樹，宮本 友弘，久保 沙織

発行者：東北大学高度教養教育・学生支援機構

Institute for Excellence in Higher Education, Tohoku University

〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内 41

Tel: 022-795-7551

Email: ieheoffice@ihe. tohoku. ac. jp

印刷所：有限会社 明倫社

*: 本企画の一部は，JSPS 科研費 JP20K20421 の助成を受けた。